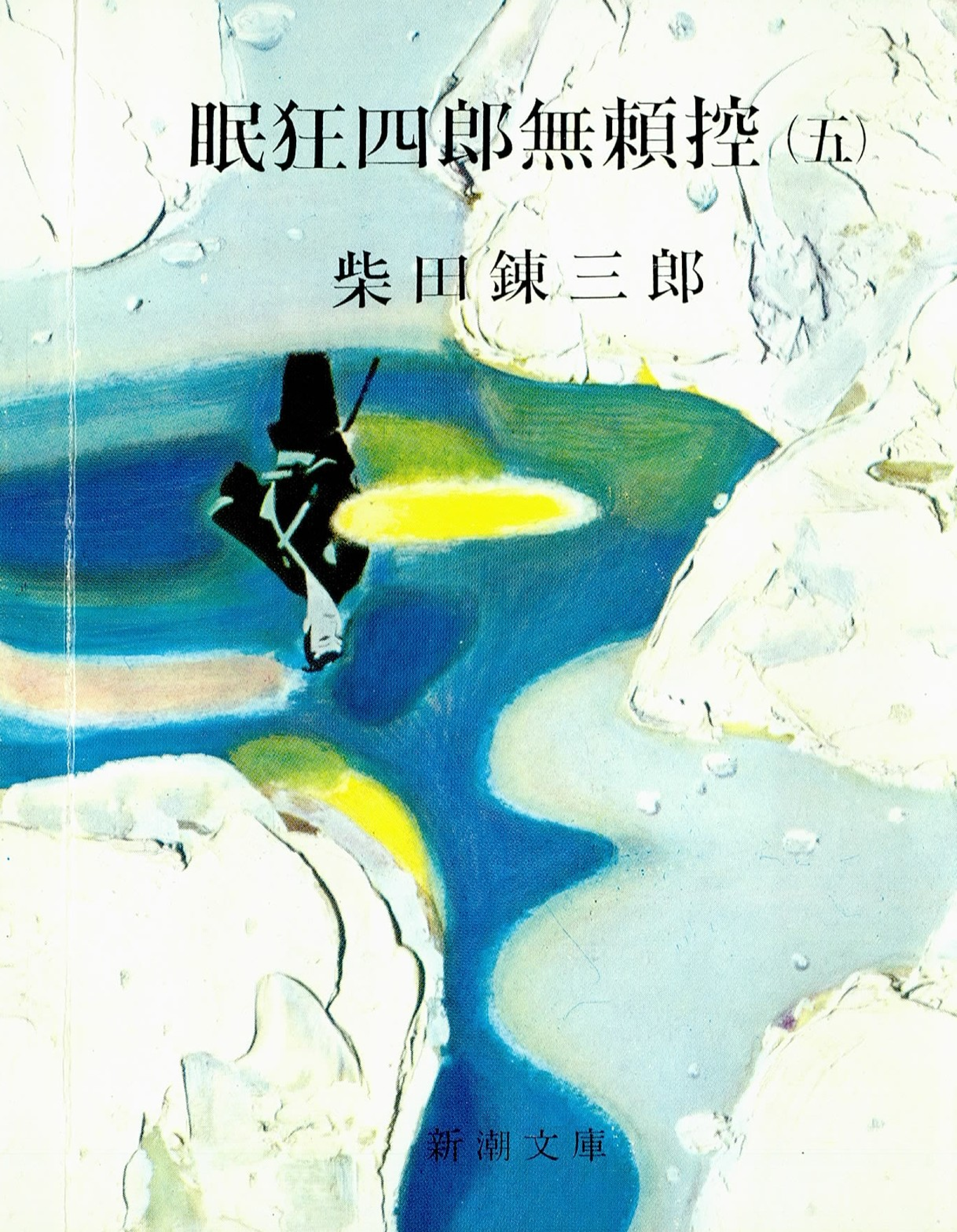


眠狂四郎無頼控（五）

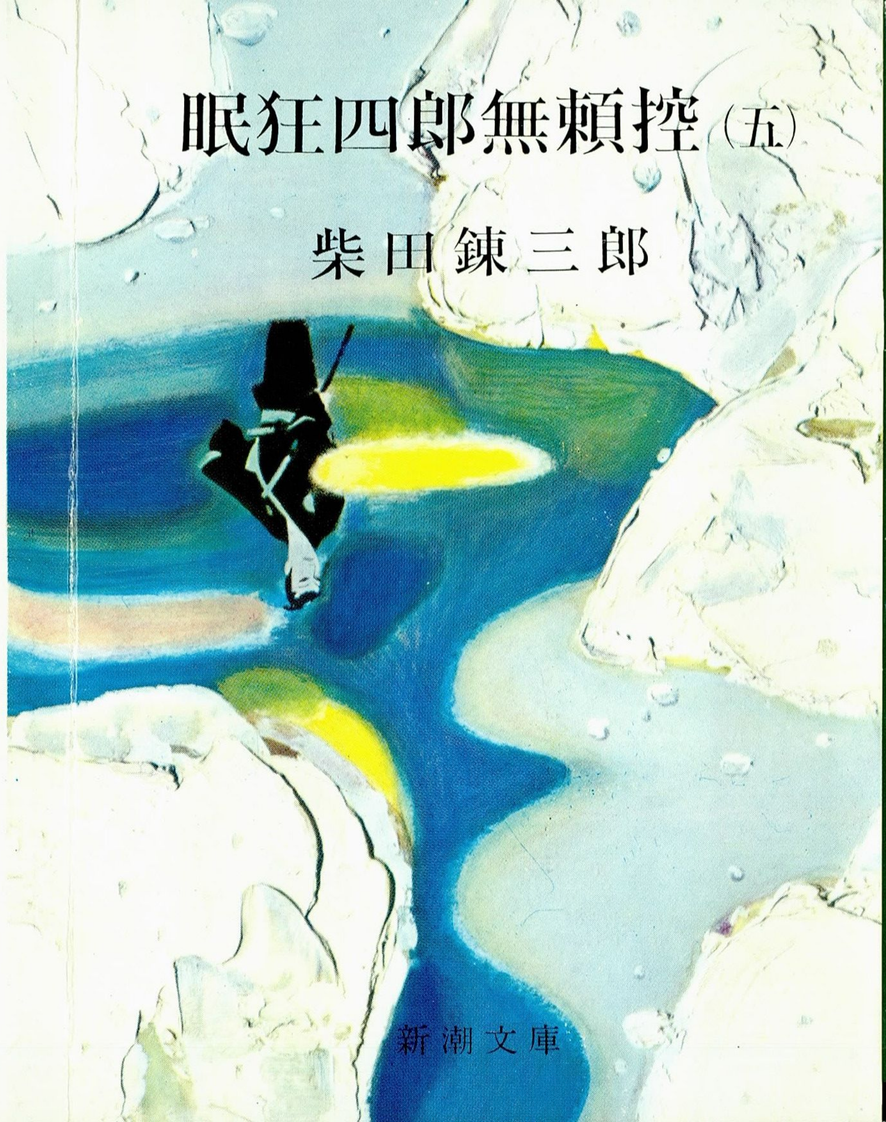
柴田錬三郎

新潮文庫

カバー　中尾　進

眠狂四郎無頼控（五）

柴田錬三郎



新潮文庫

眠狂四郎無頼控（五）
柴田錬三郎
し 5 10
新潮文庫
480

贋(にせ)狂四郎に扮し、あらゆる奸策(かんさく)を弄(ろう)して狂四郎に挑戦する甲賀忍組第三番を筆頭に、次々と出現する忍者たち。公儀隠密中随一の使い手白鳥主膳を交えた三つ巴の戦いが展開する。土方縫殿助と、その幕下(ばっか)の数十名に囲まれて疾風の剣技をみせる狂四郎……。こうした死闘が連続する中にあって、狂四郎を命がけで慕い続けてきた可憐な女性・美保代が静かに息を引き取った。

9784101150109
1910193004800
定価480円（本体466円）
ISBN4-10-115010-9
C0193 P480E

カバー印刷　錦明印刷　　デザイン　新潮社装幀室

新潮文庫

眠狂四郎無頼控

（五）

柴田錬三郎著

新潮社

新潮文庫

眠狂四郎無頼控

（五）

柴田錬三郎著

新潮社版

1447

目次

眠狂四郎無頼控

（五）

贋狂四郎

一

両国広小路——遊び場として江戸で、随一の繁華を誇るここは、朝のうちは、野菜市がひらく。市が退けてから、勤番侍や江戸見物の三太郎婆々をきょろきょろさせる賑いがはじまるのが、正午刻。

本所側の東両国は、引っ張りの観世物で、こちら広小路は、多く高小屋物であった。百日芝居、女芝居、軽業、曲独楽、寄席、そして、土場と野天芸人。土場芸人とは、開き木戸で、一齣ごとに、聴衆から木戸銭をとった。野天芸人は、路傍で伎芸を演じて、投銭を乞う。米沢町一丁目から吉川町に入ると、煮売店と交互に、さまざまな香具師が並んで声をからして、客を寄せる。

山下の長太郎玉、山雀曲芸、早継の粉、鼠取伝授屋、武鑑売、五臓円、易者、大道天道干(てんとぼし)、薄荷売、読売など……。

今日も——。

どっとあふれた雑沓を縫って、勇み肌の兄哥たちが、わがもの顔で、ねりあるいて行く。

なかでも、いちばん陽気な声をあげて首をふり乍ら、うたって行く金八の姿は水を得た魚のように、いきいきしている。

雪の夜中の冷たくて、初手はへだてて、何時となく、枕と枕、顔と顔――ときやがらあ意地の悪さのすき間から、アレ邪魔をする夜寒の風に、へへ

襟と襟とをひらいてあけて、肌と肌とをすりあわす

「おう、そこの姐さん、そっぽを向くにはおよばねえやな。とぼけていたとて、昨夜の牀の、肌のもだえのすすり泣き、人に知れずにいるものか、ってな。どうだ、ひとつ思い出させてやろうか」

ひょいと、娘の前へうしろ向きに立つと、

いやにからんだ、垣根のへちま

ぶらりと下った程のよさ、

風が落した赤手拭いに

くるりと巻かれて、吉原かぶり、

こいつは乙だと、ぶうら、ぶら

と、うたい乍ら、くるっと裾をまくって、赤ちりめんの褌の臀を滑稽にふって踊ってみせた。

娘は、まっ赤になって、あわてて、踵をかえすと、反対の方角へにげてしまった。

金八は、けろりとした顔つきで、裾をおろすと、

「逢いはしなんだか、横町の茶屋で、黒の着流し、竜胆紋、無想正宗落差し――」

と、小声で呟き乍ら、並び茶屋を一軒一軒のぞいていった。

やがて、とある店の床几に腰かけている眠狂四郎を見つけ出した金八は、にやっとすると、とっとと駆け込んで行って、そばについている茶汲女に、
「惚れてみたいは山々の――てえ風情でげすな。笑いものにならねえうちに、あきらめたがいいぜ」
「ちょいと、金さん。あたしが先生に惚れたら、どうして笑いものになるのさ？」
「へへん。惚れてみたいは山々の、一度に笑う雪解けに、そこは沓々(くっくっ)、ここは下駄下駄、ってな――。柄じゃねえや」
女は、つんとして、立ってしまった。
「先生。もう、そろそろ、中野へもどって頂きてえや。……美保代様は、どうも近頃、ずうっとお加減がよろしくねえご様子でざんすぜ。かくしていなさるが熱もおあんなさるらしいし、ときどき、そっと、苦しそうに咳をしておいでになるんでさあ」
狂四郎は、しかし、黙って、暗い眼眸(まなざし)で宙の一点を刺している。
その表情は、すぐに、金八の神経へ敏感に反応した。
――おや？　なにかあるな？
狂四郎が、ただ、ぼんやりと、この茶屋で油を売っているのではないと、読みとれた。
金八は、そうっと、まわりを見わたした。べつに、怪しい者の影は、どこにもなかった。客は、ほかに一人、渡り中間らしい男が、弁当をぼそぼそとつかっているだけである。
つと――狂四郎は、立ちあがった。
金八は、いそいで、そのあとにしたがい乍ら、もう一度、ぐるっと、視線をまわした。こちら

の動きにつれてうごくなんの気配もなかった。
ふところ手で、すたすたと歩きはじめた狂四郎は、とある地点で、急に足をとめた。
瞬間、その後姿から放たれる目に見えない鋭気に、金八は、はっとなった。
すぐに、狂四郎は、歩きだしたが、金八は、少々うす気味わるくなった。
まさか狂気の前ぶれというやつじゃあるめえな、と――その不安が起って、あわてて、かぶりをふった。
突如として気が狂っても、その悲惨な末路を、われ人ともに肯定しなければならぬ宿運を背負っている狂四郎だったのである。金八のような男にも、漠然と、そうした予感めいた恐怖心は、胸の底にあった。

二

ずらりと並んだ髪結床の路地をぬけると、自身番を境にして、楊弓店が檐をつらねる。
勿論、女をかかえているが、のちの浅草の矢場のように猥らではなく、通人の姿もみえる、かなり品のいい遊びとされていた。
狂四郎は、なにを考えているのか、その一軒へすっと足を入れた。
――こいつは、珍しいや。
金八は、また、小首をかしげた。狂四郎が、矢場遊びするなど、絶えてなかったことなのである。ひろい射場の板敷には、勤番侍らしいのが三、四人、どうやら競技を終ったところらしい、しずかに、お茶をのんでいた。

狂四郎は、右端の位置に就くと、片脱ぎにもならず無造作に、弓をとって、矢をつがえた。

物間（ものあい）（射手と的との距離）十五間。的の霞（かすみ）は、狂四郎がえらんだのが、いちばん小さく、一寸八分であった。これは、普通の腕前では、まずあてることは困難である。

勤番侍たちも、女も、ややあっけにとられた面持で、いきなり最小の的をえらんだ異相の浪人者を見まもった。

弓道には勿論、他の兵法と同じく、整然たる要則がある。足踏み、胴造、取懸、手の内、弓構え、打起、延合、やごろ、離れ、残心まで、射技の動作は、一分の狂いもあってはならぬとされている。

たとえば――。

弓構えにおいては、自己の前三隅のところで矢束の三分の一を弓手で押開き、的を見込み、顔の方向はいずれの方にも偏せしめず、呼ぶにこたえるかたちに頭持を整え、これを最後まで保持する。打起において、かるく一呼吸して、弓を左右に偏せしめず、まっすぐに打起す。その際、約一貫目の物を持ち上げる心構えが必要で、その動きは、はじめは静かに、なかばは、やや早く、ふたたび静かに止まるごとくみえる。矢先は、矢筈の方より低く、水流れの形となる。そして弓懸が耳を越したところで止める。矢は眉毛の高さで水平となる。延合においては、左右両方へ、糸を引張る気持で、引分け、ついに、自己の矢束の全部を引きしぼる。この時、拳が的に付くのと、矢が頬に付くのと、弦が胸に付くのと、まったく同時でなければならない。ここで、矢と顔は、十文字の形になる。更に、じりじりと左右両手に糸の両端を持って引延す気持で、その糸の切れんとする刹那まで、満を持す。

矢は、ひょーっ、とはなれる。
ちなみに、その所要時間は、弓構えの時、弓を押しひらいて的を見定め、打起にかかる迄の一呼吸が二秒、弓構えから打起しつつある時間が二秒、打起して停止せる如くみえる時間が二秒、打起から矢を眉毛の高さで水平にとめるまでが二秒、それから矢と顔を十文字の形にするまでが、一秒、ひきしぼって、放つまでが五秒——と、これだけの正確さを必要とする。
ところが、狂四郎は、その要則を、ことごとく、無視してしまった。
ふみひらいた両足の広さは、矢束にひとしく、その角度は扇子を八軒に開いたような形をよし、とされているにも拘らず、狂四郎は、普通に彳んだ姿のままだった。
さきに弓を立てておいて、あとから矢を添えたのもまちがっていたし、胴造も取懸も行わずに、いきなり、ぎゅっと、弦を引きしぼったのも、無法だった。
——射法を何も知らぬな。
眺めている勤番侍たちは、露骨に、軽侮の色をみせた。
弓道は、素引三年、巻藁三年といわれている。的を射るまでには、六年の稽古を積まねばならぬ。
射法の形も知らずに、一寸八分の的を射ようとする者に対して、心得ある射手が失笑を用意したのは当然である。
勤番侍たちは、矢がとんでもない方角へ逸れるに相違ない、と思った。
びゅん！　弦音とともに、矢は、十五間を翔けた。
勤番侍たちは、おのが目を疑った。

矢は、見事、的の黒星に射立ち、杉なり箆(へら)を、ぶるるんとひと顫いさせたのである。

つづいて、狂四郎は、間を置かずに、第二矢を放った。これもまた、第一矢に吸いつくように、黒星に的中した。

「へへんだ。たった一矢（夜）で胸射ぬかれてだ、弓（夢）のたまくら寝みだれ髪の、はっとめざめてはずかしや、そのあかつきのひと声は、的もあたごの山ほととぎす、とくらあ――」

金八が、ざまアみろ、とばかり、大声で調子づけた。

狂四郎は、第三矢をつがえた。

きりりっ、とひきしぼった――その刹那であった。

その弦から矢がきって放たれるよりも早く、突如、ちょうど的のまうえから、逆に、狂四郎めがけて、びゅん、と唸りをたてて、一矢が飛んで来た。

あっ、と皆が、仰天した。

ひとり、平然としていたのは、狙われた狂四郎自身だった。

ぱっと、弓をひと振りして、鏑籐(かぶらとう)のあたりで、その怪矢を、たたき落した。

「野郎っ！」

金八が、躍りあがって、十五間の物間をふっとんで行き、的置場から、裏側へ、とび込んだ。

狂四郎が、控所の畳敷へ腰を下すと、女が、いそいで、湯桶と手拭いを運んで来て、

「申しわけございません。とんでもない悪戯(わるさ)をする者が居りまして……すぐに、番所へ届けて、詮議して頂きます」

と、詫びた。

すると、狂四郎は、
「いや、かまわん。多分、こういう仕組みになるであろうと思って、ここへ入ってみたのだ」
と、こたえて、女を不審がらせた。
ほどなく、金八が戻って来たが、その面持は、なんとも奇妙なものだった。
「いやはや、さてはや——早野勘平早駕籠で、はや駆けつける赤穂城。先生、御注進！」
と、叫んでから、てのひらで顔をぶるんとひとなでした。
「いや、おどろいた。ひっくり、けえるに、あきれ、けえるで——ぎょっ、ぎょっ、となりやしたぜ」
狂四郎は、うすら笑い乍ら、
「追いかけてみたら、逃げて行くのは、このおれだったたろう」
「へえ？　もうご存じなんですかい。そうでさ、先生とそっくりそのままの身なりで、ひょいと、ふりかえった面も、まったく寸分ちがわねえ、ときてやがるから、それ——、けえる、になって、目玉が背中に宿がえしたんじゃねえか、と面くらって、立往生でさ」
「ふふふふ、……眠狂四郎が射た矢を、また眠狂四郎が射返した、という趣向だな」
「いってえ、どういうんでござんす？　まさか、先生が、双児だったとはきいたおぼえがねえ」
「いたずらだ。少々あくどすぎる」
「よくもまあ、あれ程似せて、顔を造りやがった。眉毛一本ちがってやがらねえ。歩きかたまで、そっくりで——あ、そうだ、ちがっていたのは」
「刀を、右に差していたろう」

「ほほ、そこまで見とどけていなさるんなら――なぜ、たたっ斬ってしまわねえんです？」
「いや、実は、まだ、おれの目の前には、あらわれぬのだ。ただ、絶えずつきまとっていることだけが、わかっている。
……おれを慍らせようとしている。慍らせて、おれを踊らせてみたいらしい」
「いってえ、何者か、見当がおつきですかい？」
「およそは、ついているが……」

三

この十日あまりのあいだ――狂四郎の身辺には、異様ないやがらせが、頻繁に起っていた。
……朝、泊った根津門前町の小料理屋の二階で、雨戸を開いたとたん、飛礫が顔を襲った。躱して、視線をまわしてみると、うしろの襖へあたって落ちたのは、どすぐろい、しなびた人間の手くびであった。
それが投げられた路地の入口へ降りて行って、遊んでいる子供に訊ねてみると、怪訝そうに、まばたきして、
「小父さんが、じぶんで、抛りあげたんじゃないか」
と、こたえたのである。
これには、唖然としたことだった。
同じ顔をして、同じ黒い着物をきていたという。
「どこか、ちがったところは、なかったか？」

と、小さい頭脳の記憶力に期待すると、
「あ――そうだ。刀をはんたいに差していたよ」
これをきいて、狂四郎は、
――甲賀忍組の一人が、榊原政之助に斬り落された手くびを、挑戦状のかわりに投げつけて来たのか？
そう想像した。右手を喪えば、当然、刀を右差しにするであろうからである。それにしても、何故に、こちらとそっくりの風姿に化けねばならないのか？
その次の日の午さがりであった。仙台堀に沿うた途をひろっているおり、突然、彼方に、女の悲鳴が起ったので、近づいてみると、町娘が、帯を断ち切られて地べたに俯っ伏していた。たすけ起そうとすると、娘は、こちらの顔をみとめるやいなや、前にも増した恐怖の絶叫をあげて、無我夢中で、前がはだけ散るのもかまわず、逃げ出したのであった。
それから、三日あまり置いた夜、和泉橋を左手に見る柳原堤を通り抜けようとすると、いきなり、星空から、ざあっ、と雨が降って来た。その臭気に、はっとなって、二間余奔るのと、右側の籾蔵の屋根から、火矢が飛来するのと、同時だった。路上、いちめんに、ぱあっと火焰が燃えたち、雨と思ったのが油であったとわかった。もし、濡れた不審に、立ちどまって、空でも仰いでいたとすれば、当然、火だるまとなっていたに相違ない。
昨日はまた、揚屋五明楼の離れで、いつものように、少女の三味線を肴に、盃を口にはこぼうとして、直感が働き、庭さきへ、その酒をすてて、犬になめさせてみると、果して、キリキリ舞いをして、ぶっ仆れてしまったのであった。

憤怒して、躍起になれば、それが影なき敵の思う壺にはまることになる、と知りつつも、狂四郎は、次第に、苛立たずにはいられなかった。

隠身遁形の秘術をそなえた忍者を、こちらから追うのは、愚であった。対手が、姿をあらわすまで待つよりすべはなかった。待つ忍耐には自信があったし、臆測になやまされる前に、こういう敵の存在をいつとなく仮定して、常にその日その日を、鋭い神経を、本能的に働かせる経験にしてすごして来ているのである。おのれの判断が、あやまっていないと悟った瞬間が、この男の、凄じい力の速度の発揮となるのであった。いわば、氷のような孤独感の中から生じせしめる暴力は、怖れとか怒りとかいった情熱とは全く異った性質のものなのであった。

忍者という、最も虚実転換の素迅い敵によって、狂四郎は、いまだ曽てない冷静な予断を強いられている。

「先生、どうなさいますか？」

金八の真剣な表情に対して、

「すてておくのだな」

他人事のように云いすてたのも、こういう場合にこそ、人間というやつは、どういう風におのれを知っているかが解るのだな、と、あらためて自分に云いきかせたからであった。

無力であること――それが、どうやら、目下は賢明だ、というさとりであった。行為は、こちらから起さぬことであった。

四

しかし、敵は、あくまでも、その執拗ないやがらせの攻撃を、意外な手段であびせかけることによって、狂四郎の逆上を呼ぼうとした。

矢場の一件があって、四日後の黄昏どきであった。

狂四郎は、押上の竜勝寺へ赴こうとして、南本所出村町を抜けて、法恩寺の高塀が、数町もつづく淋しい往還を辿っていた。

竜勝寺住職空然から、使いがあって、離れに預っているお園という婦人が、病い篤いので、一度見舞ってもらえないか、という報せであった。

すでに狂四郎をこの世に亡いものと思いきめて、その位牌をまもってひとり佗しく生きている女のことであった。

これまでの狂四郎ならば、見舞う意志は動かなかったであろう。その報せをきいた時、美保代もまた同じ病いになやんでいることを思いあわせて、ふと、その気になったのである。

——おれは、おれの知るかぎりの女を、あの世へ見送ってやるつとめを課せられているらしい。

その自嘲で、腰をあげたのであった。

つるべ落しの形容通りに、つい今まで足もとから延びていた影が消えると、急に、あたりは、暗くなっていた。空には、もう、月も星も生れていた。

不意に、行手をさえぎった武士があり、放って来る殺気の凄じさは、思わず、狂四郎に、ふところから、両手を抜き出させたくらいであった。

「眠狂四郎だな」

「左様――」
狂四郎は、こたえつつ、
――どこかの道場主だな。
と、見た。
四十なかばであろうか。風貌も秀れていたし、恰幅も堂々としていた。
殺気の凄じさは、狂四郎だからこそ、それをおそるべきものとしてさとったのである。並の者ならば、殺気すらも感じなかったであろう。その顔つきも尋常であったし、剣にものいわせようとする身構えをとっていたわけではなかった。
「北本所番場町・神道無念流道場・黒崎源八郎。……いざ！」
左手を、刀のくり形へかけて、すっすっと草履を、うしろにぬぎすてた。
――岡田撃剣館の高足だな。
狂四郎はそう察した。
神道無念流をして、江府に熾(さか)んならしめたのは、岡田十松吉利である。神田猿楽町の撃剣館道場は、門弟三千人、試合剣術の隆盛において、比類がなかった。十松吉利は、資性温厚で、子弟の教育に寛厳宜しきを得、頗る礼儀を尚んで、礼服着刀でなければ、戸外に出ない程、進退儀容を重んじたので、自然、門下も、その風に就いた。
当時にあって、行儀作法の正しい剣客に行き会ったならば、それは神道無念流の一門と考えてよいとされていたくらいである。
十松吉利の遺業は、目下、斎藤弥九郎によって嗣がれているが、この黒崎源八郎は、年齢から

見て、おそらく、弥九郎の兄弟子格であろう。
「眠狂四郎！　抜けっ」
右手を、柄にかけて、源八郎は、底力のある声音で、叱咤した。
尋常の果し合いを望んで、同時に抜き合わさんとするものであった。
狂四郎は、しかし、ダラリと両手を垂らしたなり、
「意趣討ちならば、その理由をうかがおう」
と、云った。
「盗人たけだけしい！　拙者の姓名をきけば充分であろう。抜けっ！」
遽に、源八郎の全身から、剣気が噴いた。
「わからぬ。お手前とたたかわねばならぬ理由など――こちらにおぼえのないことだ」
「云わせぬぞっ！」
源八郎は、それまでの、抑えに抑えていた憤怒を、その形相と声に、炸裂させた。
「人非人！」
呶号もろとも、地を蹴って、躍りあがりつつ斬り込んで来た一刀に、狂四郎の五体は、あおられたように、一間余を後へ跳んでいった。
「うぬっ！」
刃風が搏った宙を、源八郎は、むなしい広さに感じて、呻いた。
狂四郎は、なおも、両手を空けたままで、構えをたてなおした敵を睨みかえしたが、
――そうか！

ふいに、頷くところがあった。
贋者のしわざが、この剣客を、こうも激昂させているのだ。
くるっ、と身を翻して、狂四郎は、奔り出した。
「待てっ！」
源八郎は、意外な対手の卑怯な振舞いに、かっとなって、躍起に捕捉をあせった。しかし、あくまで冷静であった者と、極度に昂奮した者との体力の消耗差が、みるみる距離をひらいてしまった。
源八郎は、足を停めて、なお走りつづけている敵影へ、狂気をみなぎらせた眼光を送った。
一人にとりのこされると、急に、さむざむと、月あかりの寂寞が、源八郎の身のまわりを包んで来た。
「……逃した！」
はらわたをしぼって吐きすてると、刀を腰に納めた。あれほど、満身に迸らせていた憤怒も殺気も、憑きものが落ちたように、消え失せて、悄然として歩き出していたのである。
寺塀が切れて、横川に架った法恩寺橋へむかう広い往還へ出ると、その広さだけ、月光もあかるくなったようである。
源八郎は、地上に濃いおのが影法師を、ゆっくりと追って行く――。
その姿を、月や星とともに、空から、じっと見おろしている者があった。
狂四郎は、いつの間にか、法恩寺の高塀の中の、阿弥陀堂の屋根の上に立っていたのである。

五

源八郎が、北本所番場町の、土井能登守の下屋敷の向いにある、さして大きくない道場へ戻って、玄関を上ろうとすると、色を失った内弟子の一人が、走り出て来て、

「先生っ！　奥さまが――」

と、叫んだなり、あとの句が告げられずに、驚愕の形相を凍らせた。

源八郎は、すでに、予期していたもののごとく、無言で合点して、妻の居間に入って行った。

居間には、幾炷かの香がうちまぜて焚きこめられていた。

その香炉を置いた経几の前で、緋のしごきで膝をしばった白無垢姿が、俯っ伏していた。顔と、梳き流した黒髪が、血潮に浸っていた。

凝然として、妻の遺骸を見下していた源八郎は、一瞬、顔中の筋肉を、ぴくぴくっと痙攣させたが、激動を奥歯で、嚙み怺えると、廊下へのがれ出て、自身の書斎へ足を向けていた。

狂四郎が、裏路地に彳んで、その書斎の下地窓の隙間から、源八郎の見事な割腹を見とどけたのは、それから、小半刻のちであった。狂四郎は、あえて、妻のあとを慕う者をひきとめようとはしなかった。

そっと、道場から忍び出て来た時、狂四郎は、小者と女中との私語によって、その悲劇の原因を知っていた。

源八郎が外出していた昨夜、その妻は、素裸にされて、高手小手に縛りあげられ、道場の板の間中央にころがされていたのである。そして、その白い腹部に、墨くろぐろと、「眠狂四郎、こ

れを犯す」と記しのこしてあった、という。

……腕を組んで、夜の道を歩き出した狂四郎は、しかし、贋者に対する激怒を、もはや鎮めていて、こうしたあくどい所業をなすりつけられても、あまんじて受けなければならない暗澹たる気持で、おのれが犯した過去のかずかずの凄惨な光景を、地獄の底を覗くように、心の内に瞶めていたのであった。

忍者独白

一

おれには、名前はない。おれは、『甲賀忍組第十七番』と呼ばれている男だ。おれが、死ねば、また新しい第十七番が指命されるだろう。

蜉蝣（かげろう）にも似た儚（はか）ない存在だが、忍組全員は、おのが宿運を聊（いささ）かも疑っては居らぬ。永年鍛えに鍛え、磨きに磨いた忍びの秘術を駆使することにのみ満足し、その目的を成しとげた時の喜悦に、生命を賭けて、微塵も悔いるところはない。すなわち、言語に絶する訓練がそういう人間を、つくりあげたのだ。

おれ自身は、といえば、もともと甲賀衆の家に生れたわけではない。

おれの親爺は、佃島の漁師であった。慶長のむかし、公儀が摂州佃島から、隅田川の川尻にある小島へつれて来た漁師が先祖だから、おれのからだには、骨の髄までも、魚の臭いがしみ込んで居る。

それが、近江国の北部にある甲賀の、山と谷ばかりの僻境につれて行かれて、沐猴宛然（もっこうさながら）のくらしをさせられたのだから、皮肉なものだ。

それ故にこそ、子供の頃の海のくらしは、おれの生涯にとって、唯一のなつかしい思い出となっている。

おれの親爺は、毎夜、江戸城の外濠内銭瓶橋の番人を勤めるかたわら、橋下で網を打って、小沙魚(はぜ)をとり、これを佃煮にするのをなりわいとしていた。小沙魚というのは、普通のだぼ沙魚ではなく、俗におしゃらこ沙魚と称する、一寸前後のやつで、粟粒ほどの卵を四、五十ずつ抱いている。

佃煮は、江戸名物のひとつだが、おれの親爺のつくるのが、江戸一番の美味だと、蔵前の札差連から、折紙をつけられていた。佃煮というものを江戸市中ではじめて売り出した日本橋の料理茶屋伊勢屋でも、通人が来た時だけ、おれの親爺の作ったやつをさし出したものだった。

佃島には、住吉明神がある。その年の初づくりを、その神前に供えるのがならわしであった。そして、それを供えに行くのが、おれの役目であった。神官から、神酒の小樽をいただいて帰る。おれの親爺が、家で待ちかねていて、小樽を受けとり、栓を抜きとって、その芳香を胸いっぱいに吸い込む——そのうれしそうな顔を眺めて、おれも、うれしかった。父一人子一人であった。

その親爺が、斬り殺された。おれが十四歳の時であった。

伊勢屋に呼ばれて、「蔵前の札差の中で筆頭のおひとが、今年は、江戸で一番目に、初鰹を食べたいと仰言っているので、たのまれてくれぬか」ということだった。

「初鰹飛ぶや江戸橋日本橋」

目に青葉、山ほととぎすの季節になると、初鰹をくらうために、たとえ嬶を質に置いても、そ

の味を試そうとする。分限者は、一日半日をあらそって、人よりさきに口に入れたという自慢の種をつくるべく、千金を惜しまぬ。くだらぬ見栄だが、おれの子供の頃は、この風がひどかった。

で——おれの親爺は、舟を品川沖へこぎ出して、鎌倉もどりの鰹舟を、四昼夜待ちくらしたものだった。そして、やっと、一番もどりの押送舟を見つけて、漕ぎ寄せるや、十両を投げて、初鰹を手に入れた。

ところが、たまたま、夜釣に出ていた屋形舟が、その押送舟を、佃島沖で呼びとめて、一尾を購おうとした。すると、船頭が正直にこれは二番鰹になる、と教えたのだ。屋形の主は、闕所物奉行をつとめていた桑山なにがしという旗本だった。闕所物奉行というのは、幕臣および江戸市中の武家で、罪があって改易になった者の財産のうち調度を官没する役目である。したがって、常に、多くの役得があって、ふところはゆたかであるし、根性も強欲になっている。

桑山は、直ちに、おれの親爺の小舟を追って、豊海橋から掘割を漕ぎのぼって、小網町の鎧の渡し場付近で、やっと、つかまえた。夜があけそめた時刻であった。

勿論、おれの親爺が、承知する筈はない。押問答の揚句、桑山の脅し文句に、おれの親爺が、荒っぽい啖呵を酬いた。

結果は、云わずと知れている。

おれの親爺の死骸は、佃島の沖へすてられたらしい。桑山が、斬りすてたという、なんの証拠ものこらなかった。

しかし、おれは、一年後、その屋形舟を漕いだ船頭の口から、下手人の名前を、はっきりとき

き出した。それから、さらに一年すぎて、おれは夜釣に出た桑山の屋形舟へ小舟を漕ぎ寄せ、海中へもぐって底穴をあけて、沈めてやり、うろたえている桑山の背中へ、死んだ親爺が愛用していた包丁をつき刺して、見事に讐(かたき)を復(う)った。しかし、供の者に顔を見られたおれは、それから数日後に、捕えられてしまった。

札差や料亭や漁師仲間からの、必死の助命嘆願があったが、ついに、磔の刑が申し渡された。その日、おれは、牢屋裏門から、裸馬に乗せられて、ひき出され、市中をひきまわされて、刑場へ至るまで、当然のことだが、本当に磔にされるものとばかり思っていた。

ところが、いよいよ罪人柱に縛りつけられた時、陣笠野羽織の役人が寄って来て、「よいか。槍で突かれたら、死んだふりをいたせ。そのまま、目蓋を閉じて命令のあるまで開いてはならぬ」

と、ささやいた。

おれは、何をほざきやがる、と思った。槍で突かれて、くたばらねえ不死身があるもんか。

罪人柱が、地上に立てられるや、おれは、白衣の突手非人たちにむかって、

「しっかりやってくれ！　まごまごして、突きそこなったら、化けて出てやるぞ！」

と、怒鳴ってやった。

縄襷(なわだすき)をかけた非人たちは、妙な笑いを泛べ乍ら、槍を把って、左右にわかれた。

まず、おれの目の前一尺のところで、二本の穂先を、交叉させて、

「えい、えい、おーっ！」

と、掛声を放つ。これを見せ槍というのだ。

次に、五度ばかり、素突きを試み、畢って、右側の一人が、胁腹から肩先まで、ぶすっと刺し貫き、ひと捻り捻って、さっと抜きとるや、こんどは左側の者が、同じ方法で突く、という一定の式がある。

おれは、かっと目玉をひき剝いて、胸をはった。

右側の非人が、びゅっと突きあげて来るや、本能的に、全身の筋肉という筋肉が、ひきちぢまった。しかし、穂先は、胁腹をかすめて、背中と罪人柱のあいだへ、すっと挿入されたではないか。ここで、はじめて、おれは、役人のささやきの意味を納得したのであった。

おれは、瞑目して、首を垂れた。

咽喉を貫くと見せかける止め槍があってから、おれは、そのままに、うちすてておかれた。

やがて、夜に入ってから、おれは、罪人柱からおろされて、駕籠にのせられた。

おれが、運ばれたのは、宏壮な大名屋敷であった。

立派な庭を三つばかり通りすぎて、奥まった建物の広縁下へひき据えられて、しばらく待っていると、小柄な、どこといって特長のない人物が、一人で、頭上に立ちあらわれると、冷やかな微笑をつくって、

「市中をひきまわされ乍ら、顔色も変えなかったそうだの」

と云った。

これが、本丸御老中の寵臣土方縫殿助殿であった。

山鹿素行が、松平越中守定綱のために記した、「武教全書」中に、忍びの定義が述べてある。

土方縫殿助殿は、その定義に則って、忍者たり得る者をひそかに、選び出しては、甲賀の山中へ

送っていたのである。

二

爾来、十余年、おれは、甲賀の山中ですごした。

忍びの修練が、いかに凄じい努力を必要とするものであるか、これは筆舌には尽せぬ。頭脳方面における諸科目も算えきれぬが、技術の習得となると、さらに、人間の力のぎりぎりの限界まで試さねばならぬ。剣術、居合、白打(やわら)捕物、砲術、乗馬、水練、変装、隠身(五遁の術)、催眠、気合、飛躍、攀登、速歩、潜伏、断食、不眠、簡易療法、諸国の方言の真似、鳥獣の啼声の真似、そして虚実転換――ちょっと、かぞえただけでも、これだけあり、いずれの術にも長(た)けねばならぬのだ。

脱落は、すなわち、死を意味する。堪え得た者だけが、一人前の忍者として、甲賀山中から出て来ることがゆるされた。

おれは、堪え得て、江戸に戻り、『甲賀忍組第十七番』となった。

その最初に、与えられた任務が、

「榊原左近将監の上屋敷に忍び入って、天皇御璽を奪いとれ」

それであった。

おれは、その命を受けた時、微かな動揺を、胸におぼえた。任務の困難さや重大さに対してではなく、おれは、間者となって、榊原邸にすでに住み込んでいる小夜を想ったからである。おれが、出府して、身を寄せたのは、小夜の家であった。まだ、小夜は、家にいて、おれの身のまわ

りの世話をしてくれた。おれが、生れてはじめて、親しく接した若い女であった。いつの間にか、小夜の面影は、おれの心の奥底で、忘れられないものとなっていたのだ。

おれは勇躍した。

「もしかすれば、眠狂四郎が一役買って、待ちうけているかも知れぬ。くれぐれも油断するな」と、首領に忠告され、眠狂四郎という男が最もおそるべき当面の敵であることも充分きき知っていたが、おれは、聊かもおのれの成功を疑わなかった。

――小夜さんがいる！　小夜さんと、意を一にし、諜し合せて、事が成らぬ筈がない！

おれは、確信した。

その夜のうちに、おれは、榊原邸へ、忍び込みを敢行した。

小夜は、期待通りに、天皇御璽は、左近将監の手より息子の政之助の手に移ったこと、それが、巻物の軸穴に秘められてあることを、紙飛礫によって報せてくれた。

――左近将監め、こちらの挑戦に応じて来たな。

応じて来るとみての挑戦であったのだ。

ここに、甲賀忍組が、公儀庭番によって組織される「親不知組」などとは、質を異にする面目があるのだ。

対手に油断させ、その虚を衝くよりも、対手に、水ももらさぬ警戒をさせておいて、そのはりつめた殺気の中点へふみ入る――これこそ、甲賀忍組の遺憾なき本領と云うべきなのだ。

榊原左近将監ほどの人物となれば、小夜が間者であることを看破せぬ筈はない。小夜一人に、天皇御璽の匿し場所をさぐらせたとて、到底つきとめられるものではない。

小夜が間者であることを、左近将監に看破させておいて、こちらから堂々と挑戦する。左近将監が、凡夫ならば、懼れてこれに応じはすまい。秀抜の賢者なればこそ、自らの智能が禍して、応ずる決意を生む。

よって——おれは、政之助の居間へ、音もなく忍び入った。

おれは、闇中の褥に、政之助が小夜を抱いているのを見て、はじめて、声なく呻いた。挑戦に応ずるに、これ以上の天晴れな態度はない。すくなくとも、このおれに対しては——。

政之助は、あたかも、小夜に対するおれの心を見透してでもいるかのように、そうして、侵入を待ちかまえていたのだ。

三無の術をもって、枕屏風の蔭に入ったおれは、ついに、ここで、忍者にあるまじき五感の乱れを、整えなおすために、無駄な少時を費さねばならなかった。

小夜がすでに犯されたとは、考えられなかった。政之助に、小夜を犯す余裕があったろうとは思われぬ。政之助は、ただ、こちらは、すでにこの女が間者であることを看破しているのだぞ、と無言で威嚇するために、そうしていたのだ。

たとえ、意味は別としても、その威嚇に、ほんのすこしでも、動揺したならば、おれの方の負けなのだ。

が——おれは、やはり人間であった。動揺した。恋する女が、素裸で、若い逞しい男に抱かれている光景に、氷のように冷静ではあり得なかった。

この瞬間、おれは、おのれの左腕一本をすてる覚悟をきめた。

そして、左腕をのばした。巻物を摑んだ。褥の中から、白刃が一閃した。左腕は刎ねられた。

次の刹那、おれは、おれのからだから永久に離れた左腕を、口にくわえて、風のように奔って、次の間にすべり出した。

そのまま、通り魔のごとく、庭を掠めて、屋敷外へ脱出したおれは、傷口の痛みよりも、

――小夜さんは、どうなる？

その懸念で、胸中を疼かせていた。

三

おれが、ここ――羽田漁師町はずれ浦守弁天の裏手にある廃れた一字の庵室に身をひそめてから、十日すぎた。

手当に専念したおかげで、傷の痛みも殆どなくなっていた。

あらかじめ、かかる場合の隠れ場所として定めておいたので、忍者兵食も用意してあった。干飯、梅干、搗栗、田螺の塩煎、打鮑、鰑、鰹節、干味噌、胡椒など――一月間の蟄居にも充分足るだけのたくわえがあった。

おれが、ここをえらんだのは、やはり、海への郷愁があったからである。夜、月が上ると、多摩川土砂の築いた砂洲のかなたに、くろぐろと引かれた水平線が望まれる。社の竜灯が、光の帯を波間に投げた景色も美しく、それを目じるしに、ゆっくりと過ぎて行く回船の影も、別世界の幻に似て、おれの心をなごませた。

風が送って来る汐の香が、漁師の血のめぐるおれの体軀を、みるみる恢復させたといえる。

ところで――

忍者の間には、忍香(しのびこう)というものがある。それを焚けば、匂いは、一町余のかなたまで、漂う。しかも、普通の人々には、街なかのものの匂いとしか感じられぬ。ただ、忍者のみが、それを、意味あるものとしてかぎわけ、風向きを考えて、仲間の所在を知る。べつに、特殊な材料をつかうわけではない。切傷につける蝦蟇(がま)の油を、楮(こうぞ)に漬して、燃やすだけのことである。一種を、幾途にも使いわけるのが、忍者の法なのである。

おれは、忍香を、今日になって、はじめて、焚いた。

自分で出て行くことをせずに仲間をまねこうとしたのは、忍者は、完璧なる健康をとりもどさない限り、外出をゆるされていないからであった。それに、おれは、当分のあいだ、ここで、海を眺めて、じっとしていたかった。

陽が落ちてから間もなくのことであった。

地底からひびいて来るような忍び笛の音が、おれの耳にとどいた。

――来たな。

おれは、すぐに、これにこたえて、人差指を曲げて、口にあてた。忍び笛とは、口笛のことだが、独特の吹きかたによって、虫の音や風の音や鳥の羽音に似せる。すなわち、対手が、蟋蟀の音で呼べば、こちらは、鈴虫の音で応える、といったあんばいである。

ひそかな跫音が、近づいて来た。

蔀戸ごしに、その姿をみとめて、おれは、はっとなった。

――小夜！

夢にも考えなかったことである。おれが、このあたりにひそんでいるとは、小夜にも、あら

かじめ報せてはあったが、よもや、無事に、榊原の屋敷から脱出して、たずねて来ようとは、考えられなかった。あるいは、不幸にして、もはやこの世には在るまい、と思って、その寂寥に堪えていたおれだったのだ。

咄嗟に——おれは、仰臥して、重体を装うことにした。

蔀戸が、音もなく開かれ、小夜は冷風とともに入って来ると、ちょっと沈黙をまもって、おれの寝姿を見まもっていたが、一間をへだてて、坐った。

「お加減がわるうございますか？」

「不覚でした」

おれは、蜘蛛の巣だらけの天井を仰いだままで、こたえた。

「いえ、お見事でございました」

おれが、ちらと一瞥をくれると、小夜は、おもてを伏せた。

月光が、蔀をくぐって、小夜のからだを、明暗の縞に染めわけていた。浮きあがった耳朶やあご<ruby>や項<rt>うなじ</rt></ruby>の、繊細な仄白さが、一瞬、おれの息をのませた。

衝動があった。同時に、おれは、はじめて、忍者であるおのれに、微かな焦燥をおぼえずにはいられなかった。

「わたくしが参りましたからには、どうぞ、ゆっくりおやすみなさいませ」

小夜は、やさしく、云った。

おれは、どうして無事に脱出し得たのか、糺そうとしかけて、思い直すと、目蓋をとじた。

およそ、一刻が過ぎたろうか。

おれは、微動もせずに、睡ったふりをつづけた。小夜も、また、同じ位置で、身じろぎもしなかった。

と——。

小夜が、顔を擡げて、そうっと、室内を見まわすのを、おれの薄目はとらえていた。

小夜の視線は、片隅に置かれた兵食の器具類にとめられた。

「……もし……もし……」

小さく、呼びかけて、おれが睡入っているのをたしかめても、小夜は、なお要心して、しばらく、動かなかった。

やがて——。

小夜は、そろりと立って、そこへ寄った。ためらわずに、器具のうちから、桐製の水入筒を摑んだのは、慧眼であった。

それを袂にかくして、こちらを、屹っと見かえった。

——とたんに、小夜は、はっと、呼吸をとめた。

おれが、気配もなく起き上って、大きく、かっと、まなこを瞠いていたからである。

「天皇御璽を、どうなさるのだ?」

「……………」

「こたえられぬなら、こちらで、云い当ててごらんにいれようか。貴女は、それを、榊原政之助に、返そうとされるのだろう」

「……………」

——この娘は、褥の中で、素裸で、政之助に抱かれているうちに、心を変えた！

——やはり、そうだったのか！

小夜の姿を見出した瞬間、脳中にひらめいた直感は、不幸にして、適中していた。

ぱっと身をひるがえして、外へのがれ出ようとする小夜へむかって、おれのからだは、野獣のごとく躍った。

四

おれは、小夜をねじ伏せるや、両足で、その双腕を蹴りつけておいて、有無をいわせずに、その上前、下前を撥ねて、柔らかな、ふっくらと弾力のある下腹へ、じかに、ぴたっと掌をおしあてていた。

どう踠（もが）く余地もないこちらの迅業に、小夜は、最大の恥辱に、唇を噛んで、観念しなければならなかった。

裏切り者に対する憤怒は、すこしもなかった。おれのうちには、欲情だけが、音たてて滾りたっていた。そして、それは、じりじりと蠢く隻手の五指から、迸り出ていた。

……急に、小夜は、ぐったりと、全身から、力を抜いた。

おれは、にたりとすると、ゆっくりと、のしかかろうとした。

その刹那——。

おれは、弾かれたように、小夜の上から飛び立って、一刀を摑んでいた。

外に、人が立っている！

栗形を口に銜えて、抜きはなちざま、蔀戸を蹴開けた。
月光に濡れて、すっきりと浮き立った孤影は、彩りを翳にしつつも、ふしぎな妖冶(ようや)な匂いを漂わせていた。左手には、月のしずくにも似た白い花をひらいた山茶花の一枝を持っていた。
白縮緬の亀屋頭巾のかげの眸子(ひとみ)が、月かげを宿して、美しく澄んでいた。
おれは、かねて噂にきいていた「親不知組」随一の使い手を、眼前にしたのだ、とさとった。
「白鳥主膳だな?」
「いかにも、左様――」
「よくぞ、かぎつけた!」
おれが、気負って叫ぶと、主膳の眸子が、微笑を刷(は)いた。
「べつに、かぎつけたわけではない。今宵、榊原左近将監の屋敷をおとずれてみると、その娘が忍び出て行く様子に、あとを尾けて来たまでのこと――」
「よしっ！　見事、天皇御璽をとりかえしてみろ！」
「もともと、わしが所有の品だ。貴様が無駄骨折ったのを気の毒に思って居る」
「ほざくなっ！」
おれは、おのれの欲情を中断されたことに、狂気のごとく激昂していた。
おれは、勾欄を蹴って、くさむらへ跳ぶと、白刃を、頭上に、舞わした。
その錠子から、幾万の蜜蜂の羽音にも似た唸りを生じて噴き出た分銅鎖が、一間の宙を、毒蛇のように飛んで、主膳に噛みつこうとした。分銅はただの分銅ではなく、鋭利な鉤になっていた。

間髪の危うさに、呻きを発しつつ主膳は、脚力の限度ぎりぎりで跳び退って、これを躱した。

おれもまた、呻きを噛んで、分銅鎖を、びゅうびゅうと、空中を截りまわして、肉薄して行った。

主膳は、跳び退くとともに抜いた一剣を、地摺りに下げ乍ら、一歩一歩、あとずさって行った。

ついに――。

崩れかかった土塀ぎわまで追いつめた。おれは、主膳が、さっと中段高めの位にとる反撃の構えをみせるや、

――勝った！

と、心中で狂喜の叫びをあげた。

事実、分銅鎖は、主膳の剣の鍔さき二寸あまりのところへ、きりきりっと巻きついたのである。

おれは、忘れたのだ、真剣勝負においては、勝たない前に、勝ったと驕ることが、すなわち自滅をまねくのを――。

おれは、勝ち誇って、鎖を、ぎゅっと一直線にひきしぼった。その刹那をはずさず、主膳は、自ら、両手を、柄から、離したのだ。

――しまった！

よろめいて、あっとなった時にはもうおそかった。主膳が、居合抜きに、抜きとばした脇差は、おれの胸板へ、ふかぶかと突き刺さっていた。

……どうっ、とのけぞって、ぶっ倒れたおれが、そのまま、息絶えたふりをしたのが、せめてもの忍者として後日のなぐさめとなった。おれは主膳が、脇差を抜きとってから、とどめを刺すのではないか、と恐怖した。主膳は、おれの疑似死を、見ぬいたかどうか——とどめを刺そうとはせずに、しずかな足どりで、庵室の中へ、入って行った。

おれは、腰の印籠をはずして、甲賀忍組のみが持つ波布の血と薬草の汁を練りあわせた秘薬を、胸の傷口に塗りつけた。起き上ることはしなかった。動かぬのが、最良の療法であった。主膳は、もはや、おれをどうしようとするものでもなかったから、おれは、いつまでも、そうして倒れていればよかったのだ。

それよりも、おれは、中天に冴えた月を眺め乍ら、べつの目に、庵室の中の光景をありありと映していた。

主膳は、おれがしようとしていたことを、小夜にむかって、成しているのだ。

敗れさった者の惨めな謙譲が、狂気からおれを救っていた。

……主膳が、出て来た。

おれは、目蓋を閉じて、遠ざかる跫音をきき乍ら、

——白鳥主膳を殺すのはこのおれだ！　この世で、おれよりほかはない！

かたく、わが胸に誓いをたてた。

この頃、ほかの場所では、おれを一人前の忍者に鍛えあげた『甲賀忍組第三番』が、腥眠狂四郎に扮して、本物を憤怒させるべく、執拗な、あくどい仕業を、つぎつぎと行なっていたのだ。

孤影両断

一

眠狂四郎に対する贋者の、あくどいいやがらせは、依然として、ひきつづいていた。

そのうち、市中に大きな噂となって拡がったのは、丹波篠山藩主青山和泉守忠成に対する言語道断の狼藉であった。

その日――十二月十三日、すなわち将軍家御営中煤払いの定日、青山家でも、総動員の大掃除をすませ、当主忠成は、伊勢よりとどいた皇大神宮御祓（はらい）を受け、ならわしによって、微醺をおびたからだを、奥女中たちから胴上げされ、「目出た目出たの若松さまよ、枝も栄えて、葉もしげる」と、うち囃されたご機嫌で、にわかに思いたって、菩提所へ詣でることにしたのであった。

菩提所は、下谷の初音の森の霊梅院にあった。

初音の森は、また鶯谷と呼ばれ、その名のごとく、立春二十日頃から鶯が、美しい囀りをきかせるのであった。

その日は、四序のおわりとは思われぬ、ほっかりとした陽気で、和泉守が、参詣を終えて、境内の甃（しき）石を歩んでいると、その初音が、耳にとどいた。

そこで、和泉守は、駕籠に乗らず、そのまま、森の中の道を、ぶらぶらとひろい乍ら、さらに幾声かを愛でようとした。
その時――。
この森の中へ馬を駆け入らせて来る者があった。蹄の音で一騎と知れた。
当然、供の人々は、誰かが責め馬をしているのだな、と思い、驚をおびやかされてはならぬと、ただそのために、行手をさえぎろうと急いで道をふさいだ。
曲り角に建っている藁葺きの稲荷の祠の蔭から、さっと出現したのは、黒の着流しの浪人ていの人物であった。
「あいや――」
しばらく、と手を挙げて、とどめようとした者へ、いきなり、だだっと乗りかけざま、びゅっと鞭を打ち下したのは、狂気の沙汰というほかはなかった。
他の士たちが、
「無礼なっ！」
「痴(し)れ者っ！」
と、激昂の叫びを口々から発した時には、もう、眼前を、矢のように飛び過ぎていた。
瞬(また)く間に、供槍、茶弁当、徒士押え(足軽)、供侍、駕籠、長柄傘、挾箱、などを、左右になだれ退かせて、行列の間を走り抜けるや、
「ご免っ！」
鋭い掛声もろとも、白刃を、煌(きら)っと宙に閃めかせた。

その下に、和泉守が、恐怖の形相で、立ち竦んでいたのである。

奇怪な曲者が、風のごとくに、という形容がふさわしい迅さで、その場から消え去ったあとに家臣たちが見出したものは、褌（したおび）ひとつの裸身を顫わせて、木偶（でく）宛然（さながら）に、きょときょとと首をまわしている主君の惨めな状（さま）だった。

袴と帯は、足もとに落ち、熨斗（のし）目の表着や下着や襦袢は、樹枝へひっかけられてあった。

唖然とするばかりであった。

曲者は、馬上から、一刀をふるって、この悪戯を、凄じい迅業（はやわざ）でやってのけてみせたのである。目撃し乍らも、殆ど信じられない手練であった。

なお、その脇差は、半町ばかりさきの樹枝へつりさげてあったが、それに短冊がむすびつけられていた。

「大名の先祖は野に伏し山に伏し」

皮肉な川柳の下に、「眠狂四郎」と署名してあった、という。

二

武部仙十郎が、五明楼の離れへ、眠狂四郎をたずねて来て、

「きいたかの？」

と、その言葉を、久しぶりの出会いの挨拶に代えたのは、それから三日後――昨日の午後のことであった。

眠狂四郎は、苦笑して、

「わたしなら、あんな下手な川柳など作らぬ」

と、こたえた。

青山和泉守は、水野越前守と、遠縁にあたっていた。

噂を耳にした忠邦から、問われて、仙十郎は、即座に、それは贋者の仕業に相違ないとこたえておいたものの、一抹の懸念があって、腰を上げて来てみたのである。

狂四郎の明快な否定に、仙十郎は、さもありなん、とにこにこと頷いてみせて、

「はてさて、武弁殺伐の風が没して二百年ともなれば、大名も、陰間以下の腰抜けになり果てるものかのう。祖宗が、墓をゆさぶって、哭いておろうて――」

と、云った。

青山家は、三河譜代で、始祖播磨守忠成は、家康が封を関東に移した時、江戸町奉行となり、関東総奉行も兼職した傑物であった。二代伯耆守忠俊は、十四歳より秀忠に仕え、書院番頭となって、大阪前後の役にも目ざましい戦功を樹て、三代将軍にかわるや、土井利勝、酒井忠世とともに、その補傅の任を命じられた。忠俊は、家光が竹千代であった頃から、その教育にあたり、毎朝、千字文の課業をほどこしたが、一点一画のあやまちもゆるさず、たとえ一句を忘れていても、思い出すまで、小机の前から起たせなかった。竹千代は、屢々、俯向いて、泪を、草紙にしたたらせていた、という。当時、竹千代の弟国松（駿河大納言忠長）が、秀忠の偏愛を享けて、兄の方が廃嫡されるのではあるまいか、という風説があったので、忠俊の教育は、いちだんと厳格をきわめたのである。

忠俊の子因幡守宗俊もまた、稀にみる気骨を持った俊髦であった。

父の死後、あらたに書院番に任ぜられた若い宗俊が、はじめて、江戸城に登った日のことであった。

詰所の前を、加判の執政・老中堀田加賀守正盛が、通り過ぎようとして、ふと宗俊の姿をみとめて、傍の者に、

「それは、誰か？」

と、訊ねた。

「青山因幡守にございます」

というこたえに、うなずいた正盛は、

「伯耆守の伜か」

と、云った。

すると、その驕傲の態度を、じっと仰いでいた宗俊が、横の朋輩をかえりみて、

「これは、誰人でござる？」

と、大声で、問うた。

「加賀守殿じゃ」

と、ささやかれた宗俊は、さらに、いちだんと声をはりあげて、

「ああ――勘左衛門の子息か」

と、云いはなった。

一座の人々は、愕然として、色を喪った。宗俊は、ひとり平然自若として、正盛の睥睨（へいげい）を受けとめていた。

正盛が、突然、声をたてて笑って行き過ぎたので、人々は、ほっと胸をなでおろしたことだった。翌日、正盛が、宗俊を、一躍、書院番頭に任じたのも、流石は、権威無雙の大腹中、として世の称讃するところとなった。

家名を惜しみ、威武に屈せず、剛毅清廉を旨とし、漫に意志を枉げず、義理を弁え、武士道の吟味のためにのみ魂をつらぬかんとした時代の大名たちであった。

この勇気ある祖宗を持つ和泉守忠成が、素浪人一騎に襲撃され、なすところなく、おののいて、素裸にされるにまかせたのである。

世間の嘲罵をあびて、あび過ぎるという次第ではなかった。

「ただ、和泉守が、わが君の従弟にあたるのは、ちとまずいの。……おぬしに、おのれのしわざでないあかしをたててもらわねばなるまいて」

仙十郎は、そう云いのこして、去ったのであった。

……狂四郎は、まだ、その贋者の姿を一度も見てはいない。

これまで出会ったいかなる強敵よりも、手ごわいであろうし、断じて斬らねばならぬ対手であることだけが、わかっていた。

――もう、そろそろ、おれの前にあらわれてもいい頃だが……。

敵が、いかなる意表外のいやがらせをやろうとも、すこしもおどろかぬだけの冷静さを持ちつづけている狂四郎であったが、それにしても、この忍耐は聊か長すぎる。

この離れに寝ころんで、惘然として、その時を待っているのも、あまりに芸がないというものである。

むっくり起き上って、
──そうだ、あの女を見舞ってやらねばならぬ。
と、想念を、そちらへかえた。
押上の竜勝寺の、狂四郎の古巣で寝ているお園という、薄倖の婦人のことであった。狂四郎は、住職の手紙を受けとって一度、赴こうとしかけて、贋者にその妻を犯された黒崎源八郎という剣客に、行手をはばまれ、それなりになっていたのである。
出て行こうとして、無想正宗を、床の間から把った時、女中が、田嶋屋の来訪を告げた。
甲府で、勤番支配松岡大内蔵から、家康作「天照大御神」という途方もない偽物を売りつけられた木場の材木問屋であった。あれ以来、はじめて顔を合せるのであった。
あいかわらず、しぶい好みのなりをした田嶋屋は、柔和な態度で挨拶をすませると、
「早速でございますが、てまえに、貴方様の影をお贈り下さいますとか──」
「影？」
「はい。お手紙を頂きまして……どういう意味か、二日ばかり、考え込みましたが、一向に、解けませぬので、こりゃアひとつ、ご当人にお会いしておうかがいした方が、手っとり早いと──野暮を承知で、参上仕りました」
狂四郎は、
──またか！
と、苦笑して、その手紙を、所望した。
たった一行、達筆で、

「近日中に、それがしの『影』を呈上。眠狂四郎」
と、あるだけだった。
「おれにも、なんのことやら、わからぬ」
冷やかに云って、手紙をすてると、狂四郎は、もう立ちあがっていた。
「いたずらでございましたか？」
田嶋屋は、眉をひそめて、見あげた。
「ただのいたずらではない。おれから、まちがいなく、おぬしに、自身の影を贈ることになるだろう。贈るまでは、こっちも、おぬしも、影とはいかなるしろものか、見当もつかぬとは、なさけない話だが、こんどの敵は、行動力に於て、おれよりはるかに役者が上だ。おれを踊らせようときめたことは、確実にやってのける。こちらも、その気で踊ってみる。……お笑い草に、待っていてもらおう」

三

蕭条たる暮色を帯びた野の中のひとすじの往還をひろって行く狂四郎は、いつか、湿った感慨にとらわれていた。
過ぎ去ったいくつかの出来事が、夕靄に溶けて潤んでいる前方――白鷺の棲む疎林や、竜勝寺の屋根がのぞく竹藪に近づくにつれて、ありありと甦って来ずにはいなかった。
左様、四年前の秋、美保代の存在を知った静香が、うちのめされて、とぼとぼとひきかえして来るのに出会ったのは、丁度このあたりであった。

静香は、異常にこわばった表情で、こちらの顔を凝視したが、ふいに、風のように、脇を駆けぬけて行ったものだった。

静香が、左馬右近に犯されたのはその直後であり、哀れにも気が狂い、そして、ついには、自ら生命を断たねばならぬ悲運の道を辿って行ったのだ。

一縷の白煙が、ものうげに、蒼然たる暮色の中にゆれている世界へ、暗い眼眸（まなざし）を送り乍ら、狂四郎は、云おう様のない、生きていることの倦怠感に、次第に脳裡を空虚なものにしようとしていた。

このおり——。

竹藪の蔭から、すたすたと急ぎ足に出て来た一人の武士が、街道から曲って来る狂四郎と、赤い前だれをかけた石地蔵の立っている三叉路で、すれちがった。

と——狂四郎が、目ざめたように双眸に冴えた光を生んで、その武士の後姿へ送った。

「おい、その御仁」

ふりかえった武士は、いかにもさりげない面持で、

「は——なにか？」

と、小首をかしげてみせた。

「甲賀忍組と見た」

いきなり、ずばり、とあびせた。

どことい って目立たない、凡庸そのものの武士ていを装っているが、それが本物ならば、当然こちらの異相に怯じけて、胡乱（うろん）臭げにぬすみ見る筈のところを、そうせずに、そ知らぬふりで行

き過ぎようとした——それが、かえって、狂四郎のねむっていた神経をぱっとさましたのであった。
「左様でござる」
対手が、平然として頷いてみせたのに苦笑が湧いて、
「わたしが、竜勝寺へ行くとさとって、一足さきに、行っていたのだな？」
「という次第に相成る」
「わたしに対する何かの小細工をして来たと考えてよいのか？」
「見透された。いかにも、然り——」
しゃあしゃあとして、こたえたのである。
瞬間、狂四郎のふところ手の姿から、目に見えぬ凄じい剣気が、放射した。
間髪をいれず、忍者は、かるく、一間を跳んで逃げると、依然たる無表情で云った。
「貴公に挑戦しているのは、それがしではない。貴公の風姿を窃んでいる者は、われらが仲間で随一の手練者——」
ふん——と鼻で嗤って、狂四郎は、歩き出した。
忍者は、その後姿を、じっと見送っていたが、ひくく、
「……危かった！」
と、呟いた。危機が去って、はじめて、よくぞ斬られなかった、と全身に冷汗をおぼえていた。平気を装っていた自分自身が、ふしぎなくらいであった。
「斬られるかも知れんぞ、第三番のやつ——」

狂四郎の姿が、竹藪の中に入るのを見とどけておいて、歩き出したその男の口からもれたのは、その独語であった。

それより、小半刻ばかりまえのことである。

竜勝寺の離れでは、住職空然と小春吉五郎が、お園の臨終を見まもったのである。

十八歳の春、狂四郎に抱かれて、瀬戸内海の波間へ飛び込んだ際に、すでに死ぬべかりし生命を、呂宋作兵衛という倭寇の頭に救われて、狂四郎の位牌に祈ることで十年をすごして来たのであった。

ようやく、その儚ない生命の残り火も消えはてる時が来たのである。

空然は、吉五郎と顔を見合せて、――もういかんな、と頷いてみせるや、立って行って、床の間にまつられた狂四郎の位牌を持って来た。

「空然さん――」

急に、吉五郎が、気色をあらためて、ささやいた。

「本当のことを、打明けちゃいけませんかね」

「……………」

「そうすりゃ、ひょっとして、ここへお見えになるまで、持ちこたえる気力が出て――」

「おそいな、もう――」

空然は、いたましげに、死相濃い寝顔を見下して、かぶりをふった。

「おそうござんすかねえ」

吉五郎は、未練げに、こうしているあいだにも、庭に、狂四郎の跫音でもきこえるのではなかろうか、と振りかえってみたりした。

空然とても、同じ気持であった。しかし、狂四郎があらわれない以上、自分たちの口から、その人が生きていると教えて、垂死（すいし）のたましいに、おそろしい衝撃を与えることはできなかった。その歓喜で、生命の火をもう一度燃えたたせるには、もはや、あまりにもそのからだは冷たくなりすぎていた。

生命の火は、秒刻でかぞえることができるはやさで、しだいに、消え行こうとしていた。そして、その寝顔は、幸せの薄かった、辛い人生から、やっとわかれる時を迎えて、この上もなく安らいだものになっていたのである。

空然は、春葱にも似た白い細い十指に、そっと位牌を握らせてやった。

目蓋が、あるかないかに、顫えた。やや間を置いて、色褪せたくちびるも、かすかに、わなないた。

息をのんで見まもる空然と吉五郎は、その寝顔に、ほんのりと、微笑が刷かれるのをみとめた。

微笑は、そのまま、死顔にのこった。

吉五郎は、がくんと項垂れて、泪をのんだ。

ひくく、誦経をささげた空然は、

「では、葬儀の用意をして参ろう」

と、やおら立って、離れを出て行った。

——可哀そうに……お園さん、眠の旦那は、生きておいででござんすぜ。もうしばらく待っていなさりゃ、屹度会えたんだ！

胸のうちで、呻いて、両のこぶしを、膝へにじりつけた。

この刹那であった。

突然、背後の障子が開いて、何者かが入って来る気配に、ひょいと視線をまわしかけた吉五郎は、対手の姿をみとめるよりもさきに、脾腹へ、強い一撃をくらって、昏倒した。

どれくらいの時刻が移ったか——。

「吉五郎！……おい！」

ぐんと、活がくわえられるとともに、わが名を呼ばれて、はっと息をふきかえした吉五郎は、唸りを発して、はね起きた。

狂四郎の顔が目の前にあるのをみとめても、咄嗟に、錯覚と思って、ふところの匕首を攫んでいた。

やっと、その顔が狂四郎のものにまぎれない、と自身に納得させて、

「旦那！」

と、一言叫んで、大きく喘いだ。

「ひと足おくれた」

狂四郎は、そう云って、お園の死顔へ、目をあてた。

「旦那！　あっしは、いってえ、な、なにをされたんでござんす？」

「おれの敵の一人が、やって来た。お前が目をあけていたら具合がわるいので、ねむらしておい

で、何か小細工をやって行ったのだ」
「へえ？」
吉五郎は、わけがわからなかった。
不幸な婦人の逝った部屋へふみ込んで来て、何をして行ったというのか？
……ようやく、心をおちつけて、わずか、一刻の差で、めぐり会えなかったお園の不運に、吉五郎が、唇を噛み乍ら、行灯へ火を入れていると、それまで、黙然として、枕頭で、腕を組んでいた狂四郎が、何を思ったか、その腕を解いて、すっと、掛具をもちあげた。
「吉五郎、灯を、ここへ寄せてくれ」
「へい――」
狂四郎は、自分の位牌を握った両手をはなすと、その襟を、ぐいとはだけさせた。
「あっ！」
吉五郎が、烈しい驚愕の叫びをあげた。
不透明な白蠟の胸肌に、いつの間にか、墨くろぐろと、左の文字が記されてあったのである。
右の乳房には、「眠狂四郎殿」
左の乳房には、「眠狂四郎より」
そして、隆起と隆起のくぼみには、「今宵子上刻、上野山内忍岡稲荷社前にて、果し合のこと」
忍者の細工とは、これであった。
「ひでえっ！　畜生っ！　なんてえ真似をしやがるんだ！　仏をはずかしめやがって！」
吉五郎が、血相かえて、喚いた。

狂四郎は、表情こそ冷たくそのままであったが、内には、はじめて、贋者に対して勃然たる憤怒を沸騰させていた。

四

忍岡稲荷は、時鐘を鳴りひびかせる鐘楼の西南の低地にあり、穴稲荷あるいは浄雲稲荷とも呼ばれる。

ひろく江戸中の人々に信仰され、昼間の参詣人の数は、大変なものであったが、夜半三更の鐘が鳴り終ったいまは、耿々たる寒月の光をあびて、樹枝ひとつ凍てついたように動かず、寂寞たる冷気に、山はおしつつまれていた。

鳥居をくぐって、すぐ左側の石狐のかたわらに、ひっそりとして彳む黒影もまた、石像と化したように、微動もせずに、対手の来るのを待っている。

これは、贋者の方であった。寸分ちがわぬ風姿乍ら、大小は右の腰に帯びられていた。

不忍の池畔をひろって近づいて来る者の唄声が、遠い地点から、よく徹ってきこえた。

白妙に、雪の振り袖ちらと見た、様の姿のなつかしや、空に知られぬわがおもい、柳に雪のしっぽりと、枝もたわめるその上に、さも美しき白鷺の……

折戸の門の前で、その唄声が、ぴたっと止まるや、鳥居の蔭で、黒影も、つと動いた。折戸をひらいて、ゆっくりと入って来た狂四郎は、そこで、ちょっと立ちどまって、彼方に立つ贋者へ、眸子の矢を射込んだ。

——成程、よく似せた！

声に出して、ほめてやりたいくらいだった。
すたすたと歩をきざんで、無造作に、たたかうべき位置を占めると、
「稲妻や昨日はひがし今日は西——か。忍者という商売も、御苦労だな。おかげで、こちらは、たっぷり、濡衣をきせられたが、どうやら、今夜で、脱がせてもらえそうだ。あまりいい気持のものではなかったことだけは、つたえておく」
「…………」
「どうした？　声までは似せられぬか。ついでに、自分の声を、他人の口からきかせてもらう愉しみもあって来たのだ」
「…………」
「そうか。唖なら、やむを得ぬ。こんど生れて来る時は、鵺の声をもって来い！」
炳乎として動かぬ、殺気凄じいふたつの眼光が、月明の宙でぶっつかり、いくばくかの沈黙を置いた。
二剣が、鞘から噴いて出たのは、全く同時だった。ともに——これまた全く同じ、地摺り下段の構えであった。
それなりに、地上へ長く影法師を映して、月光に濡れたふたつの黒衣痩身は、じりとも動かず、吐く息すらもみせなかった。
切尖が、殆どふれあわんばかりに、鈍角を描いて、ぴたりと空間に固着した白刃と白刃が、時おり、煌っとひかったのは、月の方が徐々に移って行くためであった。
その月の運行路に中天の老松が在った。

ふっと……月が、その梢にかくれた。

刹那——狂四郎の両足が、大地を蹴った。満身からの気合は、双方の口から、同時に発しられた。

贋狂四郎の手から弾かれたその剣が、白い弧を描いて、背後へ飛んだ。

とともに、贋狂四郎もまた、翼でもあるごとく、後方へ、ひらっと、跳び退った。のみならず、舞い落ちるおのが剣を、ふたたび、さっと摑みとっていた。

次の瞬間、贋狂四郎の五体が翻転して、風のように、石段を駆けのぼるのを見た狂四郎は、

「うぬ！　卑劣っ！」

猛然と、追った。

贋狂四郎は、たちまちに、階を躍りあがって、祠の内へ消えた。狂四郎もまた、その五尺の高処へ飛んで、立った。

蔀戸の突き開かれたそこに——正面、半間の距離をもって、敵は、すっくと向い立っていた。

その全身から燃え熾る殺気の凄絶さに、狂四郎は、相討と直感する粛然たる神気のなかに、無想正宗を、真っ向から、斬りおろした。

敵もまた、同じく、狂四郎にむかって、その一剣を、振りくだした。

奇怪——鏘然たる音響とともに、敵影は、ぱっと消えはて、狂四郎は、微傷だに負わず、その場に健在だった。

一瞬の喪神ののち、狂四郎の顔が、自嗤のために、ひき歪んだ。

狂四郎が、真っ二つに断ったのは、巨大なぎやまんの鏡であった。すなわち、狂四郎は、悲

惨、それに映ったおのれの影を斬ったのである。

ふたつに割れた鏡面が、うしろのささえで、左右に大きく傾いたまま、床に倒れて砕けるのをまぬがれているのも、あらかじめの工夫とみえた。

「……敗れた！」

はじめて、狂四郎の口から、血をしぼるように、その悲痛な一句が、呟かれた。

贋狂四郎が、豪商田嶋屋へ送ると約束した『影』とは、まさしく、この大鏡のことだったのである。

傍観者

一

四更にちかい深夜の街を、寒風が、唸って、吹きぬけていた。

じっと耳をすませていると、その風の音も、幾種類かあった。遠くからさわいで来て、中空を翔けすぎる疾風（はやて）。急に、近くで地から噴きあげるように起って、家々の戸を烈しくゆさぶって行く旋風（つむじ）。それから、響きを波うたせつつ、妙に静かに渡って行くこがらし——。

眠狂四郎は、ここ——日本橋南詰東側の罪人晒し場の裏手にあたる居酒屋で、幾本かの銚子を空にし乍ら、これらの風の音を、きくともなしに、ききわけていた。

風の音のほかは、世界は、まったく、寂莫にかえっていた。外は、上弦の寒月が冴えて、白昼のようにあかるいのであったが、それにむかって遠吠える犬の声も、今夜は、一度もきこえないのであった。

すすけた戸障子を、縄暖簾（のれん）に打たれるにまかせたこの居酒屋の内部も、もう二刻あまり前から、ひっそりとしずかなのである。

といって、狂四郎のほかに、客がいなかったわけではない。別の台で、もう一人、町人姿の若

い男が、飲んでいた。それから、奥では、火鉢の熾火へ、踞みかかったお内儀が、綿入半天の黒繻子の襟へ、あごをうずめて、じっと動かずにいたのである。

この三人は、左様、まだおもての通りに、人の跫音があった頃から、ふかい沈黙をまもって、歓楽を求め利得をあさってあわただしく急ぐ人々とは全く無関係にきりはなされた寂寥の底に、思いを沈めていたのである。ふしぎに、この間、客は、あらたに一人も入って来てはいなかった。

やがて——。

「……おい」

狂四郎が、首をまわして、呼ぶと、返辞のかわりに、お内儀が、銚子を持って来て、台へ置いた。そして、そのまま、奥へ引込もうとしかけた時、風に乗って、微かにつたわって来る人の呻き声にふっと、面をこわばらせて、立ち竦んだ。

お内儀は、狂四郎をふりかえって、

「旦那——。旦那は、晒し場の捨札を、お読みでございますか？」

「うむ」

「鋸挽きでございましたねえ」

「ああ——そうだったな」

めったにない刑罰だった。

いつもは、そこは空地になっている。晒し者がある時だけ、苫小屋を懸け、内に筵を敷いて、杭を打ってしばりつけて置くのである。鋸挽きとは、いうまでもなく、鋸で囚人の首を挽き切る

ってからは、流石に、鋸挽きは、字義通りに実行することは、止められて、泰平が続いて、秩序が整切り、その血を鋸につけて傍に置くようになり、この時代にいたっては、疵をつけることも廃して、ただ鋸を傍に置くにとどめられていた。

主人殺しのような逆罪を犯した者に科せられる刑罰であった。

「やっぱり……お主をなにしたのでございましたか？」

「うむ」

狂四郎は、頷いたが、捨札に記されたいきさつを説明する親切心はもたなかった。

すると、別の台から、もう一人の客が首をまわして、

「お内儀――」

「はい」

向きかえた顔へ、客は、にやりとした。陰惨な、凄い目つきであった。

「お前が、わざわざ、こんな場所をえらんで、白馬をひらいているのは、もしかすれば、お前の伜が、晒されたからではないのか」

冷やかにあびせた。

瞬間、お内儀の表情が、凍った。

「そうなのだな」

ふふふ、とひくい笑い声をもらして、盃を口へ運ぼうとする客へ、狂四郎が、口調はしずかに、

「他人の古傷を痛めて何になる」
と、云った。
客は、じろりと、狂四郎へ、一瞥をくれた。
いきなり、こっちの名前を口にされても、別に眉もうごかさなかったのは、すで
「眠狂四郎殿は、他人の古傷を痛めたことはないのか？」
に、三日前から、この男に尾けまわされていることを知っていたからである。今日の暮れがたま
では、姿を隠していることに万全の思慮をはらっていたにも拘らず、突然、この居酒屋へ入って
来たのを見て、かえって、これは、こっちの方で、なんのこんたんかと訝ったくらいである。
「わたしは、求めて、他人の古傷を痛めたことはない」
「………………」
男は、鋭く刺すように、狂四郎を瞶めていたが、急に、台へ目を落して、
「おれは、あんたを尾けているうちに、だんだん、あんたの、その……なんとも云い様のない、
呪わしげな、暗い妖気に、やりきれなくなった。……おれは、おれの任務をすてるほぞをきめ
た。おれを牽きつけるあんたの魅力は宿業の古傷から滲み出るのではないのか？」
殆ど独語にひとしい、顔をふかく伏せ乍らの言葉であった。
「甲賀忍組にも、おぬしのような人間くさい仁がいるとは、ひろいものだ」
狂四郎は、冷やかに、それを返辞にした。おのれの影が映った大鏡を斬らされて以来、狂四郎
は、憤怒も恐怖もなく自ら危険に身を曝す判断というものが、いかに至難のわざであるかを、ふ
かくさとって、あらためて、忍者とのたたかいに、過去に積んだ経験を一切すてて去る決意をして

いた。忍者というものは、こちらが身につけた流儀では予見し難いおそろしい非情を、脳髄の機構の芯として、外界すべてのものに対して行動を移す――あらためて、そうみた。いわば、自由な意志を持たずして、いかなる危険な手段でもとり得る冷静な狂人――これだ、と考えて、狂四郎は、曽て「親不知組」とたたかったごとき思案や熟考を無益としたのである。

そう思いきめた矢先に、あまりにも人間くさい言葉を吐く忍者の出現は、これは、甚だ当惑すべきことに相違なかった。

――これも、忍者の詐術のひとつなら、こっちは、腕を拱ねいているよりほかはない。

狂四郎が、そう考えていると、対手は、再び顔を擡げて、

「おれが、忍者を廃業する証左を、跟いて来て、見とどけて頂こう」

「その前に、ききたいことがある。……わたしを尾けているうちに性根が変ったというのが、解せぬ。まことの理由が知りたい」

「それは申せぬ！」

男は、きっぱりと、かぶりをふった。

二

それから、小半刻のちに、狂四郎と忍者は、室町一丁目から須田町へ抜ける江戸随一の広い往還を、ゆっくりとひろって行った。

月は傾き、片側は影になって暗く、一方の家並が、塗装されたように、しろじろと浮きあがっていた。今川橋を渡るまで、視野の中に動いたのは、魔物のように路地から路地へ駆けぬけた黒

猫のすがただけだった。
いつか、風は、落ちていた。
「……これから行く屋敷に、甲賀忍組帳がある」
長い沈黙ののちに、忍者が、ぽつりと云った。その全員の、経歴、特技、動静が、大小洩らさず、くわしく記されてある秘帳であった。これは、忍組の全貌をつたえるのみならず、その一員一員がなした行動によって、幕閣、三百諸侯、旗本、および江戸大阪の富豪たちの、政権をめぐる暗闘、金融上の画策などが、掌を指すごとく推察される筈であった。
狂四郎が、返辞をせずにいると、忍者は、底目を光らせて、その横顔をぬすみ見て、
「おれは、それを奪って、あんたに呉れてやる」
と、云った。
が――狂四郎の口は、猶も頑なに、一文字にひきむすばれたままであった。
忍者も、それきり言葉を断った。
鍛冶町から右へ折れて、土手沿いに、紺屋町を辿って行くと、この町屋通りに、急に、あたりを威圧する宏壮な大名屋敷のなまこ壁の長屋があらわれた。
忍者は、その塀の端に足を停めた。頭上には、樫らしい巨木が樹冠をひろげていて、二人の姿は、月光から隠れた。
狂四郎は、石垣の畳出し、出格子の作り、そして彼方にそびえる黒い門を眺め渡して、
――何様か？
と、首をひねった。

大名屋敷の正面は、家に応じ地位に応じ格式に随う厳重な規定に律せられる。一瞥しただけでは、十万石以上の譜代と受けとれるが、それならば、すぐに、思いあたる筈であった。この町屋通りに、譜代の名門国主が屋敷を構えているとは、きかないのである。

忍者は、狂四郎の不審を察した様子であったが、教えようとはせず、

「では――」

忍び込む、と合図した。

もとより、厳重に囲われた屋敷であったが、この両者の侵入をはばむことは出来なかった。

塀の内側は、欝蒼と繁った林であった。向いの土手の下をくぐらせて引き込んだ水が、月明りに、樹影を映して流れていた。下草を刈って、落葉をしきつめた小径は、それに沿うてつけられていた。

忍者は、なんのためらいもなく、落葉をふんで、林をくぐって行く。

幾曲りかして、出たのは、築山の頂上だった。臥竜と名づけられそうな、人の背丈よりもひくい老松が、いちめんに匍いひろがっているのであった。

大きな池が、前方にあり、そのむこう岸に、くろぐろと、宏壮な屋根が、月空を截りぬいて、そびえていた。

狂四郎は、忍者のからだに、遽に、きびしい鋭気が満ちるのを察知した。

――妙なことになったものだ。

心の中では、そんなそらぞらしい呟きがあった。

これまで、他人の家へは、屢々忍び込む経験をもっているが、それにはなさねばならぬ目的が

あった。今夜は、それがないのである。完全なる傍観者の立場に置かれていた。甲賀忍組帳を手に入れたい欲求など、すこしもなかった。

忍者が、ふりかえって、云った。

「万が一の場合は、あんた一人で、逃げ出されたい」

「おぬしは、死ぬのか？」

「いや――」

かぶりをふって、忍者は、確信をもった一歩をふみ出した。

三

屋内に侵入すると、狂四郎は、勝手に振舞うことを告げた。忍者は、ちょっと逡巡していたが、承知した。

「引きあげは、忍び笛で、鶯を啼く」

そう云いのこして、廊下の闇へ消えて行く忍者を見送ってから、狂四郎は、ふところ手で、反対側へ――中廊下へ、入って行った。

この時刻であるから、屋内が、しいんとしずまりかえっているのは当然であるが、磨ぎすまされた神経ならば、多数の人の寝ているのと、無人であるのとでは、おのずから、その静寂がちがうのを知る。奇怪なことに、狂四郎は、この屋内に、殆ど人が住んでいない、と断定せざるを得なかったのである。気ままに歩きまわってみることにしたのも、このためであった。

――どういうのだ、これは？

跫音を消してはいるが、細心の注意をもって忍ばせる必要もないようであり、狂四郎は、中廊下を幾曲りかするうちに、ますます、奇怪の感をふかくした。通りすぎるどの部屋も、まったく人の寝ている気配はないのであった。

中廊下が終って、渡廊（わたどの）になり、離れらしい別棟に入った時、はじめて、狂四郎は、

——ここには、住んでいそうだな。

と、予感した。

壁に沿うて、ひと曲りして、障子にふれると、立ちどまって、鋭く神経を働かせた。

——いる！

ここまで来た以上、寝ている者の顔を見とどけておこう、という気になった。

音もなく、障子をあける——。

とたんに、狂四郎の鼻孔を衝いたのは、甘い乳の匂いだった。

その匂いに、狂四郎の神経が、ふっと、溶けた。ゆくりなくも、遠く忘れていた、なつかしい匂いをかいで、虚無でおしつつんでいた孤愁が、微かに疼（うず）いた。

闇を透す目で、牀を見据えていたが、ゆっくりと、床の間の方へまわって、行灯のわきに、片膝をついた。

乳の匂いとともに、なまめかしい化粧の匂いも、闇にただよっているのであった。若い母と幼児の居間なのだ。

かちっと、燧石（ひうち）が打たれた。

同時に、掛具がはねのけられ、ぱっと起き上った者の手もとから、轟然と、銃声がほとばしっ

た。
　それきり……撃った者も動かず、撃たれた者も動かなかった。
　再び、燧石が打たれたのは、数秒間を置いてからであった。あかい明りが、そこから、ぼうっと、闇へ滲み、拡がった。
　狂四郎は、左の手くびから噴く血汐を、懐紙でおさえ乍ら、牀に坐って、短筒を握りしめている女を、眺めた。
　黒い瞳が、みじんの恐怖もなく、深く澄んでいる美しい貌だった。細く通った鼻梁や口もとは、巧緻な気品のあるつくりであったが、優しさのかわりに、氷を刻んだような冷たいものに感じられた。
　無断の侵入者に対する怒りの表情がつくられているという次第でもなかった。
　じっとして、動かぬ、薄紫の寝衣姿が、神秘にさえも感じられる。
　かたわらには、銃声にもおびえず、可愛い嬰児が、もみじの両手をばんざいして、すやすやと睡っていた。
　狂四郎は、やおら、立ちあがると、
「失礼した」
　詫びて、出ようとした。
「お待ちなさい！」
　呼びとめる声音も、美しかった。
「なんの理由による、無礼の振舞いですか？」

「ただ、なんとなく――」
うすら笑って、こたえておいて、狂四郎は、廊下へ、ひと足出た。
「それだけでは、すみますまい」
女は、銃口をあげて、狙いつけた。あくまでも、冷たい、蔑みの色を含んだ眸子の光だった。
狂四郎は、その光を受けとめて、
「わたしの連れは、目的があって、母屋の方にいる」
と、こたえた。
女の眸子は、次の言葉を促していた。
甲賀忍組帳のある屋敷である。住人がただものでないことは明白である。女と雖も、これだけの不敵な勇気をそなえている。
連れの目的をうちあけてみせたら、どんな反応をしめすか――興味が湧いた。
「わたしの連れは、甲賀忍組の一人だ。いや、つい先刻まで、そうであったが、どういう風の吹きまわしか、その任務をすてる肚になったようだ。のみならず、この屋敷から、忍組帳を奪って、敵であるわたしに、呉れようというのだ。申しおくれたが、わたしは、眠狂四郎という素浪人――」
そう告げるあいだにも、狂四郎は、期待以上に、女の表情が、みるみるしめす烈しい変化に、
――これは！
と、遽に、興味を強いものにした。
「その人は――」

女は、云いかけて、ひと息止めて、衝動を抑えると、
「眉と眉のあいだに黒子のある……？」
「忍組第三十二番、と呼ばれて居る由」
狂四郎のこたえのおわらぬうちに、女は、すっと立って、隅炉の切ってある床脇へ寄った。そのひくい亭武天井へ双手をのばし、鏡板をずらすと、帙入りの一冊子をとりおろした。
——忍組帳は、ここにあったのか。
狂四郎は、聊かあっけなさすぎる女の行為を、冷やかに眺めて、
——どうやら、おれの出番はないようだ。
と、心で呟いたことだった。
傍観者で終始することに、なにやら、のんびりとした満足感があった。

四

床柱に、後手に縛りつけられているのは、三十がらみの、大兵の、鞏固な意志力の持主であることを、その立派な風貌にしめしている武士であった。
自由をうばわれ乍ら、平然として、眉ひとつ動かさぬ無表情であった。
縛りあげた方の凄じい形相と、これは、皮肉な対照であった。
忍者の右手には、匕首があった。
「おれに、復讐されることを、よもや、考えなかった貴様ではない筈だぞ！　それを、なんぞや——他愛もなく、このざまに、なり果てて、恥を知るなら、その平気な面構えがいまは滑稽な

虚勢でしかないことに気づくがいい！……おれは、この二年余、貴様の、その傲慢な面を、片刻も忘れずに、呪いつづけて来たのだ。その間のおれの、忍者としての働きは、自慢するに足りる。おれは、頭領にたのんで、最も危険な、極度のはなれわざを必要とする任務につき、それをやりとげて来た。それは、ひとえに、貴様に復讐するために――復讐を絶対に失敗せぬために、おのれの業（わざ）を鍛えるためであったのだ。おれは、貴様が、忍者以上の、おそろしい兵法者だと信じていたのだ」

ここで、忍者は、かっと、痰を、俘虜の面ていへ、吐きかけた。

「なんという笑止だ！　貴様は、刀の抜きかたも満足にできぬでくのぼうだったのだ！　貴様は、その尊大な面構えと、奸智に長けた脳みそで、われら甲賀忍組を自由自在に頤使（いし）して来たのだ！　くそっ！」

一語一語に、満身の憎悪を罩め乍ら、忍者の脳裡には、二年前の思い出が、走馬灯のように、おそろしい速力で回転しつつ、蘇って来ていた。

実は縛りあげたこの俘虜と忍者は、幼馴染であった。ともに、旗本軽輩の伜であった。

忍者の方は、父親に越度があって、甲府城在番を命じられ、十一歳で江戸を離れていた。

十八歳の時、えらばれて、甲賀忍組に入り、甲賀山中に送られ、言語に絶する苛烈無比の修業十年を経て、ようやく、江戸の土をふんだのであった。

ところが、江戸における忍組に公儀御用を命ずる総支配に目通りするや、愕然としたことだった。曽ての腕白仲間が、いかなる異数の抜擢を経たものか、その総支配だったのである。

もはや、膝を交えて親しく談笑することなど、思いもよらぬ遠い懸隔があった。忍者は驚愕を

胸中に呑みくだして、往時を回顧するにあわただしかったし、総支配の方は、それが幼馴染と知るや知らずや、全く無視した態度であった。尤も、そのおり、ほかに八名の朋輩がつらなって、総支配の訓令を受けていたのであったが……。

別室で酒宴となったが、忍者は、他の者と同様、膝行して、盃を受けただけで、ついに、一語も交さないでおわった。

総支配が、奥へ引きとってから、忍者は、ひとりになって、その感慨を鎮めるべく、庭へ出た。

暮秋の十六夜の月が、明るく泛んでいる宵であった。芝生の斜面を下ると、池畔には、夜霧がうす絹のようにたなびいていて、水面は、いぶし銀のように、霧を透した柔かい月かげを映していた。

そこに――大きな楓の木蔭に、一人の女が、しゃがんでいるのを見出したとたん、忍者は、直感した。

――妹の登重ではないか。

そうであった。

つと立って、向きなおった、白い花のように美しい顔が、微笑して、

「修之助さんですね」

と、云いかけたのである。

兄とちがって、素直に、むかしの名を呼んでくれるその妹に対して、忍者の心は、生きかえったように、はずんだ。

勝気な少女で、遊び相手になってやるたびに、ひどく手こずらされたものだった。初午祭の宵、武家も町家もなく、近くの旗本大身の邸内が開放され、花傘を掩うた地口絵灯籠をたてならべて、手踊りが催された時、幼いふたりは手をつないで、植込みの木下闇へさまよい入り、いずれからともなく、抱きあって、ぎごちない口づけを交したものだった。

なんとなく、肩をならべて、月のなかを池畔から、築山へ登って行く忍者と娘は、同じく、十余年前のその時のことを思い出していたのである。

築山の中途に、竹林の繁みの蔭にかくれた腰掛待合があり、そこに入って、しばらく、腰をおろしているうちに、その追憶が、どちらの心の中でも、あらたな欲求と衝動にかわって、烈しく昂ぶったのであった。

……忍者が登重を抱いて、徐々に、畳敷きの上へ押し倒していった時、登重は、両のてのひらをかざして、丸窓からそそぎ込む月光から、はずかしいわが肢態をかばうようにした。それから、袂で顔を掩うて、しずかに、人形のように、全身を、男にゆだねたのであった。やがて、疼痛を怺えるために、男の襟もとを噛んでいた。

不運は、このいとなみを、朋輩の一人が、竹林の端から、ぬすみ見ていたことだった。忍者は、口外すべからざる無慚の処罰を受けたのである。

「おいっ！」

忍者は、一歩迫って、匕首を、俘虜の鼻先へ、つきつけた。

「貴様が、おれになした残酷を、こんどは、おれが、貴様にやってやるのだ！　この期におよんで、吠面は、かかせぬぞ！　よいか！」

悪鬼——ともいえるその凄惨な形相を、しかし、縛られた者は、依然として、冷然たる面持で受けとめていた。
「やるぞっ！」

五

夜あけは、もう近いのであったろう。月は落ちていたが、中空には、ほんのりと薄明りがさしていた。
いっさいの風物が凍てついてしまった暁闇の地上に、ひたひたと、数人の跫音がつづく。
眠狂四郎と忍者と、そしてすこしおくれて、一梃の駕籠と駕籠の中には、登重という女が、嬰児を抱いていた。
忍者が、俘虜に躍りかかろうとした矢先、嬰児を抱き、忍組帳を携えた登重が入って来て、事態は一変したのであった。
俘虜は、はじめて、非常な狼狽をあおらせて、妹を大喝した。しかし、登重は兄へ一顧もくれず、忍者へ、忍組帳をさし出して、兄をゆるしてくれるようにたのみ、また、じぶんたち母子をつれて行って欲しい、とたのんだ。
不覚にも、この世に、おのれの子が生れ出ているとは、夢にも知らなかった忍者は、すやすやとねむる嬰児を見て、名状しがたい困惑の情を、掩いかくすことは出来なかった。
息づまる対峙の緊迫した空気を、ふいにやわらげたのは、廊下に佇んで、庭を眺めやり乍ら、謡曲・熊野（ゆや）をうたう狂四郎の、ひくく、冴えた声音だった。

「……草木は雨露の恵み、養い得ては花の父母たり、いわんや人間に於ておや……」
忍者は、匕首を懐中におさめて、登重母子をともなって、屋敷を出たのである。
辻に来た。
狂四郎は、立ちどまった。
「ここで、お別れしよう」
そう告げて、渡されていた忍組帳を、さし出した。
「これは、おぬしに、おかえししよう」
「いや――あんたに呈上すると約束したのだ」
「わたしは、自身から進んで、甲賀忍組と決戦する意志はない。したがって、忍組帳を紐く興味もない。……これは、たぶん、おぬしの生命をまもる護符になるのではなかろうか」
忍者は、うなだれていたが、ひくく、礼をのべて、忍組帳を受けとった。
狂四郎は、西へ――。
忍者と駕籠は、東へ――。
半町を過ぎて、狂四郎は、首をまわしてみた。
すでに、その影は、靄の中に溶けていた。
――あの二人が、夫婦になって、果して、幸せがおとずれるのか？
暗然として、その行手を想いやった。
狂四郎は、知っていた。忍者が、女犯の罪をなした場合は、その男根を断たれるという無慚の掟があることを――。

あの忍者も、例外ではなかったのである。

比丘尼地獄

一

町々に、餅を搗く音が、ひびいていた。

往来での、町内の鳶の者が、威勢のいい声をはりあげて杵をふりあげているのを、引きずり餅という。とりかこむ子供たちの目が、かがやいている。この光景をさかいにして、あわただしい年の暮れのさわぎがはじまるのである。

各辻に、〆かざりの小屋が作られるのも、今日である。外堀、河岸の各所には、松市がたつ。

将軍家御城三十六の目付御門が、御用達によって、飾られはじめるし、諸侯、旗本、大刹も、抱え人足によって、これにならう。

行き交う人々の足の運びも、金策、年の尾の進物配り、家業追い込みで、忙しい。その気ぜわしさをひっかきまわすように、編笠に紅白青の紙を貼り粧うた乞食の群が、割竹をたたき乍ら、節季候、と喚きあるいて行く——。

ひとり、眠狂四郎だけは、四季のいとなみとは全く無縁の、暗い異相を、汐香をふくんだ寒風になぶらせつつ、ふところ手で、ゆっくりりと、永代橋を渡ろうとしていた。

「……もし」

背後から、声をかける者があったが、べつに、ふりかえろうとしなかったのは、茅場町あたりですでに尾けられていることを知っていたからである。

不審なのは、尾けて来ているのが、頭巾で顔をつつんだ尼法師だったことである。年配は初老にちかく、清雅な品をそなえていることまで、狂四郎は、いつの間にか、見てとっていた。

「あの……もし――」

再度呼びとめられて、狂四郎は、眸子を前方に置いたまま、

「御用なら、歩き乍ら、うかがおう」

と、云った。

尼法師は、狂四郎と肩をならべた。

「貴方様が盗まれた大鏡を、おかえし願わねばなりませぬ」

おちついた声音で、そう迫られて、狂四郎は、はじめて瞥と、尼僧を見やった。

能面のように動かぬ貌であった。みじんも、肚裡をおもてにしめさぬ心得が、かえって、大鏡を取返すことの重大さのためだ、とこちらには、読みとれた。

狂四郎は、否定するかわりに、

「わたしが、盗んだ、とどうしておわかりだ？」と、訊ねた。

「見とどけた者が居りまする」

――おれの贋者が、わざと見とどけさせたのか？

「おかえししてもよいが、二つに割れて居る」

「貴方様がお切りなされたのでございましょう」
「よく、ご存じだ」
「ご自身の中の悪魔(じあぼ)を断とうとなされた……」
ひくく、しかし、はっきりと、そう云われて、狂四郎は、あらためて、鋭い視線を、となりへ移した。仏門に帰依した尼法師が、意外にも、切支丹の言葉を口にしたのである。これは、こちらの素姓を知っていて、わざと誘いをかけて来たのだとも受けとれる。
——なんの誘いか？
つめたい大理石をおもわせる肌をもったその横顔を瞶めていた狂四郎は、ふっと、うすら笑って、
「わたしに、懺悔(こひさん)をさせようとの下心で、近づいて来られたのなら、無駄なことだ」
と、云った。
尼僧は、なんともこたえずに、ならんで、橋を渡りきった。そして、狂四郎が、佐賀町の方へ、足を向けると、当然のようにして、ついて来た。
下ノ橋、中ノ橋、上ノ橋と——佐賀町を通りすぎて、仙台堀に沿うて、道を折れても、尼僧は、依然として、狂四郎から、はなれようとしなかった。
伊勢崎町にさしかかった時、面倒になった狂四郎は、立ちどまって、
「鏡をいずれへおかえしすればよいのか、うかがっておこう」
「お返し下さいますか」
「気が向けば、だが……」

尼僧は、ちょっと、ためらっていたがしずかな口調で、
「車善七殿のところまで、送りとどけて頂きとう存じます」
と、云った。
車善七は、浅草の非人小屋頭で、関東一円の非人を管督している。品川の松右衛門とともに、非人の取扱い、引廻しの護衛、死刑執行の雑役などの指揮も取り、また、病気の囚徒を溜に移して、看護、監視する役もつとめている。
――比丘尼と非人頭と、なんの関係があるのか？
奇妙なとりあわせに思われたが、狂四郎は、それについて糺そうとせず、一揖すると、尼僧から、はなれた。

二

半刻後、狂四郎の姿は、向島の田嶋屋の寮に在った。
にこにこし乍ら迎えた田嶋屋は、
「貴方様の影が、大鏡とは、おどろきました。……映った御自身の影を、まっ二つになさいました、と使いのお人の口上でございましたが、いったい、どういうのでございます？」
「間抜けていたのだな、おれの方が――」
「と申しますと？」
「おれの姿をそっくり窃んでいた贋者が、刀だけを右にさしていたのは、鏡に映った場合を考えての細工だった。まんまと乗せられて、自分とたたかったおれを、贋者は、物蔭で、さぞ、あざ

わらっていたことだろう」
「成程――」
「おまけに、どうやら、鏡は、おれと因縁のあるしろものらしい。贋者が、そこまで知っていて、鏡を、持主のところから盗み出したか、どうかだ」
「鏡は、離れに置いてございます」
狂四郎は、座敷を立って、田嶋屋とともに、離れに入った。
高さ六尺余のぎやまん鏡は、壁にたてかけてあった。飛騨工（たくみ）が打った墨のような直線が、やや斜めに走っている。狂四郎が、両断した痕である。田嶋屋が、くすりで、ぴたりと継いだものとみえる。
「お見事な技でございます」
田嶋屋は、狂四郎が、鏡の前にすすんで、食い入るように目を据えているのを、おのが手練の痕を調べているのだと思って、心からの感嘆をあらためて声にした。
しかし、狂四郎は、それを調べているのでもなければ、おのが顔を凝視しているのでもなかった。
数分を置いてから、
「雨戸を閉めてもらおうか。それから、蠟燭を――」と、たのんだ。
田嶋屋は、中床に置いてある銀の鈴を鳴らして、女中を呼び、それを命じた。
闇になった部屋に、赤い焰が、人と調度の影を、大きく畳や壁にゆらめかした。
狂四郎は、燭台を、鏡のうしろに置くと、おぼろに映じたおのれの姿を消すために、正面か

ら、身を避けた。田嶋屋はずっと遠くに、端坐していた。

「田嶋屋、どうだ？」

狂四郎に、云いかけられて、田嶋屋はじっと、眸子を凝らしていたが、

「おおっ！」

と、烈しい驚愕の唸りを発した。

鏡の中央に、妖しい幽玄の立像が、徐々に浮きあがってきたのである。

それは、幼きぜずす・きりすとを抱いたびるぜん・さんたまりあ観音像にまぎれもなかった。

うしろに置かれた蠟燭の灯かげのゆらぎも妖しく、御像の神々しい美しさを映えさせた。

やや俯向き加減の慈母の優しい面持は、いずれの画人の筆に成るものか、翠羽のような美しい眉、潤みをたたえた明眸、細く通った鼻梁、かたちのいい絳唇——それらすべてが、高貴を表現するためにのみ努力を傾けられたとみえた。

狂四郎も田嶋屋も、しばらくは、息をのんで、そのけだかさに牽きつけられたまま、身じろぎもしないでいた。

やがて、狂四郎は、立って、雨戸を繰って、真昼の陽ざしを入れた。鏡面から、御像は、拭ったように消えた。

「近頃、何かの科で、取りつぶしになった比丘尼寺のことをきいたことはないか？」

と、唐突に、狂四郎が、訊ねた。

「さあ？」

ちょっと首をひねっていた田嶋屋は、

「そういえば、巣鴨の御薬園のとなりの比丘尼寺が、去年撤廃になったという噂でございましたな」

「科条は何であったろう？」

「世まどわしの咒やら符やらをまきちらしたという、おさだまりのお咎めでございましたろうが、なんでも、水戸の御主殿様やら、越前侯の御簾中様が、御祈禱の御利生に大層甘心あそばしたので、寺社奉行所でも、公の吟味をせずに、こっそり、取りつぶしてしまったという噂でございました」

水戸御主殿とは、将軍家斉の女峰姫のことであり、越前簾中とは、同じく家斉の女浅姫のことであった。

「そうか――。公方の子女が、切支丹になったとは、皮肉だな」

「え？　そ、そりゃア、まことでございますか？」

田嶋屋は、啞然として、目を瞠った。

「そうではなかろうか、と臆測にすぎぬ。……院主は殺されたかどうか、そのことはきかなかったか？」

「さあ、そこまでは……。おそらく、水戸様や越前様からの助命乞いがあったのではございませぬかな」

「そうすると、まだ、どこかに生きているということになる」

そう呟いたとたん脳裡に、直感が閃き、狂四郎は、眉をあげて、眸子に、遠い色を泛べた。

三

いまにも白いものが、ちらちらと舞い落ちて来そうな曇り空の下を、一梃の辻駕籠が、俗に日の出という吉原田圃の中の一本道をとんで行く。

上野広小路から、吉原大門へかよう金太駕籠である。

大音寺前の引手茶屋の通りをすぎると、日本堤まで、さえぎるもののない一望の野であった。

えい、ほ……

えい、ほ……

黄昏が来て、空気が急に凍り、駕籠舁きの吐く息が白い。

太郎稲荷の前を走ろうとした時、駕籠の中から、

「おい、右だ」

と、指示があった。

「旦那、吉原(なか)じゃござんせんか？」

後棒が、叫ぶと、

「いや、溜(ため)へ行く」

「えっ？……ちょっ、縁起でもねえや」

「そこに、三分女郎なんぞ足もとにもおよばぬ絶世の美人がいる——という噂はないか？」

「冗談じゃねえ」

「但し、比丘尼だ」

すると、先棒が
「おうおう、そいつは、ききやしたぜ、溜の番太の八が、酔っぱらって、ほざいていやがったっけ。黒桟留の投頭巾の歌比丘尼なんざ、ちゃんちゃらおかしくって買えねえ。こちとら、香をたきこめた部屋で、緋緞子の布団を敷いて、まっ白しろの大紋綸子の神々しい尼様を、祝詞（のりと）をあげて、抱きたてまつるんだ、と大見得きっていやがった。そいつがほんとなら、逆立ちして富士山のてっぺんへのぼってやらあ、とまぜっかえしてやったもんだが――」
これをきいて、駕籠の中の狂四郎は、合点するところがあった。
鷲（おおとり）神社わきで、駕籠をすてて、野道をものの二町も辿った頃、あたりは、闇になった。夜に入ると、物騒なので、通行の者は絶えてなくなる往還であった。たまに、御徒士町辺の武士が、道場稽古にあきたらず、事を望んで歩いてみることがあるくらいだった。
溜の構地に近づくと、狂四郎は、おしつぶれたような粗末な檻舎のつらなりを眺めて、ちょっと思案していたが、すぐに、その南端へむかって、足をはこんで行った。
そこだけ、最近作られたとおぼしい、高い板囲いがしてあった。内部に建物はなさそうであったが、一応覗いてみる必要がありそうだった。
板囲いが、かなり厳重なものであるのをみとめるや、狂四郎は、逡巡（ためら）わず、それを、躍り越えていた。
三百坪あまりあろうか。ずっとむかしの屋敷跡と思われた。北の一隅に、土蔵ひとつ、のこっているだけで、いちめん草が深いのであった。雲が散って、氷の破片のように冷たい下弦の細月がのぞいて、土蔵の屋根の瓦を、霜を降らせたように光らせている。

狂四郎が、まっすぐに、草を踏んで、土蔵へむかって行くと、その戸口に、ひとつの黒影が、幽鬼にも似た、音のない出現をみせた。

二間の距離を置いて、狂四郎が、立ちどまると、頭巾で顔をつつんだ対手は、かわいた嗄声で、

「なんの用だ？」

と、問うた。

「見物に来た」

こたえつつ、狂四郎は、石段の上に大きく立った彫像のような対手の姿勢に、なみなみならぬ自信がそなわっているのを見てとっていた。

これは、これだけの凄腕の武士を用心棒に据えておかねばならぬだけの、重大な秘密が、土蔵内にあるのだとわかった。

対手は「帰れ」とは、叱咤しなかった。ここへ来た者を生かして帰さぬ役目を持っているのである。

ただ、この用心棒の不運は、眼前に彳むのが眠狂四郎という稀有の使い手であるのを知らなかったことである。ふところ手で、うっそりと、月光に痩身をさらした様子が、まるで、案山子同然に、目に映ったのも、不覚であった。

尤も、狂四郎は、無想正宗を鞘走らせるまでは、いかなる凄じい剣気をあびせられようとも、みじんも、こちらから、殺気をもって反撥しない男であった。意志と気色を、この男ほど、きりはなしたものにしている兵法者は珍しいといっていい。

用心棒は、悠々とした態度で、石段を降りて来た。

狂四郎は、依然として、ふところ手のままで、微動もしなかった。

このおり、土蔵の中から、つとあらわれたのは、例の老いたる尼僧であった。
「あ——」
狂四郎に迫って行く用心棒のやや前踽みの凄味をあふらせた構えを一瞥して、驚愕の叫びをあげた。
「須藤殿！　おひかえなさい！」
貴方の勝てる敵ではない、という意味であったろう。
おそかった。
狂四郎が、つと、一歩退いた、と見た刹那、須藤某は、腰をひねって、草上を滑りつつ、一刀を鞘走らせていた。
星が流れるに似た一条の白光が、狂四郎の顔面すれすれに、地に落ちた。
須藤は、抜きうった肢態をそのままにくわっと瞠いた双眼を、狂四郎にあてて動かなかった。
戸口に立つ老尼には、一瞬、月明りの世界が、ぴたっと時刻を停めてしまったように思われた。そして、それは、堪えがたいまでに、長く感じられた。
生命なき個体が、ゆるやかに傾いて、撞っと草に伏すさまが、老尼に、止めていた息を、ほっと、ひと吐きさせた。
ただ、一刀で、胴を両断された須藤は、呻きものこさず、仆れては、微かなもがきすらもみせないのであった。
老尼は、不思議な異様なものでも眺めるように、血を吸った刀身を地に垂らして黙然と静止している狂四郎を、見戍った。

老尼は、狂四郎が、刀を抜いたのも、須藤の胴を薙いだのも、まったく目にとめなかったのである。気がついた時には狂四郎は、その姿勢で動かずにいた。

人間一人を斬り殺して、こうも冷たく静かでいられるものか。

老尼は、一種の陶酔にも似た戦慄で、全身から力が抜けるのをおぼえた。

懐紙で拭った刀身を、腰におさめた狂四郎は、ゆっくりと、石段下へ歩み寄ると、

「鏡の中のまりあ像を拝見した。安置する場所を拝見に来た。御案内願おう」

と、云った。

老尼は、はっと、われにかえると、そこにひざまずいて、胸で、十字架(くるす)をきった。

「……おん威光限りないでうすよ、大慈大悲のぜずすよ、おん聖寵(がらさ)を垂れたまいて、この身を凶悪よりのがれさせたまえ。さんたまりあよ、守護の御天使(あんじょす)よ、わが名の聖人(べあと)よ、その他もろもろの聖徒(さんとす)・天使(あんじょす)よ、御合力を加えたまいて、悪魔(じあぼ)を退散あらせたまえ」

四

土蔵の壁の一面は、仕掛けによって、軋りつつ回転した。そこから、石の階段が、地下へ通じていた。

手燭をかかげた老尼をさきにたてて、一歩一歩降りて行き乍ら、狂四郎は、曽て、大奥医師室矢醇堂邸内にある霧人亭の地下へ忍び入った時のことを、脳裡に甦らせた。

――あれは、きりすと復活節の逮夜(たいや)であった。

あの夜つどうていた三十余名の信徒が、もしかすれば、場所を移して、この地下で、まりあ観

音をおがんでいるのかも知れぬ、と狂四郎は、ふっと、想像した。

霧人亭の地下には、階段を降りるにつれて、天主の慈悲を説く伴天連の声がきこえたものであったが、この地下は、しいんと鎮まりかえっている。

そのかわり、ほのかに、香が匂う。

狂四郎は、先刻の辻駕籠の先棒の言葉を思い出した。

急に、老尼が、ふりかえって、きびしい面持で、睨みすえて来たので、狂四郎は、きっぱりと、先手を打った。

「ご安心ねがいたい。刀は抜かぬ」

老尼は、頷き、それから、いままでとはうってかわった烈しい口調で、云い出した。

「この地下で、現身（うつしみ）がうけなければならぬ無間地獄（いんへるの）の一場を、貴方様は、ごらんになりまする。あさましい苦界のすがたでございます。これも溯（さかのぼ）れば、わたくしたちの元祖あだんとえわの神の応報でございましょう。……思えば、でうすの御憲法のおそろしさに、五体の血も冷えわたる思いがいたします」

老尼は、ここで、十字架の文をむすぶと、顔をあげて、祈禱（おらしょ）を口にした。

「いかに広大無辺、御善徳御大切の源なる御身でうすよ、御子ぜずすの流し給うた御血の功徳によりて、御身の震怒をやわらげたまえ！　いかに慈悲哀憐、いたりて甘味（あまこ）にましますびるぜん・さんたまりあよ、追放人なるえわの子われら、この泪の谷に哭き叫びて、ひたすらにのみ、ねがいあげ奉る。ぜずすの御苦難（ばっしょ）の功力によりて、よこしまなる悪魔（じあぼ）の嘲笑をしりぞけて、なにとぞ、われらが訴訟を顧みたまい、いんへるのの呵責よりすくいたまえ！　あめん！」

憑かれたような、その一心不乱の祈りの状(さま)を、しかし、狂四郎は、聊かも、侮蔑をもって、眺めはしなかった。

老尼が、狂四郎をともなったのは、厚い石壁で桝形に刳(く)られた一角で、これは、不意に侵入して来た敵に備えて、身を隠すためにつくられた場所に相違なかった。

胸の高さのところに、掛障子があった。そこが、床脇の洞(ほら)窓になっていたのである。

狂四郎は、障子に小穴をあけて、内部を窺った。

数寄を凝らした草庵式の幽雅な小座敷が、そこにあった。幕閣の要人が、密議をするために、わざと、非人溜の地下に、この茶室を作ったかと想像できる。

平縁天井、壁はすべて鳥ノ子白張付、吹寄桟の横繁の腰障子、次の間との境は七宝透彫の欄間、間仕切る襖には枯淡の筆致の山水が描かれ、下座床、袋棚、飾棚などすべて清らかな意匠である。

そして、この小座敷にふさわしい、若く美しい尼僧が、ひとり、炉ばたに、ひっそりと坐っていた。

狂四郎は、目をあてたとたん、大鏡に浮き出たまりあ観音像の優美な面差そっくりであるのをみとめた。あの御像が、この尼僧の貌を写したことに疑う余地はなかった。

尼僧は、ふっと、沈思からわれにかえったように、顔を擡げると、すらりと立った。手には、念珠(こんたつ)を持っていた。

背後の竹の中柱にかけられた十字架(くるす)にむかって、ひざまずいて、さんたまりあの祈禱(おらしょ)をこめはじめた。

それは、ずいぶん長いあいだ、つづけられた。

やがて――。

戸外に、人声がきこえ、入って来る跫音が頭上にひびいた。

階段を降り乍ら、声高に喋る言葉の野卑さで、それらが、非人であると知れた。

「へい――こんばんは、まりあ信秀尼さま」

根太い声が、襖のむこうから、かけられた。

「今夜は、四人が参じました。ろれんそ政太と、あんとによ茂七と、ぺとろ作五郎と、じゅあん久兵衛でございます。よろしく、おねげえ申上げます」

尼僧は、美しく徹る声で、

「いま、したくをいたしまする」

と、こたえた。

狂四郎は、尼僧が、一隅にたてまわした二双屏風のかげから、花模様の夜具をとり出して、そこに敷きのべはじめるのを見て、凝然とし、固唾をのんだことだった。

五

それから二刻あまり後――。

月の落ちた暗黒の野道を狂四郎は、殆ど虚脱の態で蹌踉と辿っていた。

――あり得たことなのか？

まざまざと目撃した地下の茶室の光景が、まだ鮮かに眼底に焼きついていい乍らも、心の隅に

は、その呟きがあった。それ程、信じがたい文字通りのいんへるのであった。

どろどろの襤褸をつけた醜悪な非人が、まことしやかに胸で十字架(くるす)をきって祈禱(おらしょ)を誦え乍ら、衾に仰臥した尼僧の純白な綸子の衣裳を剝ぎとって、その上へのそのそと掩いかぶさっていったのである。

節くれだったどす黒い手が、尼僧の腰をまとうた水色の綾羅(うすもの)を、脛を伝わせ、腹に纏わらせ、そして乳の下まで、手繰りあげてゆくのを眺めた瞬間、狂四郎は、あやうく、おそろしい叫びをたてそうになった。

最も高貴なるものと、最も卑賤なるものが、ひとつに合わさる名状すべからざる奇怪な営みを、狂四郎は、骨の疼くような苦痛をもって、見とどけて来たのだ。

饐(す)えた臭気を発する、垢まみれの、獣欲の塊りを乗せて、透けるように白い、熟れきった豊かな柔軟な肌が、息絶え絶えに、官能の綾を織って蠢いてみせたのである。しかも、入れかわり、四人もの欲情を満たせてやったとは！

——あり得たことなのか！

ふみ込んでいって、無想正宗を閃らさなかったおのれの忍耐さえ信じられないものに、思いかえされる。

四人の非人が立去ると、白い裸身は、しばらくのあいだ、正体もなげに、衾の上に、なげすてられたもののように動かなかった。ひっそりと目蓋をとじたその寝顔が、なんの苦悩も悲嘆も泛べず、高貴なる匂いをそのままにとどめているのが、狂四郎を、茫然とさせたのであった。

尼僧が、のろのろと起きあがって、衣裳をつけて、再び、中柱にかけた十字架の前に、祈りの

すがたを置いた時、狂四郎は、そこを去って来た。

公儀が、隠れ切支丹に科す罰とすれば、これは、他の処刑に比して残虐すぎるとはいえまい。尼僧は、それを、天主の与える試練として受け、きりすとの苦難に殉ずる覚悟をきめて、堪えつづけているのであったろう。もとより、非人たちが、殊勝げに、うなだれて、棕櫚の葉につけた祝福（べんさん）で浄めた聖水を十文字にふりかけられたり、おらしよを誦えたりしているのは、切支丹宗門に帰依したからでは毛頭なく、そうしなければ美しい肢体を抱かせてもらえないからに相違ないのだ。

「あり得たことなのだ！」狂四郎は、闇に、目をあげて、呻くように、吐きすてた。

行手の夜空に、ただ一光のみ、孤独な星が、冷たく、きらきらと煌いているのが、いまの狂四郎には、なにか、すくいのように思えた。重い疲労感が、その肩にかぶさっていた。

幽霊松

一

「馬やらんけえ、馬あ——」

あぶれたらしい馬子が、痩馬を曳いて、やけくそな大声で、どなっていた。

「おうっ、そこのお若けえ御両人、膝栗毛が、ひょろついているぜ。大磯けさ出て、程ヶ谷泊り、花の藤沢、昼旅籠(はたご)——ってえところだろう。へへへ、箱根を越える前に、腰を使っちまうたア、恐れ入りやした。そこで、ひとつ、馬アやらんけえ」

若夫婦に、近づいて、

「木曽じゃ御嶽(おんたけ)、甲州じゃ御嶽(みたけ)、西じゃ乗鞍、鎗ヶ嶽、わたしゃお前に、首ったけ——とくらあ。へっへっ、おうらやましいこって……。その仲のいいところで、乗り掛けちゃ下さるめえかのう」

しつっこく、すすめたが、怯えた若夫婦は、小走りに行ってしまった。

「ちょっ、かけ落ち——ってえのは、てめえらのこったぞ」

馬子は、いちだんとどら声をはりあげて唄い出した。

　　掛けて好いのは、衣桁に小袖
　　掛けてたもるな、うすなさけ

この時、黒の着流しの、ふところ手の浪人姿が、馬子のわきを、急ぐでもない足どりで、しかも、意外な迅さで、追い抜いて行った。

「旦那――」

馬子は、声を掛けたが、その後姿にただよう凄味を、本能的に感じて、ぶるんと胴ぶるいした。

「ちょっ、昨夜、大磯の鼻べちゃ女郎に振られたのが、どじのはじまりだあな。
　　目で知らせ、あごで受けたる、むかしと、かわり、鼻であしらう、今日の仕儀
こん畜生っ！　くそ面白くもねえ」

水の涸れた粗岩の河原を左手に見る箱根路であった。

双子山が、正面に、早春の靄にけむって、うす曇の空に、むっくりと盛りあがっている。

『人の足に踏めど叩けど箱根山』

この山がもつ嵐気を、ふと吸いたくなって、眠狂四郎は、ぶらりと出かけて来たのであった。

三昧橋を彼方に望む地点に来た時、町人姿の三人連れと行きちがった。

数間はなれて、一人が、険しい視線をまわし、

「彼奴っ！」

と、鋭く呻いた。

「よせ、風早――」

先頭を歩いていた年嵩の者が、とどめた。
風早と呼ばれた男は、蒼褪めた形相を、朋輩へ向けて、
「小森も竜造寺も須藤も矢倉も……みな、彼奴に斬られているのだぞ！　見遁せるか！」
と、ひくく叫んだ。
この三名は、公儀隠密団「親不知組」であった。京から、いま、江戸へ帰って来る途次だった。東山の一峰阿弥陀ヶ峰や淀の川堤で、眠狂四郎と、凄惨な血闘をくりひろげて、生き残った連中なのである。
狂四郎の水際立った腕の冴えを、知りすぎる程知っている。到底、三名だけでは、仆し得ぬ敵だ、と百も承知し乍ら、こうして、おのがまなこにその姿を映した以上、みすみす去らせるのは、なんとしても堪え難かった。
「おれはやる！　一人でもやる！」
風早は、烈しい語気を、他の二人へ押しつけた。
二人は、顔を見合せた。それから、また、無言で、風早へ、眼眸をかえした。それが、承知を意味した。
風早は、猛然と、奔った。
「待てっ！　眠狂四郎っ！」
いくばくかの後——。
楓、櫨、楢、椚、欅などの霜葉樹林が、のしかかるように、左右の断崖を掩うている河原で、

狂四郎は、三方から、白刃をつきつけられて、無想正宗を地摺り下段に構えていた。

沈黙がつづいていた。単調な渓流の音だけが、凄じい殺気をこめた寂寞の下を、無意味に流れていた。

おのおのが、足場を定めると、微動もせず、この固着状態は、永久につづくかとさえ思われる。

包囲した三名の双眸だけが、異常に、らんらんと光っていた。

どれくらいの時刻が移ったろう。

曇天が動いて、薄ら陽がさし、狂四郎の蒼白な面貌の、彫りふかいつくりを、さらに翳ふかいものに、浮きあがらせた瞬間、そのあまりに冷たい無表情に、正面の風早が、苛立って、ひくい鋭い気合を発して、切尖を三寸あまり、ぴくっとはね揚げた。

しかし、そうしただけで、斬り込む隙のないままに、また動かなくなった。

狂四郎は、無数の死地をくぐった修練で、最初に仆さなければならぬ敵が、どれか、をきめていた。

向った左端の、年嵩の男の構えが、なみなみならぬ鍛えられかたをした鋭気を満たしているのを見てとっていた。一瞥、一番静かに、さしのべられた刀身だが、その停止が蓄えているものは、獰猛といってはばからぬ、一颯すれば骨を断たずにはおかぬ強烈な力なのだ。

「親不知組」中でも、これは、まず最初に指折らねばならぬ使い手に相違なかった。

その鋭い切尖をつきつけられた狂四郎の左半身に、全神経の働きが傾注されているといってい い。

この強敵に対して、無想正宗の迅業をどうしめすか——その刀身一如の秘法を編むために、狂四郎は、これだけの時間を必要としたのである。

——よし！　ゆくぞ！

おそるべき剣気を体中に沈めたまま、狂四郎は、無想正宗の鋩子を、しずかに、山気澄む宙に、滑らせはじめた。

この男独創の秘妙の殺法は、当然、正面の風早に、あらんかぎりの精神力をふりしぼる抵抗を要求した。

風早の双眸は、眥を裂いた。顳顬（こめかみ）はふくれあがり、額は無数の汗粒を生んだ。

空間を截（き）ってまわる妖剣の魔力に憑かれまいとする人間の、可能の限界が、ついに、ひきしぼられた弦が音たてて切れるように、絶望的な一刹那を迎えた。

「ええいっ！」

風早は、五体を、鋼（はがね）の発条（ばね）と化して、跳躍した。

これまでの場合ならば、無想正宗は、刃金の匂いを撒いて、その一撃を撥ねかえしざま、ぞんぶんの一閃を、敵の肉にくらわせた筈である。

ところが——。

狂四郎は、風早がきって落した刃風に、ひろびろとした空間を与えておいて、黒い旋風となって、左方へ奔（か）け抜けたのであった。

二間のむこうにぴたっと立ちどまった狂四郎は、刀身を、ダラリと垂らした。その切尖から、一滴、血汐が、したたり落ちて、足もとを流れる清冽な渓水に、じわっと赤斑を拡げた。

年嵩の男が、刀を杖にして、顔を仰向けた。苦悶の色がわずかであったのは、すでにそれを感じない見事な一颯をその胸部に受けていたからであろう。

たたらをふんで、やっと転倒だけをまぬかれた風早も、右端になお身構えたなり動かぬ者も、おのが目を疑うように、地上へ横たわった仲間を、茫然と眺めた。

信頼すべき秀れた腕前を持った先輩格のこの男が、ただの一合も刃と刃を交えることなく、案山子同然に、斬られるにまかしたのである。

信じがたいことだった。

鍔鳴らせて、狂四郎が、ふところ手になっても、二人が、そのまま動こうとしなかったのは、全く意気を沮喪させられた証拠であった。

「この次ということがある」

狂四郎は、そう云い、

「手当をすればたすかるかも知れぬ。枕をならべるよりも、その方が、利巧なやりかただろう」

その言葉をつけ加えておいて、もう、すたすたと歩き出していた。

二

半町あまり上流へ遡って、杣道を上ろうとしかけた狂四郎は、ふと、人の気配を感じて、頭をまわした。

大きな岩の蔭に、その者は、立っていた。全裸であった。

そこは、潭(ふち)になっていていて、腰まで沈めて、上半身を、薄ら陽に曝していたのだが、はっとなる

程、白い綺麗な肌をもった娘だった。不均衡な面差だが、大きくひらいた双眸が、きらきらと光って、野性の魅力があった。かくれていた愛嬌のあるけものが、発見されて、動きもならず、じっとして、瞶めかえしているといった様子だった。こちらの出かたでは、たちまち、水をはねちらして敏捷に逃げ出す気配をひそめている。

その潭は、湯が湧き出ているのであろう。そっと、湯あみしていると、下流で、突如、凄じい果し合いが行われた。そして、勝った者が、こちらへ近づいて来るのを、息をのんで見成った。その視線が、まだひき緊(しま)っている対手の神経にふれて、発見されてしまった。それだった。

――羞恥を知らんとみえる。

狂四郎は、その時はただそう思って、微かな苦笑をのこして、杣道をのぼって行った。

三味橋を渡って、湯本に入る。

『世にふるは、更に時雨のやどりかな』

ここの旅籠に死んだ宗祇法師の句が、狂四郎の脳裡を掠めていた。

北条早雲や今大路道三などの墳墓旧跡をもって知られた早雲寺の前を通って、須雲川に沿うた湯坂道は、急に険しくなる。

押しつぶされたような雲助人足の小屋のならんだ坂を過ぎると、欝蒼たる千年杉の木立の中に入って、空はまったくさえぎられる。

狂四郎は、背後から、馬蹄のひびきがつたわって来るのをきいて、

――火急の早馬は、この難場をも駆けて通るのか。

と思った。

すぐうしろに迫って来たので、道脇へ身を躲けた狂四郎は、何気なく、馬上を仰いで、――これは、と思った。

それは、早馬の武士ではなく、意外にも、さっき、河原の露天湯につかっていた娘だったのである。盲縞の布子をまとった馬子すがたであった。

ひらっと、とび降りると、眸子を硬く据えて、

「おさむらいさん、乗って下せえ」

と、云った。

「わたしは、歩くことに馴れている」

「いいや、代は要りましねえ」

「どういうのだ？」

「おさむらいさんは、どうせ、本宿でお泊りなさるんじゃろ？」

「うむ――」

「なら……蘆ノ湯の、わっちの家で泊って下せえ」

「お前の家は、旅籠か？」

娘は、こくんと頷いた。

箱根七湯という。湯本、塔ノ沢、堂ヶ島、宮ノ下、底倉、木賀、蘆ノ湯である。このうち、江戸の金持が泊る湯本にしても宮ノ下にしても、粗末な茅葺屋根の宿が、数軒あっただけである。

当時、箱根へ湯治に来ることは、江戸の人々にとっては、一生一度の思い出だったからである。

蘆ノ湯などへ、のぼって来る湯治客が稀であるのは当然で、まして季節は早春である。

宿の娘が、馬子をし乍ら、客をつかまえるのにふしぎはない。
狂四郎は、馬上の人となった。
娘は、うれしそうに、
「おさむらいさん、唄をやろうか」
と、云って、うたいはじめたのは、誰に習ったか、節まわしたくみな、さんさ時雨だった。
　さんさ時雨か、萱野の雨か
　音もせで来て、濡れかかる
うたいおわって、娘は、狂四郎を仰ぎ、
「おさむらいさんは、あのようにお強いのじゃから……もし、な、もし――幽霊が出ても、怕おうはないじゃろ？」
「この世にいるのなら、出会うてもよい」
「ほんとに、そう思いなさるんか？」
娘の顔が、遽に、いきいきとかがやいた。
「お前の家に、出るのか？」
「退治して下されますか？」
それが目的で、馬で追って来たのだ、とわかった。
やがて濃い霧が、舞い降りて、視界をとざすと、寒気が肌をしめつけて来た。
娘は、それきり、口をきかず、黙々として、馬を曳いて、山坂をのぼって行った。
霧が散った時、北条の砦跡のある鷹ノ巣の丸い萱の山頂に着いていた。明星・明神が北に浮き

たち、白銀山の崩壊した断面が、南をふさいでいる壮大な眺望が、狂四郎の欝屈した心を、解放した。

三

幽霊は、まさしく、出た。

狂四郎は、朝――雨戸の節穴が血のように赤く陽ざしを塗っている頃合、むっくり起きあがって、手を叩いた。

すぐに、お加津というその娘が、小走りにやって来て、雨戸をひらいた。

それから、大きく瞠いた眼眸をまたたきもせずに、狂四郎に、あてた。

無言で、作夜の異変を問うている。

狂四郎は、無表情で、床の間にかけられた墨絵を指さした。

「これは、誰が描いたのだ？」

「去年、永らく滞在しとった旅絵師です」

秋風の渡る蕭々たる高原の、いちめんの旗薄の中に、もの寂しく一本ひょろ高い松が、立っている図であった。ただ一本だけの松を描くなら、その梢に一羽の鴉ぐらいとまらせても、よさそうであったが、それも描かず、幹のなかばから、横枝を一本、水平に突きのばさせているにすぎない。

到底、寒山拾得をイませるに足りる枯淡の絵ではない。しかし、そのかわりに、じっと見据えているうちに、名状しがたい陰欝な気配が、薄墨を刷かれたさむざむとした空間から、じわじわ

と滲み出て来るようである。

筆法は卓抜であり、ねらった効果は、的確なのである。左様、作者は、描かざる空間に、凄い迫力をみなぎらせることに成功しているのだ。これは、昨日、この部屋に入った時、すぐに感じたことだった。

にも拘らず、この図柄は、なんとしても不自然なのである。作者のねらいは、空の色や松の枝ぶりや旗薄の風になびいているさまによって、秋の寂寥感を表現するというのではなく、もっと別の意味で、画面に、不気味な雰囲気を漲らせることにあったのだ。その効果がみとめられるのだ。

そして、一夜を明かした狂四郎は、その理由を、さとっていた。

狂四郎は、昨夜、三度、同じ悪夢をみた。この絵とそっくり同じ景色の中で、一人の女が、その松の横枝に、縄で、だらりとくび縊っているすがたをみたのである。

最初、その夢をみて、ぱっと目ざめた時、全身にじっとりと盗汗があり、

――成程、幽霊か！

と、闇の中で、苦笑したことだった。これまで、業念が積んだ数々の無頼の所行故に、悪夢に魘（うな）されたことは、屢々ある。しかし、昨夜のそれは、あきらかに自分とは無縁のものとして眺めている意識があった。それでいて、ひしひしと迫って来る凄味に、次第に余裕を喪う自分を、あやしまずにはいられなかった。くび縊った女の土色の形相や、垂らした手や足のかたちが、微細な点まで、鮮やかに見てとれたせいであったろう。

二度目にみた時も全く同じであり、三度目にあらわれた時も、またかと思いつつ、同じ状態にひき込まれたのであった。

「おさむらいさん！　幽霊を追いはらう方法を考えて下せえ」
　お加津の嘆願をきき流して、狂四郎は、顔を洗うべく、庭へ降りた。
　懸樋から、勢いよく落ちている、痛い程冷たい水を、両の掌に受けたとたん、狂四郎は、この男独特の直感を、脳裡にひらめかした。
　お加津は、部屋に坐って、狂四郎が、なみなみと冷水をたたえた手桶を携げて戻って来るのを、何にするのだろう、と訝しげに見戍った。
　狂四郎は、座敷に上るや、つかつかと、床の間に寄って、いきなり、手桶の冷水を、掛物めがけて、ざぶっと、ぶちかけた。
　お加津は、あっと、息をのんだ。
　滝になってなだれ落ちたあとに――濡れた画地に、徐々に、水底からゆらゆらと浮かびあがって来るように、ひとつの物体が、くろぐろと滲み出して来たのである。
　それは、ちょうど横枝の下方であった。
　くび縊った女の姿にまぎれもない、とわかった瞬間、お加津は、おそろしい呻き声をしぼって、両手で顔を掩うた。
　――成程、これで、この絵は、完全な図柄となる。
　夢の中の幽霊と寸分ちがわぬ縊死体を瞶め乍ら、狂四郎は、胸の裡で、呟いた。
「おい――」
「は、はいっ！」
　お加津は、びくっとなって、顔から両手をはなした。

怯えきった表情であった。
「これを描いた旅絵師は、死んだか？」
「い、いえ……。知らぬ間に、ど、どこかへ、去んでしもうて……」
「何故、こんなしろものを描いて、のこして行った？」
「………」
お加津は、色をうしなった唇をわななかせて、こたえるのを躊躇した。
「その理由をお前が知らぬ筈はなかろう」
「はい――」
「これは、まことの、くび吊り死体を写しとったものだな？」
「そ、そうです」
「この幽霊は、何者だ？」
お加津は、うなだれて、小さな声音で、じぶんの継母だ、とこたえた。
お加津は、幼い時、実母と死にわかれて、父一人子一人で育って来た。
十三のおり、江戸へ所用で出かけて行った父親が、帰途、大磯の廓で買った女郎が、ひどく気に入って、すぐにひかしてつれて来た。それが、継母だった。だらしのない女だったが、好人物で、お加津を虐待するようなことはなかった。
三年前、父親が、中風で全身不随になってから、継母は、自分がかわって、旅籠稼業をもりたてる才覚もなく、たださえすくない顧客の足をとだえさせてしまい、箱根越えの旅人は、他の旅籠へみんなとられてしまうしまつだった。

こうした、開店休業にひとしい旅籠に、まだ若い旅絵師が、草鞋をぬいだのは、去年の春さきだった。ここをえらぶだけあって、一風変った男で、誰とも殆ど口をきかずに、ひまにあかして、山中をあるきまわって珍しい花を集めて来て、腊葉(さくよう)にしていた。金はかなり持っているらしく、いつの間にか、一家は、この男によりかかってくらすあんばいとなっていた。

継母が、突然、姿をかくしたのは、昨年秋の、箱根権現の祭礼がおわって数日経った一夜であった。

木樵が、鷹ノ巣からすこし下った、浅間山との鞍部で、継母が縊死していることを報せて来てくれたのは、次の日の午後であった。

すると、どうしたのか、旅絵師が、急に、険しい顔つきになって、画帳と矢立をつかんで、まっさきにとび出して行ったのであった。あとを追って、お加津が馳せつけてみると、旅絵師は、狂気のような凄い目つきで、一本松の横枝に垂れた縊死体を、画帳に写しとっているのであった。そして、写しおわると、死骸をおろす手伝いをしようともせず、さっさとひきかえしてしまったのであった。

それから、三日後に、旅絵師は、何処へ行くとも告げずに、立ち去ったのであった。お加津が、朝、何気なく、掃除をしに、部屋に入ってみると、旅絵師は、荷物とともに消えうせていて、床の間には、この掛物が、のこされていたのである。

四

ききおわった狂四郎は、やおら、立ち上がって、

「その一本松のところへ案内してもらおうか」

と、云った。お加津は、裏口からまわり、狂四郎が、ひとり、ぶらりと、玄関の障子戸を開けて、おもてへ出た――瞬間に、

「やああっ！」

満身の闘魂を、その懸声にほとばしらせて、一刀が、反をうってきえーっと唸って来た。狙われ、待ち伏せられ、斬りつけられた経験が算えきれない者のみの、咄嗟の飛鳥に似た迅さで、これを避ける動作を、対手の胸もとへとび込む動作と同じものにした。

一拳は、鳩尾へ、見事にきまった。

悶絶して、地べたへ頬をつけた顔が、昨日、湯本の河原で抜き合せた「親不知組」の一人のものであるのをみとめた狂四郎は、

――あの男は、死んだな。

と、察知した。

――惜しい使い手だったが。……

暗然と思いかえし乍ら、数間むこうに立ちすくんでいるお加津のところへ、歩いて行った。

「起き上がったら、もう二度とは、斬りつけては来ぬ」

そう告げて、狂四郎は、お加津を促した。

めずらしく、一斑のくもりもなく晴れわたった冬空であった。

『散さじと置らんものを箱根山明れば凍る玉笹の露』

顕仲の詠んだその草露をふんで、ものの五町も、だらだらの斜面の小径をのぼったろうか。

狂四郎は、やがて、広い草原の中に、掛物そのままの一本松を見出した。ちがっているのは、その根かたに、高さ二尺あまりの石が在ることだった。
自然石だが、楕円の形が、墓らしく思える。但し、文字は刻まれていない。
「それは、墓だな」
狂四郎は、お加津に云った。
「はい――」
「お前がたてたのか？」
「はい――」
狂四郎は、お加津が、その前にぬかずくのを流し見て、ゆっくりと、一本松のむこう側へまわって行った。
ふと――。
枯草の繁みにかくれた墓石の裏面に、狂四郎の視線が、そそがれた。
枯草をふみしだいてみると、その裏面に、戒名が刻まれてあるではないか。
狂四郎は、視線をお加津の顔へ移した。その鋭さに、お加津は、目をあげて、一瞬、全身をこわばらせた。
「なんのために、墓を、裏がえしにたてた？」
「………」
お加津は、表情を凍らせ、ただ、黒い瞳だけを、けもののように、光らせた。
「お前の継母は、旅絵師と密通していたな」

「…………」
「お前は、その二人を憎んだ。動けぬ父のために憎んだか。それとも、お前は、旅絵師に惚れていたか」
「…………」
「お前は、継母を殺して、この一本松に吊した」
「…………」
「墓も、世間へ顔向けできぬように、裏がえしにたてた」
「…………」
「裏がえしにたてるぐらいならば、いっそ、たててやらねばよいではないか。殊勝げに、冥福を祈るなど笑止——」
冷やかにきめつけられると、お加津は俯向いて、哀しげに、こたえた。
「でも、母さんは母さんじゃけに——」
狂四郎の腰から、無想正宗が、澄んだ宙に、びゅっと弧線を描いた。
松の幹が、地上三尺あまりの個所から、ぐーっと、傾いて、墓石の上へ倒れかかった時、狂四郎の後姿は、すでに、十数歩も下方にあった。

麻薬姫

一

いつぞやは、大層長居をしたし、いろいろ御馳走様に相成りました。今年もまた、四、五日は、御当地のお得意先まわりをさせて頂くことになりますので、ちょいちょいお邪魔をさせて頂きとう存じます。

早速に、あのふしぎなご浪人さんの話をききたい、と仰言います——。

よほど、あのご浪人さんの行状がお気に召したものとみえます。……いえ、てまえ自身、この前申上げたように、あれから、もう一度、ご浪人さんにめぐり会って、旅のお供をしたいものだ、と思いつづけていた次第でございます。

左様でございます。一念と申すものは、おそろしゅうございます。

今年の春——と申しましても、まだ梅のたよりもきかぬ冬景色の箱根路でございましたが、関所口まで登りついたところ、なんでも、御通過のお行列とお役人とのあいだに、悶着があったとかで、しばらく、通行止めになって居りました。

ご存じのごとく、関所には「お定」がございます。

一、関所を出入る輩、笠頭巾をとらせて通すべき事
一、乗物にて出入る輩、戸を開かせて通す可き事
一、関所より外に出る女は、番所の女を出して相改むべき事
一、手負死人並に不審成る者、証文なくて不可通事
一、堂上の人並に諸大名の往来、兼而（かねて）より其聞えあるは沙汰に不及（およばず）、若し不審の事あるに於て
は誰人によらず改むべき事
右条々厳密可相守者也

という次第でございますから、お大名と雖も、疑わしいとなれば、容赦なく、お取調べをお受けになるのでございます。

そのお行列は、不意のお忍び道中とみえて、多分、関所に、あらかじめ御通告がされてなかったものとみえました。お女中の姿が多く、お鎗（やり）のほかに、薙刀を二本立て、お着替を入れた挟箱の数がかぞえきれぬところをみると、どうやら、お駕籠のうちは御簾中と思われました。御紋は、ついぞ、東海道筋や中仙道筋では、お見受けしない、珍しい打出小槌（づち）でございました。一刻以上も、待たされて、ようやく、お行列がご通過になり、一般の旅人の手形改めと相成りました。

「薬屋」

関所を出たところで、突然、うしろから呼ばれて、ふりかえりましたてまえは、

「おお――これは！」

と、胸をはずませて、夢ではないか、と目を瞠ったことでございました。

万人の群の中に交っていても、決しててまえの見のがす筈もない、彫のふかいお貌が、微笑を含んで、眼前にあったのでございます。
「どちらへお行きなさいます？」
――京までなら、こっちも、このまま、お供をしちまおう！
その気持で、お訊きしたところ、
「あてはない」
あっさりと、おこたえでございました。
本宿から三島まで、三里二十八町――その下りを、てまえは、うきうきと、地に足をはずませて、とりとめもない話を喋りつづけましたが、それに対して殆ど相槌もおうちにならなかったのは、この前の旅とかわりはございませぬ。ただ、ちゃんと、耳にとめていて頂けることは、てまえには、わかっていたのでございます。
三島大明神の鳥居の前にさしかかったおり、ご浪人さんは、ふいに、
「薬屋、お前は、修禅寺に行ったことがあるか？」
と、お尋ねでございました。
「ございます。一昨年、下田へ参ります途中でございますので、お詣りいたしました。頼家公や範頼公のお墓もおがませて頂きました」
そうおこたえしてから、ふと、てまえは、思い出したのでございます。
「旦那様、お行きなさいますか。あの村で、年に一度の面白い祭礼があるのをきいて居ります。それが、今月十七日――明後日にあたります。口にするのをはばかるような、みだらきわまる騒

ぎだと申しますが、旦那様がお行きなさいますれば、てまえも、話の種に見物いたしとう存じます」

「まさか、修禅寺が、催すのではあるまい」

「いえ、修禅寺の門前の虎渓橋を渡りまして、一町ばかり参りますと、小高い丘がございます。指月ヶ岡と申しまして、そこに、頼家公のお墓がございます。指月殿と申す、尼将軍がわが子頼家公のご冥福を修めるために創建された一切経堂もございます。その境内で、祭礼がとりおこなわれるそうでございます。……なんでも、非命にお斃れになった頼家公の御霊(みたま)をおなぐさめたてまつると称して、近郷の若い者たちが集まって来て、なんとも言語道断の、たわけた振舞いをいたすのだ、とききおよびました」

「……そうか」

領かれたご浪人さんのお口もとには、なにやら、意味ありげな、皮肉な気色が刷かれていたのでございます。

ご浪人さんとてまえは、田方平野を狩野川に沿うて、南へ下って行くことになりましたが、その前方を、偶然でございましょうか、関所で悶着をおこしたお行列が、しずしずと進んで行くのでございました。

二

まことに――こうして、日本全土を旅して居りますと、国々に、変った風習やら伝説やら迷信がございまして、あっけにとられることが屡々でございます。

その二つ三つを申上げてみますれば……。

信濃国の埴科郡のある村では、婚礼の夜、いざお牀入りとなったとたんに、村の若者たちが、どっとおどり込んで来て、花婿と花嫁の衣裳を剝ぎとって——それこそ、湯もじまでもすてさせて、囃したてるならわしがございます。花嫁は、身も世もあらぬはずかしさで、屛風の蔭に、裸をちぢめるし、婿殿は、ひたすら狼狽して、平あやまりにあやまる、はた目にも気の毒な奇風でございます。

四国の伊予や土佐では、酒宴の席で、もし腹痛を起した者があれば、犬神に憑かれたとさわいで、さんざん打擲して、半死半生の目に遭わすのでございます。……そのむかし、ある残忍な男が、一疋の赤犬を、土中に埋めて、首だけのぞけさせ、口のとどかぬところへ、飯をうまそうに盛って置きました。犬は、餓えに餓えて、涎をたれ流しつつ、七日七夜を吠えつづけたと申します。通りがかりのお武家が、あわれと見て、刀を抜いて、その首を刎ねるや、おそるべき執念で、首は、くわっと口をあけて、件の飯にくらいついたのでございました。それを眺めたお武家は、その飯を持って、男の家をたずねて行き、有無を云わせずに、一粒のこらず平げさせた——。すると、犬の妄執が、たちまち、男にのりうつって、七転八倒の狂乱の態と相成ったのでございました。こういう犬神の由来が、強く、人々の心の中に、根をはって、恐怖を呼ぶ故でございましょう。げんに、てまえは、犬神の家だと云うて、村八分にされているあわれな人を、見て参りました。

出雲国八束郡に美保神社と申す、事代主命、美保津姫の妹背の神を祀ったお社がございます。参詣いたす者は、その前後の日、鶏の卵を食べると、必ず祟られると、信じられて居ります。…

…むかし、事代主命が、小舟に乗って、毎夜、海の彼方の岸の揖夜村なる姫神の許へかよわれて居りました。翌朝、鶏の啼くのを合図に帰りの舟にお乗りになっていたのでございますが、ある時、鶏が時をまちがえて、真夜中に啼いてしもうた。命は、あわてて舟を出されたが、急いだあまり艪をお忘れになりました。やむなく、手で水をかいてお戻りの途中、鰐があらわれて、お腕にかみついたのでございました。爾来、命は、鶏を憎まれること一通りでなく、その地方から、鶏を一羽のこらず追いはらわれてしまいましたとか——。いまでも土地では、鶏を飼うては居りませぬ。

こういうお話を中上げて居りますと、きりがございませぬ。

修禅寺村の指月ヶ岡で催される祭礼も、そうした迷信が生んだ奇習でございました。

但し、これは、あとでご説明いたしますが、迷信とは申せ、犬神などのような、途方もない伝説から生れたものではなく、なまぐさい人間の情欲で裏打ちされた所行でございましたし、また、そうするには、そうするだけの根拠もあったわけでございます。

ところで、寺前の桂川の中に板囲いをして、磐石をくりぬいて湯槽とした獨鈷湯と申すのがございます。なんでも、弘法大師が、留錫の時、獨鈷をもって開掘して、里人におしえて、浴せしめた由。

暮れ六つに、旅籠から、ご浪人さんのお供をして、ぶらりと出て参りますと、街道を一列になって、松明をかざした裸の若者たちが、まるで、合戦の鯨波のような掛声をあげて、いっさんに走って来るや、この獨鈷湯へ、とび込んで飛沫をはねあげて、また、躍り出て、まっしぐらに、指月ヶ岡めざして、駆けて行くのでございました。

その若者たちがかぶっている笠は、一瞥しただけで、男子のそれをかたどったしろものでございまして、思い思いに、赤やら青やら黄やらに塗っているのが、なんとも奇妙な印象でございました。

修禅寺は、北条様の時代に、隆渓禅師と申されるお方を住持にして、大いにさかんであったところ、小田原城がほろんで後は、すっかりおとろえてしまって、もう昔時の面目はどこにもないのでございます。将軍様から三十石の御朱印寺領をお受けなされているとはいえ、壮麗な巨刹を維持するには足りませぬ。

まして、頼家公のお墓など、顧みる余裕もなく、指月ヶ岡は、荒れ放題でございます。

指月殿なる釈迦堂も、簷（のき）が崩れ、蔀戸も破れて居りました。「征夷大将軍左源頼家尊霊」の文字を刻んだ石標のまわりは雑草にうずまり、後の五輪塔も、かたむいているしまつでございます。

ところが、年一度――今宵だけは、石段の左右には、あかあかと篝火が燃やされ、樅、栂（つが）、欅などの大樹を、奇怪な生きもののように浮きあがらせ、墓前には、餅と赤飯を、うず高く、山に盛りあげてございました。それから指月殿の前には、弘法大師一万座護摩秘密の灰で描いたといわれるお釈迦様の御像の幟が立ててございました。

さて――。

墓前、石段、樹間を、鐲鈷湯で身を浄めた裸に跣の若者たちと、晴着をつけた娘たちが、うずめつくして、のどいっぱいに、声をはりあげて、唄いつつ、妙な手ぶり腰つきで、出鱈目な踊りを、倦くことも知らずにおどり狂う行事がはじまったのでございます。

あげよあげよは、日頃の思い
今日は吉日抱きあげる
おめでたや　サッサ、ササ

そんな祝儀唄を、笛、太鼓、鉦の囃子にあわせて、くりかえしくりかえし喚くのでございました。

そのうち、数人の男たちが、わっしょいわっしょいと掛声かけて、指月殿の中から、かつぎ出して来たのは、これは、あきれかえったことに、ひとかかえもある大木で造った男子の一物だったのでございます。

すると、娘たちが、耳をつんざくような嬌声をあげて、どっと、それに殺到して行ったではございませんか。

狂気のように、もみあい、へしあって、双手をのばして、それに、手をふれる有様は、なんとも、あさましい限りではございましたが、年一度の愉しみであれば、来年までの悔いをのこすまいと、はじらいもなにもあったものではありませぬ。

三

ふと——。

てまえの目を惹きましたのは、右方の樹間に、そこだけ、特別に空けられた地点で、この乱痴気騒ぎを見物しているおひとでございました。

それは、まぎれもない、身分高い上﨟でございました。富士見西行の高裾模様の衣裳をまとう

たあでやかさは、それまでこちらが気がつかなかったのがふしぎでございました。顔は、お高祖頭巾でつつんで見えませぬが、すらりとした姿ぜんたいにただよう気品から推して、さぞかし美しいだろうと、動悸さえもおぼえるくらいでございました。まわりを覆面をした警衛のお徒士たちがかこんでいて、それとはなしに、皆に、そのご身分を知らしめている気配がございました。

——あれは、もしや？

咄嗟に、てまえは、脳裡を掠めた直感で、思わず、

「旦那！　あのご婦人は今日のお行列の——」

と、ご浪人さんにささやきかけました。

ご浪人さんは、もう疾くにお気づきになっていて、瞥と目をくれてから、

「跟いて来たのは、こっちの方なのだ」

と、仰言いました。

あとで、うかがったのでございますが、箱根の関所口で、御通過をはばまれたお行列が、何処へ行こうとするのか、ご浪人さんは、お小人たちの会話から、おききとりになったのでございました。お駕籠のお方が何人か、それも、その時、看破されたに相違ございませぬ。そこで、気まぐれに、そのあとを跟いて、当所へ来てごらんになった、という次第でございます。

ご浪人さんは、それきりもう、上臈の方を気にとめられるご様子もなく、しばらく、たわけた御柱を中心とする男女の渦まきへ、じっと目をあてておいでになりましたが、

「薬屋」

と、お呼びになりました。

「はい。なにか――?」
「このあたりには、催淫剤になる薬草が採れる、ときかぬか?」
「は? ……あ、そう申せば、いいいくろばことか申す茜草が、陰萎にきくとか――旅籠の番頭が、教えてくれましたな」
「ふむ――」
ご浪人さんの横顔に、冷たい微笑が泛ぶのを見て、
「どうなさいました?」
「あそこに――あの丸太棒にしがみついている連中の中に、一人だけ、笠をかぶらぬ男が交っているだろう」
「お――左様でございますね」
「あれは、わたしの知り人だ。和蘭医学を勉強している、曽田良介という変り者だ」
「はあ――?」
「さっきから、あの男が、どうしてこんなところへ来て、祭に加わっているのか、不審だったが――そうか、そうだったのか」
ご浪人さんが、ひくい笑い声をたてられた時でございました。
人間の渦まきが、どっと洪水になって、石段をながれ落ちて行きました。
丘を下って、東へ三町ばかり参りますと、御庵洞と申すところが、ございます。十三の石塔が建てられて居りまして、これは、頼家公の遭難に殉じた家臣たちの古塚だと、伝えられて居ります。

このすぐわきは、きりたった絶壁で、岩脈の割れ目から、ひとすじの温泉が、ほとばしり出ているのでございました。

わっしょいわっしょい、と嗄れ声をふりしぼって、ねり寄せて来た裸男たちは、その割れ目にむかって、一挙に、凄じい歓呼をあげて、御柱を突き入れたものでございました。

てまえは、以前、なにかの草紙で、読んだのをうろおぼえにおぼえて居りますが、

「むかし、あめつちいまだひらけざりし時、伊弉諾尊、御神天の浮橋の上より、霧の海を眺め下し給うに、島のごとく見ゆるものあり。御神天のとぼこを以て是をさぐりみ給うに、国なりければ、則ちこのところに跡をたれ給う——」

と、ございましたな。

そして、これが、注解に、

「伊弉諾尊は、天の逆鉾なり、伊弉冉尊は滄海原なり。鉾を降して海をかき探る。鉾の滴りを阿浮曇と号す。父の精なり。よって、男陰を天の逆鉾と称す。一名に、天の瓊矛とも呼べり。阿国歌舞妓の両儀舞のうたにいわく、生れ来し天の逆鉾滴りて人の命は露となりけり」

いわば、大むかしの伝説が、いまもなお、こうしたかたちで、生かされているわけで……。

いいえ、旅の薬屋風情が口はばったく、愚にもつかぬ知識をふりまわして、申しわけございませぬ。

ともあれ——。

見た目には、いかがわしさなどすこしも感じられぬまことに大らかで、思わず、にやにやいたしたくなる、もしこれだけでおわるならば、他国へ参って、すすめたい行事でございました。

ただ、そのあとが、どうにも、ゆるしがたい不埒な祭だったのでございます。
御柱を岩脈の割れ目へさし入れておいて、ふたたび、指月ヶ岡へ駆けもどった若い男女は、一斉に、篝火をうち消して、たちまち、飢えたけだものと化し、闇をさぐって、相手えらばずにひっ捕えると、組みあってくさむらに倒れ込んでいたのでございます。

四

旅籠へもどりましたのは、亥の刻をまわって居りましたろうか。
すぐに、番頭がやって参って、ご浪人さんに、按摩をおとり下さるように、ねがい出ました。
ご浪人さんが、にべもなくおことわりになると、番頭は、おそろしく真剣な面持で、
「この修禅寺の裸祭をごらん下さいましたあとでは、女按摩におもませになるのが、旅のおかたのしきたりでございます。是非そうして頂かねばなりませぬ」
と、申したことでございます、
ご浪人さんは、番頭の膝の手が、どうしたのか、こまかく顫えているのを、ごらんになって、うすら笑われて、
「では、呼んでくれ」
と、仰言いました。
「有難う存じます」
番頭が、平伏して、ひきさがって行くや、ご浪人さんは、
「薬屋、岩風呂に降りて行くとみせかけて、そっと、その襖のむこうの納戸にかくれていてく

れ。お前さんに一役買ってもらうことになるかも知れぬ」
「かしこまりました」
　ご浪人さんが、この旅籠内で仕組まれた何者かの策謀を、鋭く予感されたに相違ない、と思うと、てまえはもう、わくわくせずにはいられないのでございました。このご浪人さんのお供をいたして居りますと、てまえのような平々凡々の人間までが、なにやら、感が冴えて来るような気がして参ります。
　てまえが、そっと納戸にしのんでから、程なく、女按摩が入って参りました。
　隙間から、覗きますと、なんの変りばえもしない田舎くさい盲でございまして、これは疑うべくもありませぬ。
「旦那さま。おもみいたす前に、この鋼鈷湯をお召しあがり下さいませ」
　そう云って、瓢をさし出して居りました。
「これも、しきたりか」
　ご浪人さんは、ちょっとかいでごらんになってから、無造作に、湯呑みに移して、お飲みになりました。
　牀に仰臥されたご浪人さんの肩のあたりに、女按摩は、ちょっと、ふれると、すぐに、
「ふしぎなおからだでございます」
　と、呟くように申しました。
「このようにやわらかいお肌には、はじめておさわりいたしました。どういうのでございましょう。……失礼でございますが、旦那さまには、ずいぶん、泣いた女子衆がおいでございましょ

う」
ご浪人さんは、女按摩にひとりで喋らせておいて、息もないかのように返辞もなさらず、指一本動かそうとはなさいませぬ。
それから……左様、四半刻あまり過ぎましたろうか。
女按摩は、こうもつぎからつぎへと、よくも独語が口をついて出るものだとあきれかえる程、お喋りを止めようとはせずに、せっせと、もみつづけて居り、ご浪人さんは、依然として、無言で、瞑目しておいででございました。
ただ、固唾をのむてまえにみとめられた変化といえば、蒼白なお貌に、わずかに赤味がさしたことでございました。
さらに、四半刻が移るや、もはや疑う余地もなく、なにか、内にたぎって来た強い力を、じっと押えていなさる気色が、ありありとお貌に滲んで居りました。
一瞬、ご浪人さんが、ぱっと、はね起きられるや、女按摩は、盲ともみえぬ敏捷な身ごなしで、畳をツツ……と滑って、廊下へのがれ出て行ったのでございます。
とたんに、仕切襖のむこうから、
「眠狂四郎殿、姫さまが、こちらにて、お待ちなされて居ります」
きれいな、若い女の声が、かかったではございませんか。
「灯を消しておいて頂こう」
そうおこたえになって、ご浪人さんもまた、こちらの部屋を暗闇になさいました。
そうしておいて、音もなく、納戸にお入りになるや、てまえの耳もとで、

「身がわり甲斐はあるぞ。あいては、天下の美女だ。しっかりやれ、薬屋」

と、ささやかれたものでございました。

五

おわらい下さいまし。てまえは、それから十日あまりというものは、四六時、頭の裡が、ぼうっとして、完全な腑抜け状態でございました。

あやめもわかたぬ真暗闇だったとは申せ——いや、それだからこそ、かえって、そのかぐわしい香をたきこめた夜具の中の刺戟は、てまえの嗅覚と触覚を最大限にふくれあがらせて、もの狂おしいものにしたと申せます。

髪の匂い、化粧の匂い、肌の匂いが、香の匂いに綯交って——もう、それだけで、てまえの五官は、しびれるばかりでございました。

必死に高鳴る鼓動をおさえ、双腕と双脚を、横たわるものへからめた瞬間、縮緬の手ざわり、肢体の柔らかさ、あたたかさ、重さ、そして、むこうから、おしつけて来た唇の甘い息吹きに、てまえは、かあっ、と血を燃え狂わせてしまいました。

無我夢中で、しっとりと汗ばんだ嫩かな内腿へ、癡のごとく顔をうずめようとした刹那でございました。

突如、てまえは、強い力で、えりくびを摑まれて、ぐーんと、ひきはなされたのでございます。

有明に、灯が入れられ……褥にとび起きたのが、闇に描いていた以上に妖しい美しい上﨟であ

るのをみとめつつも、てまえが、幻でも見ているように、頭も臓腑も手足もしびれてしもうて、ぼんやりとへたばり込んでいた様子を、ひとつ、よろしく、御想像下さいまし。

憤怒のためにますます凄艶さをくわえた面容や、緋縮緬がひきめくれてあらわになった太股の白さなどが、鮮かに脳中に甦って、てまえを苦しめはじめたのは、数日すぎてからのことでございました。

その時は、有明のかたわらにうっそりと彳まれたご浪人さんが、冷やかに、

「所詮、いくたび出会おうとも、貴女様とは、交ることとのないさだめのようですな、高姫様」

そう仰言る声音を、地獄の底からひびくもののように、てまえは、きいていたのでございます。

高姫というお方が、どういうご身分の姫様か、ついに、てまえは、おうかがいする勇気はございませんでした。また、おたずねしても、たぶん、ご浪人さんは、おこたえ下さらなかったろうと存じます。

それよりも、てまえが申上げたいのは、あの瓢の中の水が、狂おしい淫心を招く麻薬であり、それを五体にめぐらせて、あわやの瞬間まで誘致されつつも、能くぞ堪え得たご浪人さんの、おそるべき意志力でございます。おみごとであった、と申さなければなりませぬ。

夜明けの靄の流れる街道を、ご浪人さんは、てまえをつれて歩き出されて居りましたが、その後姿が、何事もなかったしずかなものであるのを、うつけたてまえの心も、感じて居りました。

とある辻まで来た時、靄の中から、まるで、幽鬼のように、ふらふらとあらわれた男がありま

した。総髪を乱れるにまかせ、着物の前をだらしなくひきはだけ、どう見ても、気ちがいでございました。

「おい——曽田さん」

ご浪人さんが、立ちどまってお呼びになりますと、男は、無表情で近づいて来て、

「眠殿か。——木乃伊取が木乃伊になりました。……拙者は、ここへ、神経を完全に麻痺する薬草を採りに来たのです。……シーボルトが教えたヨヒンべと同じ薬草が、ここから産するのを知って、採りに来たのです。……ところが、虎穴に入らずんば、虎児を得ず、で——ははは、ごらんのていたらくです。……拙者は、当分、ここから、ぬけ出せぬ。……やられました。やられたのです……」

そう云いのこして、また、ふらふらと、靄の中へ消えて行ったのでございました。

ご浪人さんは、歩き出されてから、小声で、

「……哀楽、時を失えば、殃咎必ずいたる、か」

そんなむつかしい言葉を、ぽつりとお洩しになって居りました。

風流梅花譜

一

春の風が、砂塵をまいて、街道を、吹きぬけていた。

空は、のこりなく晴れて、眠狂四郎がふんで行く地面に、並木の影は、鮮やかに濃いのであったが、小鬢(びん)や袂や裾をなぶる風は、肌にしみ入る冷たさであった。

並木ごしに望む海原も、まだきびしい冬の色を潤ませてはいない。白い波頭が、見た目にも、うそ寒いのであった。

相変らずふところ手で、狂四郎は、江戸への帰路を、急ぐともなしに、暗い業念を秘めたからだをはこんで行く――。

国府新宿村の中央をつらぬく地点で、伊勢原道が北へ走る岐路を過ぎようとしたおり、一人の飛脚が、三度笠を傾けて、とっとと、狂四郎を追い越して行った。

――はてな?

急に、狂四郎の目が、鋭く光って、遠ざかるその後姿へ、注がれた。

普通の旅人なら、もとより気にも、とめないであろう、なんの変りばえもしない飛脚であっ

た。道中すれば、一日のうちに、三人や四人には、必ず出会うのである。
　ところが、狂四郎の目は、決して、ごまかされることはなかった。
　この飛脚には、間（あい）の宿（しゅく）の梅沢で、狂四郎は一度、追い越されていたのである。
　追い越された時、
　――ひどく、迅いな。
　ふと、そう思った――そのために、記憶がのこっていた。
　飛脚の走る早さは、きっちりとしたものであった。一っ時（今日の二時間）で、「早飛脚」は一里三町三十間、「早の早飛脚」は、二里九町を走った。
　ところが、その飛脚の速力は、「早の早飛脚」よりも、もっと急だったのである。
　例外として、定めよりも早く奔（はし）ることもなくはないことで、勿論、その時は、狂四郎は、ただ、なんとなく、そう見てとったにすぎなかった。
　梅沢から、この国府新宿村まで、一里にも足りない。狂四郎は、その中途で、立場茶屋に寄ってはいるが、一刻も費してはいない。
　ところが――。
　意外にも、同一人物である飛脚が、またもや、そのすばらしい速歩で、狂四郎を追い越して行ったのである。引きかえして来た姿をみとめなかったにも拘らず、だ。
　速歩だけで、同一人物ときめたのではない。どことといって目立たない、このなりわいに長年馴れた男の走る身ごなし足さばきも、狂四郎の目にとらえられると、ちゃんと特長を持っているのであった。

おぼえておこうと意識して、記憶にとどめたのではないことは、いまもことわったごとくである。心身に自然と具わった、磨ぎすまされた神経が、一瞥なんでもない事柄に、油断なく働いていて、これは、気分や思慮の置かれた状態とは、なんの関りもなく、そうしているのであった。

――同じ男だな！

そう断定すれば、もはやその事実を疑ってみる躊躇はなかった。それよりも、どうして、こういう奇妙なことが起るのかと、その謎を解く興味を湧かせている。

――二度あることは、三度ある、という。

ふっと、薄く笑って、狂四郎は、すたすたと、歩いて行った。

はたして――。

小磯村に達して、西行法師が三夕の名歌の一首で有名な鴫立沢の古蹟をとどめた鴫立庵のかたわらで、狂四郎が、枯れて切られた老松の株に腰を下していると、その前を、その飛脚は、同じ速歩で、とっとと、前二度と同じく、西から東へ、駆け過ぎて行った。

つと、狂四郎は、立ちあがると、その後を尾けはじめた。

むこうは、走る。こちらは、歩く。しかも、その距離半町は、絶対にひらこうとはしなかった。

二

兵法に、小鷹の術というのがある。隼のごとき迅さで歩く。狂四郎は、この秘術を使ったのである。

大磯宿――。
狂四郎は、宿はずれの立場茶屋の床几に腰を下していた。
むかい側は、人馬継立ての問屋場で、あわただしい雑沓をみせている。これは、大名行列の御用が命じられた証拠である。
渋茶を持って来た婆さんに、
「大名が泊っているようだな」
と、訊ねた。
まだ陽が高いのに、もう投泊しているのが、不審だった。
「はい、細川様で――」
婆さんは、意味ありげな笑顔で、こたえた。
「細川が、どうした？」
「ご存じありませぬかの。細川様は、ご参覲の途中、かならず、あそこの――」
と、高麗山の方角を指さして、
「唐人林の中で、一夜を、おすごしなされますわい」
「唐人林というと、梅の名所であったな」
「さようでございます。その中に、曾我十郎が、虎御前と逢瀬をたのしまれたとつたえられて居りまする古いお寺がございましてな。そこの茶堂で、大磯の娘と二ノ宮の娘とが将棋をたたかわせるのを、お殿様は、ごらんなさいますのじゃ」
「将棋を――？」

「これが、三年毎の行事になって居りましてなあ……」
婆さんが、説明をつづけようとした時、狂四郎は、急に、床几からはなれて、街道へ出た。
むかいの問屋から、一人の人足が出て来て、足早やに、化粧(けはい)坂の方へむかって、歩き出したからであった。
狂四郎は、その人足が、例の飛脚が姿を変えたものであるのを、看破したのである。問屋へ、とび込んで行って、今日の時間にして、ものの三分も経ってはいなかった。
狂四郎は、この男の出て来るのを待っていたのである。
人足に化けた飛脚は、つと、街道を左へそれて、松の疎林の中へ入ると、腹がけ丼から、黒い細長い筒を、とり出して、幾度か大きく、横に振ったり、縦に振ったりしておいて、片目にあてた。
遠目鏡であった。
この松林つづきが、唐人林なる梅の名所になっているのである。
早咲きの白い彩(いろどり)のあわいに、風雅な一草庵が見出された。
遠目鏡は、そこへ、向けられていた。
縁側に、武士の姿があらわれていて、両手をあげて、何かの合図をした。
飛脚は、すぐさま、遠目鏡をかくすと、一散に、街道を横切って、海辺へ奔った。そして、そこをつらぬいている浪除堤を躍り越えた。
――成程、そうだったのか。
木蔭から見送った狂四郎は、苦笑した。

その浪除堤は、平塚宿の浜から、南東小磯まで――小淘綾（こゆるぎ）の磯を走っている。その蔭を行けば、街道からは、姿は見えぬ。

飛脚は、人足に化けて、荒磯をつたって、西へ、一気にふっとんで行くのだ。それから、ふたたび、みたび、もとの姿にもどって、街道を、「早の早飛脚」の速力よりも倍増した健脚で、ひき返して来ていたわけである。

種を明かせば、あっけなさすぎる話で、狂四郎が、同じ飛脚から三度追い越されたとしても、なんのふしぎはなかったわけである。

飛脚が、往復しているのは、梅沢のあたりからに相違ない。だからこそ、あれだけの速歩が使えるのだ。

狂四郎は、逡巡（ためら）わずに、唐人林へむかって、進んで行った。

ちらほらと咲きそめた梢の下を、ほのかな香をかぎつつ、くぐって行くと、曽我十郎が虎御前と逢瀬を愉しんだとか、建仁のむかし源頼家が、江島へ詣でる序でに、遊女を聚めて歌曲を催したとか、といった故事のなごりをとどめた古びた建物が、ひっそりと、春の陽ざしをあびて、そこに在った。

梅樹の塀のかわりにめぐらした境内は禅林の庭で、これは頼朝の依頼を受けた静空阿闍梨の構築ともいえそうな、見事な風韻の幽雅をたたえた眺めであった。

上段に石組を構え、下段に池泉渓流を配し、堂、塔、亭を、その風光に調和させて建ててある。

――風流の流れを汲む大名だけあって、九曜星の幔幕など、不粋にひきまわしていないだけい

い。

そう思い乍ら、狂四郎は、方丈とおぼしい茅葺きの建物へむかった。

もののしく、徒士が、警護の目を光らせていないのも、気持がよかった。

玄関に立って、案内を乞うと、小姓が出て来た。

「側頭役の諸住七郎左衛門殿に、眠狂四郎と申す浪人が、御意を得たい、と、つたえて頂こう」

小姓は、受けて、奥に入ったが、すぐに小走りにあらわれて、招じた。

通された簡素な書院で、腕を組んで、待っているあいだに、鶯が、いく声か、啼いた。まだ啼き馴れぬ稚い調子が、かえって、枯淡の幽居にふさわしかった。

「ほう——ほうこれは、珍しいの」

さらりと襖を開けて、気軽な態度で、座についたのは、ふくぶくしい童顔をもった老人であった。

この老人は、水野忠邦の側頭役武部仙十郎と昵懇で、その関係で、狂四郎も、二、三度酒席で顔を合せたことがある。仙十郎程の曲者ではないが、器量は劣らず、鋭利な芯を飄逸な物腰がかくして、狂四郎のような男にはつきあいよかった。

狂四郎は、挨拶をすませると、

「細川侯の風流に、一役買わせて頂きたくて、上りましたが、お手前様ならば、おききとどけ願えそうです」

と、きり出した。

三

細川家代々の主人が、風流を解す乃至は解さんとつとめるのは、遠祖が、足利の代に管領にして、禁中貴爵につらなった伝統をもったからだ、といえる。野武士から身を起した大名とは、おのずから格も品もちがっていた。

就中（なかんずく）、十一代公方足利義澄の子だといわれる玄旨法印藤孝は名だたる武将であると同時に、天稟多能で、殊に和歌は当時無双といわれた。

慶長五年秋、上杉景勝が反旗をかかげたので、徳川家康は、これを伐（う）つべく下向し、藤孝の嫡子忠興も、手勢大半を率いて、これにしたがった。この留守中、石田三成の下知によって、忠興の内室がらしゃが、人質にとらわれんとして、男女二人の子を刺し殺し、おのれも自害して果てた事実はあまりにも有名だが、同時に、父藤孝も、三成輩下の小野木縫殿助公郷らの諸将に、丹後国へ攻め込まれていた。

この時、細川家の屈強の士（もののふ）たちは、豊後杵築の城を守って居り、丹後には、老幼のみがのこっていた。

しかし、藤孝は、聊かも狼狽せず、宮津の城をひきはらって、田辺の城に引きこもるや、残兵を指揮して、狭間を切り、逆茂木を引き、持場持場に勢を配って、悠々として、敵軍を待ちかまえたのであった。

大阪方一万五千の精鋭は、稲麻竹葦と攻め囲んで、もみにもんだが、城はビクともしなかった。

城内にあって、藤孝は、平然として、古今集の秘蘊を証明する筆をとっていた。そして、これを完成すると、

いにしへも今もかはらぬ世の中に
　心の種をのこす言の葉

という一首を添えて、使者に持たせて禁裏へ趨(はし)らせ、烏丸頭弁光広に手渡させたのであった。

後陽成院は、これをひもとかれて、古今集の秘蘊を極めた武人を殺すのを嘆かれ、ただちに勅使を大阪城に遣わされたのであった。三成は、詔であるから、やむを得ず、急使を発して、寄手に、田辺城の囲みを解かしめた。

すると、藤孝は、何を考えたか、城内をくまなく塵ひとつとどめずに掃除させると、寄手の大将小野木縫殿助を招じ入れて、ひき渡し、飄然として、ただ一人で城を去ったのであった。

このことは、嫡子の忠興を憤らせたが、藤孝は、さらにかまわず、洛西仁和寺の片傍に草庵をあんで、ひきこもり、幽斎と号して、しずかに風月に嘯くくらしをはじめたのであった。

某日、老臣が、たずねて来て、家中の様子をつたえたことがあった。黙ってきいていた藤孝は、やおら、几上の硯蓋をはらい、文台の短冊をとって、さらさらと書き下して、老臣に渡した。

短冊二葉には、左の二首がしたためてあった。

あふ坂の関のあらしの寒けれど
　ゆくへ知らねばわびつつぞぬる
まこも草つのくみわたる沢辺には
　つながぬ駒もはなれざりけり

藤孝は、老臣にむかって、云った。

「いまきいて居ると、越中（忠興）は、あまりに手厳しくて、家中の者が心服しかねて居る様子と思われる。……わが子を誇るに似たれど、越中は、父にまさって武辺も功者であるし、将軍家をはじめとして、諸大名への交際も下手にはあらず、細川が丹後の領主となったのも、彼が働きに負うところに相違ない。しかし越中も、すでに三十七万石の国持大名と相成ったからには、まず、徳を養うが第一と申すものであろうの」

老臣は、かしこまって、二葉の和歌を、読んで、その意味を考えた。

「わかるかの——？」

「は——いささか」

「関のあらしの歌は、古今集読人しらずとあり、まこも草の歌は、詞花集に俊恵法師とある。いずれも、ふかく読み透せば、自ら、意があきらかとなろう。おのが立身出世のために、家人、郎党はあるものだ、と思うてはならぬ。これは、威服と申すものじゃ。威服によって、ひきしたがえては、万一味方の敗軍、あるいは手痛い攻口に臨んだ際、生命を主君にさし出す心に相成るまい。士が主を慕うには、徳というものが肝要じゃ。すなわち、心服とも帰服ともいう。孔子がいう、温良の二字——これだの。玉のごとき含蓄があってこそ、国が保て、身を持し得る。帰って、越中に、つたえるがよい」

この教えは、忠興の心に、熱くこたえたものだった。忠興もまた、雅量においては、父に一籌(ちゅう)を譲ったが、秀れた武将として、諸大名から敬われた。

ある時、江戸から帰国の途中、京へたち寄り、烏丸大納言の館に泊った。

五畿内の某大名が、このおりを利用して、忠興の意匠によって、冑一刎（ひとはね）作りたい、と使者を送って願い出た。忠興は、しばらく考えていたが、一紙に冑の注文を記して、使者に渡した。

使者は、一読して、不審げに、

「おそれ乍ら……前立物には水牛の角（つの）、下地は桐の木、とおん認（したた）め遊ばして居りまするが、桐にては、ものに触れて、折れやすうはございますまいか」

と、うかがいをたてた。

忠興は、笑い乍ら、

「このような大立物は、折れやすいがよい。働く時には、物にひっかかっても、すぐに折れた方が、働きのさまたげになるまい」

「お言葉をかえすようなれど、もし折れてしまっては、後日のために如何なものでございましょうや？」

「武士は、戦場に出でて帰ると思うものか、帰らぬと思うものか——生きて帰らぬ心得あればこそ、折れやすい立物をつくるのだ。後日の心遣いは、無用にせい」

使者は、赤面し、平伏した、という。

忠興の嫡子与一郎忠隆もまた、関ヶ原の役には目ざましい戦功をあらわした若武者であったが、その妻（前田利長の女（むすめ））が、母がらしゃの自害の際に、知らずに大阪玉造口の屋敷を出たことを、父から咎められるや、ただちに、妻を離別して、自身も浪人して、都をすこしはなれた嵯峨野に閑居してしまった。休夢居士と称して、花鳥風月を友として、ついにふたたび世に出ることをしなかった。

けだし、細川家の人々の血の中には、勇武に兼ねて、風雅を愛する傾向が濃かったのである。

当代にいたっても――。

風流人たるの名は、三百諸侯中で、きこえていた。

茶道、歌道の催しには、なくてはならぬ大名であり、将棋好きであり、さらりとした漁色家としても、噂があった。

参覲の道中、名所名所に立寄って、何首ずつかをのこして行くのを道楽としていた。

この唐人林中の寺に、当主茲樹（しげたつ）が、はじめて休息したのは、十数年前のことになるが、その時、えらばれた二ノ宮生れの町娘が、女には珍しく将棋をさすときいて、相手をさせたところ、遠慮なく、茲樹を負かしたので、おもしろがって、その夜の伽を申しつけた。

娘は、髪にも裸身にも、ほのかに梅花方（ばいかほう）の香気をただよわせて、床に入って来たので、茲樹は、いよいよ気に入って、翌朝、立去るに際して、名品・虎斑（とらふ）の駒を、与えたのであった。

この娘は、不幸にして、二年後に、風邪がこじれてこの世を去ったが、茲樹が、再び立寄った時、二ノ宮と大磯の両宿では、すでに、おのおの美貌の娘をえらんで将棋を教えこんで、待ちうけていたのであった。

側頭役諸住七郎左衛門は、両宿からの願い出をききとどけて、娘たちに、茲樹の面前で、駒をたたかわせることにしたのであった。

こうして、勝った方の娘が、夜伽をして、莫大な下賜品を頂戴するというならわしが、できたのである。

風流大名にとっては、梅の香をかぎ、鶯のさえずりをきき乍ら、棋面を争う美しい娘たちを眺

めて、まことにのどかな興趣に耽っていればいいのだが、娘たちにしてみれば、互いの宿の栄誉を担って、必死であった。

前二回とも、大磯の娘が連勝して、虎斑の駒をあずかっていた。

こんどこそは、こちらの宿で奪わねばならぬと、二ノ宮側では、えらんだ娘に、江戸から達人を招いて稽古させた、という。

狂四郎が、やって来た時、このたたかいは、中盤の岐れを迎えていた。

四

狂四郎は、云った。

「ただいま、茶堂においてたたかわされている勝負、どちらが勝つか、てまえが、あててごらんに入れる」

「ほう……これは、おもしろい。あててみるがよい」

七郎左衛門は、にやにやした。

「但し、これは、てまえと諸住殿との勝負になりますぞ」

「ふむ――」

「てまえが、あてたなら、勝った娘を、てまえの夜伽に頂戴する。はずれたならば、てまえの首を、お手前様にさしあげる。いかがですな？」

七郎左衛門は、しばし、なんともこたえずに、狂四郎の蒼白い異相を凝視していた。

狂四郎は、棋面を観戦もせずに、この大それた賭をやってのけようというのである。

――何かあるな？
七郎左衛門は、そう感じた。
「風流を誇られる細川侯のことです。てまえの申し出をおききとどけにならぬ筈はないと思いますが」
「おぬしという人物のことは、かねがね、殿のお耳に入れてあるがの……。よかろう、ひとつ、勝負するかの。どちらが、勝つ？」
「二ノ宮の娘です」
狂四郎は、ずばりと云った。
七郎左衛門は、ちょっと、首を傾けて表情をひき緊めた。
つい今、観たところでは、あきらかに、形勢は、大磯の娘の方に有利に、展開していたのである。
「おぬし、首を棄てるのでは、あるまいな？」
「生命の落し場所は、これで、心得て居ります。お手前様ごとき古狸には、滅多に、この首は、さしあげられぬ」
「はははは――」
七郎左衛門は、立ちあがると、書院を出て行った。
二刻が過ぎた。
七郎左衛門が、再び書院にあらわれた時、有明に灯が入り、狂四郎はそのかたわらに、うたた寝をしていた。

「眠――」

呼ばれて、やおら起き上がった狂四郎は、黙って微笑して、老人を見あげた。

「おぬしの勝じゃわい」

七郎左衛門は、じっと狂四郎を見据えて、

「理由を明かせい」

と、促した。

それにこたえようとせず、狂四郎が、口にしたのは、

「二ノ宮の娘は、てまえの好みに合いそうな美女でしょうな」

そのせりふだった。

五

利休の言葉に、

「侘びるは善し、侘びたるは悪し」

と、ある。

この茶堂の露地は、まさに、樹木、岩石、庭面におよぼされた長い年月が、この侘びるの幽趣をたたえていた。

灯障りの木かげからもれる明りに浮きあがった、影ふかい石組や樹枝や茶亭の破風や腰掛待合や雪隠など、すべて古雅な余韻をたもって、春宴の閑寂を彩(いろど)っている。

狂四郎は、中門を背にして、苑路にむしろを敷かせて坐りこみ、黙然として酒をのんでいた。

た。灯かげを半面にうけたすがたは、そのわきに立っている梅の梢の白い花びらとともに、この枯淡の庭を破る艶冶な作意といえた。

もう半刻以上も、ひと言も交さずに、この男女は、対座しているのであった。

娘は、その間、膝で重ねた手を、指一本動かそうともしないでいる。

努めて無表情を保とうとしている美しい面貌に、時として、微かに、不安と困惑の焦燥の色を掠めさせるほかは、よくもこうまで、人形のように動かずにいられるものだ、と感心させられるのであった。えらばれて将棋をならったくらいであるから、気性も強いのであったろう。

見事に勝利を獲て、熊本城五十余万石の大守の伽を申しつけられるものとばかり信じていたのに、意外にも、氏素姓も知れぬ異相の浪人者へ、身柄を渡されてしまったのである。

しかし、この仕打をうける身におぼえは、あるのだ。

じぶんの為したことが、露見したのだとすれば、手討ちにされても、異存はない筈であった。いや、死は間もなく与えられると覚悟して、しかも、この静かな態度を持続し得ているのは、いっそ、立派であると、ほめられてよいのである。

「おかや――さんと云ったな」

長い沈黙を、狂四郎が、ふと、やぶった。

「はい――」

「この茶庭には、無駄なものがない。一枝すらも、見えがくれの配慮がなされている。……ついでに、お前さんにも、無駄なものをすててもらおうか」

「……？」

娘は、大きく目を瞠いて、狂四郎を、瞶めかえした。

「脱ぎすてるんだな、身につけているものを、いっさい――」

もとより、その要求に対して、わずか乍らも、反抗の気色は、しめされた。

狂四郎は、二度とは促さなかったし、態度もかわらず穏かなものにして、待った。

娘は、立ちあがって、うしろ向きになって、帯を解き、衣裳をいちまい、いちまい、すべり落していった。

一糸まとわぬ純白の素肌が、滑らかな陰翳を刷いて、春の夜気にさらされた時、狂四郎は、つと立って、梅花一枝を手折ると、ぽんと投げ与えた。

「これで、かくして、しばらく、立っていてもらおうか。……なまぐさい生き方をしている卑賤な素浪人の風流が、これだと思って、我慢してもらう」

その言葉が終らぬうちに、刈込籬の蔭から、突如、一本の槍が、狂四郎の背中めがけて、ひょーっ、とくり出された。

狂四郎は、その一撃をどう躱したか、次の刹那、ぐさりと穂先が突き立った角樽の手掛けを摑んで、にやりとした。

「野暮だったなア、御家臣」

まず、そうあびせておいて、

「こちらは、お殿様の風流にならって、春宵一刻を愛でたら、おとなしく、ひきあげるつもりだったのだ。ここは、鶯が啼くところで、雉子が啼く場所ではないのだぜ。啼いたおかげで、撃た

れることになる……。おぬしだったのか。飛脚の遠目鏡に、手ぶりよろしく、駒の動きを指の本数で教えていたのは――。飛脚は、合点すると、韋駄天駈けに、梅沢まで、荒磯をふっとんで行く。そのあたりに、二ノ宮宿でやとった江戸の達人とやらが待っていたのだろう。飛脚は、次の手をきくや、こんどは街道をひた走りだ。遠目鏡を、横やら縦やらに振って、それを教える。左様さ。娘の耳につたえるには、鶯の啼き声をもってしたか。二ノ宮宿から袖の下をつかまされての仕業（しわざ）であったろうが、うまく考えたと、ほめてやってもいい。ただ、このおれに見破られたと知って、風流の庭へ、槍などを持ち込んで来たのは、やっぱり、袖の下をつかまされる下種根性でしかなかったということになる。細川家に仕える資格はないのだぜ」

どこかに身をかくして、見まもっている側頭役に、きかせるための種明しであった。

それから、いくばくの時間が過ぎて――。梅の樹の根かたには、裸男と裸女が、背中あわせに、ひっくくられていた。

そして、唐人林を遠ざかる粋な小唄がこの一幕の幕ぎれにふさわしかった。

香にまよう、梅が軒端の匂い鳥、
花に逢瀬をまつとせの、明けてうれしき懸想文、
ひらく初音のしおらしく、まだ解けかぬるうす氷……。

無想双刀術

一

仲春事宜。
きさらぎの空麗かに、雪解の草も萠えいでて、梅が香も猶ゆかしく、桜の蕾いろづくころ、鶏腸菜の芽を摘み、蒲公英の花を採り、帰雁も雲霄に声を啼き、雉子は野辺にほろろうつ、午日、稲荷の祭典あり、彼岸涅槃の法会あり、遊人日々に一瓢を提げて、花の消息を近郊に誘うべしとぞ。

この月は、工商農ともに、手隙の折である。野外へ、人の群は、どっと出る。
殊に、江戸人士にとって、終日の行楽は、品川から二里半——厄除大師のある川崎あたりが最適であったようである。その霊場をはじめ、堀ノ内山王権現堂も近く、梅林、桃の名所、洲河原もある。
綿雲のふたつみつ、ふわりと浮いた、風もなく静かな春の真昼の大師河原は、黒胡麻を撒いたように、無数の人影が、ちらばっている。

就中、これは、宛然大きな四角な桝から、黒胡麻をあふれさせたといった一個処があり、どよめきが、そこからあがっていた。

相撲の興行であった。

といっても、立てられた幟に、江戸大相撲の三役の名は見えず、一人、前頭の中位にある関取の名が、その数旒とも占めているところをみれば、どうやら、この土地出身の力士を歓迎する催しと思えた。

眺めたところ、積樽、飾り物も景気よく、行司が、緋総の軍扇に、熨斗目麻裃をつけているなど、相撲狂いの分限者の肝煎りがあるのであろう。

この賑やかな風景を見下す土手上の立場茶屋に、眠狂四郎は、いた。

名物米饅頭が、小皿に盛られて、かたわらに出されていたが、勿論、狂四郎は、一個も口にしてはいない。罪業深い身には、こののどかな行楽の眺めは、眩しすぎるように——いわば、孤は自ら恃むより孤なるは莫し、といった暗い面持を、春の匂ううららかな陽ざしになぶらせて、動かずにいるのであった。

すぐかたわらに、同じ黒の着流しの浪人者がいたが、これは、狂四郎と面白い対照をみせて、盛んに米饅頭へ手を出し乍ら、熱心に、土俵上の勝負を見まもって、ひとりで、しきりに声をたてているのであった。

奇妙な腰つきの仕切りには、笑い出すし、大男が小男に負けると、舌打ちして、その気力の足りなさを慍るし、鮮やかな勝ちには、声がとどけと、ほめる——無心とさえ云えそうな明るい表情のいきいきとした動きは、行き交う旅人の微笑を呼んでいたのである。

そのうち――。

群衆が、ひときわ騒々しく、どっと喚声を渦巻かせた。

突然、ひとりの大女が、着物を脱ぎすてると、真赤な褌ひとつになって、つづら笠のような胸の隆起をゆさゆさと揺り乍ら、土俵上へあがって来たのであった。

この女の登場は、当然予期されていたところとみえて、

「うわあっだ。待ってました。天下無敵、お倉大関！　女日下開山！」

「日下開山じゃねえや、日下開帳だろう」

「あれで、もう四十で、餓鬼が六人もいやがるんだぜ」

「六人とも、父親がちがってやがって、こんどは、このおれに目をつけたものよ、今朝おれをつかまえてな、四十だ四十だと今朝まで思うた、三十九じゃもの花じゃもの、――」

「へっ、てめえなんぞ、日傭取りのひょろひょろ玉に、あの女を嬶にして、からだも身代も持つもんけえ。いっぺんに、蕎麦を三十杯も平げやがるんだぞ」

「その大好物の蕎麦よりも、わたしゃお前のそばがよい、ってな」

「やいやい、昂奮しやがって――あんまり頭をふりまわすねえ」

「頭が高うて、あの臀(しり)見えぬ、あの臀可愛や髷(まげ)憎や――って小唄にあらあ。頭をどけろ、頭あ」

笑い声と呶鳴り声の中に、お倉は、四人まで抜いた逞しい若者を、かんたんに、投げとばして、大きく見得をきって、胸をたたいてみせた。

「荒磯の波のゆりかえし、どんと来いってやつだのう」

「当節、もう柳腰なんざ流行らねえんだ。どっしりと、こう――碾臼(ひきうす)にかぎるて」

「鬼が餅搗きゃ、閻魔がこねる、そばで地蔵が、嘗めたがるってな。てめえ、よだれをたらしてやがるぞ」

お倉は、つぎつぎと、とび出して来た力自慢を、あっけなく、土つかせて、愈々、喝采をあびて、大得意だった。

やがて、四、五人の乾分をつれて、六尺ゆたかの博徒態の巨漢が、近づいて来ると、大声をあげて、群衆の垣を崩して、土俵下へふみ込んだ。

「ちょっ、稲光の野郎、丁度いいあんばいに、江戸へ行ってやがると思っていたら、戻って来てやがる」

「稲光って、四股名か、あん畜生の――」

「そうよ。四股を踏む時、きまって、ぶうっ、とひとつ鳴らしやがるんだ。稲光が鳴ったら、雷電になるってな」

「雷電、糞を為右衛門――そのうち、雲州侯が抱えに来るだろうと待ってやがんだ。もともとあの野郎、雪隠大工だからのう」

「お倉、負けるなっ！　糞くらえ、だ！」

「しかし、なにしろ、稲光は、五大力だからのう」

「おうおう、学のねえことを云やがる。五大力てえのはな、五大力恋緘といってな、五大力菩薩に念じて、芸妓が色文の封じ目に書く文句だアな。……一筆と書き初むる御懐しさのまま、日日に思い参らせ候えども……思い寝にする独り寝の……あらあらかしく、いろいろかゆく、いっぺん、搔きに来てたもれ――ってな、おれんところでは、山とたまって、雪隠紙にしてらあ」

稲光定右衛門というその破落戸(ごろつき)が、のしのしと、土俵に上るや、お倉は、流石に顔色をすこし青ざめさせたが、女だてらに相撲をとるだけあって、すぐさま、闘志を裸身にあふらせた。
稲光は、すでに、酒気を帯びていて、淫猥な笑いを泛べ乍ら、大きく、四股をふんだ。
お倉の二十七、八貫はあろう巨体が、猛然と突進して来たのを、稲光は、中腰で受けとめてみせた。
四つに組むや、ずるずると、お倉を土俵ぎわへ押しつけ、うんと気ばって、面を朱にした稲光は、たかだかと吊りあげた。
太鼓腹に太鼓腹をのせて、宙に足をばたつかせるお倉の格好は、群衆の卑猥な叫び声を招くに充分だった。
稲光は、お倉を吊り出すかわりに、くるっと踵をまわして、土俵中央へ、どんとおろした。そして、すでに闘志を喪ったお倉に対して、予定のこんたん通りに、まわしをはなした両手で、むっくりと盛りあがった臀部を抱き、頭を下げて、その乳房へくらいついた。
悲鳴をあげたお倉に、たぶさをつかまれるのもかまわず、稲光は、そのまま、お倉を、押し倒した。
周囲に爆発した笑い声や喚き声は、遠くにいる人々を、何事だろうと駆けつけさせ、群衆の数は、数倍にふくれあがった。

二

「こらっ！　止さんか！　やめい！　やめろっ！」

群衆の中から、一人の旅装束の武士がとび出して来て、叱咤しざま、稲光の腰を蹴とばした。見るからに武骨な勤番ざむらいだった。

稲光は、巨漢に似ぬ敏捷な身ごなしで、つっ立ちあがると、駆けあがって来た乾分から、長脇差を受けとって、

「大方さんのおよろこびなさる余興を邪魔さらしやがって、鹿尾菜（ひじき）さんぴんめ！　すっ込んでやがれ！」

「無礼者っ！　雑言許さんぞ！」

「なにをぬかしやがる！　この初詣でで、四十二の厄は払ったばかりだあ。うぬら、道中埃にまみれた勤番野郎が怕くって、この東海道のかなめどころに縄張りは持てねえんだ。やるか、赤いわし！」

稲光は、いきなり、ぎらっと、長脇差を抜きはなった。

「うぬっ——」

勤番ざむらいは、肚に据えかねて、刀の柄へ、手をかけた。

とたんに——。

風のように、土俵上に姿をあらわしたのは、土手上の茶屋にいた若い浪人者であった。

「たわけっ！」

一声、稲光にむかって、鋭くあびせた。

それから、勤番ざむらいへ視線をまわして、左手をあげて制した。

この刹那であった。

稲光が、異様な、けだものじみた唸りを発して、のけぞった。
その両眼から、血飛沫が迸るのを、千余の群衆は、息をのんで、見とどけた。
誰一人、刀身の閃きを目にとめてはいなかった。
勤番ざむらいは、刀の柄へ手をかけた同じ構えのままだった。
居合の正法は、抜く手も見せずに、白刃を横に薙いで、対手の両眼を斬る。それを、勤番ざむらいは、なしたものとみえた。
見事というほかはなかった。
たしかに——茶店にいる狂四郎が、その瞬間、思わず、
「うむ！」
と、感嘆の呻きを洩らしたものである。
仲裁に入ろうとした浪人者は、つと、勤番ざむらいに寄って、
「長居は無用です。御主君の名を出されぬうちに、立退かれい。あとは、引受けました」
と、小声で、せきたてた。
勤番ざむらいは、何故か、神速の技を発揮した者とも思えぬ、奇妙な戸惑いの色を顔に泛べたことだった。

三

『二十五と四十二でこむ渡舟』
六郷の渡舟の風景をうたった一句である。大師詣での厄年の男たちが、こみ合うので、この川

柳が生れた。大昔は、橋が架けてあったのを、貞享以後、舟渡しになったのである。
ちなみに――記しておく。大井川にしろ、六郷川にしろ、橋が架けてないのは、徳川幕府の警備政策のひとつであった。橋を架けて、敵に攻略の便利を与える愚かさから免かれるためであった。当時の道路交通施設は、一般庶民階級のためのものではなく、一部支配階級（主として特権者及び上級の武士階級）のためのものであった。舟賃にしても、武士は全額免除であった。
狂四郎は、渡し場から、街道に上ると、相変らずのふところ手で、急ぐでもなしに、雑色村、新宿、蒲田と、過ぎて行った。
大森宿に入って、麦藁細工と和中散の店を眺めると、去年、新太郎をつれて、ここを過ぎた時のことが、思いかえされた。
子を持つ親が、東海道の旅の往き還りに、かならず、ここで、このふたつの土産物を買うならわしを、狂四郎もまた、みならったものであった。
その些細な、父親らしい経験に、妙にほのぼのとした気分になったのを、今でも、狂四郎は忘れぬ。
狂四郎が、つと、和中散の店へ立寄って、三袋ばかり購って、通りに出ると、
「やあ――」
と、明るく笑いかけたのは、六郷の茶屋で一緒だった若い浪人者であった。
――やはり、追って来たか。
この予感は、舟で渡るおりから、心中にあったのである。
狂四郎が、冷やかな一瞥をくれて歩き出すと、浪人者は、肩をならべて、

「長く旅をされていたのですか、眠狂四郎殿」
と、云いかけた。ちゃんと、こちらの素姓も知っていたのである。
狂四郎は、それにこたえず、まっすぐに、眸子(ひとみ)を行手へ置いて、
「おぬし、あの居合は、わたしに見せるためであったのか！」
と、ずばりと云いあてた。
浪人者は、一瞬、別人のように、きらっと、鋭い眼光を、狂四郎に、くれた。
土俵上で、破落戸稲光の両眼を居合で斬った――そのことであった。
斬ったのは、勤番ざむらいではなかった。この浪人者の方であった。
稲光を一喝しておいて、勤番ざむらいへ視線をまわして、左手をあげて制した――その刹那、右手で、腰の一刀を抜打って、稲光を見もせずに、その両眼をひと薙ぎして、また鞘におさめる迅業をやってのけたのである。
おそらく、その居合を見とどけたのは、遠く土手上にいる狂四郎ただ一人であったろう。
「流石は、眠殿だ。やはり、こちらの思った通りだ。てまえの仕業と見ぬかれた」
浪人者は、もうもとの明るい表情にかえっていた。
「用心ぶかいことだな」
「左様、てまえは、用心ぶかい人間です。てまえの師は、常静子先生ですからな」
常静子――平戸侯松浦静山の名が出たので、狂四郎は、瞥(ちら)と、浪人者を見やった。
その「剣談」や「剣攷」は、狂四郎も、修業中、くりかえし読んだものである。後日、白刃場裡において、その教えは、すくなからぬ参考となった。

たとえば——。

すべて、表を使うに、使い損じたるとき、その使い直すことあり、是は、その表の形にせんとて為す事ゆえ、尤もなることなれど、この心こそ剣術の真の心に非ず、その故は、変に応じて自在なるこそ願うところなり、因て表には各その変あり、これを知らざれば、剣を学ぶの術にはあらず、然れども人の手足の進退思わざるの変ある者、これは必ずその変応を予めするとも、之無きも多し、そのときは己が心に随って即応すべし、この即応のわざ、流儀の形にあらずとて恥と思う者は、かえって流儀の意を知らざるに似たり、本形の起ること変応の為なれば、思わざるの変に、定めざるの刀を以て勝つこと、大いに尚ぶところなり、然れば形を使い損じたるが恥と思い、使いかけたるにて使いなおさんより、無法の太刀にても、即座に間に合わせたるこそ恥に非ざるなり、表は皆勝負なりと心得べし。

といった条は、これまでの無数の死地にあって、狂四郎が、使った臨機応変の殺法を、ぴたりと指摘している。

また、常静子は謂う——。

剣術の奥義とて何も無き事也。察するに人は酩酊沈酔したる時も、免印の上ならば、敗れを取ることはあるまじ、と思うべきが、先ず予が身にとりて言うべし、予浅学にして、その術もまた拙と雖も、吾師常稽子の印証を受けたり、しからば、無下に凡庸の門生とは混同すべからず、人は知らず、予が心に於て知るべし、酒をくらい、昏蕩の時にあたっては、中々手足の進退速かならず、その甚しきに至りては神去り気散じて殆どその敵を分たず、この時に及んで、豈に能く勝を得るの術あらんか。

狂四郎が、常時、酒を飲みながらも、足の乱れの一歩前で、盃を伏せる習慣がついたのも、この教えの、おかげであった。
この浪人者も、おそらく、常静子に直接剣をとって教えられたわけではなく、「剣談」と「剣攷」を金玉の家語として常履しようとしているに相違ない。
ただ、どうやら、この浪人者とこちらがちがっているのは――。
一日を慎みて、以てその世を終う――その心掛けが、こちらには皆無であることであろう。
狂四郎は、一町あまり、黙って足を運んで、ふっと、微笑した。
こうして、なんとなく、肩をならべて行き乍ら、この浪人者の持って生れた明るい雰囲気が、こちらまで、のびやかな気分をさそうようであった。どんな他人からも好感を抱かれる、とくな人柄とみた。
「おぬし、誰にたのまれて、わたしの生命を、狙って居る？」
不意に、その問いを発しつつも、狂四郎のおもてに、微笑はつづいていた。
「てまえの腕では、眠殿は斬れぬ、とわかりました。あきらめました。もともと、誰にたのまれたのでもないのです」
浪人者は、よどみのない、綺麗な声音でこたえてから、自分は、下曽我典馬、という者だと名乗った。
「おぬしのような、心に曇りのなさそうな御仁が、わたしを斬ろうという了簡を起したとは、訝しい話だな」
「人間はあさましいものですな。てまえも、心志誠実に生きようと心掛けて来たのですが、貧窮

には勝てなかった。その名を申すのはひかえさせて頂くが、さる西国の大名の側頭役に、かねて仕官の儀を願い出ていたところ、眠狂四郎に一太刀あびせるだけの腕前を持つなら、五十俵もくれよう、と云われましてな。真に受けたのです。……いまにして、からかわれたとわかりました」

——細川家の諸住七郎左衛門だな。

狂四郎はすぐに、察知した。

「おぬしの腕なら、斬れるかも知れぬ。立合ってもよい」

「とんでもない。ちゃんと、ご存じではないか、てまえが、用心ぶかい人間であることを——。てまえが、あの田舎力士を居合で斬るのを、あんたに見破られなかったならば、その時は、果し合いを申込んでやろう、と考えていたのです。見破られたら、とうてい、自分などの歯の立つ相手ではないから、あきらめよう、と——」

「後を追って来たのは、それをたしかめるためであったろうが、同時に、隙あらば、試しに抜き討とう、という肚を持っているのではないのか」

「……………」

典馬の顔が、はじめて、困惑の色を刷いた。

狂四郎は、ひくく、笑い声をもらして、

「かまわぬ。いつ、どこで、斬りかかって来ても、わたしの方に不服はない。そういう生きかたをしているし、いずれは、それで死ぬ男なのだ」

云ってから、ふと、足をとめると、すぐ左手の間道の岐れ口を指さして、

「げんに、こうして、すでに、わたしの墓まで、立てていてくれる親切な者もいる」

四

奇怪——くさむらの中に、太い桜の丸木がたててあり、その一個所を削って、
『左三丁眠狂四郎之墓』
と、記してあるのだ。
「これは——」
唖然として、典馬は、狂四郎を見やった。
「何者の仕業か、お心あたりがおありですか？」
「なくもない」
狂四郎の脳裡には、甲賀忍組の黒衣の影が、掠めていた。
ここから、間道が、武蔵野の林の中へ通じていた。
これは、上代の東海道とおぼしい。文明十二年、太田道灌が、京都に上らんとして、江戸を発って、大森に来て、その木の蔭で、

大森の木の下かげのすずしきに知るも知らぬも立ちどまりけり

と詠んだというが、このあたりであったろうか。
狂四郎は、無造作な足どりで、間道にふみ入った。典馬も、勿論、そのあとにつづいた。
曲り道で、大きくうねっていたが、ひとすじに、林の中をつらぬいていた。
林を抜けると、まだ、春の花の、ひとつも見あたらぬ、ぼうぼうたる曠野であった。

狂四郎は、この広漠のひろがりが、将軍遊猟場であるのに、気がついた。

彼方に、鶴寄土堤が、かすんでみえる。

そのむこう側の、楢林の中には、鳥見屋敷がある筈である。

──そうか、甲賀忍組の仕業ではない。

前年の初夏、新太郎を背負うた狂四郎は親不知組の面々にとりかこまれて、鳥見屋敷へ誘致され、そこで、将軍家斉の女（むすめ）高姫の面前へひき据えられたものだった。

──高姫は、あの鳥見屋敷へ、伊豆から帰って来ているのだな。

こちらは、修禅寺の旅籠で、旅の薬売りを使って、高姫に、またしても、とんでもない恥辱を与えているのだ。

こんどこそ、高姫は、心底から、眠狂四郎という素浪人を憎悪したに相違ないのだ。

──そうだったのか、高姫のたくらみか。

にやりとすると、狂四郎は、さらに、その場所へむかって、足を進めた。

白木の墓標は、大むかしの芝塘の跡とおぼしいくさむらの中に、在った。

墨痕あざやかに、

『浪人眠狂四郎霊』

と、認（したた）められてある。

墓標のうしろは、人の背丈ほどある灌木がびっしりと茂って、それが、鶴寄土堤まで、ゆるやかに起伏して、つづいているのであった。

「おれのような男の終焉の地として、まことにふさわしいのだが──」

呟いて、狂四郎は、冴えた眸子を細めて、曠野の果てへ、投じた。

富士は、ちょうど、正面に、すっきりと、碧落を、截りぬいて、美しかった。

半日の閑遊も世のちりをはらう心地ぞし侍る、折から富士雪はれて、しろしろとみえけるこそ、今少し生のぶる様におもはれ侍りて

むさしのや尾花が末を踏みわけてゆきにまよひぬ富士の遠山

そうした遊文が、実感として、胸に来る遠望であった。

再び、狂四郎は、おのが墓標へ、眼眸をもどすと、

「下曽我さん、風心刀に、居合双刀術というのがあるのを、ご存じか？」

と、云った。

風心刀とは、常静子剣談に、秘中の秘なる刀法と、記されてある。これは、無形より出て、無形にかえる間の、一刹那の秘刀であって、心形刀流直伝の人々のうちでも、殆ど知る者はいない。

もとより、典馬も、かねてから知りたいと欲して、まだ、はたしてはいなかった。

狂四郎もまた、これがまさしく風心刀だという一撃を経験していたわけではない。一度、大阪の曽根崎新地の料亭の庭で、笈川良範という聾唖者の、水のように静かな構えを見て、――もしかすればこれが風心刀か、と疑ったことはある。はたして、そうであったかどうか、いまだに、たしかめてはいない。

「眠殿は、知って居られるのか？」

「いや、知らぬ。……が、たぶん、風心刀居合双刀術というのは――」

独語するがごとく、そこまでもらしてから、突如、狂四郎の五体が、音もなく跳躍した。
典馬は、まず、聴いた。
灌木の中に、ぐわっと咽喉を裂く断末魔の呻きを——。
典馬は、次に、見た。
白木の墓標が、中ほどのところで、すぱっと両断されているのと、覆面の士が右手に短筒を掴み、左手に灌木を抱き、脳天からまっ二つに割られて、のめり出るのを。
狂四郎は、左手に脇差、右手に無想正宗を抜き持って、墓標と曲者のほぼ中間の位置に立っていた。
その立像がたたえている名状しがたい静けさに、典馬は、固唾をのんで、ただ茫然たるばかりであった。
春の陽ざしは、この一瞬の出来事も知らぬげに、明るく、宙に満ちていた。

忍組覚書

一

将軍息女高姫の指令を受けた公儀庭番衆が、大森はずれの武蔵野の叢中に、眠狂四郎の墓標をたてて、その当人をおびき寄せ、暗殺をはかった時、われわれの一人は、近くの灌木の蔭にひそみ、これを、つぶさに見とどけて来た。

眠狂四郎の使った居合双刀術は、まさに、驚嘆すべき神技というべきであった。

この報告を受けたわれわれは、しばらく、黙然として、ひとりひとりの想念に沈んだ。

われわれは、べつだん、総支配の命令によって、眠狂四郎を敵にまわしたのではなかった。彼が、榊原政之助に味方したことに端を発して、その強さを試す企てを起したのだ。いわば、眠狂四郎は、われわれ甲賀忍組の鍛えぬいた忍びの術を矢継ぎ早やにあびせかけるにあまりにもふさわしい対手であったのだ。

眠狂四郎は、われわれの攻撃をことごとく、はねかえしてみせた。鮮やかであったというほかはない。

いままた、彼の咄嗟に生んだ秘刀のことをきいて、もはや、これ以上、われわれの方から仕掛

けるのを愚を、誰しも、考えざるを得なかった。孫子が虚実に言う、善く戦う者は、人を致して人に致されず——眠狂四郎という人物は、この備え完璧とみえた。

上座に就いていた頭領が沈黙を破って、薄く笑った。

「どうやら、眠に対しては、干戈をおさめる秋らしいな」

独語するように、そう云った。

「時を失うたと申されるのか？」

冷やかな嗄れ声で訊いたのは、眠狂四郎の風姿をそっくり窃んでいた第三番であった。

「まずの——」

頭領は、頷いて、眠狂四郎の強さを、ひとつひとつ胸にたたむ面持であった。

「易るべからざる強敵だから、いまこそ、これを仮す可からず、とも考えられる」

第三番は、おのれに云いきかせるように、きっぱりと云いはなった。

「無駄だ」

頭領は、あっさりとしりぞけた。

「無駄？——いや、われわれは、まだ、眠に対して、戦いの気を喪っては居らん。断じて、遅疑は起して居らん！」

「はたして、そうかな」

頭領は、われわれを、ずうっと見わたした。

「眠は、巧を以て勝とうとはせぬし、謀を以て反撃しても来ぬ。これは、おぬしらが、充分に知っている。これ以上しまつがわるい敵はないといってよい。眠は、水だな。これを杖で打とう

が、石を投じようが、徒労におわるのは当然の仕儀であろうではないか。こちらが、躍起に仕掛けたところで、それが終れば、対手は、またもとの静けさをとりもどして居る。仕掛けた細工を、眠は、慍(おこ)りもせねば、嗤いもせぬ。危機を抜け出せば、さっぱりと忘れて居るのだ。その態度は、見事だとほめられねばなるまい。……まア、このあたりが、汐どきであろうな」

「いや、それがしは、そうは思わぬ！」

第三番は、意地になって、かぶりをふった。

頭領は、べつにきびしく制しようとはせず、穏かに、

「まだ、あの男を、亡地に追い込む計略があるというのか？」

「ある！　堅(けん)を攻むれば、瑕者(かしゃ)も堅し。瑕に乗ずれば、堅者も瑕なり。眠狂四郎とても、化生魔神ではない。必ず、弱点がある。そこを衝けば、断じて、破り得る」

第三番は、確信をもった語調で、言葉を継いだ。

すなわち――。第三番は、眠狂四郎に対して、これまであまりにも、実とみせての虚謀を用いすぎた過誤を率直にみとめて、こんどは、直接の武力に訴える手段を放棄して、彼が内に匿し持っている菩提心に対して、罠を仕掛ける策を主張したのであった。

彼を知る大方の人々は、その容子が湛える暗い翳におそれて、その心中も氷のごとく冷徹とみている。さあらず、眠狂四郎が、一脈の熱い血汐を、その胸裡に流していることを、われわれは知っていた。

このことは布教師(いるまん)ヨハネス・セルディニィが色戒を破って、仏像師芦部光源の娘を犯して生ませた混血児を、門付の莫連どもの手からとりもどすために、彼が刀をすてて、土下座し、滅多打

ちにあまんじた一例によって明白である。

眠狂四郎も人の子――その虚しげな面皮を剝げば、むしろ、誰よりも情にもろい温かさを蓄えている――これこそ、われわれの狙う彼の唯一の弱点に相違ない。

目をとじて、その主張をきいていた頭領は、第三番が口を緘じても、まだしばらく、そのままでいたが、やがて、

「眠のために、おぬしらの計略が失敗するのを祈ろうかな」

と皮肉な言葉をのこして、座を立ったのであった。

第三番の指揮下に、五名の者が入った。

協議一刻ののち、われわれが一決した計略は眠狂四郎にむかって、われわれ六名のうち誰一人も近づくことなしに、意外の手段をもって、これを仆すことであった。

意外の手段――これは、火のついた爆薬を、彼に持たせることであった。

では、火のついた爆薬を、彼に手渡す者に、誰人をえらぶか？　これは、絶対に、彼に一片の疑惑をも抱かせる者であってはならぬ。彼に手渡す者自身が、それを爆薬と知らず、心からの善意の振舞いに出るのでなければなるまい。眠狂四郎は、その者に心からの好意を持って、きわめて気軽に、爆薬を受けとることになるのだ。

このためには、この計略は、まずその発端から、いっさいが、善意によってなされる行動を利用しなければならぬ。そして、その中途において、眠狂四郎をして、ふっと、

――はてな？

と、首をかしげさせたならば、直ちに中止されなければなるまい。
ということは——。
その発端が、われわれの仕組んだ罠であってはならぬのである。
偶然に起る、ごくありふれた、眠狂四郎の意志の働いた出来事を、われわれは、辛抱強く待ち、その行為に、こちらの計画を、無理なく、自然に添わせてゆく——このことでなければならないのであった。

二

かかる罠ならぬ罠を仕掛ける機会をねらって、甲賀忍組が、おのれを尾けはじめたとは、夢にも知らず、眠狂四郎は、相変らずの、急ぐでもない足どりで、その孤影を、品川宿にあらわした。
初午が来ていて、染幟一対が、あちらこちらの木戸口に立てられ、そこの屋根からは、武者絵の大行燈がつるされ、地所内の子供たちの賑やかに打ちならす太鼓の音が、稲荷の境内からひびいていた。
当時、江戸町内には、稲荷社のないところはなく、地所があれば必ず稲荷社を安置して、守り神としたものである。したがって、初午祭の盛んなことは、非常なもので、この日ばかりは、吝嗇の地主も、祭費を悉く負担して、町内の子供たちにもれなく花笠と半纒を与えるのをならわしとした。
とある横町から、手踊りの屋台つくりの囃巣車（だし）が、ねり出されて来たので、群衆は、左右の檐（のき）

下へしりぞいて、子供たちの勢いのいい行事を見まもった。

太鼓を打つ子、踊る子、金棒引の子――それぞれに、大人そっくりの装いをこらし、これを引受けた地主の散財ぶりは、噂を呼ぶものと思われた。

巣車が遠ざかり、群衆が散ったおり、歩き出そうとした狂四郎は、ふと、酒屋の土蔵の前に据えられた銅張りの天水桶に、一人の老いた巡礼が、苦しそうに、胸をおさえて、蹲っているのをみとめた。

近づいて、

「どうした、爺さん？」

と、肩へ手をかけると、ひくい呻きをもらして、そのまま、ずるずると地べたへ崩れ込もうとした。

――巣車に、はねとばされたな。

狂四郎は、その上半身を起すと、背活を入れておいて、腰の印籠をはずして、丸薬を三、四粒その口にふくませた。

すでに七十を越えた老人なので、もとの呼吸をとりもどすには、なおしばらくの時間をかけなければならなかった。

ようやく、口をひらく気力が出て、狂四郎に、礼をのべかけた時であった。

狂四郎は、小さな影が、背後に忍び寄って、猿臂をのばして、天水桶の蓋にのせた印籠をつかむのに、気がついた。

ふりかえって、

「こども！」と、叱った。
むしろ抑えたひくい語気であったが、盗人の足を釘づけにするには、充分であった。まだ十二、三歳の少年であったが、花笠も半纏もつけて居らず、貧しい装のままで、素跣であった。きかぬ気らしく、恐怖の色をあふらせつつも、小さな肩のあたりに、反抗の様子をしめした。
「かえすがいい」
狂四郎が、右手をさし出すと、少年は、印籠をうしろにかくして、じりじりと、あとずさった。
「欲しければ、まずかえして、あらためて、そのわけを云うがいい。慍っては居らぬし、惜しみはせぬ。しかし、だまって、盗むのはいかん」
狂四郎は、やさしく云いきかせた。
少年の顔だちが、その貧しい装にふさわしからぬ整ったものであったし、ひとり今日の催しから除けられているのもあわれに眺められたのである。
少年は、しかし、狂四郎のやさしい態度に、恐怖の色を消すかわりに、大人に対する不信のふてぶてしさを、その気色にあふらせるや、ぱっと身をひるがえして、走り出した。
狂四郎には、捕える意志が動かなかった。
——祭に加えてもらえなかったくやしさとかなしさが、盗みを働かせることになったのだろう。
そう思いやり乍ら、見送っていると、ものの半町も逃げた少年は、物蔭からとび出して来た一人の娘に、とりおさえられた。もみあらそった挙句、少年から、印籠を奪いとった娘は、まっす

ぐに、こちらへ目をあて乍ら、近づいて来た。
背後で、少年が、泣き顔になって、
「姉者の阿呆っ！　ばかっ！」
と、喚いた。
娘は、まだ十五、六歳であった。
これも、みがけば美しくなろう、氏素姓正しそうな面差であった。みなりのあわれさは、弟以上であった。
狂四郎は、地べたへ膝をついて印籠をさし出す娘の挙措が作法にかなっているのをみとめた。
零落した武家の姉弟である。
「おゆるし下さいませ。お咎めは、弟にかわりまして、わたくしが、お受け仕ります」
そう詫びる態度は、すでに覚悟をきめて、いささかも怯じず、わるびれず、すがすがしいものにさえ感じられた。
狂四郎は、印籠を受けとってから、
「そなたの弟は、印籠が欲しかったのか、それとも、薬を必要とするわけがあったのか？」
と、尋ねた。
「父が先月、早馬にはねられて、胸を打ち、以後容体が、はかばかしくございませぬ。弟は、貴方様が、こちらの巡礼殿にお手当なされますのを見て、急に、父の容体を思い出したものと存じられます」
娘のこたえは、よどみなく明快であった。

「そうか——」

狂四郎は、印籠を、ぽんと、娘の膝へ投げると、すたすたと、歩き出した。

「あ……も、もし！」

娘が、あわてて、呼びすがったが、狂四郎は、ふりかえりもしなかった。

三

吉原を真似て、すががきが、格子の内から流れ出ていたが、もとより、この品川の廓は、初出府の勤番ざむらいや、江戸見物の町人百姓を客にするところで、茶屋呼出しの体裁などある筈もなく、切見世に並んだ女郎は、更紗木綿に縮緬の肩入れ、黒木綿の裾廻しといったいでたちで、せいぜい太夫めかして、客の視線が移って来るや、媚びた笑みと色っぽいしなをつくってみせるのであった。

たそや行燈に、灯が入った頃合であった。

狂四郎は、ここで一夜を明かすつもりで、ぶらりと入って来たのだが、醜女たちを眺めて行くうちに、しだいに、その気がなくなった。

さいごの店の前を過ぎようとして、ふと目にとまった女が、狂四郎の足を停めさせたのは、まったくの偶然であった。

——似ている！

そう思った。

どこか淋しげな、影の薄い細おもてが、美保代のそれに近いものだった。

狂四郎の視線を受けても、ほかの女のように、媚びた笑みもみせなければ、色っぽいしなもつくろうとはしなかった。
そのひややかな無表情が、狂四郎の足を近づけさせた。
狂四郎が、前に立つと、女は、顔をそむけた。
「上らせてもらおうか」
そう云いかけると、女は眸子（ひとみ）を畳に落したままで、
「お上りになるのを、女郎の方からおことわりはできませぬが……振られるのを承知なら――」
隣りの朋輩にきこえぬ小声で、こたえた。
狂四郎は、微笑した。
「よかろう。酌をしてくれるだけでよい」
松華楼というその店の中へ、狂四郎の姿が消えるのを、金山寺の大箱をかついだ嘗物（なめもの）売りが、数間をへだてて、見とどけた。
嘗物売りは、路地から、勝手口にまわって、下婢をつかまえると、遣手を呼んでくれ、とたのんだ。
出て来た婆さんに、嘗物売りは、懐中から、ちらと朱房の十手をみせて、小部屋に案内させた。
婆さんは、相手を本物の御用聞きと信じて、かしこまって、問われるままに、いま、浪人者を客にした女のことを、喋った。
女は、小花といい、一昨年暮までは、京の島原で、天神の梅の位をはった花魁で、傾きかかっ

た忘八（くつわ）（置屋）をたてなおすくらいかせいだ、といわれた。それが、こんな品川の宿場女郎におとされたのは、どういう風の吹きまわしか、禁中につかえる六位蔵人職と深く馴染んだためであった。六位蔵人は、位階こそ、その名称のごとく正六位上であるが、役料は百石で、とうてい、島原の太夫などをあげる金力はない。

島原に遊ぶ客は、参観途上に忍びかよう大名か、蔵屋敷の賄賂ぶくれの留守居役か、蔵元とよばれる大町人にかぎられていたのである。当然、小花は、無理に無理をかさねて、六位蔵人に達引いた挙句、心中沙汰を起してしまった。幸い、発見されるのが早く、二人とも生命をとりとめ、内聞にすまされたが、忘八では、ほかの女たちへのみせしめもあって、この品川へ鞍替えさせたのであった。

小花は、切見世女郎に堕ちるには、まだまだ美貌と品位を誇る心を失ってはいなかった。したがって、客のえり好みも甚だしく、登楼させても、気が変れば、吉原の呼出し花魁のねだんでくどかれようが、頑として、くびをたてにふらぬ傲慢を持しつづけている、という。それでも、どうせ吉原とちがって、行きずりの旅人客が大半なので、その美貌に牽きつけられて、ふらふらと登楼して来て、振られれば、別の女郎で我慢してくれるので、結構さそい水の役目を果す小花を手酷く折檻も出来ないのであった。

「……まだね、京の男のことが忘れられないらしゅうござんしてね。とどくものやら、なにやら――せっせと、便りを出している様子でござんすよ」

遣手婆さんが、せせらわらい乍ら、つけ足すと、嘗物売りは、にやりとして、合点したことだった。

夏は夕べの身の思いなる、色に心は深見草、露は袂のいとまもなしに、羨しくも憂き恋の世は、知られつ知らぬかおよ花……立ちも離れぬ、君が面影、逢うさ切るさの泪の川に、あやめもわかで泣き沈む……底の玉藻のいわで茂るもよそめよそめ、忍ぶは小車の、通い通れば関守も、一夜は許せ手枕に……

つまびきの、上方唄を、狂四郎は、仰臥瞑目し乍ら、しみじみとしたものに、ききほれていた。

去年の春、京の高瀬川筋の小路にある、地唄と踊の師匠お春の家で、狂四郎は、こうした古びた品のいい上方唄を、いくつかきいたものだった。

――どうしたろう、あの女は？

ゆくりなくも、この品川の切見世女郎から、抒情ひとすじの上方唄をうたわれて、狂四郎は、お春の俤を、目蓋の裏に描かずにはいられなかった。

別れも告げずに、すてて来た女なのである。江戸の鉄火な粋おんなとはちがって、どことなくおっとりした面差、立居振舞いの色年増であった。くすんだ京の町でなければ見出せない――京から外へつれ出せば、たちまち色あせてしまうような、そんな風情が、いま、狂四郎の脳裡に、この上もなく、なつかしく、想い描かれる。

「主さん――」

呼ばれて、薄目をひらいた狂四郎は、

「お前は、京女か？」
　と、訊ねた。
「あい――」
　頷く小花の、能面のように動かぬ細おもてが、心なしか、なごんでいた。
「江戸は、水が合わんだろう」
　狂四郎は、天井へ、眸子をあて乍ら、云った。
　小花は、それにこたえるかわりに、
「主さんは、女に死ぬほど想われたことが、おありかえ？」
「ないこともない」
「その恋に破れたために、そのように暗い顔におなりかえ？」
「それは、お前の方だろう」
　云いあてられて、はじめて、小花の透けるように白い頬に、ほのかな微笑が刷かれた。
「主さんは、いま、別れた女のことを想うていやしゃんしたなあ？」
「お前の唄がそうさせた」
「…………」
　小花は、切長の眸子を大きくひらいて、まばたきもせずに、じっと、狂四郎の寝顔を見まもっていたが、
「もう、おやすみなされませ」
　と、すすめた。

狂四郎は、瞥と目をくれて、立ちあがった。
「その約束ではなかった」
「唄がとりもつ縁かいな」
小花は、そうっと、顔を近づけると、狂四郎の額へ唇をあてておいて、
「あちらの部屋で、したくをして、お待ち申して居りまする」
小花が、去っても、なおしばらく、狂四郎は、仰臥をつづけていた。
京で出会った女たちが、お春を除いて、みな偶然にも、哀しい宿業をせおって、それぞれに悲惨な最期をとげたことを、狂四郎は、記憶に甦らせていたのである。
祇園の裏通りで出会った少女に、つれられて行った鹿ヶ谷の家には、病み窶れたその母が、身を売るべく、緋縮緬の対丈襦袢で痩せさらばえたからだをつつんでいた。意外にも、それが、美保代の異母姉と知って、狂四郎が、その良人の朱子学者松尾内記を、所司代屋敷地下牢から救い出して来た時には、すでに女は、わが子とともに、死んでいた。
――母娘が、おれに会いさえしなければ、こんなことにはならなかったのだ！
狂四郎は、殺したのがほかならぬ自分であったと、痛恨に胸を噛ませて、雨の外へ去ったのであった。
また――。
伏見の京橋際の船場で出会った地獄宿の女は、妻を売るべく仲間の女衒につれられて来た零落した武士が、じぶんを裏切った憎い昔の男と知るや、復讐の炎を燃えたたすかわりに、われとわが宿命の無慚さにうちのめされたのであった。そして、狂四郎に、武士夫婦を救ってくれるよう

にたのんでおいて、夜明けの淀川へ身を投げて果てた。

——もしかすれば、お春も、もう、この世にいないかも知れぬ。

そんな予感がして、狂四郎は、急に、湿った感慨をふりはらって、起きあがった。

廊下に出て、むかいの襖をひきあけると、螢火のように灯を細くした寝部屋に、花模様の夜具が、なまめかしく、丘状に盛りあがっていた。

女郎は、決して、客よりさきに、牀に就かぬものである。

その不審で、狂四郎は小花の寝顔へ視線を落した瞬間、はっとなった。

枕もとへ、片膝ついて、てのひらを、鼻孔にあててみた。呼吸は、絶えていた。

掛具をあげてみると、胸で組みあわせた両手の下に、一通の封書があった。

行燈の灯をあかるくして、抜いてみると、それは、京の男から来た手紙であった。

『……そなたの文により、それがしを想うてくれる心がいやましこそすれ、いささかもうすれぬことが、どんなにうれしいか……いや、もはや、いまとなっては、くるしく、堪えがたい。所詮、ふたりの非運は、是非もない。この世で添われぬ以上、そなたの申し越しのねがいを容れて、あの世で逢うよりほかにないと、ようやくに、それがしの心も決った。……初午の日、戌上刻、それがしは、そなたとはじめてちぎった一文字屋の部屋で自害する。そなたも、くれぐれも、時刻を違えぬように——』

といった内容を読み下して、狂四郎は、あらためて、女の死顔を見戍(まも)った。

苦痛の色をとどめぬ、美しい死顔であった。

江戸と京と百二十余里へだてて、約束しあった時刻に、必ずあいてが生命を断つと信じて、自身も果てる——この心のまことは、尋常の思慕からは生れぬ。眠狂四郎が、深く心打たれるに相違ないと、われわれは、確信をもって、この悲劇を仕組んだ。

五

左様、われわれ甲賀忍組は、眠狂四郎が、零落した武家の姉弟に印籠を与えたのち、廓に入り、小花というその女が気に入って、登楼するまでは、ただ、腕を拱いて、遠くから、眺めていただけであった。

嘗物売りに化けた一人が、女の前歴を調べて来てから、はじめて、われわれの手で、罠をかける積極行動に出ることに一決したのであった。

一人が、京の男の手紙を認め、一人が、女に、苦痛なく死にいたる毒薬をのませた。

われわれは、眠狂四郎の心底にひそめた善根をゆさぶるとともに、彼を夜の街道へ出て来させるべく、それを為したのである。

はたして、眠狂四郎は、その直後、飄乎として、松華楼からあらわれて、歩き出した。

肥えた月が中天にかかって、人通り絶えた広い往還を行く孤影は、よほどの遠距離からも、見失うことはなかった。

人家がきれて、並木の翳が深くなった地点に、提灯の赤い灯が滲んだ。例の小娘が、薬を父に与えて、印籠をかえすべく、陽の落ちる前から、辛抱づよく、眠狂四郎を待ちうけて、そこに彳んでいたのである。

眠狂四郎が近づくや、小娘は、小走りにその前へ寄った。
短い問答があってから、眠狂四郎は、印籠を受けとるかわりに、さらに、いくばくかの金子を懐紙に包んで、小娘にくれた様子であった。
そして、その薄汚れた提灯を貰って、歩き出した。
修験道のいでたちになって、あとを尾けて来ていたわれわれは、もはやわれわれの計画が、九分九厘まで成功したと信じて疑わなかった。
小娘に印籠をかえすようにすすめて、提灯を持たせて、そこに佇ませたのは、罠であった。
火のついた蠟燭は、四半刻の後には、眠狂四郎の五体を、月下の虚空に四散させる筈であった。
われわれの胸中は、遽に、音たてて迅鳴って来た。
寸秒を刻んで、その瞬間が迫るや、われわれの足もまた、自然に、眠狂四郎との距離をちぢめて行った。
ついに——強敵の生命は、あと数秒をのこすのみとなった。
われわれは、ぴたりと、その場に立ち停まった。
——稀世の剣の使い手も、ここに、その生涯を熄るか！
粛然として、斉しく、固唾をのんだ。
と——。
眠狂四郎のからだが、くるりと、われわれの方へ向きなおった。
「呀っ！」
われわれは、仰天した。

蠟燭は、提灯の中から抜きとられて、彼の右手に摑まれていた。
眠狂四郎は、それを、しずかに、地上へ置くや、身軽く跳んで、二間を退(すさ)った。
轟然たる爆音とともに、火柱が中天高く噴いた。
われわれは、濛々たる白煙を突破して、風のように奔(はし)り寄る眠狂四郎にむかって、佩刀を抜き揃えた。
偶然であったろうか。
眠狂四郎が、奔り寄りざま、凄じい気合一喝、まっ向脳天から、両断したのは、おのが贋者――第三番だったのである。

春夜の賊

一

なにか、物音がひびいたとか、別の夜気が、部屋の中へ流れ入って来る気配をさとったというのでもなかった。

ふっと――褥の中で、目がさめた刹那、綱代は、心身が鋭くひき緊（しま）ったのである。

――何者？

霊感に似た、とぎすまされた感覚が、咄嗟に、闇にひそむ存在をさとっていた。

幼い頃から、武術狂いの父に鍛え込まれて、またその天稟も豊かで、周囲から、なぜ男に生れて来なかったか、と口惜しがられた綱代である。

睡りの底にも、必ず冴えた神経が蓄えられていて、それにふれるものがあれば、ぱっと意識が甦っている。さわやかなぐらい、心機の働きは、われ乍ら、的確なのであった。

また――。

――何者かが、ひそんでいる！

と、さとるや、綱代の若い白いからだは、熾火（おきび）のような闘志を奥底から、あかあかと燃えたた

せて、それをじっと包んで動かずにいることに、ふしぎな快感さえおぼえているのであった。
恐怖というものを知らぬ生れつきであった。
記憶のいい読者ならば、三年前、琵琶湖上の空中を翔けて、眠狂四郎から、万古焼砧手の花瓶を奪うはなれ業を演じたのを、思い出す筈である。
綱代は、眠狂四郎の神速の刀法すらもおそれなかった女である。
……しっとりとした春の夜の闇は、ふかく、しずかである。幾部屋かへだてた書院に置かれた時計の振子の音が、かっちかっち……ときこえるほかは、まったく、しーんと寝しずまった邸内であった。
綱代は、曲者が、どのあたりに潜んでいるのか、全神経をくばりつつ、微動もせずにいる。
その位置をさとらせない敵も、よほど、忍びに長けた者である。
これは、どちらかが動かねば、到底やぶれない緊迫したおそろしい沈黙の均衡に思われる。
綱代は、目的をもって忍び入って来た敵の方が、当然さきに動くものとはかって、その瞬間を、待った。
およそ、四半刻も過ぎたろうか——。
綱代は、ふと、疑った。
自分は、こうして目をさましている。しかし、修練によって、睡っている時の状態とみじんも息づかいを変えてはいない筈である。敵が、どうして、こちらの目をさましているのを察知し得るものであろう。にも拘らず、敵は、気配もしめさず、闇に溶けたままでいる。
——面妖（おかし）い？

綱代は、自身の錯覚か、と疑ったのである。

この疑いが、つい、綱代に、すっと身を起させることになった。

刹那――。

褥の裾にあたって、暗黒の中で、さらに、黒く、敏捷に動く影があった。

同時に、綱代は、しなやかに、四肢をおどらせて、長押（なげし）に架けた薙刀をつかみとりざま、闇中四尺の高さを、びゅっと横へ薙ぎはらっていた。

むなしく、刃風が宙を走った――その一瞬、綱代は異様な金属性の音が、耳もとを掠めるのをきいた。

はっと、危機本能で、身をちぢめつつ、綱代は、見た。襖にぴたっと吸いついている黒影にむかって、床の間から、一個の品ものが鳥のように飛び寄ってゆくのを――。

すなわち、曲者自身近寄らず、手ものばさず、目的の品ものの方が翅でも生えたように翔けていったのである。

あまりの奇怪さに、茫然と立ちすくんだ隙に、曲者は、音もなく、廊下へ滑り出ていた。

おのれっ！

気をとりなおして、綱代が、廊下へ追って出た時、曲者の影は、二間のむこうにあった。

無言で、距離を一間余にせばめて、天の構えから袈裟切りに、躍起の一颯をあびせようとした瞬間、ふり向きざまに、曲者の手もとから、一条の綱状のものが、雨戸の上の玻璃窓から注ぐ夜の明りに、にぶく光って、綱代に躍りかかった。綱代が、最初にきいた金属性の音は、それが発したものだった。

意外な武器に、躱(よ)ける間がなく、切り上げにはらったが、逆に、千段巻きへ、くるるっと巻きつかれて、体勢が崩れ、不覚にも、綱代は片膝をついた。
とみたとたん、曲者は、ぐん、と力まかせに、その武器を、たぐった。薙刀は、綱代の双手から、離れた。
盗っ人かぶりをした、黒装束の曲者は、薙刀を、とん、と天井板へ突きたてておいて、
「勝ったぜ！」
ひと言、あかるい調子で云ってのけるや、身をひるがえして、廊下のかなたへ、姿を没してしまった。
綱代は、腑抜けたように、その場に彳んで、曲者の消えた闇を見まもっていたが、われにかえって、薙刀を抜きとると、居間へもどった。
灯をつけて、綱代は、褥の上に坐った。
——鼠小僧！
たしかに、そうだった、と綱代は、考えた。京に在った時、眠狂四郎の供をしていた町人が、鼠小僧と呼ばれる怪賊であったとは、後日わかったことだが、いまの曲者は、まぎれもなくあの男であった。
綱代は、頭をまわして、床の間を見た。
そこに置いてあった密陀塗の文箱が、消えている。
——なぜ、あれを盗みに来たのであろう？
金子は入っていなかったが、主人の高姫から預った品と、他人には見せてはならない綱代自身

の秘密の品が入れてあった。高姫から預った品が何か、綱代は知らなかった。ごく無造作に渡されたところをみれば、さして大切な品とは思えなかった。それよりも、自分の秘密の品が、あの鼠小僧の手に渡ったということに、綱代は、たまらない羞恥をおぼえずにはいられなかった。

綱代は、頬が火照(ほて)った。

それなり……邸内の誰にも気づかれなかったのをさいわいとして、綱代はいつまでも、ひっそりと、褥の上に坐りつづけていた。

二

ぴ、ぴ、ぴ！

ぴ、ぴ、ぴ、ぴ！

するどく、呼笛(よびこ)の音が、大名小路から、町屋通りへ移って行く。

偶然に、宏壮な屋敷の高塀を越えて、広い往還へ跳び降りる黒い影を、見まわりの町方の手先が発見して、追いはじめたのである。手先は、お玉ヶ池の岡っ引佐兵衛の配下だった。

二人つれ立っていて、一人が、

「あっ、あれは——」

と、指さし、他の一人が、勘で、

「野郎っ、鼠小僧じゃねえか？」

と、叫び、もうその時、足をそろえて駆け出していたのである。

曲者の方は、身軽く地上に立って、ちょっと、こちらを透し見てから、走りはじめたのだが、

その落着きはらった様子といい、跫音もたてずにみるみるひきはなして行く迅さといい、これは鼠小僧に相違ない、と確認されたことだった。

二人の手先は、十手を摑みしめて、呼笛を鳴らし乍ら、狂気のように追った。

上方へ逃げていたと噂されていた鼠小僧が、また江戸へ舞い戻って来て、大名屋敷を荒しはじめた事件は、被害を受けた屋敷でかたく秘していても、いつの間にか街々へつたわっていて、廻り方同心、御用聞きたちの神経をとがらせている矢先であった。

――鼠小僧を、おれたちの手で挙げる！

そう思ったとたん、二人の手先が、かっと全身が熱くなる昂奮にかられたのも、当然であった。

距離をひきはなされつつも、道はひとすじで、行く手の町屋通りの入口に自身番小屋の短冊行灯が、闇に滲んでいるのを見て、もしや、そこから廻り方の同心がとび出してくれないものか、というねがいもあったのである。

たしかに――二人は、左右の高塀からひろがり出ている樹冠で星明りをさえぎられてはいても、夜霧のうっすらと沈んでいる路上を掠めて行く曲者の影を、見失ってはいないつもりだった。

ところが――。

不運だったことは、とある屋敷の裏門から、幽鬼のように、白い装いの武士が、ふらりとあらわれたのに、瞥（ちら）と目をとめたばかりに、二人は、愕（ぎょ）っと、そこへ足を釘づけなければならなかった。

長羽織をぞろりとつけ、亀屋頭巾をすっぽりとかぶったいでたちは、この屋敷の部屋住みの蕩児が、夜遊びに出た風情とみえたが、手先たちの総身に戦慄を与えたのは、その右手に白い大きな花びらをひらいた一枝を携げていることであった。

——白鳥主膳！

疑うべくもなく、季節毎の白い花を匂わせて、夜道をそぞろ歩く艶冶な伊達姿を、去年まで、親分佐兵衛以下、血眼になって追いもとめたものであった。そして数度の襲撃を敢行して、ことごとく失敗におわっている。

鼠小僧を捕えんとする昂奮は、突如として、水をあびせられたように、冷えはてて、生きた心地もなく、目玉を据えて、対手の近づくにまかせなければならなかった。

ゆっくりと、数歩前まで寄って来た主膳は、立ちどまって、

「おれに用か？」

と、訊ねた。

「………」

二人は、息をのんで、抜討たれる恐怖をあふらせた眸子(ひとみ)を、対手からはずせなかった。

「呼笛を吹いていたが、おれを狙っているのか？」

「そ、そうじゃねえんで……、鼠——鼠小僧を」

一人が、やっと、顫え声で、こたえた。

「鼠小僧？……まだ、うろついているのか、小盗っ人は——」

ひくく、冷たく笑いすてると、主膳は、歩き出していた。

三

いつの間にか、次郎吉は、装（なり）もそれらしく、豆しぼりで頬かぶりをして、とある辻の大店の檐（のき）下を借りた夜明し店の蔭に蹲み込んでいた。

——成程なあ、手妻遣いというやつは、途方もねえ便利な飛道具を思いつくものだ。

ひとり、にやりとして感服しているのは、先刻、綱代の居間で使った武器のことだった。

次郎吉は、狂四郎の使いで、奇術師胡蝶斎の隠宅をたずねたのが縁で、しばらく、居候しているうちに、胡蝶斎が創案した奇妙な武器を貰いうけたのであった。

それは、渦を巻いた鋼鉄製の発条（ばね）であった。一方の縁が、鋭利な刃になっていて、いわば、刀身をぐるぐるとまるめたあんばいで、柄を摑んで、びゅっとひと振りすれば、一丈余をのびた。そして、それは、使用者にはなんの危険もなく、手もとに、きりきりっと巻きもどるのであった。さらに、切尖にあたるところが、鈎状に工夫されていて、距離をへだてて、狙った物をひっかけることができた。

次郎吉は、これを使って、綱代の文箱を奪いさり、また、薙刀をからめとったのである。

——だが、殺生の好かねえおれには、この飛道具は、ちと剣呑すぎる。あやうく、あの別嬪の首を刎ねとばすところだったぜ。こいつは、やっぱり、胡蝶斎の爺さんに返納した方がよさそうだ。

ひとり、かぶりをふった次郎吉は、そっと、辻へ寄る三筋の往還へ目をくばってから、

——さてと……。

くすん、と北叟笑みをもらすと、丼棚から、文箱をとり出して、朱の蓋紐をほどいた。
蓋をはずして、とぼしい灯に近づけてみて、
「あった！　これよ——」
四、五通の封書をつまみあげて、わざと、有難そうに、おしいただいて、懐中にした。
このおり、次郎吉は、数間さきに、人影が動くのを知って、すばやく、文箱をもとに匿すと、
爺くさい物腰で、立ちあがった。
すっと、その影は、屋台の前に立った。
ぞろりとした遊冶郎の、廓がえりとみてとって、
「へい。一本、おつけいたしますか」
と、云い乍ら、何気なく、ひょいと上目づかいに見やった次郎吉は、亀屋頭巾のかげからそそがれる眼光に、びりりっと、鋭い感応を五体に起した。
この人物が、眠狂四郎の宿敵白鳥主膳と、次郎吉は知っていたわけではない。
主膳と次郎吉が出会うのは、いまがはじめてというのは、妙なようだが、事実そうなのであった。
次郎吉は、ただ、直感的に、
——敵！
と、さとった。
しかし、さあらぬていで、対手の無言を、飲むのだと受けとってみせ、
「やはり、更けますと、まだ冷えこみます」

などと云い乍ら、燗をつけた。
主膳は、ふところから右手を抜いてさし出された銚子を把りあげると茶碗についで、しずかに、飲んだ。
「もう一本、いかがでございます？」
そのすすめる次郎吉の視線を、主膳の双眸が、不気味な薄ら笑みの色でとらえた。
「貴様、鼠小僧か」
次郎吉は、すでに、そうあびせられるのを予期していたように、すこしも狼狽しなかった。ひるまずに、瞶めかえして、
「としたら、どうなさるおつもりなんで？」
不敵にも、問いかえした。
「捕える！」
「お役人とはみえませんぜ。また、あっしの首につけられた褒美金が欲しいお人柄とも思えねえ」
「貴様を捕えて、おれの上司への土産にする。ここもと上司の屋敷の敷居が聊か高くなっている。鼠一匹とは安値にすぎるが、評判は高いから、土産にはなろう」
「御冗談を――へへへへ」
笑って――次の瞬間、次郎吉は、ぱっと屋台をひっくりかえして、一間余遁げ跳んでいた。
この時すでに、主膳の手には、峰を下にして、白刃が抜き持たれていた。
「ふざけやがって、化けそこないの白狐め！」

次郎吉は、右手を懐中にして、じりじりとあとずさった。

それに歩幅を合せて、主膳は、詰めて行く。文字通り、鼠を追いつめる猫の、余裕のある静かなすり足であった。

一瞬——。

鼠が身をひるがえすと見て、猫は、音もなく地を蹴った。身をひるがえすとみせたのは、鼠の虚術だった。

主膳が、毒蛇にも似て、宙に弧線を引いて襲い来った黒光る異様の兇器を、

「おおっ！」

と、呻きを迸らせつつ、胸すれすれに避けたのは、流石の手練であった。

「——窮鼠に嚙まれたな」

霞となって一散に遠ざかる影を見送り乍ら、主膳は、苦笑とともに呟いた。片袖が切り落され、肱に痛みがあった。

刀を鞘におさめて、踵をまわした時、ふと、横倒しになった屋台の傍に、夜目にも見事な品とわかる文箱がころがっているのをみとめて、主膳は、ひろいあげた。

——どこの大名屋敷から、盗みとったか。

片手に携げると、今夜の塒（ねぐら）をもとめて、足の向くままに、歩き出していた。

次郎吉が、そこへまた舞い戻って来たのは、それから四半刻後であった。

しきりに、屋台のまわりをさがしていたが、やがて、舌打ちした。

「ちょっ！　あの白狐めに、ひろわれちまったか——」

あきらめて立去りかけて、急に、ぶるっと身顫いして、ぐるっと、あたりを見まわした。
対手もまた、ここへ引っかえして来ているのではなかろうか、という恐怖感が、からだ内を走ったのである。

──おっそろしく身のさばきの冴えた野郎だったぜ。

危機の刹那を蘇らせて、背すじにうそ寒さをおぼえた次郎吉は、当然、眠狂四郎の強さを思い泛べた。

──あの野郎と互角に勝負できるのは、眠の旦那ぐれえなものだろう。

そう胸の裡で呟いたとたん、はっとなったことだった。

「あいつじゃねえか、白鳥主膳という奴は──。そうだ！　そうにちげえねえ」

もう一度、身顫いした次郎吉は、このあたりに長居は無用と、得意の迅足で、たちまち、何処かへ姿をくらまして行った。

異変千両富

一

京にある孤篷庵忘筌の庭を、そっくり再現したものといわれている。
孤篷庵は小堀遠州が寛永末年から正保の初年にかけて造営したもので、茶禅一味の境地に達していた晩年の遠州さいごの傑作と称されていたが、寛政五年におしくも焼失していた。その後、修補されたが、いちじるしく形式を変えていた。
ところが、この茶庭の方は、古図そのままに再現されていた。すなわち、近江八景を写して、完璧であった。
春の午後の陽ざしが、樹木や組石や灯籠の影を、苔地や苑路や洲浜に、あかるく落していて、その枯山水の景趣にふさわしい静けさは、ふかいのであった。
宿は、花の匂いをふくんで明るい。塀の外は見わたすかぎりの畑で、菜の花がさかりだったのである。
と——。

六畳（直入軒）の障子が開いて、二重縁にすらり立ちあらわれたのは、武家娘の装いをしているが、内親王・桂宮明子（さや）にまぎれもなかった。

鎌倉東慶寺から、白鳥主膳につれ出され、親不知組に追われて、海上へのがれ、小舟の中で、死界をさまようた明子は、意識をとりもどした時、榊原左近将監の指揮する将軍御座船の御座所に寝かされていたのであった。

次の日、ともなわれたのが、この古雅の景趣を誇る屋敷であった。いかなる人の所有か、あきらかにされなかったが、見知らぬ家にくらすことに馴れた明子は、老婢ひとりにかしずかれて、いつか、七月あまりの月日を、しずかにここでおくりむかえていた。

ふっくらとした丸顔も、もとのままの美しい色艶をとりもどしていて、﨟たけた匂いをたたえている。ただ、大きく切れて長い眸子（ひとみ）の光が、心なしか淋しげなうるみをおびているのは、余儀ないことであろう。

明子は、その場に、そっと、蹲って、目の下の蔦石を、ちょんちょんと移って行く雀の影を、遠い目で追った。

なかば放心して——明子は、この静寂のなかに、じぶんの孤独の佗しさをいたわるように、組んだ両手を胸にあてて、うごかなかった。

苑路の飛石をつたって来る跫音も、あらわれるものは老婢だけときめている明子の気をひくことにならなかった。

明子が、はっと顔色を変えて、立ちあがったのは、二間の間近に近づいた人影に何気なく目をあげたとたんであった。

白鳥主膳であった。
花のかわりに、携げているのは、白絹の包みであった。
まばたきもせず大きく瞠いている明子の眸子へ、冴え冴えと澄んだまなざしをあわせて、
「ここにおいでになることは、去年の暮から存じて居りました」
その言葉を、挨拶のかわりとした。

二

明子が主膳を通したのは、三畳の茶室「縄枢」であった。
炉のわきの点前畳に就いた明子は、作法美しく、茶をたてて、主膳にすすめた。
主膳も、無言で、それを受けた。
点前がおわってから、主膳は、
「姫宮さまは、かねて、ふるいむかしの密陀塗が欲しい、と申されて居りましたな」
と云って、包みを解いた。
あらわれた文箱を、膝の前へさし出されて、明子は、素直なよろこびの色を、おもてにのぼせた。
「おお、みごとな――」
蒔絵の技の発達とともにすたれた、遠い時代の精巧な彩色がすこしもそこなわれていない文箱を、そっと膝に置いて、蓋をとってみた明子は、かすかに、眉宇をひそめた。
「これは？」

いぶかしげに、つまみあげたのは、幾枚かの紙片であった。

主膳は、微笑し乍ら、

「富札と申すものです」

「富札？」

「左様――その一枚が、あたれば千両に相成ります」

主膳は、それについて、説明をくわえた。

神社仏閣において、修復費に宛てる名目で催す富籤興行は、享保十五年京都御室仁和寺のそれを最初として、年々盛んになり、当時、江戸では、三十箇所で行われていた。そのうち、谷中の感応寺、目黒の滝泉寺、湯島の天神――これを江戸の三富といって、最も有名であった。

寺社では、まず、何千枚かの富札を作る。松竹梅とか春夏秋冬とか十二支とかの各部にわけて、それに番号をつけたのが富札で、その寺社の印が捺してあるのは勿論である。これを、市中の札屋に、利鞘をとらせて、売りさばかせる。一枚売がたてまえであったが、割札といって、貧乏人たちは一枚に何人か乗ることもできた。三富の場合は、買手が殺到したために、売値よりも高い代で求めることになり、また、蔭富（かげとみ）といって、当籤番号を標準として、輪贏（ゆえい）を決する方法も行われていた。

抽籤日には富札と同じ番号と札数の小さな木札を入れた大六方箱を、本堂あるいは拝殿の広縁に据えつけ、これを充分にゆさぶっておいて、上部に穿った穴へ、錐を通して、木札を刺す。すなわち、富突きという――。

「おもしろいものですね。これは、どこの興行ですか？」

この札を持って、見物に行ってみたい素直な好奇心をわかせ乍ら、明子は、訊ねた。
「寺社のものではなく、水戸家の催す富籤です」
主膳は、こたえた。
「大名も富興行をするのですか？」
「大名と雖も、内証向きが苦しくなれば、金もうけをいたさねばなりますまい。宮家や御門跡でも、名目金と申して、武家町人に金を貸付けて、利をかせいでいることを、姫宮さまはご存じありませぬかな」
主膳は、皮肉な口調で云ってから、いまわしい病いをしめす軽い咳をもらした。
この富札は、水戸家より高姫にとどけたものであった。主膳が、文箱をひろって帰って、あけてみると紙包みが入って居り、表書は、「高姫様」とあり、裏面には水戸家の印が捺してあったのである。ひらいてみると、富札であった。
将軍家の女（むすめ）たる身が、富札を買うとは――と、主膳は苦笑したものだった。それから、ふと、明子にこれを見せて、ひとつ、興味を抱かせてやろう、と思いたって、おとずれたのであった。
明子は、主膳の予測通りに、富興行というものに心をうばわれて、おかげで、久しぶりの対座を、気まずいものにせずにすごすことができるかにみえた。だがそのうち、明子は、急に、札を文箱にしまうと、あらたまった気色で、主膳を瞶めた。
「主膳、わたしは、いつまで、ここに住まっていればいいのでしょう？」
「おのぞみなら、べつのところへ、それがしが、おつれいたしてもよろしいと存じます」
「いえ――」

明子は、つよくかぶりをふった。
「わたしは、会いたい人がいるのです」
「眠狂四郎だ、と仰せられる」
「ええ——、会わせて欲しい」
主膳は、怯じずはじらわずに、まっすぐにたてた明子の顔へ、じっと冷たい双眸を据えていたが、
「もし、この富札が、千両当ったならば、お会わせ申しましょう。これが、姫宮さまとそれがしの賭ということに相成ります」

三

同じ日の同じ時刻——。
深川の岡場所、大新地の揚屋五明楼の離れで、眠狂四郎は、高姫の侍女綱代の訪問をうけていた。
女中から告げられた時、
——こんどは、なんの策略を弄ぶつもりか？
と思ったことだったが、入って来た綱代の様子を一瞥した瞬間、疑いをすてた。
その姿に、羞恥が滲んでいたのである。しおらしくよそおったのであれば、その不自然さを見やぶるのに、狂四郎ぐらい、たしかな目を持っている男はいない。
綱代の面持は、羞恥に堪えようとして、むしろ、苦しげでさえあった。

「御用ならば、こちらから参上してもさしつかえはなかった」
穏かに、狂四郎は、そう云った。
この女には、京の所司代屋敷で、逆上させ頰を打たせるまでに、狂四郎は、甚しい屈辱をあじわわせている。にも拘らず、この女は、大森の鳥見屋敷から、新太郎をつれて逃げる狂四郎に、馬を与えてくれたのである。その時、狂四郎は、不可解な女心に、戸惑ったものであった。
綱代は、端近に坐って、俯向いて、しばらく、膝に組んだ両手に目を落したなり、動かなかった。
「そなたは、わたしに貸しがある。遠慮しないことだ」
そう云われて、綱代は、俯向いたままで、ひくく、
「文箱をお返し下さいませ」
と、云った。
「文箱？」
狂四郎は、怪訝な目を向けて、
「どういうのだ？」
問いかえされて、綱代は、顔を擡げた。ほっと、安堵の色があった。
「鼠小僧と申す男が、わたくしの居間より、奪って行きました」
「わたしが、命じた、と疑ったのか。おぼえのないことだ。それは、いつなのか？」
「一昨夜です」
「あの男には、ここしばらく会って居らぬ。……あの男は、金以外のものは、狙わぬ筈だが、何

か貴重な品が入っていたのだろうか？」

「………」

それにこたえず、綱代は、必死の表情で、

「文箱を、明日までに、とりもどさなければなりませぬ！」

「それは、むつかしかろう。あの男は、近頃、隠れている場所をかえている。わたしのところへは、ときおり、あらわれるが、それが今夜とはかぎらぬ。こちらから、さがし出すのは、まず、隅田川にもぐった、泳ぎの迅い小魚をとらえようとするにひとしい」

そう云われて、綱代は、思いあきらめたように、顔を伏せた。

「もし、今夜にでも、あらわれたならば、文箱をおかえしする約束もできるが――」

「そのおりには、文箱の中をごらん下さいませぬよう――」

「承知した」

綱代は、いったん立ちあがりかけて、急に、考えを変えた。

「やはり、申上げておきまする。文箱の中には、高姫さまよりお預りした品と、わたくし自身の品が入って居りました」

「………」

「明日までに、必ず要るのは、高姫さまよりお預りした品でございます」

そこで、いったん、口をとじて、逡巡っていた綱代は、思いきって、

「わたくしが、高姫さまに文箱を奪われたお詫びを申上げましたところ、あれは明日までに必ず水戸家へかえさなければならぬ品ゆえ、是非とも、とりもどして参れ、と仰せつけられたのでご

ざいます。……でも、貴方様におねがいして、叶わなければ、いたし方ございませぬ」
「そなたが、死んで謝罪するとでもいうのか？」
「いえ。高姫さまには、明日、鼠小僧を捕える用意がある、と仰せられました」
「ふむ――。つまり、あの男が、その品を見たら、必ず、水戸家へあらわれるというのだな」
「左様に存じられます」
「妙な話だが……よかろう。そなたの落度がべつに罰せられずにすむのなら、明日は、わたしの出る幕もありそうな気がする。鼠小僧も捕えられず、その品がそなたの主人の手もとにかえればよいというわけだ」
綱代は、頷いてから、すこしもじもじしていたが、
「わたくし自身の品のほうは、どうぞ、ごらん下さいませぬように――」
と、念をおした。
綱代が去ってから、半刻あまりすぎて、狂四郎は、ぶらりと街へ出て、もしや両国の垢離場(こりば)あたりで、次郎吉に出会わぬものか、と足を向けた。
出会いそうもない気がして来たので、並び床（髪結床）の一軒に入った。
腕を組み、目蓋をとじて、顔をあたらせているおり、どやどやと四、五人の職人たちが入って来た。
「――政、いいか、四つ割だぞ。てめえが、三人分をたてかえたからといって、当った時には、知らん顔をしやがったら、その獅子っ鼻を、鉋(かんな)で削り落すぞ」
「心配するねえ、これで、おらあ、鷹揚に生れついているからの。はずれた時には、てめえら

が、払いしぶるのを承知で買ったんだ」
　奥で将棋をさしていた一人が、これをきいて、
「おうおう、どこの富籤だ？」
「水戸様の興行よ」
「へっ、また、なけなしのむだづかいか。それ論語に曰く、貧にして楽しむ、ってえ心得のねえやからだ」
「孔子の倒れ、たあこのことだのう」
「べらぼうめ、なにをぬかしやがる。明日になってみろ、この四人が、二百五十両ずつ、えんやこらさと、ひっかついで来てみせてやらあ。……ちゃんと、そこの道安先生に易をたててもらったんだぞ。縁起がいいや、臨兵闘者皆陣列在前の九字を切ってな——」
「おらあ、昨夜、吉原で、千両当った夢をみて来てるぞ。うつつか夢か幻か、くいじられて噛む小夜ごろも、とくらあ」
　すると、片隅で煙草をのんでいた一人の隠居が、
「大きな声では云えぬが、水戸様の富籤には、なにか、からくりがあって、札屋で売っているやつは金輪際当らねえしかけができているという噂があるの」
「やいやい、爺い、せっかくの前景気に、水をかけやがるねえ」
「いや、どうも、その噂は、根も葉もないことじゃないらしい。なにしろ、水戸様の御勝手をあずかる大久保今助てえ御仁は、土方縫殿助様の草履取から成上った、油断も隙もならん曲者だからの。富籤にしかけをするぐらい、朝飯前だろうぜ」

黙然として、この話をきいていた狂四郎は、
──そうか！　どうやら、読めたぞ！
胸の裡で、にやりとしていた。

四

春のほこり風が唸っている晴れた空の下で、一枚の紙札に慾望の祈りをこめて、数千人の老若男女が、向島の水戸家の下屋敷広庭にひしめきあっていた。
表書院の広縁に、富突場が設けられ、その六方箱に錐が突きたてられる毎に、騒擾の波は、ひそと、しずまりかえる。
「七十八番のあたりーい！　秋の六千六百九十一ばあん！」
高らかに読みあげられるや、固唾をのんでいた群衆が、どっとどよめきたつ。
「これ──押してはいかん！」
「しずかにせい！」
六尺棒を持った徒士たちが、張った縄が切れんばかりにつき進んで来る人波を、制する。
寺社の興行とはちがい、御三家筆頭の水戸家の催す、町奉行や寺社奉行が黙認している富籤だから、集る庶民たちも、はじめのうちは、昂奮を抑えて、静粛をたもっていたのだが、突きが進行するにつれて、しだいに、顔にも声音にも慾望をむき出して来ていた。
当り数は、百本ある。したがって、百回、錐で、札を突くわけである。百回目を突き留めといって、これが最高金額千両である。その次に多額なのが、第一回──すなわち、一の富で、ふつ

う二百両か、三百両であった。この水戸家の一の富は、百両であった。それから、五節十節といって、五回目毎、十回目毎の当りが、十両から二十両、そのほかは、間々といって、せいぜい、二両どまりであった。両袖といって当り番号の前後の番号、印ちがいといって他の部の同番号に、若干の金が出て、これを花といった。

眠狂四郎は、群衆の、ちょうど中央辺に立って、興行ぶりを、冷やかに眺めていた。

六方箱をゆさぶっているのも、百度錐を突いているのも、木札をひきあげるのも、当り番号を読みあげるのも、悉く水戸家の家臣たちであった。

――成程、これなら、いくらでも、秘密のしかけはできる。

狂四郎は、そう見てとっていた。

一刻が移って――。

「これより、突き留めえ――」

掛声が、かかるや、広庭は、わあああっと喚声の渦と化した。

ひとり、狂四郎のみは依然たる無表情で、六方箱のうしろにあらわれた長身の武士へ、じっと目をあてていた。

――あれが、大久保今助か。

常陸の亀作村の水呑百姓の倅で、十七歳の時に江戸へ出て、土方縫殿助の屋敷に渡り中間奉公しているうちに、金一歩拾い、これで富籤を買うと、八十両に当り、それが運のつきはじめで、とんとん拍子に金を儲け、いまでは、京橋に巨邸を構えて、中村座の金主をし、水戸家からは五百石の扶持をもらっている男。

もはや、六十も半ばを越えて居ろうが、その面貌は、剃刀のように鋭く険しい気色をみなぎらせている。

突き手が、錐をかまえるや、広庭は、水をうったように、しずまりかえった。

一万に近い目が、ぎらぎらと光って、食い入るように、たかだかとかかげられた一枚の木札を瞶めた。

「千両籤っ！」

読み手は、まずそう叫んでおいて、

「冬の九千二百三十四ばあーん！」

と、告げた。

一挙に、どよめきが奔騰した。失望した群衆は、札を破ったり、ふみにじったりし乍ら、いったいどんな奴が当ったんだろう、と好奇と羨望と嫉妬の目を光らせて、見まわした。

「誰もいねえのか？」

「あたった野郎は、昨夜、一足さきに河豚にあたって、くたばりやがったとよう。あたる運がつきすぎてやがってな」

「てめえは、あたらなさすぎらあ、鉄漿溝（おはぐろどぶ）の水を呑んでも、けろっとしてやがる」

「そういうてめえは、女房にあたったのう。土手南瓜で、おまけに近目で、年中、何かにつきあたってやがら」

妙なことに、当った者が、容易にあらわれなかった。

人波が、くずれて、ぞろぞろと表門の方へ流れて行きはじめた頃あい――。

一人の品のいい老婆が、しずかに、広縁へむかって、歩み寄って来た。一瞥して、大名屋敷につかえる者と知れた。
流石に、おさえきれぬ昂奮を、表情挙措に滲ませ乍ら、
「冬の九千二百三十四番でございます」
と、こまかく顫える手で、富札をさし出した。これを見下した大久保今助が、かたわらの家臣へ耳うちした。
――はて？
狂四郎の方は、不審を起していた。
――あの老婆は、次郎吉の代理とはちがうようだ。
大川に沿うた河岸道を、千両箱と老婆をのせた一梃の駕籠が、一人の中間につき添われて、しずかに通って行った。それから、七、八間おくれて、深編笠の武士が五、六名、そっと尾けて行った。さらに、数間のあとから、ふところ手で、歩いて行くのが、狂四郎であった。

五

無心に――琴をひいていた明子は、襖のむこうから、
「姫宮さま――」
と、老婢の声に呼ばれて、
「あ――」と、顔をかがやかせて、白い指から爪をぬいた。入って来た老婢の笑顔に、明子は、

思わず、
「あたりましたか！」
と、声をはずませた。
「はい。あたりましてございます。千両でございます」
背後に置いた千両箱を、ひき寄せて、前へおしやった。
「本当にあたったのね！　よかったこと——。主膳は、きっと、約束をまもってくれます」
眠狂四郎殿に、会うことが叶う——この言葉は、口のうちで、そっと呟いた。
この時、路地をふんで来る人数多い跫音に、主従は、顔を見あわせた。
案内を乞う声もなくて、いきなり、障子がひきあけられた。
先頭の大兵の武士が、凄い目つきで明子を睨み据えた。
「富札を何処から、入手された？　それをうかがおう」
「そなたたちは、何者じゃ？」
身分貴く生れたものの、凜とした態度で、明子は、きりかえした。
「何者でもよい。当方も、貴女の素姓は問うては居らぬ。富札の入手は不正とみた。千両箱は、当方に頂くぞ！」
「無礼者！」
明子は、きりりと柳眉をはって、叱咤した。指揮者は、かまわず、輩下へ、千両箱を奪うように、目顔で合図した。
抵抗すべくもなかった。危機に備えての警衛の士は、この屋敷にはいなかった。

千両箱をかついだ者をまん中にして、水戸家の家臣たちが、足早やに路地を出て行こうとすると、腰掛待合から、ふらりとあらわれた黒の着流しの浪人者が、ふところ手のままで、その行手をさえぎった。

「おあいにくだったな、御一同。その千両箱は、こちらに頂くことになる」

たちまち、殺気を噴かせて攻撃の陣形をとるのへ、冷やかに薄ら笑って、

「お主たちの頭取の大久保今助は、高姫君へ、当籤を呈上して、御機嫌をとりむすび、将軍家へ口添えをたのんで、また何やらひと儲け企んでいるのであろうが、先年、土方縫殿助の髭の塵をはらって、斉修公へ大御所のご息女を奥方に迎え入れ、化粧料を年一万両ずつふんだくったような甘い汁が、こんどもまた吸えると思っていたら、とんでもない料簡だぜ。……高姫君に、お主たちから報らせておいてもらおうか。この千両は、高姫君の名で、江戸中の窮民へ、ばらまかれることになろうとな。大久保今助も、生れてはじめて、功徳をほどこすことになる」

一人が、狂四郎の全身に空けた隙をあなどって、いきなり、斬り込んだが、目にもとまらぬ峰打ちをくらって、生れもつかぬ不具になる惨めをその悲鳴に予告しつつ、地べたへころがった。

鼠小僧が、狂四郎をたずねて来たのは、それから二日置いた真夜中であった。

狂四郎は、文箱がひき起した騒動をきかせてから、

「なにが目的で、それを盗みに、忍び入ったのだ？」と、訊ねた。

すると、次郎吉は、恐縮し乍ら、

「とんだ余興に、旦那までまき込みやして、申訳ごさんせん。……なにね、あっしは、あの高姫

様が、あんまりしつっこく、旦那にわるさをしかけるのを伺ってひとつ、旦那にかわって、あっしの方から、いたずらをしてやろうと思いたちましてね、お屋敷の天井裏へ、三日ばかりひそんでいるうちに、あの綱代ってえ女中が、夜中に、しきりに手紙らしいものを書いているのを見つけやした。よく窺ってみると、なんと、いじらしいじゃござんせんか。恋文だったんでさ。思いのたけを筆にこめて、毎夜一通ずつ、書きあげては、文箱にためていたんでさ。しめし参らせる望みもないままに、でござんすよ」

そう語って、次郎吉は、懐中から、数通の封書をとり出して、狂四郎の前に置いた。

「眠狂四郎様御許へ」と、記してあった。

手にもとらず、黙然としていた眠狂四郎は、ふと思いついて、袂をさぐると、香包みをとり出した。それは、かつて、祖父楽水楼松平主水正からもらった十炷香であった。

「次郎吉。ご苦労だが、もう一度、忍び込んでもらおうか。綱代に、これを渡して、手紙はたしかに受取って、読まずに火中にした、とつたえて来てくれ」

「できやした！」

次郎吉は、香包みを、おし頂いた。

狂四郎は、次郎吉が去ると、三味線をとりあげて、つまびき乍ら、ひくくうたいはじめていた。

　玉草（たまずさ）の
　恋の路芝ふみわけて
　いくのの里の遠近（おちこち）に

かざす枝折の玉垣や
アレ、小鹿の妻恋いに
なく音をはこぶ山おろし

夜襲床

一

もののしい出陣の光景であった。

床の間には、梅鉢の紋を浮き出した幔幕をひきまわしてあった。

その前に、具足いかめしく、一人の老武者が、どっかと、牀几に腰をかけている。

丸小札草の鎧、螺鈿鎖の鉏、胡蝶散らしの臑当、金襴緞子の袖無しの陣羽織をまとい、黄金づくりの陣太刀を横たえ、大きく瞠いた双眸を宙に据えて、まばたきもせず、胸を張っているのであった。

左脇には、雲形の鍬形を打った兜を据え、右足前には、紅白の菱餅、鏡餅を重ねた三方——すなわち、甲冑鏡餅飾がしつらえてあった。

幔幕の端には、鎗と馬印と弓箭がならべられ、具足櫃の上には、奇怪な形の煩や赤銅に金象嵌の軍団扇ものせてあった。

いずれも、古びてはいるが、由緒ある見事な武具とみえた。また、これらを擁して、いま出陣の座についた老武者の風貌も、古武士の相を継いで、立派で堂々としていた。

ただ——。
宙に放った眼光が、現世から遊離した空虚なものであるのが、いたましい。
廊下に、衣ずれの音がした。
入って来たのは、出陣を祝う式三献肴組の三方を両手にささげた娘であった。面長な、目もとのすずしい、やや蒼ざめた透けるような皮膚がどこか影うすい美貌であった。
三方を、さだめの位置に置くと、数尺すさって、両手をつかえ、
「父上様、このたびの御出陣、おめでとう存じまする。式三献の祝の儀、いざ、おすませなされませ」
と、すすめた。
「うむ——」
大様に頷いた老武者は、牀几から立つと、具足を鳴らして、三方の前へ、八文字に坐した。
三方の上には、勝栗、打鮑、昆布、そして、椎の葉に盃がのせてあった。
老武者は、おもむろに、手をのばして、盃を把ろうとして、ふと、目をいからせて、
「織江！」
と鋭く呼んだ。
「はい」
「この采幣は、なんぞ！」
ばらっとうち振って、つき出した。
「なんでございますか？」

いぶかしげに仰ぐのへ、大喝をあびせた。

「たわけ！　見よ、この紙は、虫が食うて居るぞ！……采幣を、一体、なんと心得る！　伊弉諾(いざなぎ)、伊弉冉(いざなみ)尊より濫觴する神器ではないか。天照大神が岩戸にこもり給うた折、諸神が嘆いて、天香久山の真榊葉に木綿(ゆう)を掛けて、祈り給うた。青幣白幣がこれじゃ。すなわち、悪気を降伏し、災難を払い、味方を進め、敵を討ち亡ぼす……。虫に食わせるとは、何事ぞ！」

「申しわけございませぬ。おゆるし下さいませ」

すでに、数百年を経た古物である。虫が食っていない方が、おかしいのであった。

老武者は、文句を云うだけ云うと、けろりとして、盃を手にしていた。

式三献の祝は、きびしい作法にしたがわなければならない。酒の酌(く)みかたも、打鮑、勝栗、昆布の食べかたも、扶桑流軍学によれば、武内大臣の古伝にのっとっておこなうのである。

老武者は、その儀式を、厳粛な気色を保って、正しく振舞った。娘もまた、故実をすこしもまちがえなかった。

これは、狂った父親と心やさしい娘が、もう長いあいだ、この出陣の祝事を、くりかえし演じていることを意味していた。

老武者は、立って、牀几に就いた。

「父上様。天晴れのお働き、蔭ながら、お祈り申上げて居りまする」

「うむ」と、満足そうに頷いて、「彼を知り己を知れば、百戦殆(あやう)からず。……また、尉繚子に曰く、機は事に応ずるに在り、戦は勇を治むるに在りじゃ。大久保右近定規、まさに、このたびの合戦にあたって、兵義なる者は王たるの勝利をわがものにしてみせてくれるわ」

織江は、昂然たる父の面相を眺めてから、しずかに三方をささげて、出て行った。
しばらくして、ふたたび入って来た時、織江の手には、一枚の古地図が携えられていた。
黙って、それを、父の足下に拡げておいて、折弓をさし出した。
それは、桶狭間の地図であった。
老武者は、折弓をつかんで、
「ふむ！　平生底人の瞞を受けず、大地都廬鉄一団、璧珠国を護りて寸土無し、三更杲日黒漫漫たり、か。……今川義元め、雪斎和尚の臨終の偈を服膺いたさず、暴慢おのれを知らず、西上の軍をおこし居ったぞ。……よし！　わしは、織田信長の軍師となって、彼奴を、この田楽狭間において奇襲し、木ッ葉みじんに蹂躙いたしてくれる」
らんらんと双眸を煌かせ乍ら、老武者は、四万の大軍を、無勢僅か三千の兵をもって擣く作戦を、とうとうとして述べたてはじめた。
時の情勢、彼我の兵力、今川勢の前進状態、織田勢の迎撃態勢を諳んずる限りにおいて、老武者の頭脳は、明晰であった。
織江は、はるかな下座で、つつましく両手を膝で組み、微動もせずに、父の軍談のおわるのを待っていた。
半刻を費して、信長の精鋭は、暴風猛雨を犯して、太子ヶ振山より、田楽狭間に突入し、老武者は、あたかも、おのれが、信長自身と化したごとく、陣太刀を抜きはなって、呶号しつつ、縦横に、宙を斬りまくった。その太刀さばきは、一流の兵法者でなければしめし得ぬ鮮やかさであった。のみならず、今川勢を殲滅した後、兵をおさめて、清洲城に入った——という満足げな様

子で、牀几にわが身をもどした時、いささかも呼吸をみだしていなかったのは、よほどの修業によって鍛えたからだとみえた。

老武者は、すぐに、帰陣の肴組をはこんで来た。

織江は、大らかな微笑を満面に湛えつつ、三々九度を終えた。

それから、わが娘へ、ふかい慈愛のまなざしをあてて、

「織江。そなたも、もはや、二十歳になる。このたびの大捷を機会に、そなたは立派な聟を迎えることになるぞ。よいか」

「はい」

伏せたおもてが、淋しげに、沈んでいた。

「明晩、その聟が参る。迎えの用意をいたしておけ」

二

「眠さん」

花日和にふさわしい、晴れて、風もない静かな真昼、柳橋の橋の上から、いま、ゆっくりと、艫音をひびかせ乍ら漕ぎ上って来た猪牙（ちょき）へ、大声で呼びかけた者があった。

春の懶（ものう）さに五体をひたして、空の色を映した川面を、ぼんやり眺めていた狂四郎は、何気なく、視線をあげて、欄干から身を乗り出している男を仰いだ。

――曽田良介か。本当の木乃伊（みいら）にもならずに、修禅寺から戻って来たとみえる。

神経（シンネン）を完全に麻痺する薬草ヨヒンベを採りに、其処へ行って、奇怪な淫靡な祭礼の渦にまきこ

まれ、そのまゝ、快楽の虜になっていた若い蘭学医師は、相変らず総髪も髭もぼうぼうたる垢臭い風貌を、無事に、江戸の春光にさらして、にこにこしているのであった。
「おねがいがあるのです。眠さん――」
狂四郎は、頷いて、橋をくぐったところにある舟着場へ、猪牙を寄せるように船頭に命じた。
曽田良介は欄干から離れると、走って、石段を降りて、さきに、待っていた。
「春は、いいですな！」
猪牙へ乗ると、良介は、まず、そう云って、あらためて、あたりのうららかな風景を眺めやった。
まさしく――河岸道の、青々と芽吹いた柳の下を、洗い髪の芸妓が、褄をとって、赤い裾をさばき乍ら、日和下駄を鳴らして行く風情や、その影法師を映した土塀の上に、早咲きの桜が咲きほこっている眺めなど、泰平の世の、絵草紙に写したいのびやかさであった。
ただ、狂四郎の彫ふかい面貌のみが、このうららかな景色の中へ溶けあわぬ暗い冷い色を刷いているのであった。
「いつぞやは、失礼しました」
とってつけたように、ペコリと頭を下げた良介は、修禅寺での異常な経験にはふれようとせずに、
「唐突ですが、貴方に、聟入りがして頂きたいのです」
と、云い出した。
「聟入り？」

「左様です。是非そうして頂きたいのです」
拒絶をうけつけぬ一人合点な気色は、もし他の者がしめしたのであったら、狂四郎を、むっとさせたに相違ない。この偏屈な青年医師がしめすと、ただ、苦笑でかえすよりほかはなかった。
初対面で、いきなり、こちらが斬った死骸を貰いうけて腑分けがしたい、とたのんだ男なのである。
「理由をうかがおうか」
「元西丸奥右筆組頭を勤めていた御仁で、大久保右近という老人が居ります。旗本には、本多姓と大久保姓が、腐る程居りますが、大久保右近の家は、大久保相模守忠隣の血統を継いだ名門です。右近殿は、相模守という義烈の勇士を彷彿たらしめる、当今珍しい古武士の風格をそなえた人物でした。左様、三年前までは、そうだったのです。ところが、相模守が、節義を尚んで、武士道の吟味をまもったが故に、本多家と不快を生じて、讒(ざん)せられて、幽囚の身となったように、右近殿も、上司の若年寄と、軋轢を生じて、御役御免になり、その憤怒憂悶が昂じて、ついに気が狂うたのです」
大久保相模守忠隣は、秀忠が関白秀次のために人質にされんとしたところをたすけ、また、家康が嫡嗣を定めようとした時、本多佐渡守は結城秀康を、井伊掃部頭は下野守忠吉を推し、諸侯もそのいずれかを支持した中に、ひとり毅然として嫡庶の分を乱さずに秀忠を世嗣にと、主張した武将であった。このために、本多家と諍って、ついに浮雲疾風の禍をまねいて、彦根に、配所の月を眺める身となったのであるが、井伊直孝が冤罪を弁解するように、幾度勧めても、それは君の非をあらわすことになると拒んで、領土を没収せられ、妻子に生き別れて、幽囚十五年、悲

惨の老境をそこで終えたのであった。

　その苗裔大久保右近もまた、廉恥を養う気概に富んでいた為に、この轍を踏んで、幽囚の身となり、門地こそ廃せられなかったが、そのかわりに、おのが頭脳を狂わせてしまったのである。右近を追い落した若年寄は、その後、落度があって、切腹を命じられたが、その時はすでに、右近は、おのれを戦国の幻想世界へさまよい込ませていて、六日の菖蒲（あやめ）十日の菊を、わが家に眺めていたのである。

「手前が、右近殿の診察を頼まれてから、もう二年になりますが、もはや、恢復の見込みはありません。一人娘の織江殿も、いまでは、すっかりあきらめて、父のなすままにまかせて、毎日、合戦のつきあいをして居りますが、花の妙齢を、狂人の看護で、萎れさせてゆくのは、いたましくて、到底正視しては居れません……ところが、昨日、右近殿が、突然、織江殿に聟を迎える、と云い出したのです。一度云い出したら、断じてきかぬ気性だけは、そのままのこしているので、織江殿が、そっと、手前に相談されたのです」

「えりにえって、わたしに、白羽の矢をたてたのは、どういうのだ？」

　狂四郎は、なんの興味ももたぬ懈げな眼眸（まなざし）を、陽気な三味線を鳴らして下って行く屋形舟へ投じ乍ら、訊ねた。

　良介は、その冷然とした横顔を、食い入るように瞶めて、

「貴方でなければならぬのです！　右近殿は、無住心剣流の正脈を継いだ稀有の達人です。狂ったとはいえ、毎朝、千回の素振りをして、いささかも、おとろえをみせて居りません。手前の知るかぎりの兵法者で、貴方を措いて、ほかに、右近殿と互角に太刀打てる人は居りません……右

近殿は、必ず、聟を試すに相違ないのです」
「…………」
「聟入りは、今日なのです。眠さん、おねがいします！」
良介は、両手を、板敷へつくと、頭を下げた。
ふっと、狂四郎は、皮肉な微笑を口もとへ刻んだ。
「曽田さん、その織江という娘さんは、覚悟はできているんだろうな？」
「覚悟？」
「あんたは、わたしのことを、もう話してあるのだろう？」
「話してあります」
「無頼の素浪人だぜ、老人を負かせば、今夜は、大久保家に泊ることになるが——それでもいいのか」
「あたりまえではありませんか。聟殿なら、花嫁と同衾なさるのは——」
平然としてこたえる蘭学医師へ、視線をかえして、
——変っている！
と、狂四郎の方が、忸怩(じくじ)たるものがあった。
「翌日、わたしは、花嫁をすてて、去るかも知れぬ。いや、必ず、去るだろう」
「かまいますまい」
「何故だね？」
「あのままでは、織江殿は、ついに、男を知らずに、色香をうしなってしまうでしょう。あわれ

です。たった一夜でもいいから、良人と思いきめた男に抱かれれば、妻となったからだを、此後ひとりでまもってゆけるひとです。父親がゆるしてくれた良人です。堂々と、なんの慙じるところもなく、貴方に身をまかせられるのです。武家の娘がえらび得る唯一の手段です。いったい、そのほかに、名門旗本布衣（ほい）の娘が、あの惨めな境遇の中で、女となる方法がありますか？」

良介は、語気を強めて、云いはなった。

三

それから、一刻あまり後のことだった。

狂四郎は、小石川柳町へ抜けるべく、伝通院境内を通っていた。いつの間にか空いちめんに雲がひろがっていて、森の中ともいえそうな、老樹が蒼々としげった境内は、宵闇が降りたようにうす暗かった。

いまにも、梢から、ぽつりぽつりと、滴が落ちかかるような気配もあった。樹冠の上では、風も出て鳴っていた。

ひとかかえもある黒い幹が、狂四郎をはさんで、ずうっと、つらなっている。

と――、急に、狂四郎は、歩幅はそのままに、跫音を消した。もともと、あまり音たてて歩かない習慣が身に備わったものになっていたが、並の人間と全く異る感覚が、後方あるいは行手に、無意識のうちに働いていて、危機をさとった瞬間から、おのれを狙っている者の位置と腕前へ鋭い神経をくばると同時に、それに応ずる五体の緊張を生む。これは、これまで、この男が、そうした立場に置かれた時、いくども述べて来た。

跫音を消したのは、待伏せていると、脳裡に閃いた刹那、対手がなみなみならぬ強敵らしいと、本能的に感じたからである。

幹の蔭に姿をひそめた敵は、こちらが近づくのを、目でとらえず、磨ぎすました感覚で、はかっているのだ。すなわち、強敵である所以であった。

物蔭から、じっと睨んで来る眼光に対しては、狂四郎は、べつだん、なんの変化も、足の運びかたにしめしはしない。対手は、すでに、眼光を送って来ていることで、自身の位置と腕前を、こちらに教えてくれているのである。

ところが、幽鬼のごとく、姿を消して、一撃する間髪の境まで、気配を断っている敵は、よほどの手練者とみなければならない。

当然、こちらも、音を絶やして、近づくことになる。

狂四郎は、跫音なく、十五歩を進んで、

——来るぞ！

と、感じた。

来なかった。

さらに、二歩去って、悪寒に似た冷たいものが、背筋を走りぬけ——おそろしい気合をこめた身がまえで、それに備えたが、なんとしたことか、颪のような襲撃は、幹の蔭から躍って来なかった。

狂四郎は、ふりかえって、その幹へ、氷のような眸子をあてた。

「おい——」

いかえしたくなるくらいであった。

「なぜ、斬って来ぬ？」

その詰問に対して、なんの反応もなかった。静寂はふかく、あやうく、こちらの錯覚か、と思いかえしたくなるくらいであった。

——いや、いるのだ。そこに！

狂四郎は、確信しつつも、しずかに歩き出していた。

——尾いて来るだろうが、もはや、抜き討って来る機会はうしなって居る。

不敵にも、影なき敵を、ひややかにさげすんでいた。

四

大久保右近の屋敷は、菊坂町の、長泉寺という古寺に隣りあわせた台地の一角に在った。

狂四郎が、手入れのゆきとどかぬ玄関に立って、案内を乞うと、もう七十以上になろう、腰の曲った用人が出て来て、すぐに、書院に招じた。つい今しがた、曽田良介が立寄って、織江に相談して行ったということであった。

その織江は、姿をあらわさず、しばらく、腕を組んで待っていると、廊下で、用人に大声で何か喋り乍ら近づいて来て、襖が開かれると、そこに立って、睨み据えるように目を光らせた人物が、一瞥で、主人とわかった。

「聟殿じゃな？」

上座に就くと、叫ぶように、そう問うた。狂四郎は無言で、頭を下げた。

「うむ。面魂も小憎いばかりじゃ。座姿にも隙がない。大久保家を嗣ぐには、まずまずの男とみたぞ。織江の聟たることに、異存はあるまいの?」
「おのぞみなら――」
「わしは、本日、貴様の来るのを知って居った。祝言の用意は、万端ととのうて居る。が、そのまえに、まず、わしは、貴様を試さねばならぬ。よいな!」
狂った老旗本は、用人に、木刀二振りの持参を命じた。
狂四郎は、そのあとにしたがって、広縁に出て、庭へ降りようとしたおり、つきあたりの部屋の障子が、わずかな隙間をつくり、その蔭に、人影があるのをみとめた。織江に相違なかった。
「さあ、参れ!」
右近は、砂敷庭の中央に立って、ぴたっ、と木刀を青眼にかまえた。
「容赦はせぬぞ! 血反吐を吐いて絶命しようとも、後悔すな!」
凛々たる気勢で、睨めつけて来た。
一間をへだてて、地摺り下段にとった狂四郎は、良介の云ったごとく、あなどり難い使い手と見てとって、傷つけずに破る迅業をどうしめすか、思いめぐらしはじめた。
無住心剣流は、小笠原源信斎の門弟針谷夕雲より起る。
その弟子小田切一雲の記に依れば――
夕雲は、東福寺隠居虎伯和尚に帰依して、禅学の意味よりして兵法を窺えば、元祖上泉を始め、源信斎が八寸の延金も、悉く妄想虚中の類にて、天理当然の性の受用に非ず、一旦豁然と大悟し、前に習い得たる諸流を捨て、本然受用の一法につづめて、自ら是を楽しみとす。

虎伯和尚の曰く、無住心剣術といわんか。
一雲は、さらに、これに工夫をかさねて、ついに、その極意を相討ちと定めたのであった。
狂った老旗本が、ゆるやかに浮き沈みさせる切先には、まさに、相討つ無我無心の気魄がこもっている――。
これが、疾風を起して打ち込んで来るのを、余裕をもって躱しざまに、叩き落すことは、狂四郎と雖も、至難である。といって、老軀を傷つけることは避けねばならぬ。狂四郎は、すり足で、左方へ左方へとさがりつつ、まわりはじめた。
右近は、じりじりと、間合を詰めつつ追って来る。
ついに汐合満ちた。
だだっと、砂を蹴って、肉薄した右近は、頭上高くふりかぶった木刀を、
「ええいっ！」
凄じい気合もろとも、打ちおろした。
鳥影が掠めるに似て、狂四郎の姿は、もうそこにはなく、
「うっ！」
と、呻いた右近は、両手のしびれるのに堪え得ずして、木刀を、ぽろっと離した。切先が、火花を散らして打ち据えたのは、誰が袖形の縁先手水鉢だったのである。
狂四郎は、縁の上に、立っていた。
「み、みごとじゃ！」
右近は、ひとつ大きく肩で呼吸してから、満足げにふかく頷いてみせた。

「貴様を迎えて、大久保家は、もはや、磐石じゃ。……わしも、今宵、安んじて、往生とげることができるぞ。ははは……人生五十年と申すが、十年余分に生きのびたわい。兵法者は天命を知らねばならぬ。いよいよ、目出度く、まなこを閉じる日が到来じゃ」

狂四郎は、その様子を眺めて、ふと、はたしてこれが狂気の独語か、と疑った。

「今宵、死を予感されるのか？」

「おう、そうじゃ。今宵四更、明智光秀めが、矛をさかさまに向けて、殺到して参るわ。わしは、信長とともに、阿修羅となって奮迅し、もののふの最期とはいかなるものか、目にものみせてくれようず——」

五

上野の時鐘が、四つを告げるのをきき乍ら、狂四郎は、寝所の褥に仰臥して、惘然と、天井を見あげていた。

半刻前、座敷において、祝言は、とどこおりなくおこなわれたのである。蓬萊の島台をへだてて、狂四郎は、千代重ねの白無垢、綿帽子におもてを包んだ花嫁を、眺めたことである。すでに覚悟がさだまっていたのであろう。織江は、おちつきはらって、三々九度の盃を、口にはこんだのであった。狂った父親は、高砂の謡ひと節を、朗々とめでたく納めて、この上もなくうれしげであった。

色直しの献酬の式があって、狂四郎は寝所へ、用人に案内されて来たのである。

鴛鴦の屛風のひきまわされた蔭に、燃えるような緋の夜具が、天一生万物のはじめを象徴する

北枕に敷きのべられてあり、狂四郎はそれに横たわったのであるが……。
——ここらあたりが、ひきあげの汐どきではないのか。
自身に呟きかけ乍ら、狂四郎は、ひとり、苦笑した。
次の間との仕切襖が、するすると開くや、狂四郎は目蓋をとじた。織江は、褥の裾に坐ると、両手をつかえて、澄んだきれいな声で、礼をのべた。それから、屛風の蔭に入って、つとめて音をたてぬようにして、紅小袖を脱ぎはじめた。
ひそやかなその衣ずれの音や、ほんのりとただよう甘い香に、狂四郎は、われにもあらず、微かな狼狽をおぼえた。
——このおれが、うろたえている！
おのれをおちつかせるために、自嘲せざるを得なかった。
「ごめん下さいませ」
そっと掛具をもちあげようとする白羽二重の下着姿へ、狂四郎は、目蓋をひらくと、
「ことわっておきたい」
「はい」
織江は、はじらわずに、狂四郎の眼眸を受けとめた。
「わたしはごらんの通りの無頼の素浪人だ。女の操など、あまり大切に考えて居らぬ。げんに、妻と呼ぶべき女を持ち乍ら、平気で、こうして、たのまれ聟の役目を買って居る。いわば、あさましく、無垢のからだをあじわってみようという——それだけの下種なこんたんでしかない、と思って頂こう。……但し、そなたが、のぞまぬのであれば、一指もふれずに一夜を明かす忍耐

を、約束できぬこともない。……いずれにせよ、わたしは、明日は立去ることになる。ふたたび、あらわれるかどうかは、返答のかぎりではない」

織江は、俯向いた。

しばらく、身じろぎもせずにいてから、その朱唇から、洩らしたのは、

「貴方様は、父がえらんでくれた良人でございます。わたくしが、おいやでなければ……」

その返答であった。

狂四郎は、黙って、自身の横を空けた。

……唇に唇をあずけた織江は、下着の前が、男の手で、しずかに捲られる時、全身の顫えを怺えるために、片手で、男の寝衣のはしを、強くにぎりしめていた。

ふっと——目ざめると同時に、狂四郎は、しっとりとしめった柔かな温かい太股のあいだから、片脚を抜きとって、褥から滑り出ていた。

風の迅さで、無想正宗を摑みとって、廊下へ走り出た瞬間——。

「夜襲ぞ！　聟殿っ、出あえっ！」

右近の絶叫が、闇をつらぬいた。

氷上を疾走するに似た勢いで、その居間にかけつけた狂四郎は、床柱に片手をかけて、刀身を杖にずるずると崩れ込む右近の血にまみれた姿と、円相床の下地窓をつき破って裏庭へ遁れんとする黒影を、瞳孔に納めた。

数秒ののち——。

狂四郎は、建仁寺垣へ、曲者を追いつめて、伝通院境内で自分の生命を狙った奴、とみとめつつ、久しぶりに、円月殺法の冴えを発揮すべく、ゆるやかに、刀尖を、おぼろ月夜の宙に、弧に描きはじめたのであった。

遊士有情

一

江戸随一の豪華な構えを誇る料亭升屋の離れ——寝殿造りの亭で、備前屋と白鳥主膳は、久しぶりに対座していた。

「お顔色が沈んでおいでのようにお見受けいたしますが、ご加減でも——？」

「いや、べつに……」

主膳は、かるく、かぶりをふった。

華美な装いに映えた白い貌は、ますます美しく、妖冶な匂いをただよわせている。

ただ、以前、ここにあらわれた時にはその冷酷無情な心懐をつつむ幽姿ぜんたいが、いかにも慎み深い、柔和な人柄のように錯覚せしめる静けさを湛えて、優雅そのものに見受けられたものであったが、いまは、肩のあたりに、暗い血のにおいをはなつ翳が落ちているように感じられるのは、備前屋の気のせいばかりではなかったろう。

それだけに、美しさは、一種不気味な冴えを、くわえている。

——気品が崩れている！

備前屋は、肚裡で、そう呟いていた。

尤も、主膳は、挨拶がおわるや、すぐに、

「三百金ばかり用立ててくれぬか」

――と、きり出したものであり、自分から無心したのは曽てなかったことなのである。

黙っていれば、対手の方で気をきかせて、包んでさし出してくれる、ときめていたことだし、それが、前に置かれても、礼ものべず、そ知らぬふりをして来た主膳であった。また、その態度が、いかにもふさわしく、自然であった。

ところが、今日は、備前屋が、桑名盃へ、袱紗をかけて、さし出すと、主膳はさっさと手掴んで、懐中にしていたのである。

――生命が短くなってくると、不作法になるとみえる。

備前屋は、その軽侮をみじんも気色にしめさぬ豁達な笑顔で、

「ところで、ちょうどいいおりでございました。……白鳥様は、眠狂四郎の妻女に、お会いになったことはありませぬかな？」

「まだ、ない。美しいそうだな」

「まず……あれだけの佳人は、ざらにはございますまい。ご本丸大奥にいた時、公方様が、大層な御執心だったそうでございますが、もしその心振になって居れば、いま頃は、飛ぶ鳥も落す権力をもった御部屋様でございましたろう。白河楽翁様が後見をされていたので、お手付きからはまぬがれたものの、隠密職に追いやられて、とどのつまり、眠狂四郎の女房になったわけでございますが――」

「その女が、どうだというのだ？」
曽て、主膳も、狂四郎が果し合いに応じない節には、その女房を拉致して玩(なぐさ)んで斬りすててやろう、と考えたこともある。備前屋に、急に云い出されて、一度愛でたいと関心をもちつつも、つい忘れていた花が、まだきれいに咲いているときかされた気持だった。
「中野の三重塔の裏手にあたる風雅な家に、住んで居りますよ」
「ところは知って居る」
「目の青い、髪毛のあかい拾い子を育てていることもご存じでございますな？」
「うむ。きいて居る」
「少々わけがございまして、その拾い子を、てまえが、ちょっと預りたいと存じましてな」
「かどわかすのか？」
「左様で――」
「おぬしは、そんな卑劣な真似を好まぬ筈だが……」
「勿論、てまえの本意ではございませぬ。ただ、このたびだけは、その拾い子が、必要なのでございます。かえす時には、それだけの預り料も、たっぷりとはずむ積りで居りますし、決して私慾の儲け話ではございません。ありていに申上げますと、高姫様と眠狂四郎とを仲なおりさせる――いわば、調停役を、てまえが買って出たわけでございましてね」
「酔狂な話だな」
「ご尤もで――」
備前屋は、にやにやした。

自分がやしなっている無頼者たちに命じて、混血児新太郎を誘拐するのは、備前屋の気のすゝまぬところだった。もし、無頼者たちが、ふみ込んで、たまたま狂四郎が帰って来ていたならば、一人のこらず仆されるであろうし、不在であっても、これが狂四郎に知れたならば、これまで大きな口をきいて来た面目は、泥にまみれることになる。

白鳥主膳は、いずれは、雌雄を決しなければならぬ狂四郎の宿敵である。この男に、拉致役をつとめさせれば、狂四郎が在宅ならば当然、剣を交えることになろうし、そうでなければ、狂四郎の憤怒は、決闘の日まで持越されることになろう。

いずれにしても、商人の算盤では、こちらの損にはならぬ勘定である。

備前屋は、いかにもこの男らしいずるい計算から、主膳に、たのんだのであった。

主膳が、はたして引受けるかどうか――問題は、それだったが、かえってこちらが意外に思う程、あっさりとひきうけてくれたのである。

備前屋は、主膳に、美妓をあてがうべく、卓上の銀の鈴を鳴らした。

二

主膳が、その家の廊下に立った時、美保代は、行灯のあかりを細めて、牀に就いたばかりであった。となりの小夜具から、小さな手がばんざいして、すやすやと寝息をもらしていた。

主膳が、すっと障子を開ける。美保代が、ぱっと掛具をはねて、起きあがって、身がまえる。これが同時だった。

――成程、佳人だ！

賞美する余裕をもって、主膳は、たたみ二畳の距離を、風のように奔った。美保代は、袂と裾をひるがえして、床の間へ跳び退った。これもまた、殆んど同時だった。

例によって、主膳は、右手に、白く咲いた侘助の一枝を持っていたが、美保代が脇差をつかんで抜きうって来た刃風へ、つと、それをさしのべていた。

高く飛んだ侘助が、襖へあたって、ばさっと落ちた時、もう、美保代は、右鳫下へ当身を受けて、息をひいて、頽れていた。

「おい——」

主膳は、廊下にひそませておいた男を呼んだ。

お店者態の備前屋の乾分は、走り入って来ると、大急ぎで、幼な児へ、猿ぐつわをはめて、かかえあげた。

「先に行け」

「へい——」

主膳は、行灯の焔をあかるくしておいて、意思を喪って、寝衣の乱れるにまかせた妍姿を、じっと見おろした。

——美しい!

あらためて、肚裡に、その独語があった。

ふるめかしい形容を借りるならば、漢の恵帝が、張皇后を冊立するにあたり、翠蛾の羅をまとうた女体を榻によこたえて、鑑賞したのち、

『脂粉を仮らずして顔色朝霞の雪に映ずるがごとく、また梨花の雨を帯びるがごとく、しかも娟

秀無瑕、肌理膩潔、肥痩度に合す、蛾眉にして鳳眼、蝤領にして蝉鬢、額は広円にして光鑑むべく、その胸や平満、その背や微厚、その肩や円正、その腰や繊弱、玲瓏玉を欺き、温淑の気外に溢る、洵にこれ絶代無二の佳人なり』

と、記しのこした、というが、主膳は、脳裡に、この古書の数行を、甦らせていた。

主膳は、少年の日、これを読んで、はじめて、女体に対する心をひらいたのであった。十余年を経て、いま、卒然として、主膳は、眼下に清楚な佳麗のよこたわった姿を置いて、その形容が、真を写したものとさとったのである。

主膳の蒼白なおもてに、血の色がのぼり、眼光が熱をおびた。

やおら、膝を折って、ぐったりと力失せた肢態を、双腕へ移した主膳は、胸の迅鳴りにむせて、軽い咳をふたつみつもらした。

あおのいた細あごから、のど、そして桃顆のまろやかなふくらみの胸もとへかけての、柔肌の優美な流れへ、食い入るように目をあてつつ、主膳の左手は、本能の蠢きをみせて、繊腰を包んだ寝衣を撫で滑ると、縫りしわんだ緋の下着の下をまさぐった。

主膳の冷えた指に、ぴったりと肌膚と肌膚の密着した股間は、火傷するような熱さだった。思わず、呻きを噛むほどの快感が、火花が散るように全身を走った。

とたん——。

美保代は、昏冥の中で、ぐっと、背を反らすと、片手で、胸をおさえた。

「あ……あっ……ああ——」

大きく、ふたつみつ、胸を波うたせたかとみるや、なかばひらいた唇を、急につぼめて、微か

にのど奥を鳴らした。
次の一瞬——主膳は、見た。
鮮やかな血泡が、その口から、ぶつぶつと湧き出るのを——。
咄嗟に、主膳は、ぐっと抱きあげると、その口へ、おのが口をおしつけた。
美保代は、口腔にあふれた血汐を、主膳の口腔内へ、喘ぎの呻きとともに、どっと吐き入れた。
主膳は、それを吐き棄てずに、咽喉へ嚥み入れた。それから、さらに、つよく吸うて、のこりの血汐も、飲んだ。
……なお、それなりに意識をもどさぬ病める女体を、そっと、褥へもどした主膳が、暗然として、自身に云いきかせたのは、
「おれは、眠狂四郎に借りがあった！」
そのことであった。
昨夏、青山百人町の空地で、男谷精一郎と凄絶の決闘を行った際、不運にも、喀血が来て、あわや精一郎の豪剣下に伏そうとして、狂四郎にすくわれた主膳である。
その妻が、自分と同じ病痾に犯されていて、強烈な当身に襲われたために喀血したと知った主膳は、翻然として、おのれの借りを思い泛べて、その窒息をすくってやったのである。
主膳は、幼児の生命に別状はないことを書きのこして、春の夜道へのがれ出ると、
——借りはかえさねばなるまい。
と、胸中で、呟きすてていた。

三

それから、一日置いた午後のことである。
根岸の里の、御隠殿通りにかまえられた、いずれ大町人の別邸とおぼしい屋敷うちから、あかるい談笑の声が、流れ出ていた。
『江戸名所花暦』にいう。
　この里の鶯声すぐれてよき故に、人々初音を聞かむとて、風流の庵をむすべる文人墨客の許へ、知己のひとひと訪れて、詩を作り歌をよみ、あるいは俳諧、茶の湯など催し、春の日ながきもみじかしと思うばかりなり。
今日は、江戸座が、催されているのであった。
芭蕉風の俳諧が崩れて、其角、沾徳（せんとく）から存義、紀逸を経て、当世にいたると、句ぶりは洒落と軽妙を主旨として、宗匠は幇間役となって、いまを盛りと、いたるところで、ひねられていた。
青茶返しの小紋に鷹の羽八丈の羽織を肩すべらかしにまとうた、幇間そのものの宗匠をまん中にして、粋と通を誇る蔵前風やら深川通やらが、ぐるりと円座をつくっているのである。呉越同舟――まさしく、備前屋の顔も、立川談亭の顔も、交っていた。そして、こうしたところには、およそふさわしからぬ眠狂四郎の異相さえも――。
尤も、狂四郎が、あらわれたのは、自らすすんでのことではなかった。昨夜、急に、武部仙十郎に呼ばれて、薦められたのである。
「わけは明さぬ方が、行く気になろう」

仙十郎は、珍しく、むっつりした面持で、そう云ったのである。

狂四郎は、談亭を案内役にして、ぶらりとやって来て、備前屋の姿を見出すや、

――わけは、この男が解くのか。

と、直感したことだった。

「どうだな、談亭師匠。近頃、おめえさん、人相を観なさるそうだが――」

縞紬の小袖から、上田八丈の黄色の下着をのぞかせた町医が、笑い乍ら、訊ねると、談亭は、大真面目な顔つきで、

「なに、拙の観るのは、もっぱら女相でげしてな。つらつらと、愚按ずるに、これ女人には八相がありやすな。はずかし相、とびで相、だまされ相、つかい相、もってい相、ゆきた相、うるさ相、なきた相」

「ところが、あたしの囲っているのは、りこう相で、よさ相で――」

「そうそう、すぐに寝たがるところが、猫と相似で、近所の若いのをくわえ込んだら、これを相姦と云いやす」

くだらない駄洒落の応酬があってのち、句作りに移った。

一刻を経て――。

『花の前に、胡蝶の舞や露払い』とか『春の野に胡蝶の舞いの芝居哉』とか、あまり大した秀句でもないのが抜けた。

狂四郎も、ものして、抜けた。

『よしや降れ稔りあしくも花の雨』

宗匠が、

「こりゃア、みごとな！　どなたさまの――？」

と問うて、談亭から、

「きまってらアな。こちらの先生さ。其角、沾徳くそくらえ。高雅の趣きがあらアな。芭蕉流でげすな。当今、七部集が地にすてられて土のごとし。芭蕉流の質やかましい振合では、附合いにならぬとか、なんとかほざいて、どなた様も、其角ばりに洒落とばそうとしなさるが、どっこい、機転頓智てえしろものは、天性の才でさ。……ここに人あり、芭蕉の域にせまって、凛として、風韻あり、だ。ねえ、眠先生、いちばんはじめにおつくりなすった句は、なんでござんしたっけ？」

狂四郎は、薄ら笑って、こたえなかった。

談亭は、しきりに、首をひねっていたが、突然、ぴしゃっとわが額をたたいて、

「あれだっ！　思い出した。うめえもんだ。浪人の肩とがりけり秋の暮――たアどうでげす、皆の衆」

一同は、ちらと、狂四郎を眺めたが、のこらず、口をつぐんだままだった。

『浪人の肩とがりけり秋の暮』

まさしく、この句は、狂四郎に、ぴったりであった。春風の座に、ひとり、秋のひえびえとした空気を送り込んで来た男――そういった異質の姿にまぎれもなかったからである。

ところで、備前屋の一句も、抜けていた。

『鶯の色や雀のおどり笛』

だった。

というのであった。

これをきいたとたん、何を直感したか、狂四郎の口辺に、皮肉な笑みが、微かに刻まれたこと

あとは、座興になり、百人一首を、吉原がよいにもじるいたずらに、笑いをさざめかした。

『吉原にうち出てみせばしろ小袖、さん茶あげやのゆきのふりそで』

『わびことをすれどふる君何事ぞ、金をつくしてあわんとぞ思う』

『ふられつつひとりねる夜の明くるまは、いかにくやしきものとかはしる』

『寝をはやめ急にせかるるけちなるに、それでも末にあわんとぞ思う』

『わが恋はしのびて見えぬ深笠の、人こそしらね買わぬ日もなし』

など――こうしたたわむれが、この連中の粋であり通であり、先刻の談亭の痛烈な皮肉も、一向にこたえぬていたらくだった。

そのうちに、備前屋が、つと、狂四郎の前に寄って来た。

「眠様、ご相談申上げたい儀がございますが、お伴をさせて下さいますか？」

「うむ――」

気軽く承知した狂四郎は、談亭の不安そうな視線に見送られて、座を立った。

おもてへ出ると、駕籠が待っていたが、乗らずに、二人は、肩をならべて、音無川に沿うた往還を、ぶらぶらとひろいはじめた。

原徳斎の『道のしをり』に、この里の四季をかぞえて、

――梅、鶯、桜、藤、螢、水鶏(くいな)、月、雁、紅葉、雪、山茶花、枯野。

十二を挙げている。
江戸で最も優れた里とされていたところである。
二人の姿は、いかにも、風流に心よせて、いずれかの文人墨客を訪れての帰途とみえた。
ところが、互いに、行手へ、しずかな目を置いて、なにげなくとり交す会話は、およそ不風流なものだったのである。
「いつぞや、朝鮮の海賊をお斬りになり、船を爆破なさって、奪いとられた輸入金六十貫——どうなさいました？」
と、備前屋が、訊くと、狂四郎は、こともなげに、
「武部老人に呉れた。使途は、知らぬ」
「まだ、どこかにねむっているものとすれば、てまえの方に頂戴いたしたいもので——」
「悪あがきは止したがよかろう」
云いすてておいて、しばらく、黙って足をはこんで、水鶏橋を渡りかけた。こんどは狂四郎の方から、
「曽田良介が、夜鷹の死骸の腹を裂いて、とり出した白珠は、どうしたな？」
と、問うていた。
「あれでございますか。この備前屋が、珍しく、殊勝な心掛けを起しましてな、ほんとうに、お伊勢様へ奉納いたしましたよ。いえ、べつに、御利益をねがってのしわざでないので……。白珠が、徳川様の御威光の恢復を祈るためと思いなおしてみれば、これで、てまえは、徳川様のおかげで大いに儲けさせていただいているのでございますからな。まア、てまえが、お伊勢様をだま

したために徳川様が、倒れておしまいになったとあっちゃ、これは、てまえの損にもなる勘定に相成りますのでね……」

そうこたえて、備前屋は、磊落げに高笑いしているのであった。

四

升屋の離れ亭で、一間余をへだてて対座した時、狂四郎は、ふと思い出して、

「辰野おばばは、いかがした？」

と、訊ねた。

「ああ、あの気強い御隠居でございますか。鹿児島へ、船でお送り申しあげました。貴方様の奥方様を、あのような目にお遭わせいたしまして、申訳なく存じて居ります。おばば様の本意ではなかったようで……、たまたま、てまえの飼犬の中に、おばば様と懇意な浪人者が居りましてな、おばば様を云いくるめて、あのような無礼を働いた次第でございます。……おばば様は、眠狂四郎を討たねば、なんの面目あって、国許へ帰れようぞ、と大層だだをこねられましたが、いや、まことに、小気味のいい御隠居でございましたて——」

「今日は、なんの相談だ？」

「武部様の方へは、おつたえ申してしておきましたが……」

「老人からは、何もきいて居らぬ」

「ああ、左様で、——何も仰言らずに、運座へ出るようにおすすめなさったわけでございますか。いや、流石は、武部様らしいおはからいで——」

わざと、狂四郎をじらすように、備前屋は、のんびりとかまえて、竈河岸のけぬき鮓を、まずどうぞ、とすすめておいて、自身は、金象嵌の煙管をくわえ、うまそうに、紫煙をひと吐きした。

狂四郎は、腕を組んで、そのふてぶてしい態度を、じっと見据えていたが、急に、にやりとして、

「隣室に、なにか、しかけがしてあるようだな」

ずばりと、云いあてた。

しかし、備前屋は、聊かもうろたえず——いや、狂四郎ならば、それぐらいの鋭い神経の働きはあるものと予知していた不敵な面構えで、

「ごらんにいれる前に、話の方をさきにおききなすって頂きましょうか。……貴方様は、全く、運も腕前も、お強いおひとだ。ほとほと、感服いたしました。甲賀忍組とやらも、貴方様には、とうとう歯が立たなかった由でございますな。忍組も、貴方様からは、手を引くときき及びました。ところが、ここに、たった一人だけ、貴方様に復讐せずにはおかぬと、修羅を燃やしている者が居りましてな」

「おぬしか？」

「とんでもない。高姫様でございますよ。それ、お経の文句にも、女人は地獄の使い、大蛇を見るとも女人を見るな、などとございます。女の執念というものは、まことに、おそろしゅうございます——」

狂四郎は、笑って、

「仏説によれば、女の額の十二本の角は十二人の子を生まねば、落ちぬそうだな。あいにく、高姫は、一人すらも生んで居らぬ」

「冗談ごとではありませぬ。……てまえが、ひとつ仲介に立とうと肚をきめましたのも、高姫様の修羅の燃やしぶりがあまり凄じかったからでございますよ」

「すてておいてくれて、一向にかまわぬことだ」

「そうは参りませぬ。これで、てまえは、高姫様のお口添えで、大奥にも、いろいろと品物を納めさせて頂いて居ります。対手が、てまえの好きな貴方様とあっちゃ、これは、ひと肌ぬがずにはいられませぬ。このあたりで、ひとつ、手を打って下さいましては、いかがでございましょうな？」

「おれに、詫び状でも書け、というのか？」

「読みがお早い。いかにも、左様で――」

「ことわる、と云ったら？」

備前屋は、口を緘んで、瞶め返した。

とたんに、するすると仕切襖が、左右に開かれた。頭をまわした狂四郎は、瞬間、はっと双眸を光らせた。

その部屋の洞床に、猿ぐつわをはめられた新太郎が、備前屋の乾分に摑まれて、匕首を擬されていたのである。

「卑怯だろう、備前屋！」

新太郎を見戍りつつ、烈しい語気をたたきつけた狂四郎は、こちらが気をうばわれた刹那、備

前屋がすばやく懐中から短筒を抜き持って、背中へねらいつけたのを察知していた。
「いかにも、卑怯でございます。……たまたま、白鳥主膳様が、あのお子をおつれ下さいましたので、ふと思いついた次第で——。こうでもしなければ、貴方様を、うん、と云わせることは、むつかしゅうございますのでね。一度ぐらいは、この備前屋に、兜をぬいでやって下さいますまいか」
息づまる緊迫した沈黙が、しばし、つづいた。備前屋が、かさねて覚悟の程を促そうと口をひらきかけると、狂四郎の方が、それよりも早く、
「ことわる！」
この男独特の、ひくくおさえた声音で、きっぱりと、はねつけた。
備前屋の形相が、異様に険しいものに一変した。
——南無！
短筒の引金にかけた指に、力がこめられた。
一瞬——。
新太郎をおさえつけていた乾分が、けだものじみた断末魔の唸り声をほとばしらせて、のけぞった。
と同時に——
狂四郎の五体が翻転して、備前屋の右手を蹴あげていた。轟然と唸った短筒は、天井へはね飛んだ。
あまりにも意外な舞台の急変に、茫然となった備前屋は、洞床の掛障子の蔭から、乾分の背中

を、ひと刺しした者が、のっそりと出現するや、あっとなった。
白鳥主膳であった。
備前屋は、くわっと眼球を剝き出すと、
「なんのために、裏切りなすった？」
と、吼えた。
主膳は、それにこたえるかわりに、狂四郎へ、澄んだ眸子（ひとみ）をあてて、
「おぬしには、借りがあった。それを、かえさなければ、果し合いは申し込めぬと気づいたので、こういう仕儀になった。では、いずれ、あらためて――」
かるく一揖して、つと、廊下へ去っていた。
狂四郎は、ゆっくりと、新太郎へ近づいて、かかえあげると、ふりかえって、
「備前屋。せっかくのたのみだから、詫び状を書くか」
そう云って、珍しく、明るく破顔してみせた。

五

「……美保代」
濃霧にとざされたような視野をうしなった世界をさまようていた美保代は、遠くで、じぶんを呼ぶ声をきいて、ふっと意識をとりもどした。
「美保代！」
ふたたび――こんどは、はっきりと、その声を間近にききとって、美保代は、目蓋をひらい

た。

じぶんを見戍っているふたつの顔を、現実のものとして、瞳孔に映しとるには、数秒間を費さなければならなかった。意識は甦っても、高い熱に冒されている脳裡は、まだ濃霧につつまれているように、そのことを信じられなかったからである。

「旦那さま……」

そっと、かわいた口のうちで、呟いてみて、はじめて、

「ああ！」

と、歓喜の色を、顔へあふらせた。

「旦那さま！……貴方が、新太郎を、つれもどして、下さいました……」

どっと泪のあふれるにまかせているうちに、潤んでぼやけた狂四郎の貌が、また夢の中へでも去るような危惧をおぼえて、美保代は本能的に、片手をさしのべて、袖のはしをとらえていた。

すでに、このあかるい春の真昼の陽ざしには堪え得ぬまでに、その美しさに人間ばなれした幽艶さをくわえた面差を、じっと眺め入りつつ、狂四郎が、胸中で、愁然と呟いたのは、

――もう、あまり長くはあるまい。

そのいたましい予感であった。

謎の春雪

一

当時。――

上野山下――仏店（だな）、提灯店（だな）、上野町、広小路付近にかけては、『けころ』という売色の家が、たくさんあった。揚代二百文、泊りは食事別で二朱（一両の八分一）であった。

『山下新談』に謂う。

女達のすがたは、上にも、紬太織、あるいは青梅桟留に黒繻子の半襟をかけ、下着は更紗八丈縮緬など着し、襦袢は緋縮緬……茶屋女のていにて、商売する故上着に美をつくすことなし。

見世は二間間口で、表は格子戸、女たちは、見世にならんで、前に小さな屏風をひきまわし、その蔭から片膝を立てて、赤い湯文字や白脛などをちらちらのぞかせて客を挑発していた。

陽が落ちて、檐（のき）行灯の明りが増し、小路は、ひとしきり、賑やかになった。

『けころ』は、水茶屋や料亭の内から、じかに行き抜けるしくみになっているので、今日のような、花日和の縁日には、もう、女たちは殆ど客がついたとみえて、酔ってうろつく飄客は、どの

店からも、しめ出されていた。

眠狂四郎は、この小路のひとつを、三枚橋へ出る近道だと思って、ふところ手で、通りぬけようとしていた。

とある店から、一人の蒼褪めた顔色の若い職人態の男が出て来て、狂四郎に、ぶっつかりそうになったが、詫びも云わずに、むっつりしたなりで、急ぎ足になった。

すると、年増の女が追って出て来て、

「新さん——短気は、お止しよっ！」

と、かんだかい声を、男に送った。

男は、ふり向きもしなかった。

奇妙だったのは、まがり角に来た時、急に男が、蹣跚たる足どりになって、いかにも泥酔した様子を装って、大声をあげたことである。

「へへんだ、秋風吹き起る淫哇謡（そそりうた）、梯子を攀じ登る蹴転（けころ）橋、とくらあ、名月千金人二百、暫時一刻今宵を惜しむ、か——ういい。こん畜生っ！　うめえことをぬかしやがったぜ、蜀山人てえ野郎は……は、はっくしょいっ」

すれちがった町人が、つばきをかけられて、

「きたねえ」

と、眉をしかめた。

「なにっ、蜀山人がきたねえ？」

「蜀山人じゃない、お前さんだ」

「蜀山人たアおれのこった。望蜀って、知っているか、野郎っ！」
町人は、笑い乍ら、
「けころにかようのを、望色というかの。ついでに、腹下しを、暴食といわあ」
「てやんでえ、どたぐそめ！」
摑みかかろうとして、するっと躱されどたんと、地べたに尻もちをついた。
そこへ、岡っ引が通りかかって、
「新吉じゃねえか。飲めもしねえくせしやがって、莫迦野郎っ！」
と、背中を、ひとつ叩いておいて、去って行った。
新吉は、ひょろりと起きあがると、また、出鱈目を喚き乍ら、進みはじめた。
狂四郎は、なんということなしに、そのあとから、足をはこんでいた。
三枚橋を過ぎて、和泉橋通りを右に折れると、片側が大名屋敷の高い海鼠塀のつらなった淋しい往還になる。
そこに、白馬ののれんをかけた小綺麗な居酒屋があった。
新吉は、ふらふらと、そののれんをくぐった。
「いよう、御一統、お揃いで——」
新吉は、油障子へ凭りかかると、べろりと、唇をなめまわして、にやりとした。
台に銚子をならべている定連らしい四つ五つの顔ぶれが、一斉に新吉を見やった。
「おう——あんまり馴染のねえ面だぜ」
「へへ、いまから、仲間に入れてもらおうってんだ」

新吉は、一人のそばへ、どさっと腰かけた。

「ぐにゃぐにゃするねえ。酒がこぼれらあ」

「力山を抜き気は世を蓋う、時に利あらず騅逝かず、って知っているか」

「あいにく、寺子屋の先生が、色年増じゃなかったんでな」

「騅逝かざるを奈何すべき、ぐにゃぐにゃ汝を奈何せん――てなもんだ。ええ、おい、兄哥、こうしてぐにゃぐにゃしているについては、これで、ふかァい仔細があるんだ。漢兵すでに地を略し、四面楚歌の声、新吉意気尽く、わたしゃ、どうしたらよいわいなア」

「ちょっ、薄気味のわるい野郎だ。あっちへ行きやがれ」

「まアそう邪慳にするな、勘平がどうとかしたと云ったじゃねえか。惚れた女が吉原へ身を売ったんだろう」

「色恋と袁彦道ばかりは、ままならねえやな。そっとしてやっておきな」

狂四郎は、一隅に腰をおろして、台に俯っ伏した新吉へ、一瞥をくれたが、すぐに、自身の孤独にかえって、盃を口にはこびはじめた。

ぼんやりと……狂四郎が、想うたのは、いま新吉がうたった項羽と虞美人との故事であった。

抜山蓋世の英傑・楚の項羽が、絶代の美姫虞氏をかたえに、四面楚歌の重囲に陥ちた垓下で、悠々惜別の宴を張って、吟じ且つ舞った一齣は、余韻をひいて、千載の後まで、青史の花として活きている。

項羽――名は籍、身の丈高く、容貌魁偉、鬚髯神のごとく、力能く鼎をあげ、才気もまた人に超えた。少時、書を学んで成らず、去って剣を学んだが、亦成らなかった。父項梁が叱りつける

と、昂然として、「書は以て姓名を記すに足るのみ、剣は一人の敵を討つにすぎず、学ぶに足らず、自分は、万人の敵を学ばん」とこたえた、という。

大戦七十、小戦八十、未だ曽て敗を取ったことはなく、天下を蹂躪して、漢王の心胆を寒からしめたが、最後の一戦に利なく、ついに、残兵八百余人を剰すのみになった。四面から漢軍のうたう楚歌をきいて、項羽は、皆に永訣を語った。

まず、愛妾虞氏が、自ら、黒髪を梳きあげ、白蠟の頭に刃をあてて、刎ね伏した。項羽は、屍を抱いて、慟哭した。その哀惜ぶりは、幼児が母を喪ったに似て、まことに身も世もあらぬものであった、という。

「虞は死んだ。余も亦死なん！」

項羽は、そう云いはなって、名馬騅に跨って、麾下の壮士を従えて、一気に重囲を衝いて、南に馳せた。江淮を渡る時は、従騎わずか百余。陰陵に道を失い、一田夫にあざむかれて大沢に陥り、東城に及んだ頃は、残卒二十八騎のみ。

「いまは、これまで——」

項羽は、馬首をかえすや、追兵五千騎のまっただ中へ馳突して、一将軍を斬り、一都尉を仆し、雑兵数十名をあの世に送ったのち、烏江に到った。亭長が、船を艤して待ちうけていて、江東千里、衆なお十万余であるから再起は可能です、と慫慂したが、おのれがはじめて江東を出る時、子弟八千を率いていたのに、いま一人の生きて還るものはない、何の面目があってその父老に見えんや、と云って、自ら、首を刎ねて斃れた。

狂四郎は、ひくく、千古の絶調をくちずさんだ。

三軍散じ尽きて旌旗倒れ、
玉帳の佳人座中に老いたり。
香魂夜剣光を逐うて飛び、
青血化して原上の艸となる。
芳心寂莫として寒枝に寄せ、
旧曲聞き来りて眉を斂むるに似たり。

…………
滔々たる逝く水今古に流る、
漢楚の興亡ふたつながら丘土。

不意に――。
どこからか、風に乗って、女の悲鳴が、きこえて来た。
「ちぇっ！　弥太兵衛の野郎、また、やってやがる――」
前の男が、いまいましげに、吐き出した。
「なんだ、あれは？」
断続する悲鳴をきき乍ら、狂四郎は、訊ねた。
「この裏手に、蔵前の札差の屋敷跡がありまさあ。土蔵だけひとつ残っているのを、弥太兵衛という刺青師が借りて仕事場にして居ります。おききおよびかも知れませんが、江戸で指折りの名人でござんしてね、おまけに、お奉行所おかかえなんでさ。……刺青師という奴は、おしなべて変り者が多うござんすが、とりわけて弥太兵衛は、人間ばなれしやがって、笑った面も、口をき

いたのも、誰も見たことがねえ、というくらいなんで……」
隣りの男が話をひきとって、
「野郎は、てめえの気に入った綺麗な餅肌をもった女と見込んだら、そりゃアもう、蛙をねらった蛇なんでさ。未通女（おぼこ）だろうが、人の女房だろうが、見さかいなく口説きかかるしまつでござんしてね。……去年の暮にも、両国の垢離場（こりば）の小屋女をつけまわして、とうとう、無理矢理、土蔵へひきずり込んで、歓喜天を彫りあげてしまいました。その時も、凄い悲鳴を、十日あまり、ぶっ通しできかされたものでさあ。……弥太兵衛は、彫りあげてしまうと、もうその女にはなんの興味もなくなっちまうんでござんすね。外へ抛り出された小屋女は、いまに弥太兵衛を殺してやると、わめき散らし乍ら、両国へ戻って行きましたがね――」
地廻りらしい別の男が、口をはさんだ。
「あの短剣打（でば）ちのお艶は、刺青のおかげで、人気があがったそうだぜ。短剣を投げる時、ぱっと片肌ぬぐと、歓喜天があらわれてよう――」
「ともかく、かどわかして来たか、たのまれたのか――どっちにしたって、悲鳴をあげやがるんだから、こいつは、しまつにおえねえやな」
「尤も、弥太兵衛は、何百両も蓄（た）めこんでいて、女を抛り出す時には、たっぷりくれてやると云うぜ。おれが、女なら、ひとつ、やってもらいてえみてえなもんだ」

二

いま――。

景が、あった。
数本の百目蠟燭の焰に、ものみなの巨大な影が壁でゆらいでいる土蔵内では、奇怪な無慚の光景が、あった。
太柱に、うしろ手にくくりつけられた若い女が、緋の背丈襦袢の前をひきはだけられて、両股を大きく、大の字にひらかされている。面立はさほど美しいとはいえないが、成程名人刺青師が目をつけるだけあって、むっちりとした柔肌は、色といい、艶といい、申しぶんない美しさであった。
それに彫られたものが、奇抜であった。
いっぴきの河童が、腹部いっぱいを泳いでいるのであった。両足は、恰度、豊満な乳房を蹴あげているあんばいになり、両手は長くさしのべて、双の太腿をしっかと摑んでいる。そして、その尖った嘴は、女の亀裂を掩うた疎毛を、銜えていたのである。
女は、もはや、反抗の気力もうせて、がっくりと、あらい髪のあたまを、太柱へ凭りかけて、うつろな視線を、天井へ投げていた。尤も、この刺青というものは、ひとたび、細針を束ねた簓(ささら)で墨を肌に入れられたならば、中途で逃出すわけにはいかなくなる。どうせよごれた肌ならば、いっそ、彫りあがるまで堪えようというあきらめが働くのは人情であろう。対手が、名人であり、心魂を傾注した姿の凄じさに、いつしかうたれるであろうし、しだいに描かれる文様に、知らず知らず惹き入れられてゆくことになるのだ。
いま、女の拡げられた股間に蹲って、最後の仕上げ――河童の顔へ、爛としてひきむいた目を入れている初老の刺青師の、憑かれたような形相は、この仕事にいかに心身を使い尽したかをしめしていた。

「ひいっ……ひいっ……」

箆が、ぶすっぶすっ、とつき刺さる毎に、女は、腹部をうねらせて、悲鳴をあげるのだが、それは、苦痛を忍ぶことにマゾヒズムの陶酔感をおぼえている――あきらかに、その風情があった。腹部がうねるや、河童もまた、妖しく、くねくねと泳いだ。

……ようやく、弥太兵衛は、びっしょりと汗を噴かせた顔を擡げると、あらためて、おのが至芸の成果に眺め入った。

「…………」

満足げに、口のうちで、何かぶつぶつ呟き乍ら、片手をのばして、いとおしむように、河童をそろそろと撫でさすった。架空のけものは、温く、柔かく、この上もなく心地いい触感を、てのひらにつたえる。……

やがて、弥太兵衛は、のろのろと立ちあがると、百目蠟燭の灯を吹き消して、勾配の急な梯子段を降りて行った。

女は、闇の中で死んだように身動きもしなかった。正面の天井ちかくに、二尺四方ぐらいの明りとりの鉄格子の入つた高窓が切られていたが、月も星もない夜で、光はさし込まず、ただ薄ぼんやりと白く浮きあがっているだけであった。

弥太兵衛が、外へ出て、重い扉を閉めて、それへ大きな函鏁（はこじょう）をおろす音が、静寂の夜空にひびいて、その高窓から、女の耳にもつたわった。

女は、びくんと四肢を顫わせたが、それきり、じっとしていた。

弥太兵衛は、ひどい跛であった。一歩毎に、上半身は、惨めにがくんと傾斜した。片足は短い

ばかりか、自由に前へ出ないらしく、ずるっずるっと、地をひき摺った。
そうした恰好で、弥太兵衛が、入って行ったのは、その居酒屋であった。
客の半ばは入れかわっていたが、依然として同じ場所へ同じ姿勢でいるのは、狂四郎と新吉という若者であった。狂四郎は、数本の銚子をならべて、黙々として飲みつづけていたし、新吉は、ずうっと俯っ伏したままだった。
弥太兵衛が、ここへあらわれるのは、日課になっているらしく、むっつりとして、台に就くと、すぐに小女が、酒と突出しをはこんで来た。
酒毒らしく、弥太兵衛は、こまかく顫える手で、銚子をとりあげて、盃についだ。この見すぼらしい爺さんの顫え手が、どうしてあんな絢爛たる刺青をつくり出すことができるのだろう、と、客たちは、怪訝そうに見戍っていた。
狂四郎だけは、暗く沈んだ眸子を宙に置いていていた。
——美保代は、死ぬだろう。
その不吉な予感が、ずうっと、脳裡に澱んでいるのであった。
渋谷の丘陵にある母と静香の墓が、思い泛ぶ。
自分という男を生んだために、云い難い悲惨な境遇を送り、そしてひっそりと燭光の消えるように死んで行った母。そして、そのかたわらには、自分という男があらわれたために、女の哀しさにもだえて、みずから生命を断った静香が、ねむっている。
——母の墓の右脇が、空いている。もうひとりの不幸な女が、そこにねむるために、空いている……。

いくたびか、その不吉な予感を払いすてようとして、いまはもう、狂四郎は、それが美保代に与えられた宿命だと、しずかに肯定していた。

——おれは、美保代のために、なにをしてやったろう？　一片の愛情もなく犯して……慕われるにまかせて、すてて顧みず……尼寺に入っていたのをつれ戻して、見知らぬ他人の捨子をおしつけて、養わせ……血を喀きつづけて高熱に喘いでいるのに看取ってやろうともせず、こうして痴れ酒をくらっている！

三

「おおっ、ひでえや。昼は桜が散って、夜は牡丹が降りやがる。縁日にかこつけて、江戸中が浮かれやがったんで、大師さんが、つむじを曲げたんじゃねえか」

あたらしく入って来た客が、胴ぶるいし乍ら、腰切り半纏に降りかかった白いものを、はたいた。

一人が、おもてをのぞいてみて、

「へえ、乙にこう舞ってやがる。……淡雪と消えるこの身の、思い寐に、浮名をいとう恋の中——って、こういう時に、吉原へ飛んで行ったら、敵娼が惚れ直してくれらあ」

この時、弥太兵衛が、三本の銚子を、ひとしずくあまさず、あじわい終えて、がくんがくんと、上半身を大きく傾斜させ乍ら、雪の中へ出て行った。

それから……左様、今日の時間で、ものの二分間も経ってはいなかったろう。

突如——。雪空をつんざく、異様な唸り声が、つたわって来た。

「なんでえ、ありゃア？」
地廻りの男が、大声をあげた。
台に俯っ伏していた新吉も、ぴくんと肩を痙攣させて、顔を擡げた。
「殺されたようだな」
重苦しい沈黙をやぶって、狂四郎が、いった。
「えっ？　本当でござんすか？」
「うむ。裏手からきこえたところをみると、弥太兵衛だろう」
人々は、一斉に、立ちあがって、顔見あわせたが、どっとわれ勝ちに、とび出して行った。
広い屋敷跡は、綺麗に整理されていて、それに、うっすらと白く雪が撒かれていたので、扉のはずされた表門から、一直線に、土蔵まで、弥太兵衛の特長のある足痕が、点々と捺されていた。
およそ、一町余の距離であった。皆は、怕わ怕わ、土蔵へ近づいて行った。
弥太兵衛は、そこの扉の前で、俯っ伏していた。函鏁（はこじょう）へ、大きな蝦鍵をさし込んだ手をそのままに――。
その背中には、ふかぶかと、短剣が突き立っていたのである。
一人が、岡っ引を呼びにすっとんで行ったあとで、新吉が、無言で、死人の手から鍵をもぎ取って扉をひらき、中へふみ込んで行った。階上に灯をつけたかと思うと、すぐに出て来て、
「女は、仏店のけいころだ。ひでえことをしやがる！　弥太兵衛の野郎、罰があたりやがった。因果応報だ！」

と、吐きすてた。
岡っ引がやって来たのは、それからすぐで、一同から聴取すると、何者かが、屋敷内にひそんでいて、弥太兵衛が扉を開こうと踴みかかったところを狙って、背後から短剣を投げたと——これは誰しもそうとしか考えられなかったことで、すぐに、土蔵のまわりを調べはじめた。
ところが——。
奇怪であったのは、土蔵の前の、白い布を拡げたように、雪が降りつもったひろびろとした平地には、なんの足痕もとどめてはいなかったことである。
「面妖(おか)しいな？……おめえさんたちが、門に立った時には、たしかに、弥太兵衛の足痕しかついていなかったんだな？」
皆は、異口同音に、そのことをみとめた。
「旦那——」
岡っ引は、死骸のそばへ寄って、短剣の突き立った状(さま)を見やっている狂四郎へ、呼びかけた。
どうやら、こっちが何者か知っている様子で、
「ひとつ、智慧を貸しておくんなせえ」
「さあ？　わたしにも、わからんな。下手人が親分をあざけるには、お誂えむきの雪のようだ」
狂四郎は、そう云いすてて、すたすたと、出て行った。

四

翌日の午すぎ、狂四郎は、両国の川沿いの並び茶屋のひとつ「東屋(あずまや)」の牀几に、腰を下してい

た。
急におもてが騒々しくなり、群衆が、どっと一方へ駆けはじめた。
茶汲み女が、見知った顔をさがして、
「どうしたのさ？」
と、問いかけた。
「短剣打ち（でば）のお艶が、ひっくくられて行くんだ！」
こたえて、一散に走って行った。
狂四郎は、腰をあげると、何を考えているのか、
「おい、これをもらって行くぞ」
と、茶碗をひとつ、女にしめして、袂に入れると、すっと、往還へ出た。
急ぐでもない足どりであとを追うた狂四郎は、群衆をわけると、小屋女を後手に縛った縄をとっている岡っ引へ、
「親分、下手人は、この女ではない」
と、云いかけた。
岡っ引は、振りかえって、険しい目つきで睨み返した。
「この女じゃねえと、どうしてわかりなさる？　この女は、昨夜のあの時刻、小屋にも家にもいなかったんですぜ」
「大方、色男に刺青をみせて、愉しませていたのだろう。……わたしが、この女が下手人ではないことを、証（あか）してやろう」

それから、半刻のち――。
「わたしが、中に入ったら、鍵をかけてもらおう」
「承知いたしやした」
「百かぞえたら、また、あけてくれ」
狂四郎が、姿を消すと、岡っ引は、扉を閉めて、函鎂をおろし、がちゃりと鍵をかけた。なんのことかさっぱり判断のつかぬままに、岡っ引は、目を光らせて、扉を睨みすえ乍ら、数をかぞえはじめた。
やがて、百になり、岡っ引は、躍みかかって、函鎂へ、鍵を、突っ込んだ。
とたん――。
「うっ！」
と、呻いて、岡っ引は、膝を折って、つッ伏した。したたか、背中を打たれて、息がとまったのである。
ようやく、立ちあがった岡っ引は、片手をまわして痛む個所をおさえつつ、きょろきょろと、まわりを見まわした。
茶碗が一個、地べたにころがっていた。これが、命中したのである。狂四郎は、土蔵から出て来ると、薄ら笑い乍ら、
「どうだ、親分――わかったか？」
「へえ？」

岡っ引は、まだのみ込めぬしかめっ面であった。狂四郎は、片手をあげて、戸口の上はるかに切られた高窓を指さした。
「あれだ！」
「あ——」
岡っ引は、唖然とした。鉄格子のはまった高窓から、顔をのぞけることは不可能だが、手をさし出すことは容易であった。そこから、茶碗をおとしたのである。短剣をおとしていれば、岡っ引は、弥太兵衛と同じ最期をとげた筈である。
「じゃ、爺さんを殺ったのは、刺青をされた仏店のけころだった、と云いなさる！」
「そうだ」
「しかし、旦那——。あっしが、昨夜、入ってみた時は、女は、柱へ、後手に、ふん縛られて居りやしたぜ。自分で解くことができるかも知れねえが、自分で縛ることはできねえ。可笑しいじゃござんせんか」
「共謀者がいた」
「へえ」
「新吉だ」
「な、なんですって？　あの気の弱い奴が——？」
岡っ引は、信じられぬ面持だった。
「親分が、仏店の通りで出会った時、新吉は酔っぱらっていたろう。あれは、芝居だ。酔ったふりをしていた。……弥太兵衛が殺されているのを見つけて、まっさきに、新吉が、この扉をひら

いて、中へ入って行った。つまり、女を、柱に縛りつけておくためにだ」
「成程――」
岡っ引は、感心して、あらためて、高窓を仰ぎ見た。
狂四郎は、もう、ふところ手になって、歩き出していた。
岡っ引は、あわてて、
「旦那！　どうして、このことを、昨夜教えちゃ下さらなかったんです？　奴らは、もう飛んでいますぜ」
と叫んだ。
狂四郎は、首をまわすと、皮肉な微笑を口もとに刻んで、
「そうさせるために、わざと、黙っていたのだ。惚れあった仲だったのだろう。弥太兵衛が蓄めこんでいた金をさらって、上方へでも行って、むつまじく、くらすだろう。弥太兵衛も、もって瞑すべきではないか」

桃花無明剣

一

——好い日和だ。

眠狂四郎は、縁側に彳んで、庭の南端に、七分ばかり咲いた桜の花を眺め乍ら、ふっと、うすい微笑を、顔にのぼせた。

空は、絹の布をひろげたように、きれいに晴れわたり、宙いっぱいに満ちた春の光の中にすがたをかくしたひばりの声が、絶え間なく、降っているのであった。

今日は、上巳節句であった。

上は大奥から、下は裏店にいたるまで、初雛の祝宴が催される。物学びする者は師の許へ、佳辰の礼に目録の包物を持参する。武家は上司へ、職人は親方へ、商人はおとくいへ、僧は師の坊へ、店子は家主へ——それぞれに、御機嫌伺いに出かけるならわしであった。

寄植の生籬のむこうを、かげ絵のように静かに通り過ぎて行く人影も、みなそれぞれに、晴着をつけているのである。

——おれの最期が、こんな佳い日では、もったいないようなものだ。

狂四郎は、そう思う……。

白鳥主膳から、果し状が届いていて、それが今日であった。

思えば——一年前の今日、狂四郎は、主膳をとらえて、桂宮明子とともに、生雛にしたてて、将軍家斉の面前に曝したものであった。

主膳が、復仇の日を、今日と思いさだめたのも、頷かれることである。

いくたびか決闘の機会を迎え乍ら、ついに、一方が葬られずにおわったのも、運命の神が、今日をえらんでおいたからであろうか。

今日こそは、必ず、孰方かが、血海に伏して、生涯を熄ることになる。

これは、もはや、避くべからざる宿業として、狂四郎の心底に、静かに納められた。

昨夏、主膳から果し状が来た時は、多分の逡巡があった。機は熟していなかった、といまにして思いかえされる。

狂四郎は、こうして、のどかな春の陽ざしをあび乍ら、あたかも、兵法に云う「真我の我」を悟り得たように、おちつきはらっている自分に、満足をおぼえていた。といって、魂の清澄を得たとは、思わぬ。一剣に拠って、無明を払わんと心掛けたおぼえなど、ただの一度もないのである。白刃に対した瞬間は、不動智神妙の心をもってこそ事理一体の働きがなし得るといわれているが、おのれの場合は、全くその正反対の業念に呻く捨身を、石火の機に働かせて来たのである。

本心妄心、という。例えれば、本心は水、妄心は氷であろうか。氷と水はひとつのものだが、氷では手も顔も洗われぬ。氷を解かして、水として、いずこへでも流したいように流してこそ、それは、全き自由の使い様となる。剣の極意は、水の心である。

しかるに、狂四郎は、あえて、氷心をえらんで、危機に臨んでは、それを、間に髪を容れず、虚空に四散せしめて、水と化して来た。

あくまでも、その剣は、殺法であり、断じて、活殺自在三昧の境地とは本源を異にしていた。抜けば、必ず、斬った。

もとより、禅に謂う拈華微笑（ねんげみしょう）の旨を得る兵法者は万人に一人もないことであろうが、殺法をふるう輪廻の妄心をもって、おのが五体を地獄へ送ろうとし、かえって事理を極めて、常に死地をまぬがれて来たこの男の人生も、稀世としなければなるまい。

ふしぎなのである。

この静かな、禅心にも似た心のおちつきぶりは――。

空を仰いで、もう一度、

――佳い日和すぎる。

と、胸で呟いた。

そのおり、背後で、衣ずれの音がした。

「旦那さま――」

美保代が、呼びかけた。

振りかえった狂四郎は、眉宇をひそめた。居間の褥の中にいるものとばかり思っていた美保代が、いつの間にか、きちんと身じまい整えて、新しく仕立てた黒羽二重の着物を持って来たのである。

「お召換えを――」

しとやかに、両手をつかえて、じっと仰ぎ視た。

うっすらと化粧した眉目は、褥の中にあった時の氷肌のつめたさをはらって、清楚な艶やかさをふくんで、美しかった。理智のちからで、熱もおさえたように、明眸も冴えていた。

——知っているのだな、今日の果し合いを。

狂四郎は、微かな胸の痛みをおぼえた。

昨夏、主膳に挑戦されて、それを受ける決意をした夜、美保代は、水垢離をとって、その勝利を祈ったのち、突如、狂ったように、すがりついて、「お死にになっては、いやです！」と、慟哭し、身もだえたものであった。

今日は、佳辰の礼にでも出かける良人を送り出すように、なにげなく、優しく、着換えをすすめている。死期を迎えた者の、ふかい愛情は、こうしたあまりにも静かなかたちをとるのであろうか。

——このおれに看取られつつ逝くのを、ただひとつのねがいにして居ったのであろうものを……。

そう考え乍ら、狂四郎は、黙って、病める身で心をこめて縫いあげてくれていた着物へ腕を通した。

美保代は、手つだい乍ら、

「新太郎は、どこへ、参りましたでしょう？」

と、訊いた。

「そのあたりに居る」

さっき、浅黄頭巾の鳥さしが、黐竿をかついで、通りかかるのを見かけて、下僕が背負って、あとを跟いて行ったのである。
狂四郎は、あらたまった別れをせずに、このまま、出て行く積りであった。
約束の時刻は、すでに来ていた。
美保代は、玄関へ送って出ても、みじんも、そのしとやかな挙措を崩さず、
「行っておいでなさいませ」
と、頭を下げた。
美保代は、かたく信じていたのである。
じぶんの臨命終限にあたって、狂四郎が、枕もとに坐っていてくれることを——。

二

同じ時刻、白鳥主膳は、荒れはてた屋敷の庭に蹲って、置石へならべた籠の小鳥たちへ、すり餌を、与えていた。
縁側へ坐って、それを眺めているのは、備前屋であった。
先日まんまと裏切られたことなど、けろりと忘れすてた顔で、やって来て、
「いよいよ、本日、眠狂四郎と果し合いをなさいますそうで——」
と、挨拶したのである。
主膳が、えらんだ決闘の場所は、高姫の住む屋敷の庭であった。それをききつけて、備前屋は、先日の自分の狂四郎に対する卑怯な策謀を、口止めしようとして、やって来たのである。狂

四郎から、詫び状をもらって、高姫にさし出してあったが、主膳から、いきさつを喋られてしまったら、いかにも狂四郎より役者が上とみせかけた自分の面目が、まるつぶれになってしまうのである。

備前屋は、もし貴方様がお勝ちのあかつきには、ひとつ、抜荷船で、海のむこうを見物して頂こうと考えて居ります、と遠まわしな懐柔策を用いたが、主膳は、返辞をせずに、小鳥へ、すり餌をやりはじめたのであった。

「備前屋、この目白は、おぬしが届けてくれたのであったな」

「左様でございます。音色は、ご満足いただけたと存じますが――」

と、こたえた備前屋は、主膳が、つと籠の戸を開けるのを眺めて、息をのんだ。

小鳥は、ちょっと、様子を窺っていたが、チョンと、戸口に出て来て、かれんに小首をかたげたとみると、ぱっと青空めがけて、飛び立って行った。

主膳は、つぎつぎと、籠の戸を開けた。鶯も、雲雀、紅雀も……飼いならされた程度に応じて、それぞれ、外へ出るのをとまどったり、しばし芝生の上をさまよったり、うれしげに樹の枝で啼いたりしたが、とどのつまり、自由なひろびろとした宙へ、翔け去った。

沈黙をまもって、その光景を眺めやっていた備前屋は、主膳が、さいごの籠の戸を開けようとするや、思わず、

「あ――それは！」

と、声を発した。

それは、かねて、主膳が、自分の唯一の宝だ、と誇っていた白鶉（うずら）であった。備前屋が、たのま

れて、鶉合せに出して、一等にえらばれた名鳥であった。
「それだけは、おのこしになりませぬか。てまえが、お預りいたしましょう。もったいのうございます」
そう云われて、主膳は、ちょっと躊躇したが、すぐに決意通りに、戸を開けた。
鶉は、戸口から、いったん、苔を置いた織部灯籠の頂きにとまり、ついで、柊の小枝に移って、飼主へ別れの一声をのこすや、ひょーっ、とはばたいた。
中空へむかって、吸い込まれるように、一条の白い線をひいて、翔けのぼって行く――。
主膳と備前屋の目が、その跡を追った。
と――。
突然、その白影が、はげしく痙攣したとみる間に、大きくつばさをひろげたままで、一直線に落下して来た。
「おっ――」
同時に、二人の口から、驚愕の呻きが発した。
築地塀のきわへ、ばさと落ちるのを見とどけて主膳は、いそぎ足に、近よって行った。
ふっくらとした和毛（にこげ）の胸に、短い吹矢がつき刺さっているのを見下した刹那、主膳の秀麗な白面が、異常な形相と化した。
何者のしわざかは知らず、これは、あまりにも不吉な前兆であった。
だが――。
縁先へもどった時、主膳は、もとの気色をとりもどしていて、

「備前屋、おぬしに、千両で売りつけておくのであったな」
と云って、華やかな笑い声をたてたことであった。

三

采女ヶ原を抜けて、万年橋を渡ると、旗本大身の大きな屋敷がつらなっている。その小路をまっすぐにつききると、西本願寺であった。
高姫の目下のすまいは、その裏手に在った。
いつもは、ひろびろとして、人影まれな旗本小路も、今日は、節句の礼者の往来が繁く、年にかぞえる程しか外出しない子女たちの盛装したすがたが、あでやかに、塀ごしの花と咲き競う眺めであった。
こうした賑いの中を、ゆったりした足どりで行く、目もあやな衣裳の亀屋頭巾の遊士は、いかにも、この景色にふさわしい。
……鬼も十七、つい年くれて、男ほしさの色盛り、花より先へ、いたずらな、風が誘わば、どちらへなりと、散って吹かれて手枕に、寝て見る夢もあるならば、うれしかろもの、しんきらし、何故に出雲の神さんが、殿御むすんでおくれはせいで、鉄漿(かね)もつけねば、袖とめず……
ひくく、清元「京女郎」を口ずさみ乍ら、やがて、めざす屋敷の門前に来た。
恰度、反対の方角から、どうやら大奥からの御代参とおぼしい総蒔絵の女乗物が、対先挾箱、局(つぼね)、添番伊賀者、お小人などをしたがえて、しずしずとすすんで来た。

偶然にも、その行列は、主膳の入りかけた表門へむかって来たのである。

主膳は、かまわず、さきへ、すたすたと足をはこぼうとした。

「これ――」

局の一人が、咎めた。

「頭巾をとって、ひかえませぬか！」

主膳は、冷たく澄んだ眸子（ひとみ）をめぐらして、

「そちら様も賓客ならば、こちらも、それにかわりはない」

と、こたえた。

「無礼な！　このお乗物が、目に入らぬか！」

総蒔絵の女乗物は、御台所か御簾中か姫君に限られているのである。黒看板（法被）の六尺が、十二人でかついでいる。

主膳は、窓についた葵の紋をみとめたが、べつに、頭巾をとろうともせず、ただ、二歩あまり退っただけであった。

局は、苛立って、添番伊賀者へ、

「頭巾をとらせ」

と、命じた。

この時、お駕籠の窓が、するっと開けられて、

「かまいませぬ。この者は、わたしの知り人なのです」

と、美しい声が、かけられた。

内親王桂宮であった。

主膳は、おどろいて、

「姫宮さま！　どうして、ここへ、いらせられました？」

と、問うた。

明子は、微笑して、

「高姫どのより、雛祭のおまねきにあずかりました」

「……？」

主膳は、とっさに高姫の真意を、はかりかねた。

眠狂四郎と自分との果し合いの場所を、この屋敷の庭にえらんだのは、実は高姫のすすめによる。

もともと、主膳が、狂四郎を討つ役を引受けたのは、京にあって、高姫に使嗾された隠密団が、なんとしても歯がたたぬ、ときいたからであった。主膳は、高姫に、自分がしとめてみせると断言して、江戸へ帰還して来たのであった。

したがって、高姫が、その決闘を、わが屋敷で果させることにしたのは、当然といえた。

——姫宮にも、試合を、見せようというのか？

主膳は、微かな動揺をおぼえた。

「そなたも、まねかれたのですね？」

そう訊ねる明子の、何も知らされていない無心な面持を眺めて、主膳は、高姫に対して憤りを湧かせた。

――わしが斬られるにせよ、狂四郎が仆れるにせよ、姫宮に見せてはならぬ！
そう思った。
「では、いずれ、後ほど――」
主膳は、一礼して、お駕籠をさきに行かせた。

四

高姫は、大層、機嫌がよかった。
お小直衣（このおし）雛、次郎左衛門雛、能人形など、美しく飾った客座敷で、明子を、実妹でも迎えるように、いそいそと款待した。
生れてはじめて、雛祭というものに接する明子は、曲水の金屏風の前に飾られた雛が、ひとつひとつ珍しかった。人間とそっくり同じ御膳に、小さく、ほんものの料理が盛られているのも、明子を、よろこばせた。
本膳が、平（ひら）、つぼ、むこう（焼きもの）、味噌汁、猪口（ちょく）、香の物、羊羹、きすの白焼、青物。二の膳が、さしみ、てり焼、吸物。三の膳が、しゃれた香の物、酢の物、鬼がら焼。いずれも、ほんもので――例えば、焼いた鯛など、人さし指ほどの可愛らしいものであった。
雛段の前に敷かれた猩々緋の毛氈には、御用達町人からの、色々な献上品が、うず高く積まれてあった。なかでみごとなのは、糸花と巻縮緬であった。大奥からは、貝づくしの大盤台がとどいていた。本丸老中からは、瀬戸物のかぶせ蓋のついた容れ物へ入れた伽羅油が、贈られていた。

高姫は、これらの品々のうちで、どれでも欲しいものをさしあげましょう、と明子に約束した。
やがて、侍女たちが、餅菓子やら鉢盛りの笹巻ずしやら、ごもく鮨やらを、はこんで来た。
「さ——では、姫宮さま、一献お召しあがり下さりませ」
高姫は、蒔絵のあるギヤマン徳利をとりあげて、明子に、白酒の酌をしようとした。
明子は、ギヤマン盃を両手にとり、受けようとして、ふと、雛段の両脇に据えられた黒塗の花桶へ目をとめた。
「あの……お雛さまには、桃の花をかざるのではありませぬか？」
その花桶には、桜と椿と山吹が咲いていたが、かんじんの桃の花だけが活けてなかった。
「ほほほほ……ようこそ、お気づきなさいました。——姫宮さま、桃の花は、男子に手折ってもらうならわしがあることをご存じでございますか？」
「いいえ」
「その花桶に、わざと桃の花をかざらなかったのは、おもしろい趣向を思いついたからでございます。……本日、当家へ、秀れた剣の使い手が二人、参って居ります」
「…………」
明子は、大きく目をひらいて、高姫を瞶めた。
高姫は、さも愉しげな様子で、
「白書院にいるのが、白鳥主膳でございます」
「…………」

「黒書院にいるのが、眠狂四郎でございます」

「えっ？」

明子の顔色が、はっと一変するのを、高姫は、おもしろそうに見やって、

「姫宮さまは、白鳥主膳に、庭に咲いた桃の花を、一枝手折って来るように、お命じなさいませ」

「…………」

「わたくしは、眠狂四郎に、そう命じましょう」

五

「外露地に咲いている桃花一枝を――」

と、侍女からたのまれて、黒書院を出た狂四郎は、玉石敷をふんで行った。

仕切塀の中門を潜ると、茶亭があり、植込み、下草、配石の結構は、みごとであった。

光と影が織りなす春の庭は、ふかぶかとした青色に、その幽玄の気品を濃くたたえていた。竜胆（りんどう）や春蘭の芽萠え、厚さを増した青苔、そして楓、樫、樅、にしきぎ、あせぼ、くちなし、ぐみ、うつぎ、ほうの木、などのしっとりと陽に光る葉翳――。

水がひき込んであって、飛石を縫った細流れが、しずかに、底にならべた小石をゆらめかしている。

流れは、小池泉に入っていた。それに架けられた八ツ橋を渡ろうとして、狂四郎は、

「……？」

視線を、むかいの砂雪隠へ投じた。
そこに——何者かが、身をひそめているらしい、と直感した。
こちらを、じっと凝視する鋭い目が、神経につたわったのである。ふりかえった時には、勿論、もうその蔭へかくれてしまったが、ただのぬすみ視とは、ちがっていたようである。
——警衛の伊賀者にしては、殺気がありすぎるようだ。
そう思ったが、べつに追い出す気持は動かず、八ツ橋を渡って、斜堤に沿うて、外露地にむかった。
くすんだ杉の錆皮を張った塀がつらなり、柿葺門を抜けると、広い砂庭であった。
伊予の八幡浜川からはこんで来た青砂で、水の波紋を模した箒目がつけられていて、美しかった。
桃は、ただ一樹だけ、ほぼ中央の位置で、らんまんと花盛りであった。
狂四郎は、第一の飛石に立った時——見た。
むこうの塗込み象眼土塀の蔭から、妖冶な孤影が、つと、出現するのを——。
対手もまた、じっと、こちらへ、眼眸（まなざし）を据えて、足を停めた。
数秒を置いて、両者は、まったく同時に、すっと、一歩ふみ出した。
桃樹へむかって、双方の歩みは、同じ歩幅と速度をもった。距離もまた、等しかった。
陽は、桃樹の南にあたり、近づいて行く波砂上の二個の影法師は、平行した。
一間をへだてて、狂四郎と主膳は、ぴたりと、立ちどまった。
静かであった。

風はまったくなく、桃の花びらは、美しく陽に映えて、そよともせぬ。匂いだけが、明るい宙に満ちているのであった。

ともに、口を緘んだまま、いつひらくとも思われなかったが、思えば、それは、わずか二分あまりの短い時間にすぎなかった。

ただ——闘いは、もはや、その瞬間から、開始されていたのである。

互いの眼光は、燠火（おき）のように、沈んだ深い色に彩られていたが、おそろしい力は、その奥に燃えさかって、心身いっさいの機能を、たたかいへ動員していた。

「おぬしは、高姫殿から、たのまれたか？」

まず、最初に、主膳が、その言葉を吐いた。

「左様。お手前の方は——？」

「桂宮からのたのみだ」

「……？」

狂四郎の片眉が、びくっとひきつった。

——高姫の仕組んだことだな。

そうさとって、狂四郎は、冷やかな微笑を、口辺に刷いた。

それから……さらに、幾秒かが過ぎて——。

頭巾のかげの主膳の眸子（ひとみ）が、かっと瞠かれるや、凄じい炳乎たる光芒を射放った。

「眠狂四郎、いざっ！」

満身の闘魂を、その叫びにほとばしらせて、抜く手も見せず、一刀を、ぴたっと、右半身中段

高めに構えた。
同時に、無想正宗も、砂上に、細くその影を映していた。
沢庵が筆になる、と称せられる『太阿記』一巻の一節に『大用現ずれば軌則は存在せず、順行逆行、天も測る莫し』とある。
大用（太陽）は十方世界如何なるところにも行渡って、鵜の毛の先程もはずれたる処はない。人間のつくったのり法度など、大用現前の上には存在すべくもない。
したがって、事を為すにあたって、順にやろうとも、逆にやろうとも、どちらも自由であり、なんの障りもない。天も、はかることは叶わぬ。
この禅語によって説かれた剣の道理は、まさに、この凄絶の決闘に、あてはまった。
極端な云いかたをすれば、両剣には、もはや、技は無きにひとしかった。独妙の法形など、なんの役に立つとも思われなかった。
剣には、いくたの法形がある。丸橋刀、波切刀、乱車刀、獅子乱刀、清眼破、柳雪刀、鷹之羽、三心刀、剣忍誠、水月刀、中眼刀、無拍子、など……。
もとより、これらの極意は、それぞれ、事の理をねりあげた秘術であって、容易に使い得るものではない。
しかし、この場合、それらいずれの刀法をえらぼうとも、それに応じて間髪に生む意外の業を、狂四郎も主膳も持っているのである。云いかえれば、かりに、波切刀を使わんとして、斜刀をもって、波濤の汀に向うの勢いで、打ち込み、翻身刀身を廻して、敵の右手を撃とうとせんか――その一刹那に、その刀法を看破した敵刃は、その裏をかいて、翻身の位置へ先まわりして、

思いもかけぬ一撃をあびせるに相違ない。
一定の法形をえらぶことそれ自体が、自らを危機に陥れるとなれば、この対峙は、技をすてさるに如くはない。
静止は、無限につづくがごとくであった。
と――一瞬。
狂四郎は、主膳の青眼に、例えれば一毛のそよぎにも似た乱れが、浮くのを見た。
狂四郎が、それに乗じなかったのは、おのれもまた、地摺り下段から、円月殺法に出ることをはばまれたからである。
すなわち――。
両者は、ともに、別の場所から放射される殺気をさとったのである。
塗込み象眼土塀の短冊瓦上に、黒衣の男が出現して、ぴたっと腹匍って、吹矢筒を口にしたのである。
狙われたのは、主膳であった。
羽田漁師町はずれ浦守弁天の裏手にあたる廃（すた）れた庵堂の前で、主膳から天皇御璽を奪われた「甲賀忍組第十七番」――それだった。
復仇を誓って半蔵、ついに、その機会をつかんだのである。
「主膳、引けっ！」
狂四郎は、そう叫ぼうとした。
その瞬間、虚空を截る吹矢の唸りが襲い――それを躱すかわりに、主膳がとったのは、一閃

を、桃の一枝へ放つ迅業であった。
それと見た狂四郎の五体は、砂を蹴って、土塀へむかって、疾駆していた。
忍者は、遁げる隙もなく、第二の吹矢を、ひゅっ、と狂四郎の面ていへ送った。
苦もなく、それを両断するとともに、狂四郎は、一間余を跳躍して、切尖ふかく、忍者の咽喉をつらぬいた。
主膳は、狂四郎がひきかえした時、桃樹の根かたへ凭りかかっていた。吹矢は、その左肩に突き刺さっていたが、抜こうとせずにいるのは、毒が塗られてあると知っていたからである。毒は、すでに、全身にまわったとみえて、眸子はにごっていた。
「……拙者の……勝だな……」
最後の気力をふりしぼって、そう云うと、左手につかんだ一枝を、わななかせつつ、さし出した。
「姫宮へ……わ、わたして……もらおう」
狂四郎は、うなずいて、受取ると、頭巾のかげで、その双眼が、微かに痙攣しつつ、目蓋をふさぐのを、じっと見戍った。
常に、白い花を好んで、携えていた艶麗の遊士は、それをとるために、いさぎよく、生命をすてたのである。
桃樹にもたれたその姿は、しばしの午睡をとるがごとく、温雅な、美しい風情であった。

遺書

一

武部仙十郎が、突然、美保代の訪問を受けたのは、上野の桜が散って、王子飛鳥山の花が満開という噂の頃であった。

下屋敷でも、桜狩りが催されたり、御殿女中が宿下りして芝居見物に胸をおどらせる季節で、上屋敷内にも、なんとなく、うきうきした空気が満ちていた。

——病み臥して居るときいていたが、花見気分にさそわれて出て参ったのなら、大したことはあるまい。

そう思い乍ら、書院に入った仙十郎は、新太郎をかたわらにして、端座している美保代を、一瞥するや、

——これは、いかん！

と、狼狽をおぼえた。

生れ出たばかりの蝉の翠翅にも似た透明な肌の色は、あきらかに、この陽春に堪え得ぬ病める翳がふかいものだった。

連娟として細く長い眉と睫毛が、白蠟の皮膚に、冴えて青いのも、かえって、いたいたしい。高く通った鼻梁や、滑らかなくびすじや、膝に組んだ十指に、痩せが目立った。
「出あるいて、大事はないかの？」
そう云って、仙十郎が座に着くと、美保代は、しとやかに、無沙汰の挨拶をし、新太郎にも、作法正しく礼をとらせた。
「狂四郎と白鳥主膳の試合も終ったそうじゃな」
「はい。……帰宅いたしまして、白鳥が勝って、おれが生きのびた、と心重げに申して居りました」
「よいよい。主膳も、花のために、生命を落した。諺に云う、早く咲けば早く散る——」
そう云ってから、仙十郎は、はっとなった。
——南無三！　爺のくせに、口軽め！
自分を叱りつけて、はははは、と笑いにまぎらわして、
「新太郎、三日見ぬ間に大きゅうなったぞ。ここへ来い」と、さしまねいた。
新太郎は、ちょっと母を仰いでから、やさしい目顔でゆるされると、ちょこちょこと老人のそばへ寄って来た。
「どうじゃな大人になったら、父のように強いさむらいになりたいか？」
問われて、新太郎は、碧く澄んだ眸子を、まばたきもせずに大きくひらいたままで、かぶりをふった。寡黙な少年であった。
「ほう……さむらいは、いやかの？」

美保代が、微笑しつつ、かわって、こたえた。
「絵筆を持たせると、いつまでも、ひとりで、遊んで居りまする。それを見て、主人が、絵師になれと申しきかせて居りました」
「ふむ――」
日本屈指の名人と称された仏像師を祖父にもつ少年のからだには、やはり、美を創り出す血が流れている、と知って、狂四郎は、胸裡にほのぼのとしたよろこびをおぼえたに相違ない。
「ひとつ、あとで、この爺に、なにか描いてみせてもらおうかの。なにが得意じゃな？」
すると、新太郎は、にことして、仙十郎の顔を指さした。
「なに？　わしが、どうかしたか？」
「おもしろい顔をしてじゃ」
美保代が、あわてて叱ろうとしたが、仙十郎は、爆発的な高笑いを噴かせて、手をふった。新太郎は、母のかたえに、かけもどった。
仙十郎は、どうにも止まらぬ笑いを、てのひらで、つるりとひと撫でして、納めると、
「いや、まんまとしてやられたわい。みごと、みごと！　このたぬき面に絵心をそそられたとは、まさに、後生畏る可き天賦のほとばしりじゃて。三十に満たざれば人の像を画かず、などと谷文晁は申したそうなが、なんの三歳にして、七十爺のたぬき面を描かんと意欲してこそ、その才華の程、思うべしじゃ。丹磨く可くしてその赤を奪う可からず――ふむ、重畳、重畳、いずれは、天下にその名を知られる絵師に育とうぞ」
と、目を細めて、満足げにいくども頷いてみせた。

「それにつきまして、お願いがございます」
美保代は、両手を畳につかえた。
「この子を、お手もとにお置き下さいまして、折をみていずれかの師におつけ下さいますまいか？」
「……む！」
仙十郎は、別人のように表情をひき緊めて、じっと、美保代を見戍（まも）った。
美保代は、目を伏せたままである。
しかし、その静姿に湛えられたきびしい決意の気色は、仙十郎の胸を強く打たずにはおかなかった。
——死をさとって居るのか！
暗然として、合点した。
「よい、あずかろう」

二

江戸の市街をはなれ、菜の花が一面に咲いた畑の中の道をしばらく辿って、美保代は、駕籠を降りた。
丘陵が、前に、なだらかな斜面をみせていて、春の花は、そこにも、美しい彩りを、明るい陽ざしに浮かせて、蝶を招んで、舞わせていた。
おだやかな、しっとりとした宙に、いっぱいに匂う花の香は、しかし、しずかに歩き出した美

保代にとっては、かなりきついものだった。
中野から、外桜田の水野忠邦上屋敷へ、そして、そこからこの渋谷までの道程を、駕籠にゆられた病軀は、一歩一歩がおぼつかないくらい、疲労重かった。
ふたたび逢えぬ悲しみを怺えて、泪もみせずに、新太郎に別れて来た——その気力も、いま敢なく崩れかかって、うららかな春景色を映した眸子は、いくども、眩暈におそわれていた。
どこか、遠くでなく牛の声や、空でさえずるひばりの音が、耳もとから、遠くなり、そのたびに、美保代は足を停めて、喘ぎを整えなければならなかった。
斜面の中腹に大きな桜樹があり、いまが盛りだった。その木の下に入って、美保代は、凭りかかると、ほっと高熱に酔うた息をはいた。
なんとなく、視線をあげると、らんまんと咲いた花の美しさを眺めた。
——早く咲けば早く散る。
先刻の武部老人の言葉が、思い泛べられた。
——そうなのだ。みにくく衰えて、苦しみもだえて、逝くよりは……。
美保代は、心で呟いた。
狂四郎に見とられつつ、この世を去るのを唯一のねがいにしていた美保代であったが、そのねがいをすてることが、狂四郎の妻たるにふさわしい最期のように、思いかえされた。
——あの方のまぶたに、わたくしのみにくい死顔をのこしてはならない。
しずかに、じぶんに云いきかせた。
その決意が、頂上まで、倒れずにのぼる力を、美保代に与えた。

やがて――。

青草をふんで、櫨の大樹の下に入った美保代は、そこにひっそりと立つ二基の墓石を眺めた。

狂四郎の母の墓が、小さな自然石であるときいていたが、その横にならんだ静香のそれも、同じかたちの自然石であった。そして、それにも、同じく、ただ一文字――「霊」と刻まれてあるだけであった。狂四郎が、ひそかに、一人で、それをつくったものに相違ない。詣でた人が近くあったことをしめしていた。いずれの花立にさしてある樒も、まだ青々と、水を吸いあげていた。

美保代は、まず、静香の墓前に、ひざまずいて、あの世では姉妹のようにむつまじく交わることをねがった。

それから、母の墓前に、身を移して、しばらくは、無心の合掌をつづけた。

そうして、目蓋をとじていると、そのまま、じぶんのからだも、地底へ沈むような眩暈が来た。

目をひらいて、墓石へあてた時「霊」という一文字が、なんという清らかな、神々しさに、映ったことだろう。

――母上様。

美保代は、くちびるをうごかさずに、呼びかけた。

――わたくしが、申上げなくても、もう、母上様は、なにもかも、狂四郎様のことは、ご存じかと存じます。……狂四郎様は、その理由は如何にともあれ、多くの人の命を殺められました。罪は、あまりに深うございます。……妻であるわたくしが、代って、その罪を背負うことは、叶

わぬことでございましょうか。……叶わぬまでも、すこしでも、狂四郎様の罪業が軽くなればと存じまする。……わたくしの屍を、この丘のどこかの雑木の蔭へ曝すことによって、狂四郎様に斬られた人々の怨みを、おひきうけ出来ますならば……。

もとより、墓石は、なんの返答もしなかった。

ただ——。

美保代は、そうして、ふかく黙した墓石を見戍るうちに、しだいに、悲しさも苦しさも溶け消えて、心も血も洗われて、澄んでゆくのをおぼえた。

それは彼女の意識が、急速にうすれることを意味した。

濃い霧が、音もなく、身のまわりを包んでくるような、一種の恍惚とした一瞬が来て——うすれゆく意識がさいごに、ふと聴いたのは、遠く微かではあるが、さやかな綺麗な声音であった。

——狂四郎の罪業を、そなたがひきうけて下さる。おそなたの父上も母上も、ここにるがよい。やさしく、いたわってさしあげたいと思います。……お礼のことばもありませぬ。ここへ参られに、しずかに、くらしておいでです……。

美保代は、少女のようにうなずき、そして、地に崩折れた。

一個の人影が、ゆっくりとこの頂上へのぼって来たのは、このおりであった。

三

『楽水』

という木額をかけた寄棟造草葺の茶堂の丸炉席に正座して、楽水楼老人——松平主水正は、ひ

とり、黙々として、点前をしていた。
南天の影を映した華燈窓からさす春の午後の明りの中に、老人の気品のある十徳姿は、いかにも、この孤独な点前に、無念無想のひとときをすごしているかのごとくみえた。
昨日までは、そうであったろう。
しかし、今日ばかりは、心中におちつかぬものがあって、喫茶しようとした手をとめて、目を宙に据えたまま、べつの想念にとらわれる様子であった。
そこへ——茶道口のむこうに、人の気配があり、
「お殿様——」
と、呼びかけた。
老女中であった。
「入りなさい」
「ごめん下さいませ」
入って来た女中は、お盆の上へ、一通の封書をのせていた。
「あのおかたの帯をお解き申して、胸もとをゆるめてさしあげましたところ、これが——」
老人は、頷いて、受けとった。
『遺書』
と、記してある。
「気息は、どうじゃ?」
「はい。まだ、お目ざめにはなりませぬが、だいぶ、やすらいだようにお見受けいたします」

「薬は、のどへおちたであろうな？」
「はい。おのみになりましてございます」
老人は、『遺書』という不吉の二文字へ、目をおとし乍ら、
「意識はもどろうが……所詮、たすからぬであろうな」
と、ひくく呟いた。
女中は、無言をまもった。主人と同じ気持であった。
主人が、昏絶したその若い女性（にょしょう）を背負うて戻った時、その顔を一瞥して、死相が濃く滲んでいると見てとれたことであったし、母屋の座敷に寝かせてから、付添うているうちに、いたましい寝顔をじっと見戍っているのに堪え難くなったくらいなのである。
「お殿様――」
「なんだ？」
「あのお墓の前にお倒れになっていたのでございますれば……もしや、狂四郎様の――？」
「うむ――」
「すぐに、お報せいたした方が、よろしゅうはございませぬか？」
老人は、ちょっと、思案していたが、
「ともかく、これを披（ひら）いてみてからのことにしようか」
「はい」
女中が、去ってから、老人は、封書を、富士形の炉釜の上にかざして、糊をはがした。
貫之の高野切の模写、臨書、暗書に幾年も心をこめたとおぼしいみごとな連綿の品格高い運筆

で、それはつづられていた。

まず――

『さやかどの』

という呼びかけによって、はじめられていた。

さやかどの。母は、いま、耳の奥に、かすかにかすかに、きれいな鈴の音がひびいているような、そのような、あまりにしずかな春の夜更けに、そなたに、これを書きのこして居ります。ほんとうに、なんというふかいしずけさでしょう。このように、ものみなの音が絶えはてた夜更けに、こうして、筆をとっているのが、この母には、いちばんふさわしいのですけれど、筆をとりあげると、どうしたわけか、泪があふれてきて、一文字も書けないままに、幾刻かが、すぎてしまいました。けれども、牀に就いたからとて、ねむれるはずもありませぬ。これを書きのこすことが、心のなぐさめになると思いたったのも、じつは、病み臥して以来、そなたのことを、そっと、胸に想いつづけるようになったからなのです。と申して、そなたのことを想いつづけることが、悲しみをふかくするためだけの儚ない女心であるならば、筆をとりあげると、もう泪があふれてくるのは、いたしかたがありませぬ。

さやかどの。

母は、疲れました。ひとみの光もうすらぎ、頬の色も、くちびるの色も、褪せました。身は、日々に細くなりゆくばかりなのです。四年前の母のおもかげは、どこへ消えてしまったのでしょうか。鏡にむかって、わがすがたを美しいと見とれた日は、遠く去ってしまいました。病み疲れ

たこの素顔にのこっているのは、死を待つ、暗い、さむざむとした寂しい相だけなのです。もともと、いきいきとした、はつらつとかがやく、若さにあふれた美しさをもたなかった母なのですけれど、こんなに死のかげのふかい寂しい相になってしまっては、わがおもてを、手洗いの水に映すことさえはばかられます。さやかどのも、こんな寂しい相をもった女を母にもつのは、さぞいやでありましょう。

そうなのです。せめて、そなたに、この手紙を書くことで、病める苦しさを忘れ、たとえ悲しみはふかくなりまさろうとも、その悲しみの泪で浄められて、あるいは、もし今宵、このしずけさの奥から、不吉な迎いの使者が、そっと、おとずれて参っても――あすの朝の、母の寝顔は、美しくはないけれど、ほのかに安らいだ色をたたえていることができれば……それだけで、この母は、しあわせに思いたく存じます。

さやかどの。

母の心は、そなたのお父上をお慕いすることに、そそぎつくしました。しあわせでした。この世の、どのような女人よりも、しあわせでした。母は、ひとりのお方をお慕いし、そして、そのよろこびの火を、片時も、うすれさせたり、消したりせずに、今日まで、燃えつづけさせることができました。女と生れて、これほどのよろこびが、またとあるでしょうか。

母が、お父上のおそばにいられたのは、ほんの短い、かぞえることのできる日数でした。幾十年も、ひとつ家の下で、ともにくらしたご夫婦にくらべれば、この意味では、母は、決して幸せであったとは申せませぬ。でも、そのほんの短い日数のあいだ、母は、そのよろこびに、身と心を、悔いなきまでにひたして参りました。それから、お父上がお留守の時は、そのおすがたの一

部分を——つめたく冴えたまなざしだとか、しずかにひきしまった横顔だとか、力づよく透るお声だとか、あるいは、ほんのちょっとした隙のないおからだの鋭い動かされ様だとか……いつでも、思い泛べようとすれば、すぐに思い泛べられるように、脳裡にたくわえておき、そうして参りました。

さやかどの。

母は、そなたに、疲れたと申しましたね。はっきりと、申します。母は、お父上をあまりにお慕いしたために、じぶんのからだが病むのを忘れて居りました。病んだために、いよいよ、わがいのちのいとなみは、はげしく、つよいものとなり、さらに、からだは衰えつづけ、とうとう、このように疲れはててしまいました。母は、世のやさしい女たちが、幾十年もかかって費やす心の炎を、この四年間で、燃えつくしてしまったのでしょうか。いえ、心の炎は、まだ、このように、あかあかと燃えて居ります。ただ、からだが……このからだが、心の炎のはげしさに——絶え間ないはげしさに、生きる力を使いつくしてしまいました。

女は、いちど、人を恋うよろこびを知ったならば、同時に、それが、どんなにかなしいものかも、さとらなければなりませぬ。母は、お父上をお慕いしているとさとった時——その瞬間から、はげしい胸の痛みをおぼえ、その夜は一睡もせずに、牀の上に坐って、わが胸をひしと抱きつづけたことでした。そうして、その痛みは、今日まで、つづいて居ります。こうして、筆をとりつつも、胸の中は、きりきりと、しぼられるように痛みつづけて居ります。健やかなからだを、天から与えられなかった母のからだは、その痛みに堪え得ませんでした。

母は、いくたびとなく、たくさんの血を喀きました。その血の量だけ、母は、他のひとより

も、人を恋うことに、はげしく、急であったのであろうか、と思いかえされます。

さやかどの。

そなただけは、この母のよろこびとかなしみが、わかってくれますね。……けれど、そなたは、母に、なにも、こたえてはくれませぬ。……そなたは、いったい、誰なのでしょう。この母の子には、相違ありませぬ。だのに、そなたのすがたを、母は、見ることが叶いませぬ。いえ、見ることが叶わぬどころか、想像さえも、つきませぬ。そうなのです。そなたは、まだ、この世に生れて来ていない子なのですもの……。

いつぞや、母は、お父上に、もし女の子が生れたら、なんという名まえをおつけなさいますか、とおたずねしたところ、さやか、というのはどうだ、と仰言ったことがございます。

さやか……さやか……さやか……。

この名まえを、母は、それ以来、幾百たび、心のうちで、つぶやきつづけて参りましたことか。

さやかどの。

そなたは、夢の子なのです。狂四郎さまとこの美保代のあいだに、もし生れたとしたならば——それが、そなたなのです。だから……永久に、生れて来る筈もない子なのです。

さやかどの。

母は、かなしい。……そなたを生みたかった。そなたを、抱きたかった。抱きしめて、頬ずりがしたかった。……それが、ゆるされなかった母が、こうして、そなたに手紙を書くことだけは、せめて、ゆるされるのではあるまいか、と思うて、筆をとりました。

……いつの間にか、夜が、ほの白く、明けて参りました。母も、筆をはこぶのに疲れました。新太郎のそばへ、もどりましょう。……さようなら、さやかどの。

四

楽水楼老人は、手紙を巻きおさめてから、長いあいだ、そこを動かずにいた。

——あわれな！

読み乍ら、胸をしめつける深い感動で、老人は、いくど、目がしらが熱くなったか知れなかった。

心を鎮めてから、老人が、想うたのは、三十年前の不幸な出来事であった。

一人娘の千津が懐妊しているらしいと、女中頭から報せられた時の驚愕と憤怒は、三十年後の今日でも、鮮やかに甦って来る。あの時のおのれは悪鬼と化していた、と思いかえされる。十日間も、そのかよわいからだを、殴り蹴りつづけたものであった。そして、ついに、腹の子の父が、わが屋敷に逗留せしめているオランダ医師ジュアン・ヘルナンドであると知った衝撃の大きさは、名状すべくもなかった。茫然自失して、書屋にとじこもったなり、一月あまり、一歩も外へ出なかった。

ジュアン・ヘルナンドが伴天連であることを看破して、捕えて、拷問をくわえ、踏絵によって、ころばせたのは、ほかならぬ大目付たる自分であった。ヘルナンドは、ひとたび、ころぶや、一介の医師として、オランダ医術に専念することを誓い、また事実、その熱意をこめた教授と施療は、接する人々の目をみはらさせずにはおかなかった。文字通り寝食を忘れて、医は仁術

たることを身をもってしめすさまに心うたれて、こちらから公儀に願い出て、屋敷内の一屋に住まわせたのであった。

なんという巧妙きわまる仮面であったろう。仮面の下には、おそるべき復讐鬼の形相がかくされていたのだ。

ヘルナンドが、千津を犯した時には、彼は、すでに、非公式乍ら、将軍家の脈もとって居り、大奥医師たちの相談役として、もはや、なくてはならぬ存在となり終せていたのである。すでに、その地盤は、微動もせぬものとなっていた。

千津を斬って、その腹をかっさばき、赤子をひきずり出して、ヘルナンドの面ていへたたきつけてやろう——と、いくたび、その衝動に駆られたか知れなかった。

それをついにはたさなかったのは、乱心の廉によって三河以来の名門たる松平家をつぶしてしまうのをおそれたからではなかった。母なき一人娘に対する愛情の絆を断つことに、堪え得なかったからである。

おのが煩悩を嗤って、千津をゆるし、親子の縁を切って、広尾町の祥雲寺山内の離れ家へ追いやったのであったが……ひそかに命じておいた老婢によって、ぶじに身二つになったことも、その子がすくすくと育って行く様子も、逐一耳に入れたのであった。流石に、よそ乍ら母子のすがたを見たい願望にはうち克ったものの、一日として、忘れたことはなかった。

少年が十五歳になった年、千津が逝ったのをきいて、どうしてやるすべもない苦悩に、どれだけ不眠の夜がつづいたことだったろう。

少年が、先祖が豪族として栄華を誇った渋谷の丘陵に、たった一人で、その母の遺骸をはこん

をしりぞいて、丘陵に近いこの雑木林の中に、終の栖をもとめたのは、それから程なくであった。
少年をひきとって、ともに住もうという心だった。ところが、その時、少年の姿は、祥雲寺から消え去っていたのである。
八方手をつくしたが、ついに捜し出せず……十余年が過ぎて、目の前に出現したのは、血なまぐさい剣気をただよわせた無頼の浪人者としてであった。
皮肉な、あまりにも皮肉な輪廻というべきであった。
その異端の孫の妻となった不幸な女を、偶然にも、この手で救ったのである。
——狂四郎は、おのが妻の慕心にも応えぬまでに、女人を悪んで居る！　そのような片端の魂をもった者を、この世に送り出したのは、ほかならぬこのわしなのだ。わしが、あの伴天連めを屋敷にひきとらなければ、狂四郎はこの世にはなかったのだ！
骨が疼き、肉の痛む惨たる悔いが、体内をかけめぐる……。
そのまま——さらに、いくばくかの時刻を移してから、宵闇が茶堂内にしのび寄ったのに気がついて、楽水楼老人は、ようやく、腰をあげた。
露地をつたって、母屋にもどり、その座敷に入った老人は、枕もとに坐って、しばらく、黙然として、白蠟の寝顔を見おろしていたが、そっと、遺書を、そのふところへかえしてやった。
老女中は、息をつめて、主人の言葉を待っていた。
しかし、老人は、ついに一言も云わずに、立ち上って、廊下へ出ていた。

自身の居間に入ってから、老人の口から洩らされたのは、
「生かしてやりたい！　なんとかして、生かしてやれぬものか！」
無量の祈りをこめた、血をしぼるような、悲痛なその独語であった。

からくり門

一

小町想えば、照る日も曇る、か
四位の少将が、なみだ雨
九十九夜でござんしょう

と、きやがらあ――

艪音を、三味線代りにして、金八が、艫で、うたっていた。

猪牙は、汐留橋から出て、宏壮な大名屋敷にはさまれた堀川を下っていた。

十三夜の月が、空にあり、微風が、晩春の柔かなぬくもりを含んで、微醺の身に、心地よかった。

狂四郎は、舳ちかくに仰臥して、じっと、薄雲を縫う月かげを眺めていた。

新太郎を武部老人に預けておいて、何処かへ姿を消した美保代のことが、心を占めている。

行方をもとめる手段は、すこしも、とってはいなかった。幾年すてておいても、待つことに堪え得る女であると信じられていたことだし、また、そうさせて来たのである。それが、死期を迎

えて、みずから、決意して、去ったのであれば、その行方をさがされるのをのぞんでいる筈がない、と考えられた。ただ、去られてみて、あらためて、狂四郎にわかったのは、自分という男にとって、いかに、美保代が大切な、かけがえのない伴侶であったか、ということであった。

美保代を知る前と、知った後の、おのれの行動が、しずかに比較された。無頼の振舞いにも、おのずからおのれ流に秩序をもったものに変っていた。虚しさの奥には、いつの間にか、狂気をささえ止める節度が生れ、死地に入った瞬間にさえも、生命の均衡を忘れはしなかった。美保代の愛情を納れたための、自らが自らを抑える羈絆をつくっていた、と云い得る。

狂四郎には、わかるのだ。

――美保代は、おれの犯したかずかずの罪を、代って背負うて、野に、屍をさらそうとしているのではないか？

全身が呻きをたてそうなこの直感が、脳裡に来た時、直感の正しさが、とりもなおさず、おのれと美保代の絆の強さをしめすものだと悟り、敢えて、その行方を追いもとめまい、と心に誓ったのである。

孤独な、虚無に生きるこの男が、とる態度は、これよりほかになかった。

……猪牙が、御浜御殿と尾張侯の下屋敷がむかいあったところへ出たとたん、狂四郎は、骨を噛む想念を断って、現実に意識をもどすと、むっくり、起き上った。

「金八、身投げの音がしたな」

「えっ！　ど、どのあたりでござんす？」

金八は、びっくりして、きょろきょろと、月明りで、水面を透し見た。

汐がさして来た時刻で、おだやかにみえる水の上も、映っている月光がせわしく砕けて流れているので、大きく動いていることがわかった。
金八の目には、何もとらえられなかった。
「先生、魚がはねたんじゃございませんかい」
「いや——。こちらの石垣に沿うて、漕いでくれ」
「合点——」
金八は、ぐいぐいと、艪を押した。
ものの二十間も下ったろうか、狂四郎は、棹をつかんで、すうと、水中へ、さし入れた。
ゆらゆらと、藻のように、黒い影が浮かびあがって来た。
首をのばして、のぞき込んだ金八が、
「おっ！　女だ！　おまけに、若けえや！　これで美人と来たら、たとえ川獺（かわうそ）でも、着物を脱がせるまでは化けていていてもらいてえ」
と云い乍ら、寄って来て、引き揚げを手つだった。
狂四郎は、その衣裳が、武家や町家のものでないのを訝（いぶか）りつつ、
「金八、急げ！」
と、早口に命じた。

二

石垣の上——御浜御殿の中から、あわただしく走りまわる跫音が、ひびいて来たからである。

舟宿の二階で、窓の手すりに凭れて、しらじら明けの大川の景色を茫然と眺めていた狂四郎は、階段をのぼって来る跫音をきいて、やおら腰をあげると、酒膳の席へもどった。

金八は、むかいの座に横臥して、いびきをかいていた。

入って来たのは、馴染のおかみで、

「先生、お起きになりました。……お加減の方は、すっかりおよろしいようでございます」

「造作をかけた」

狂四郎は、冷えたのを、茶碗にあけて、ひと息に飲み干してから、立って、階下へ降りて行った。

女は、おかみの好意の借着をつけて、如輪木の長火鉢のわきに、洗い髪の首を俯向けていた。さして美しいというわけではないが、おっとりとした面立は、永い伝統によってつちかわれた純粋な清らかさを湛えて、気品があった。

京の女性（にょしょう）とみた。

しとやかに、畳に両手をつかえて、救われた礼をのべる言葉づかいと挙措が、特殊な世界のものであるのをみとめて、狂四郎は、しずかな口調で、

「貴女は、禁裏の御用で、出府されたひとだな――」

と、たしかめた。

「はい。長橋局（つぼね）――勾当掌侍（こうとうないし）をつとめ居りますす小夜と申します」

勾当掌侍とは、宮廷女官のうち、典侍（すけ）に次ぐ位で、掌侍の中での筆頭であった。禁裏にあっては、大典侍の権力が最も重いが、外部に対して一番睨（にらみ）をきかせるのは、勾当掌侍であった。勿論、

堂上名家の出身者にかぎられている。

「お局どのなら、将軍家へのお使いか？」

「いえ、このたびは、上野の輪王寺宮さまへのお使いを命じられて、出府つかまつりました」

掌侍小夜は、おちついたまなざしをあげて、語りはじめた。

上野・東叡山寛永寺の御門主自在心院准三后一品舜仁親王から、京の御所の御宝蔵にある唐渡りの呂調の鐸をおゆずり賜りたい、と願い出られたのは、すでに数年前であったが、いよいよ、それが御裁可になったので、はるばる江戸表へ、はこばれて来たのであった。

輪王寺宮から願い出られた、というのは、名目であって、実は、財政まったく逼迫した禁中が、上野の御府庫金から援助してもらうべく、いわば、抵当の品を送りつけて来たのであった。

当時の狂歌にも、

『貧乏をしても下谷の長者町、上野のかねの唸るのを聞く』

とあるごとく、上野黒門内には、莫大な小判が蓄えられてあったのである。それが証拠には、文化六年から、執当御救済という名目で、大名に対して、金の貸しつけをはじめていた。五分の利息で大町人から預かって、一割で大名に貸しつけるのである。いわば、銀行業務をつかさどったわけである。

大名の内証が、極度の窮状にあったことは、これまで、すでに述べてある。麹町十三丁目には、大名専門の質屋があったくらいである。だから、東叡山御府庫金貸付は、大名にとって、何より有難かった。

上野山内には、各大名の宿坊がある。将軍家廟参の時に、随従して来て、休息し、衣服を改めるための寺院である。大名たちは、この宿坊の連印で、金を借りていた。もとより、返済は容易ではない。期限が来て、利息が滞ると、連印した宿坊が閉門を命じられる。そうなると、大名は、将軍家の供をして、上野へやって来ても、休息し衣服を改める場所がない。やむなく、苦心して、本金を持参し、利息だけを支払い、すぐにまた借りて往く。返金の時期は、毎年十二月一日より十日までであったので、この期間には、大油単をかけた千両箱積みの吊台が、ひっきりなしに、黒門から搬入されて、谷中門へ抜け、一大壮観であった。（大名は、その日一日だけ、大町人から、見せ金の千両箱を借りて、上野へはこび、また持ち帰って来たのである）

御府庫金が、しだいに、ふくれあがったのは、当然である。

禁中が、この御府庫金に目をつけないわけがなかった。

勿論、抵当にする品であるから、呂調の唐鐸は、素晴しい名器であった。

その鐸は、天平勝宝元年、奈良の大仏が鋳造された年に、支那から渡って来たものといわれ、高さ四尺、重さ六十貫、宮廷内で長く、時鐘の役割をはたして来た。のち、平家が西国へ敗走するに際して、兵庫の海に沈められたが、偶然にも、秀吉が大阪城を築いている頃、城石を運搬する船が、これをひろいあげ、秀吉は、京の御所の御宝蔵へ納めた、と伝えられていた。

鐸とは、唐代にあっては楽器であった。呂調は、その基準の音色。この音色を発する鐸は、すでに日本には、他に一個も存在していなかった。海底に数百年ねむっていたために、さらに音色は冴えた、という——。

この唐鐸奉納の正使として、勾当掌侍の中から、小夜がえらばれたのであった。

ぶじに、唐鐸を納めた檜の白木箱は、本丸老中立会いのもとに、寺社奉行の検分を受けるべく、御浜御殿の貴賓座敷へ、据えられたのであった。

昨日の午後のことである。

本丸老中の代理として、姿をみせた土方縫殿助は、小夜の挨拶を受けると、

「検分の前に、長の道中の御苦労をねぎらわせて頂こう」

と云って、彼方の茶亭へ誘って、自ら点前をして、小夜ののどをうるおわせたものだった。

四半刻を、そこですごして、貴賓座敷へもどり、寺社奉行の手によって、箱の蓋をとりはらってもらったところ、意外、唐鐸は、その中から、煙のように消えうせていたのである。

小夜は、失神しなかったのが、ふしぎなくらい、驚愕した。この座敷にはこび入れるまでは、たしかに、納めてあったのである。これは、はこび入れた京から随行して来た六人の仕丁が、口をそろえて証明した。一刻前には、品川の伝奏屋敷で、小夜自身の目が、たしかめている。

なんとしても、合点のいかぬ奇怪な、白昼夢にひとしい出来事であった。

貴賓座敷から、茶亭までは、ほぼ半町の露地を辿るが、まっすぐな寄石敷の歩道でつながって居り、中程にたてられた萱の露地門も、扉を左右に開けはなたれていたのである。

すなわち、小夜が就いた茶亭の客座から、むこうの母屋の貴賓座敷は、ずうっと見通せたのである。事実小夜は、縫殿助が点前をするあいだ、貴賓座敷に安置された白木箱を、視野の中に映していたのである。

小夜が、その白木箱から目をはなしていたのは、それは、縫殿助のあとにしたがって、茶亭へ行くほんの一分あまりのあいだにすぎなかった。いや、そのあいだにさえも、小夜は、宙に匂う

仄かな花の香に、頭をめぐらした記憶がある。その時、貴賓座敷には、人影もなかった。

……呆然と、虚脱した小夜を、じっと見据えていた縫殿助は、奉行をしりぞけておいて、穏かな声音で、

「この失態は、そなた一人に責を負わせるわけには参るまい。すでに、奉納の儀式の準備も、万端ととのうて居る。ひとまず、それらしい偽物を入れて、寛永寺にはこぶよりほかはあるまい」

「…………」

小夜は、こたえる言葉もなく、身も心もふるわせた。

「何かの理由をこじつけて、当分の間は、日門様（親王）にも、御覧なさらぬようにとりはからおう。その間に、わしの配下を、必死の探索にあたらせることになる。一切、まかせて頂こう」

そうなぐさめておいて、縫殿助は、小夜の肩をかかえて、立ちあがらせて、隣室へ、ともなった。

そこには、夜具が敷きのべてあった。

小夜には、抵抗する力は、全くのこされていなかった。

小夜は、処女であった。

三

狂四郎は、小夜が語り了えてからも、しばらく、腕を組んで、黙然としていた。

沈思をやぶって、おかみを呼び、紙と筆を所望した狂四郎は、小夜に、別のことを訊ねた。

「禁中では、桂宮様の御処置を何かお考えか！」

「べつに、うけたまわっては居りませぬ」
小夜は、かぶりをふった。
「京へおもどりになっても、主上よりのお咎めはないわけですな?」
「はい。左様に存じられまする」
「それでは……、貴女が帰洛の際、桂宮様をおつれ願おうか」
「は――?」
小夜は、狂四郎の平然たる面持を、訝しげに瞶めた。
――このさむらいは、唐鐸を紛失したわたくしが、おめおめと京へ帰ることが叶うと考えているのであろうか?
死を覚悟した者のおちつきがあればこそ、恥をしのんで、いきさつを語ったのである。
小夜が、語ったことを、ひそかに悔いているところへ、おかみが、紙と筆をはこんで来た。
狂四郎は、それを小夜の膝の前へ置き、
「貴賓座敷と茶亭の見取図を描いてみせて頂こうか」
と、たのんだ。
小夜は、筆を把りあげて、記憶にある限りのこまかさで、それを描き乍ら、説明していった。
狂四郎は、それに対して、一語すらも、口をさしはさまずに、冷たい眼眸(まなざし)を、紙の上へ落していた。
小夜が、筆を擱いた時、たったひとこと、
「巧妙なからくりだな」

と、洩らしていた。
狂四郎は、小夜が描いているあいだに、この男独特の鋭い直感力を働かせていたのである。
すなわち——。
一年ばかり前に、蔵前の札差の一人が、奢侈放縦の廉によって、家財没収、遠島の刑に処せられたことがあった。その主たる罪状は、「濫りに柳営の御庭を模し、上を怖れざる振舞い」というのであった。すなわち、その札差は、小梅の里に豪華な別荘をつくった際、そっくり、江戸城西丸の松の廊下前の庭園を造りあげたのであった。
狂四郎は、それを造った庭師が、日本橋南詰東側の罪人晒し場に晒されている時、通りかかって、捨札の前にむらがっている人々の交している会話を、きくともなしにききとめたが——それを、ふっと、いま、記憶に甦らせていたのである。
その庭師は、苗字帯刀をゆるされた公儀御用の名人で、御浜御殿の庭園は一代の傑作として、後世にのこるであろうと白河楽翁から絶讃された、という。
「なァに、大きな声じゃ云えねえが、お城の庭造りは、どうせ、畳の上で往生は出来ねえようにきめられているんだ。秘密のぬけ穴やら、匿れ場所やらを造っているんだからな。命じられたからには、殺されるのは覚悟の上よ」
捨札の前で、知ったかぶりに、そう云っている者もあったが……。
狂四郎は、ゆくりなくも、小夜の描く見取図を眺め乍ら、そのことを思い出し、唐鐔紛失にむすびつけたのである。
すっと立ちあがった狂四郎は、不安そうに見あげる小夜へ、薄ら笑みを投げた。

「たぶん、おそくとも、明日中には、唐鐸を、貴女ご自身の手で、上野へ納めることになろう」
自信をもったその言葉は、小夜を、悦ばせるよりも、あっけにとらせた。
さっさと、二階にもどった狂四郎は、金八をゆり起して、
「これから、御浜御殿へすっとんで行って、目を皿にして見張っていろ。長持で出て来るか、乗物で出て来るか——六十貫の重いしろものが、かつぎ出される筈だ」
と、命じた。
金八は、睡気をいっぺんにふきとばして、
「また、金ですかい？」
と、顔を輝かした。
「こんどは、銅だ」
「へえ——」
「がっかりした面をするな。銅は銅でも十万両になる銅だ」
「うわっ、だ！　運去って金は銅となり時来って銅は金となる、道邇しと雖も、行かざれば至らず——って、へへ、このあいだ、談亭師匠から、きいたばかりでさあ。金と女と幽霊と、稲妻かげろう水の月、とかくこいつは逃げやすい、さっさよいやさ、えっさっさ——」
横っとびに、階段を中段までかけおりて、また、あわただしくとびあがって、首だけのぞけると、
「先生は、どうなさるんで？」
「おれか、——おれは、ここで迎い酒だ」

「将は動かず、兵はおさめて而して時に動かさん——こいつも、談亭の爺いからきいたばかりだ。首尾を待っておくんなせえ」

四

その日の午すぎ——。

備前屋は、御浜御殿から、身分高い人の忍び遊びと見せかけて、立派な駕籠にのせてはこんで来た大きな白木箱を、わが家の離れへ、傭いの若い者たちに、かつぎ込ませ、

「中のものを、床の間へ——」

と、指図した。

若い者たちは、おそろしく重い、奇妙なかたちをした銅製品を、よいしょよいしょと掛声かけて、床の間に据えつけた。

備前屋は、一人になると、満面に笑みをつくって、それを、ためつすがめつして、女の柔肌でも愛撫するように、ふれてみるのであった。

これが、この世に生れてから、千余年の治乱興亡を経るためには、あるいは、土中に埋れ、水底に沈み、いくたの不運に遭うて来たのである。そのために、かえって、古色は冴えて、まことにすばらしい逸品となっていた。銅器というものは、千年を経なければ、真の色を成さない。

備前屋は、何かの古書で読んだおぼえがある。

銅器が、数百年間、土中に埋もれていると、その色合は純青となって、午前中は淡く、午後にいたると陰気に乗じて翠色が滴らんとする趣きを帯びる。まま土に蝕せられて、剝落または孔を

生じ、あたかも蝸篆のように自然な凹凸となって、斧鑿の痕を消してしまう。またこれが、数百年間、水中に入ると、純緑色を生じて、光彩、艶が、玉のように美しくなる。

まさしく、この唐鐸の肌は、さきに土中に埋れ、のちに水底に沈んだとおぼしく、ある部分は、翠色を滴らせ、ある部分は純緑色に輝き、蝸篆の凹凸が、滑かな光彩と艶を湛えているのである。

「――うむ！　三千両は安かった！」

思わず、そう独語して、ひとり、大きく頷いたおりであった。

背後の仕切襖が、音もなく開いた。

備前屋が、人の気配を感じて、愕っとなって、振りかえったのは、それから数秒過ぎてであった。それほど、古銅器に、心をうばわれていたのである。

狂四郎は、すでに、そこに、無想正宗をかたえに置き、端然と坐って、腕を組んでいた。

「すばらしい名品だな、備前屋」

それが、挨拶がわりの第一声だった。

「貴方様でしたか」

備前屋は、ひきつれ、こわばった顔面に、磊落な笑いを刻もうとしたが、これは、むりなわざであった。

「今日参上したのは、ほかでもない、その唐鐸についての相談だが――」

「ほう、何か？」

「わたしに、ゆずってくれぬか？　但し、無料でだ」

狂四郎は、真面目な表情で、云った。
「どういうのでございましょうな。てまえは、三千両で手に入れたばかりでございますよ」
おちつきをとりもどして、備前屋は、怪訝そうに見かえした。
「おぬしは、これが、京の御所より、上野の御宝蔵へ送られて来たしろものだぐらいのことは知っていて、土方縫殿助から買ったのだろう」
「勿論でございますよ」
「土方が、どのような手段で、せしめたか、そのことはきかされては居るまい」
「そりゃア、土方様のご勝手でございますからな。てまえの関り知ったことではありますまい」
「土方は、いうまでもないが、無料で手に入れた」
「まア、左様であろうかと察して居りました」
「おぬしは、まだ、三千両を土方へ支払っては居るまい」
「明日お届けすると約束いたして居ります」
「つまり、おぬしが、わたしにゆずるなら、誰も別段、損はしなかったことになる。……尤も、いまここで、すぐにゆずれとは云わぬ。おぬしのはからいで、これを、御浜御殿の貴賓座敷へ——もとの場所へ、もどしてくれるなら、わたしが、箱の中から、煙のように消してみせよう、という趣向だ。どうだ、備前屋？」
「おもしろい！　貴方様の手妻ぶりを拝見いたそうではございませんか」

五

御浜御殿は、常日は、誰も住んでいるわけではなかったので、備前屋が、警衛の役人へ鼻薬をきかせれば、再び、白木箱をかつぎ入れることは、造作はなかった。

貴賓座敷の中央に、白木箱を据えて、狂四郎は備前屋と二人きりになると、

「正使の女官は、土方に、あのむこうの茶亭で、点前を受けた由。そのあいだに、箱の中から、唐鐔は消えた。われわれも、その通りにやろうではないか」

「よろしゅうございます」

陽が傾いて、樹木や灯籠の影が、長く濃く落ちた寄石敷の歩道へ、二人は降りて行った。

備前屋は、萱の露地門を潜る時、視線をまわして、貴賓座敷の中になんの変化もないことをたしかめた。

茶亭へ上る時も、さらにもう一度、振りかえった。

白木箱は、あかあかと燃える夕陽にあたって、しんと、そこに安置されたままだった。

座についてから、備前屋は、ずうっと、それを見まもりつづけた。狂四郎は、炉のかたわらに坐って、いかにも静かな眼眸を、ひっそりと陰翳を深くしてゆく露地へはなっていた。

「もどろうか」

促されて、備前屋は、狂四郎をしげしげと眺め、

――もう、あの箱から消えさせたというのか？

と、何やら、小莫迦にされた思いがした。

到底あり得ないことに思えるのだ。こっちには、全く油断はなかったのである。白木箱に背を向けていたのは、三十秒にも足らぬ。そのあいだに、何者が、六十貫もの重い品を、箱からひき

あげて、はこび去ることができるものであろう。不可能である。
にも拘らず、狂四郎は、悠々として、貴賓座敷へ、ひきかえして、もとの座に就くなり、
「蓋を開けるがいい」
と、すすめるではないか。
備前屋は、ふっと、背すじを冷たいものがはい下るのをおぼえつつ、蓋へ手をかけて、
「もし、消えてなかったら、どうなさる？」
「おれの首をやる」
狂四郎のこたえは、明快であった。
蓋は、はずされた。
備前屋の顔色が一変した。
中は、空であった。
狂四郎のひくい笑い声に、備前屋は、われにかえって、顔を擡げた。
しかし、声を発するまでには、それからなお、幾秒間かを費さなければならなかった。
「貴方様は、魔術をお使いなさる――」
「しかけがあれば、小児でも、これはつかえる。……備前屋、おぬしは、この箱にばかり神経をとられていて、茶亭へむかって、幾すじの歩道が、集っていたか、おぼえては居るまい」
「……？」
「八つの歩道が、集っているのだ。われわれは、北からかぞえて四つめの歩道をあるいて行った。しかし、もどりは、南からかぞえて四つめをあるいて来た」

「なんですと？」
「ははは。ひとすじ、ちがったのだ」
「そ、そんな筈はない！」
「ところが、そうなのだ。その証拠をみせる」
狂四郎は、庭にむかって、
「おい、金八、うごかせ！」
と、叫んだ。
するとーー奇怪ーー萱の露地門が綾目張の杉板塀とともに、音もなく、するすると移行した。たちまち、彼方の茶亭のたたずまいは眺めを別の位置に変えてしまった。
「どうだ、備前屋。この御殿には、構えも調度も寸分ちがわぬ貴賓座敷が二つ、それにしたがって、全く同じ露地がふたすじ、つくられてある。あの露地門をうごかすことによって、茶亭への往復をもって、客を、別の座敷と気づかせずに、いざなうことができるのだ」
備前屋は、呻いた。
「ところで、備前屋ーー」
狂四郎は、皮肉な冷やかな微笑を含んだ眸子（ひとみ）を据えて、
「江戸城の庭やら、この二つ正面の露地やらを造った庭師は、昨年処刑されたが、おぬしも、その男に、向島の本宅の庭を造らせているようだな？」
「いかにも左様でーー」
「あの庭は、江戸城本丸の後苑の一部そのままらしい」

「えっ?!」

愕然として、この剛腹な大商人の顔から、血の色が引いた。

「公儀は、おぬしを利用するだけ利用したら、程よいところで、捕えて、片づけるこんたんから、その庭師に造らせた——そう思わぬか、備前屋。ここいらが、汐どきだ。おぬしは、船で、海のむこうへ出て行くべきだろう。長いつきあいのよしみに、この眠狂四郎が忠告するのだ。真剣に考えてよいことだ」

そう云いのこして、狂四郎は、隣りの貴賓座敷の唐鐸をはこび出させるべく、立ちあがっていた。

はらいそ悲願

一

昨日から降りつづいていた雨が、夕刻になってあがり、雨を追った風が、唸りをたてて、野を渡っていた。

眠狂四郎の姿が、その野をまっすぐにつらぬく一本道にあらわれた頃、迅い雲行きの夜空に、月があった。

鷲（おおとり）神社から、非人溜（だめ）に通じている往還である。

月かげを映した水たまりを、無意識で避け乍ら、かなりの急ぎ足であゆむ狂四郎の孤影は、常のものとは、どことなくちがって、鋭くひきしまった気配をしめしていた。

その懐中には楽水楼老人から届けられた美保代の遺書があった。

添えられた手紙では、ここ数日のいのちであろう、ということであった。

狂四郎は、この世に存在せぬ夢の子「さやか」に宛てた遺書を一読するや、しばらくは、痴呆のように虚脱状態に陥っていた。

美保代も新太郎もいなくなった中野の隠れ家でひとり、影のようにすごしていた狂四郎は、し

かし、これまで孤独に生きるためにつちかった虚無感のおかげで、その沈黙の起臥しに、さしたる苦痛もなかった。

ところが、遺書によって陥らされた虚脱状態から、われにかえった時、狂四郎を、襲ったのは、名状し難い寂寥感だった。

突如、狂四郎は、はじかれたように立ちあがって、家を出た。

しかし、めざしたのは、楽水楼老人の隠宅ではなかった。

この男の心中には、これまで微塵も怖れたおぼえのない神から、生れてはじめて、厳しい審判を下されている怯懦が、生じたようである。そのために、おのれが為し得る唯一の謙虚な手段をとろうと、決意したのである。

溜の構地にふみ入ると、南端の板囲いにむかって進んで行ったが、この時、ふと、おのれの怯懦を嗤う意識が、脳裡を掠めた。

――このおれとしたことが……。

一瞬、出足を停めたが、すぐに、その自嘲をはらいすてたのは、現代流に云えば、自由なる意志が信念に固有な対象であるごとく、神もまた感情に固有な対象であることに、この男の思惟が働いたからに相違ない。

思いもかけず、おのれの中に湧きあがった心の動きの美しさを、狂四郎は、すて去るまいと思いかえしたのである。

万能なるものの秩序と節度に従おうとする敬虔が、この無頼の男の胸に生れていた。

旧臘、その板囲いの中の土蔵の地下室で、狂四郎は、世にも奇怪な淫靡な光景を目撃してい

る。

さんたまりあの高貴な貌を、その現身(うつしみ)としたといっても誇張ではない若い美しい尼僧が、どろどろの襤褸をまとうた醜悪な非人を迎えて、その白い、熟れきった豊かな肌を貪るにまかせた――あの惨たる営みを、である。

尼僧は、それを天主の与える試練として受け、きりすとの苦難に殉ずる行為と覚悟して、堪えつづけていたものに相違なかった。

土蔵の壁の一面を回転させて、一歩一歩、石の階段を下りつつ、地下から洩れる明りをみとめて、狂四郎の心は、遽かに、譟(さわ)いだ。

地下に降り立つと、この前と同じく、香も匂うていた。

狂四郎は、ためらわずに、尼僧のすまいである、数奇を凝らした小座敷へ、進んだ。

板戸を、ひきあけた――とたん、狂四郎は、思わず、息をのんだ。

たしかに、炉ばたに、尼僧は、いた。しかし、それは、あの清雅な美しい尼僧ではなく、黝(くろず)みしなびた、骸骨同然の老婆であった。肉というものをあまさず捨てさって、みにくい皺皮を骨に貼りつけたすがたは、到底息ある者とは見えなかった。

この老婆が、永代橋上で呼びとめて、大鏡を返してくれるように頼んで来たあの尼法師であることに気がつくには、しばし、凝視をつづけなければならなかった。

――自身の意志で、餓死しようとしているのだな。

と見てとった狂四郎は、音もなく、座敷に入って、炉をへだてて、坐った。

息づかいもみせぬ老婆が皺まぶたを微かに痙攣(けいれん)させて、眸子(ひとみ)の光を、こちらへ送り出して来た

のが、ふしぎなくらいであった。
「眠狂四郎です。おわかりであろうか」
「……………」
こたえはなかったが、その口もとにしめされたあるかないかの表情が、肯定を意味した。
「光照尼——といわれたか。あのひとは、どうされた？」
その問いに、老尼は、数秒を置いて、こまかく顫える右手を炉へのばすと、火箸の一本を把って、灰へ、
『火』
と、書いた。
「火？　火とは——？」
訝る狂四郎へ、老尼は、何か云おうと、白くかわいた唇をわななかせたが、声が出なかった。
それから、緩慢に、その上半身が傾くのを、狂四郎は、固唾をのんで、見戍った。
寄って、てのひらを、その鼻孔にあててみると、すでに息は絶えていた。
暗然として、地下道を抜けて、外へ出た瞬間、直感が来た。
「火！　そうか！　そうだったのか！」

二

その翌々日も、ひきつづいて、鉛色の雲がひくく垂れ罩めて、強風は、また冬へひき戻すかと思わしめるほど、冷たかった。

ここ——巣鴨御薬園に隣接した土地は、去年まで、かなり宏壮な比丘尼寺が構えられて、水戸侯の御主殿、越前侯の御簾中をはじめ、その祈禱の利生に甘心した身分ある婦女子の出入で賑っていたものであるが、突然の撤廃に遭って、いまは、高い土塀だけがのこされていた。比丘尼の幽霊も出る、などとあらぬ噂も撒かれていて、絶えて、人も近寄らずに、荒れるにまかせてあったのだが……。

どうしたのであろうか、今日になって、付近の人々をおどろかせたのは、夜明けて間もない頃から、多くの役人たちの姿があらわれて、ものものしい警衛にあたったことである。

巳の刻をまわった頃には、お忍び行列ではあるが、あきらかに公儀の高い地位の人物が乗っていると察しられる駕籠が、しずしずと門内へ入った。

駕籠からあらわれたのは、山岡頭巾をかぶっていたが、その羽織の紋が、本丸老中水野出羽守であることを証明した。

すでに、さきに到着していた土方縫殿助が、近づいて来て、ひくく何か囁きかけて、笑い乍ら、設けの席へ、みちびいた。

本堂の跡と思われる、すこし高い台地の中央に、緋毛氈が敷かれ、牀几が据えてあった。

出羽守忠成は、それへ就くと、

「あれか——？」

と、水の涸れた池を指さした。

「御意」

縫殿助は、頷いた。

小さな池であったが、かなり深く、底はきれいに平に掃除されてあり、まん中に、白木の十字柱が立ててあった。そのまわりには――柱を距る三尺あまりのところへ溝を掘って、薪が積み積ねてある。

「わしの記憶では、切支丹の火刑は、安永のはじめにあっただけだが、あれは、牢屋敷の火刑の仕掛けとはちがうのか？」

忠成が、訊ねた。

「もとより、ちがうのが当然でござる。殿は、牢屋敷の方の火刑も御覧遊ばされたことはござるまい」

「ないの」

「牢屋敷の火刑は、籠作りと申し、罪柱の足下にも台薪を入れ、さらに四面より、茅薪を積んで全身を覆うのでござる。ために、罪人は、焚死前に、窒息つかまつる」

風上より火を移して、非人が、猛烈に筵で煽るので、罪人は、肉の焼ける地獄の苦悶をさまであじわわずに、煙に巻かれて意識を喪うのである。

ところが――。

いま、眼下の池底に設けられた火刑の造りは、この上もなくむごたらしい処置がとられるものとみえた。薪を、罪柱からはなして、溝の中へ積んだのは、それだけ、炎に炙られる罪人が、のたうつ時間が長いわけである。

場所を、池底にえらんだのは、風を避けるためであり、煙によってすぐに窒息させまいとする残忍な意図にほかならぬ。

「気味のよいものではないの」
忠成は、流石に見物に来たものの、多少忸怩たるものをおぼえる様子だった。
罪人は、火刑にあたいすべき切支丹信徒にまぎれもなかったとはいえ、そうであるならば、世間に表示して、衆人に、そのみせしめとして、処刑場を公開すべきなのである。
切支丹に対する刑律は、あくまで一般予防の為にせる公衆威嚇の章程であって、法度、触書、高札など、必ず制禁の令条を公示しなければならぬ。ひそかに処刑したのでは、全く意味をなさぬのである。
公儀が、宗門改の一手段として、切支丹類族をつくったのも、このためなのである。類族というのは、曽て信徒たりし者の子孫ならびに眷族を指す。類族は、男子七世、女子四世までを称して、それ以後の者たちをやっと素人たらしめる苛酷きわまる掟であって、これ程幕府は、衆庶を威嚇したのである。
にも拘らず、本日行う火刑は、全く隠密裡なものであった。見うけたところ、南北奉行所から出役した検使らしい武士の姿もない。警衛にあたっているのは、ことごとく、土方縫殿助がつかっている無禄の庭番たちばかりであった。
火つけのために、非人たちが十名あまり、連れて来てあるが、これらも宰領横目(非人小屋頭)の指揮を受けてはいない。
本丸老中たる身としては、忸怩たらざるを得ない所以である。
土方縫殿助の方は、冷然たる態度で、
「では——」

と、一礼しておいて、池の向う側にひかえている配下にむかって、扇子をかかげてみせた。

彼方の植樹の蔭に、小屋掛けがしてあったが、そこから引き出されたのは、一昨日狂四郎が非人溜の地下に、その姿をもとめたあの若く美しい尼僧にまぎれもなかった。

頭も青々と剃りあげ、やや俯向き加減の面差に、一片の憂悶の翳もなく、すらりとした白衣姿も爽やかに、楚々たる跣の蓮歩をはこんで来た。

忠成はじめ、すべての者の目が、その美しさを食い入るように、瞶めた。

池底へ引きおろされ、罪柱の前に立たされるや、こちらから、縫殿助の酷薄な声がかけられた。

「衣を剝げい」

これをきいて、忠成が、あわてて、

「いや、待て——。その前に、今世へ申し遺す言葉があれば、きいてつかわそう。翻心して、踏絵を致すとでも申せば、これに越したことはあるまい」

「その節は、殿のおそばへはべらせては、いかがでござろう。青あたまの側妾も、まんざらではござらぬ」

せせらわらっておいて、縫殿助は、その旨をつたえた。

尼僧は、すずやかな眸子（ひとみ）をあげて、忠成を見たが、

「揚屋（あがりや）でしたためましたこんひさんを読ませて頂けますならば、かたじけなく存じまする」

と、ねがった。

許可がおりるや、尼僧は、しずかに、懐中から、巻き紙をとり出した。縄をかけられていたが、これは揚屋縄で、両手は自由であった。

澄んだ、きれいな声音が、池底から、生血をしぼって記したにひとしい懺悔文を読みあげはじめた。

三

中空を渡る強風は、その声音をさまたげるよりも、そのひびきに、ふしぎな協和音を添える効果をもっていた。このふたつの音は、廃寺の趾の光景を、さらに蕭々たるものにしたのである。そのために、聞き入る人々の、どの表情も、知らず知らず、暗く翳ってゆくかにみえた。

……去る三とせの前、聖なる復活祭（ぱすこぁ）の日、よろずのみなものでうすのおん慈悲のおぼしめしによりて、その無量無辺のおん知恵、おんはからい、不退の御安楽、御哀憐、御柔和の御尊体をあがめるすべをさとりてより、奇しくも清き洗礼を受けそろこの日に、聖きひいですのおん光を仰ぎつつ、はらいそにお召しをたまわることの有難さに、ただただ、このいやしき身のいのちを、ことごとく御主に捧げ奉るべくそろ。でうすの御子ぜずす・きりしとが、くるすの上に架けられたまいしことを思えば、この身の受ける試練こそ、聖き三位一体（ちりんだで）のおん思召、宏大の御仁慈をもって、あふるるばかりのその御名誉をわれらにも知らしめ給わんためなりとおぼえ、心うれしく存じそろ。われらの御主ぜずすさまには、じゅでや人から受けさせられし御ぱっしょの間に、あらゆる苦難にお遭いなされ、また、まるちるなるさん・びせんても、おそろしき土牢にとじこめられそろ。それに比ぶれば、わたくしの苦行（でしびりな）のごとき

は、はらいそへの花の道を辿るにも似て……人すべてが、あだむの罪科にておん作り手の懲らしめを蒙り、はらいその光栄を失いしのちにも、なお人すべてにそのおん慈みもて包ませられるでうすの、この科(とが)を赦させたもう御意(みこころ)に添いたてまつるべく、ふかく、ふかく……

「止めいっ！」

縫殿助が、烈しい苛立ちの形相で、叱咤した。

「世迷い言は、もうたくさんだ！　それほど、はらいそとやらへ行きたいのなら、せいぜい、大慈大悲の死花を、十悪の里に咲かしてくれる！」

この時――。

忠成の背後にひかえていた太刀持ちの小姓が、突然、すっくと立って、高らかに、

「御主ぜずす・きりしと、さんたくるすの上において、世界を扶け給うによって、苦業礼拝し奉る、われらが科(とが)をゆるしたまえ！　おがみ奉る！」

と、口走るや、主人の太刀をなげすてておいて、憑かれたように、ふらふらと、池へむかって、下って行こうとした。

思いがけない隠れ切支丹門徒の出現に、一同は、唖然となった。

小姓は、女人とも見紛う美しい少年であった。いつの間に、帰依していたものであろう。その澄んだ眸子は、尼僧に、ひたとあてられて、殉教(まるちり)のよろこびに、きらきらとかがやいていた。

縫殿助は、じろりと、忠成を見やった。

忠成は、不快そうに、

「斬れ！」

と、命じた。
一人の庭番が、すすっと迫るや、小姓は、反射的に、はじかれたように、地を蹴って、一散に池底へ、駆け降りた。
尼僧の脚に、ひしとしがみついて、
「でうすよ、栄光（ぐろおりや）を——」
と、絶叫した。
庭番は、むすっと、口をへの字にひき歪めて、佩刀をぬきはなった。
瞬間——。
さらに、意外なことがおこった。
非人の群の中から、三人あまりが、けもののような素早さで、とび出して来ると、小姓をかばって、庭番の前に立ちふさがったとみるや、口々に、大声でおらしょを誦えつつ、胸で十字をきってみせたではないか。
尼僧が、非人溜の地下室で、自らの肉体を犠牲にして、非人たちに、神の教えを説ききかせたのは、無駄ではなかったのである。その美しい白い肢体を抱きたさに、おらしょを誦えた非人の中から、このような、まことの信徒があらわれたのである。
縫殿助は、狼狽した。
「斬れっ！　斬れっ！」
憤怒の叫びをあびせた。
庭番は、目にもとまらぬ迅さで、白刃を、宙におどらせた。

尼僧は、四個の男体からはね散る血飛沫で、白衣を染めつつ、天を仰いで、おらしょを誦えつづけた。

「衣を剝いで、火をかけい！」

そう呶号する縫殿助は、まさしく、尼僧の瞳には、地獄（いんへるの）の悪鬼と映ったことであろう。

たちまちに――。

白衣は、容赦なく、奪いとられ、一糸まとわぬ純白の裸像が、罪柱にくくりつけられた。

黒い池底に浮きあがるその肢体が、神秘（くしび）めく玲瓏さを湛えているのをみとめた縫殿助は、いまは、淫猥な嗜虐を愉しむ余裕もうせて、

「焼けい！」

と、喚いた。

ところが、この男を仰天させるべき、第三の不意打ちを、神は、用意していたのである。

突如として、忠成が、悲鳴を発し、ぶざまに、牀几から、前へつんのめった。

次の瞬間――。

音もなく背後に忍び寄って、緋毛氈をひったくった眠狂四郎は、四ン匍いの忠成の頸すじへ、ぴたっと、無想正宗をあてて、

「お立ちなさい」

と、命じておいて、縫殿助へ、冷やかな一瞥をくれると、

「土方殿、おとろえを知らで炭割る怒りかな、という句があるのをご存じか。また、息の臭きは主知らず、ともいうぜ。六十に手がとどいて、いまだ、おのれを覚えることのないお手前の方こ

そ、ここいらで、成敗されてもいい頃だ。念仏の練習でもしておくことだ」

と、きめつけておいて、立ち上った忠成へは、

「御老中、尾大掉(びだいふる)わず、とはこのことですな。その尾を、近いうちに、それがしが、両断してさしあげることに相成ろう」

と、云ったものだった。

四

霧のような小雨が、風にあおられて、降りそそぎはじめた町筋を、騎馬が一騎、矢のように、駆けぬけて行く——。

雨と寒さで、人影が稀なのをさいわいに、その疾駆は、通り魔に似て、戛々たる蹄の音の迅さに、なんだろうと、好奇心にかられた者が家から顔をのぞけた時には、もう彼方に後姿をみせていた。

傘をかたむけて、檐(のき)下をひろっていた通行人さえも、傘をあげて、馬上にみとめたのは、浪人者のきびしい異相だけで、前にかかえている白いものを、よもや尼僧とは気づかなかった。

……渋谷の宮益町はずれの雑木林の中に入って、馬をとめた狂四郎は、尼僧をかかえおろすと、無言で、その手をひいて、雨のけぶる小径を辿り、冠木門を抜けて、楽水楼隠宅へ入った。

柿葺(こけらぶき)の土庇のふかい玄関に立って、案内を乞い、あらわれた老女中へ、

「このひとの着かえをたのむ」

と云いおいて、自分は、庭をまわって、書院へ通った。

老人の姿は、見えなかった。
やがて——。
紅梅色の綸子の留口小袖をまとうて、老女中にみちびかれて入って来た尼僧の姿は、その清雅さに、なんともいえぬなまめかしさをくわえていた。
狂四郎は、尼僧が、あらためて、礼をのべるや、
「いや。お救いしたのは、こちらに、おたのみしたい儀があってのことでした」
と、ことわっておいて、
「わたしの貌をごらんなされば、容易に想像がおつきかと存ずる。……わたしは、ころび伴天連が姦淫の子です」
抑揚のない、低い声で、その告白をした。
すると、尼僧は、あえかな美しい微笑を湛えて、
「そのことは、わたくし、ききおよんで居ります」
「左様か——。それならば、わたしが、これまで、切支丹に対して、どのような心を抱いて来たか、およその推量はおできだろう。……いまも、わたしは、神に背中を向けているといさささかもはばからぬ。その男が、まるで、おのれの心を裏切るおねがいを、貴女にいたさねばならなくなりました」
「なんでございましょう？　わたくしにできることでございますれば……」
「あちらの部屋に、わたしの妻が、病み臥して居ります。今日、明日かのいのちかと思われるのです」

「………」
「妻に洗礼を受けさせてやって頂けまいか」
肚裡から苦汁をしぼり出すように、狂四郎は、云った。
万能なるものの秩序と節度に従おうとして、この無頼の男がえらんだ唯一の謙虚な手段——それが、これであった。
尼僧は、無言で、ただ、しずかに、やさしく、歪んだ異相を見戍った。
狂四郎は、尼僧の視線から、自身の目をはずして、ひくく、
「わたしが、それをねがっているときけば、妻は、洗礼を受けるでしょう」
と、云い添えた。
「かしこまりました」
尼僧は、立ち上ってから、
「どうぞ、貴方様も、おつき添いなされませ」
と、すすめた。
「わたしは……御免を蒙ろう。いまも申した通り、神にむかって、背中(そびら)を向けて居る男です。わたしには、わたしにふさわしい果てかたがある」
この言葉は、きっぱりとしたものだった。
尼僧が、出て行こうとすると、狂四郎は、ふと、思いついて、
「わたしの親しい人間で、備前屋という商人が居ります。近く、船で、海のむこうへ出て行く企てをもって居ります。もし、貴女が希望されるならば、ローマへ渡れるように、とりはからわせ

ることができましょう」

「いえ――」

かぶりをふる尼僧へ、狂四郎は、微笑して、

「ご遠慮なさらぬことだ。備前屋は、なみなみの悪党ではないが、そのかわり、約束したことは、どの様な犠牲を払っても、はたしてみせてくれます」

「おこころざしは有難う存じまするが、わたくしは、じぶんの生れた国に、ただ一粒の信仰の種をまく使命をもって生れたと思うて居ります。そのために、よろこんで、十字架にかかる決意をして居ります故――」

「左様ですか。しいては、おすすめはせぬ」

尼僧は、美保代の臥している部屋へ行った。

それから、なお、四半刻あまり、狂四郎は、同じ座に、うっそりと身じろぎもせず、坐っていた。

やがて――、無想正宗を携げて、書院を立ち出て、縁側から、沓石へ、降りた時、離れからの露地を辿って来る楽水楼老人の姿が見えた。

狂四郎が、かるく黙礼して、歩き出そうとすると、老人は、

「狂四郎――」

と、呼んだ。

沈鬱な面持であった。

近づいて、

「わしは、お前に、詫びなければならぬ」
と、云いかけた。
狂四郎は、冷たく、
「お手前様は、はじめてお会いした時、自分の名を、楽水楼とだけおぼえてもらいたい、と云われました。それで、よろしいのではありますまいか」
「………」
狂四郎は、一揖して、歩き出した。
「何処へ参る？」
老人に、問われて、狂四郎が、ふりかえって、笑い乍らこたえたのは、
「死にに行きます」
その言葉であった。

何処へ

一

その日のうちに——。
眠狂四郎から、土方縫殿助に宛て、果し合いの牒状が送られた。
腐木を以て柱と為す可からず、卑人は以て主と為す可からず、無頼孤単の庸夫、茲に生涯只一度び、天下の為に、斧柯（ふか）を把って、腐木を仆さんと志す。
殺を以て殺を去る——知らず、他に、死を善（よ）くするすべを。狼子、野心を抱くに非ず、狐も死するときは、丘に首（こうべ）す、とか——。
貴下が兵の数は問わず。武器勝手たるべし。
日時、明朝——卯の上刻。
場所、西ヶ原御殿山
一介の素浪人が、本丸老中の寵臣に、斬奸状をつきつけたのである。前代未聞のことであった。

霧が、武蔵野を流れていた。
一夜中を荒れていた風が已んだのは、つい先刻のことであった。嘘のような、ひっそりとした夜明けであった。
眠狂四郎は、霧の中を、ゆっくりと歩いていた。とざされた視界の中を、勘を働かせて、濡れた草をふんで行くのであった。
一上一下する北郊の原野で、正保頃までは、将軍家遊猟の土地であったという。
彼方の、霧にかくれている丘陵は、御殿山と呼び、三代将軍家光の時代に、宏壮な御殿が築かれていた。
記録によれば、正保四年秋に、盛大な犬追物が興行されている。犬追物とは、犬を放って騎馬の者が、馬を奔らせ乍ら、之を弓で射取る武技であった。これは武家の一大儀式で、鎌倉幕府をはじめ、足利時代にも屢々興行されたものである。戦国に入って、武将の間にその儀式が顧られなくなって久しかったが、ただ薩摩島津家のみは、これを伝えて絶やさずにいた。家光は、島津家に所望した。このために、真田幸政と多賀常長が、この丘陵に殿舎を普請して、家光を迎えたのであった。美々しく、物々しい桟敷が構えられるや、射手三十六騎は、犬十四を放って、八匹まで射当てて、家光をして、前例をやぶって、簾を高く捲き上げさせて、観覧せしめた、という。
慶安の頃にいたって、更に、窪地に池を鑿って、清水を湛え、梟、鷺、魚類を放し飼い、池畔に亭を設けて、寿寧軒と称し、さらにむかいの高処に遠望亭を建てた。遠望亭は、その名のごとく、富士、日光、筑波の山脈をはじめ、千住大橋までを、一目にして見渡すことができたとか

——。

いまは、すべて、昔日の夢と化して、松杉雑木に掩われて、わずかに、池跡と、丘陵の頂きの空所によって、往時を偲ぶよりほかはない。

動いてやまぬ霧が、林の梢から、中空へ吸われるように散りはてて行くや、いきいきと新緑のしたたる丘の斜面が、狂四郎の眼前に、浮きあがった。

老杉の陰に、ひそと立ち停って、じっと、冷たく冴えた眼光を、丘の頂きへ送った。

しずかである。

高い梢から、目ざめた鳥が、羽を搏ったほかは、しいんとして、なんの物音もきこえない。

空は、光のない、淡々(あわあわ)とした白い色をひろげて、雲一片もとどめてはいなかった。

——よくぞ、隠れた!

狂四郎の口辺に、不敵な薄ら笑みが刻まれた。

樹蔭にひそみ、くさむらに沈み、窪地に伏している夥しい数の敵の、満身にみなぎらせている獰猛な鋭気が、ひしひしと、狂四郎の五官につたわって来る——。

寂として動かぬ丘陵を、おのが死場所と観つつ、狂四郎の心気は、その朝空のごとく、澄んでいた。

——おさらば!

おのれの知るすべての人へ、そして、三十年の生を与えてくれたこの世へ、別れを告げておいて、つと、一歩、樹蔭から、出た。

ツツツ……と、荆棘雑草を薙いで、滑るがごとく、樹間を過ぎて、草地へ——。

それから、一気に、次なる林へむかって、突進したが、その途中、一本だけ、とりのこされたように、大きな葉冠を中天にひろげている松樹の脇を、駆け抜けざまに、狂四郎の右手は、目にもとまらぬ迅さで、無想正宗を、鞘走らせていた。

そして、白い閃光を松樹の幹につらぬかせるとともに、その切尖を、まっすぐに突き出したなりで、一間余を跳んでくさむらへ、身を伏せていた。

背後で——、ぐうっと、松樹が傾き、夥しいしずくを降らせるや、あたかも、樹自身がほとばしらせるかのように、梢に潜んだ鉄砲持ちの敵の口から、おそろしい悲鳴を発せしめていた。

敵は、梢にしがみついたまま、幹とともに、凄じい音響に包まれて、地上へ、その生命を棄てた。

狂四郎は、瘦身を朝露に、しとど浸しつつ、振りかえりもせずに、亡地への突撃路を、じっと、目測していた。

二

左右のくさむらが、動いて、銃声をとどろかせた。

一弾は、眼前二尺あまりの個処へ、ぶすっと撃ち込まれ、次の一弾は、背上すれすれに掠めた。

前方の林の中、そのむこうの斜面に、一斉に、黒い影が、湧くがごとく、蠢いた。

なお、それから、数秒間、狂四郎は、死んだように、微動もしなかった。

左右の鉄砲持ちの敵たちが、しとめたかどうかをたしかめようとして、姿をあらわしたとたん、狂四郎の五体は、飛鳥と化していた。

左の敵が、咽喉ふかく、小柄を刺されてのけぞった時、もう右の敵は、躍って来た狂四郎の速影に、反抗するいとまもなしに、脳天から、血噴かせて、異常な断末魔の唸りを、宙に撒いていた。

次の刹那——。

狂四郎の黒い軀は、疾風と化して、敵の白刃圏へ飛んでいた。

無想正宗は、稲妻に似て、その林の入口で、一颯で、二人を斃した。

どっと、十余名が、刀を、槍の穂先をひらめかせて、半月陣を備えかけるのへ、狂四郎は、自ら、悽愴の妖気を濛と燃えたたせて全身を悠然とはこび入れ乍ら、

「土方縫殿助！　必勝を明らかにする将たるならば、その隠れ場所をしめせ！　眠狂四郎、約束通りただ一人で、参上したぞ！」

と、高く呼びかけた。

これにこたえて、丘の頂きから、

「野獣、能く、ここまで登ってみせるかっ！」

と、叫びかえされた。

にやり、と嗤ったその異端の貌へ、びゅっ、と一槍が襲った。

しかし穂先は、むなしく、狂四郎の幻影を刺しつらぬいただけで、刎ねとばされたその敵の首が、くるっと廻転して、味方の足もとへころがった時にはもう、狂四郎の姿は、二間のむこうにあった。

「喝っ！」

「く、くそっ！」
「おのれっ！」
「やああっ！」
口々に、短い、鋭い、本能の叫びをあげて、おのれの前へ躍って来た狂四郎へ、白刃を撲(なぐ)りかけたが……。
いたずらに、虚空を截(き)ったおのが失敗を、無念と意識する一瞬も与えられずに、ある者は、面ていを朱(あけ)に染めて、のけぞったし、ある者は、胸いたを突き通されて、ごぼっと口腔いっぱいに血の塊りをせりあげたし、またある者は顎から肋骨まで斬り下げられて、がくんとうなだれると、生命なき軀幹を、四、五歩すすめていた。
そのまま……狂四郎は、樹間を突破して、一気に、丘陵の斜面を翔けあがるかとみえた。
中腹にひそんでいた二十名あまりの面々は、堰を切った奔流が、ひくきにつくように、そこへ殺到して来た。
すると――。
狂四郎は、くるっと身を翻すや、たたたっと、ななめに、左の方角へむかって走り出した。
「のがすなっ！」
「やるなっ！」
絶叫し、追いすがって、刀を舞い下し、槍をくり出そうとするのだったが……。
それらの、地獄の悪鬼宛然(さながら)の血相をもった群は、追撃の距離がのびればのびるほど、無想正宗の贄(にえ)を、つぎつぎと、駆け去ったあとへ横たえさせることとなった。にも拘らず、いずれも、追

撃を中止しようとしなかったのは、味方の血汐と絶鳴をあびて、完全に、人間の感覚を麻痺させたからであった。血に酔い痴れた狂人の群――それであった。
しかも、その数は、五十名以上もかぞえたのである。
いかに、狂四郎に、魔神にひとしい迅業があろうとも、血に狂った白刃の怒濤におしよせられては、戦闘力にもおのずから限度がある筈だった。
左様、狂四郎が、死を自ら望んで、此処へ来たのでなかったならば、あるいは、丘陵上へ達することもおよばずして、地に伏したかも知れなかった。
死を自ら望んで、阿修羅となった者の、氷のように冴えた気魄が、限りある戦闘力に、想像を超えた働きを発揮せしめたといえる。

三

狂四郎は、絶対に、気合を炸裂させはしなかった。終始無言であった。ただ、全身に漲らせた鬼気を、疾霆にひとしい敏捷な動きにしめした。
遁げるかとみせて、突如、翻転し、躍り込んだとおもうや、次の刹那には、斜横に跳んで、速影を数間さきに奔らせていた。
無想正宗の閃きは、燕の掠めるに似て――ひらっ、と白く煌くたびに、其処に、此処に、
「うわあっ！」
「げっ！」
と、絶鳴が生じ、真紅の虹が、虚空に描かれた。

絶鳴は、こだまのように、次の絶鳴を呼んだ。くれないの虹は、消えはてぬうちに、あたらしい血飛沫を招いた。
しかし、味方の斃れる数が増すにつれて、襲撃者たちは、いよいよ、たけり狂って、まさに、凄じい悪鬼の勢いに、おのが器官を総動員した。
一瞬後に、おのれが斬られる——そんな怯気は、完全に失っていた。それというのも、狂四郎の神技が、誰の目にも、予測し得なかったからである。
正面から向って行く者が、必ずしも斬られるとは、かぎらなかった。
「うおっ！」
と、吼えて、正面から突撃した者が、むなしく、草を薙ぎはらって、その失敗に本能的な身顫いをした瞬間には、意外にも、狂四郎から二間余もはなれた地点で、刀を構えていた者が、ぎゃっと、けだものじみた唸りをたてて、よろめいていたのである。
そして、殆ど同時に、その横にいた者も、ひらっと空間に円光をまわした無想正宗の切尖を、頸根に受けて、目も口も手も足も、ぎゅっと歪め、痙攣させていたのである。
一閃一颯の速度は、一人を斬って、次なる敵へ対するまでのものではなかったのである。
一個の胴を横薙いだ閃光は、そのまま、別個の首を刎ねとばすべく、宙を走ったのである。そして、それは、静止することなく、第三の生贄にむかって、とびかかっていた。したがって、包囲陣形の虚をえらんで、間隙を奪うたたかいではなかったので、狂四郎自身も、いたるところに、薄創を負うていた。
そして——。

丘陵の中腹まで達した時、そこに伏せていた数名が、一挙に、銃を撃ちはなつや、狂四郎のからだは、弾機にかかったけもののように、もんどりうって、くさむらへころがった。
「やったぞっ！」
「こなくそっ！」
目を剝き、歯を剝き、猟犬の群が、えものにくらいつくように、どっと、そこへ殺到した。
とみた刹那——、ころがりざまに、摑んで撓めていた灌木の反動力を利用して、狂四郎は、地を蹴った。
一間あまりへだてたところが、窪地になって居り、ひとっ跳びに、そこへ躍り込んだ。
「しゃっ！」
「おのれっ！」
数十名が、肩と肩をぶっつけあい、白刃と白刃をすりあわせて、なんの脈絡もない混乱状態で、躍起に、追い迫った。
狂四郎が、窪地のむこう側へ、鹿が跳躍するように、駆け上るや、追手は勢いあまって、七、八名おりかさなって、そこの底へ顚倒していた。
そのまま……鳥影が掠めるに似た血まみれの姿は、驀地（まっしぐら）に、頂上めざしていた。
「やるなっ！」
「鉄砲はどうしたっ！」
「手負うたぞ！　仕止めろっ！」
いったん、一個処へむらがった追撃者たちは、また、思い思いに散らばって、刀をかざし、槍

を突き出して、草地をひたばしり、灌木を蹴わけて、地震のように丘陵の斜面をゆさぶったが……。

狂四郎の疾駆は、殆ど、人間の体力を越えていた。

土方縫殿助は、頂上の、殿舎の跡の平らな空地に立って、この酸鼻をきわめた修羅場を見下していたが、あとひと息で仕止めると固唾をのむ緊張を、たちまち、非常な狼狽に一変しなければならなかった。

かたわらに三、四人の護衛の士がいたが、これらが、刀をぬきつれて、狂四郎へむかって、走り降りて行き、ただ一人のこされた縫殿助は、急に、さむざむとした怯懦心にとらわれて、四、五歩あとずさって、逃げるべき方角をもとめて、頭をまわした。

だが、どうしたのか、迎撃した配下たちが、またたく間に、血煙りたてて、くさむらへ崩れ落ちるや、縫殿助は、かえって、全身が、恐怖のために硬直してしまって、一歩も動けなくなってしまった。

……ついに、狂四郎は、縫殿助の面前へ、すっくと立った。

その形相は、生きているものとは思えなかった。おちくぼんだ双眸は、瞠いたなり、黒瞳を動かさなかった。蒼白な輪郭は、黄燐のような妖しい微光につつまれているようだった。

血と汗と土ほこりにまみれたこの世の幽鬼の姿が、すっと、一歩迫った。

「…………」

縫殿助は、顔中の筋肉を、ぴくぴくとひきつらせて、何か叫ぼうとしたが、咽喉が、からからにかわいて、声にはならなかった。

「……勝ったぞ！　土方――」

ひくく、呻くように、口からおくり出すとともに、狂四郎は、切尖を、地摺りに落して、ゆるやかに、地獄送りの円月を、宙に描いた。

怒号の渦が、すぐ背後におし寄せた瞬間、十余名の生血に濡れた無想正宗は、本丸老中の寵臣の頭上へ、びゅっと振りおろされた。

だが――。

ぞんぶんの手ごたえを、腕に感ずるのをさいごとして、狂四郎自身もまた、意識をうしなって、がくっと、膝を折っていたのであった。

四

……どろどろの、どす黒い泥濘の中に、狂四郎は、仰のけに、浮かんでいた。灰色の濃霧が、びっしりとたちこめているようであった。泥濘と濃霧のほかに、この世界にあるのは、永遠の静謐だけと思われた。

――ここが地獄なのか。

そっと、自分に問うてみて、狂四郎はなお、しばらく、泥濘に浸ったまま、じっとしていた。

やがて、そっと、四肢を動かそうとして、はじめて、おそろしい疼痛をおぼえ――それが、はっきりと、意識を現実のものにさせるのに役立った。

薄目をひらいた狂四郎は、まず、煤けた梁の組みあわされた屋根裏を、見た。ついで、かたわらから、ゆらゆらとたちのぼっている湯気をみとめた。炉にかけられた鉄瓶から噴いていたので

ある。

——おれは、死ななかったのか。……また、生きのびたのか。

なんの感動もともなわない、暗い疲れた呟きが、胸裡に洩らされた。

緩慢に、頭をまわした狂四郎は、炉ばたに、黙然として坐っている人物を、眸子に映しとって、微かに、眉宇をひそめた。

五十年配の、素朴な、古武士然たる風貌の持主であった。

「お手前が、わたしを、救って下されたか？」

「左様——」

武士とも郷士ともつかぬいでたちの人物は、微笑して、頷いてみせた。

「無駄なことでした」

「いや……救って進ぜる理由が、当方にあった」

「……？」

「当方で、手を焼いて、干戈をおさめた強敵を、むざむざ、別の隠密組によって討ちとらせるのは、なんとしても肚がおさまらなかったのでな」

——そうか。

狂四郎は、合点した。

「お手前が、甲賀忍組の頭領でしたか」

対手は、微笑をつづけ乍ら、

「わしは、おぬしとたたこうているうちに、忍者のかしらたることが、だんだんいやになって参

ってな……、おぬしに対する攻撃を中止したのを機に、こうして、この庵に、隠居いたした。おかげで、はじめて、人の生命を救うよろこびを知った次第だ」
「こちらは、有難迷惑だった、と申上げなければならぬ」
「死のうとされていたのは、わかって居ったが……わしの方では、見すてるわけには参らなんだ」
忍組頭領は、そう云って、隔意のない笑い声をたてた。
狂四郎は、疼痛を怺えて、起きあがった。全身いたるところに受けた傷には、巧みな手当がほどこされてあった。
「救われついでに、おたのみしよう。馬をおねがいできまいか」
「五日あまりの安静を必要とするとみて居るのだが——」
「わたしの妻を迎えに来ている死神は、待っていてはくれますまい」

五

それから、半刻後には、すでに、狂四郎の姿は、楽水楼隠宅の門をくぐっていた。
馬を走らせているあいだ、失神状態に幾度が陥入っていたし、門前で地上へ降りたとたんに、烈しい眩暈に襲われて、しばし、その場に蹲っていなければならなかったにも拘らず、門内に入るやふしぎな気力が、五体をささえた。
——二年前、静香をさがして、ここへ来た時も、そうであった。
その回顧も、狂四郎を、しゃんと歩ませる扶けとなった。

庭からまわって、縁側にあがったところへ、老人が、書院から姿をみせて、一瞬、その悽愴をきわめた面貌に、棒立ちになった。
「狂四郎！」
そう呼びかけたなり、あとへ、句が継げなかった。
狂四郎は、薄ら笑って、
「生きて、もどって、参りました……。美保代を葬ってやるしごとが、のこっているので、でうすとやらが、生きのびさせて、くれたものと、思われます」
と、云いのこした。
病室には、香が焚いてあった。
狂四郎が、枕元に坐ると、美保代は、その気配を感じて、まぶたをひらいた。
それなり……。
「…………」
「…………」
無言で、互いの眸子を瞶めあったまま、二人は、いつまでも、そうして、じっと動かなかった。
異常な状態によって、むすばれたこの男女は、安息の家庭を築くいとまもなく、絶えざる暗い兆しによって未来をうち消されつつ、四年の月日を経て、いまここに、永遠の別離の一瞬を迎えたのである。思えば、美保代がひたすらに身うちに燃えつづけさせた純粋な思慕の炎も、それに応える、美保代にだけわかる燠（おき）のような狂四郎の愛情の火も、宿命という無慚な審判者の、冷酷

な予言にはばまれて、ついに、全き情熱の昇華を生むことなく、今日にいたったのである。
ただ、いまここに、二人が、互いに、永遠の別離の一瞬にあたって、はっきりとさとったのは、言葉も身振りも仕草も必要とせぬまでに、贖め合うことだけが、真実であるという、心の一致であった。
「………」
「………」
幾秒間――いや、幾分間が、しずかに、流れすぎたろう。
はじめて――美保代が、色褪せた唇をひらいた。
「わたくしを、母さまのお墓へ、おつれ下さいませ」
かぼそいが、澄んで、はっきりとした声音であった。狂四郎は、頷いた。
「わたしが、背負って行ってやろう」
「……うれしゅうございます」
美保代は、すでに、狂四郎が、重傷を受けた身であることを見てとる感覚をうしなっていたのである。
狂四郎は、美保代を、背負うて、一歩一歩、大地をふみしめて、堀川沿いの道を辿り、青い麦畠の中を過ぎ、丘をのぼって行った。……ついに、ただの一度も、足を停めることをしなかった。
なんの苦しさもなかった。苦しさを超えたものが、狂四郎に、この奇蹟をなしとげさせたとい

える。
頂上の、櫨の根かたへ、美保代のからだをそっとおろして、はじめて、狂四郎は、ふかい呼吸を、ひとつした。
それから、美保代の白蠟の細おもてへ、視線をおとした。
息は、すでに、絶えていた。
狂四郎は、息あるもののごとく、その遺骸をかかえおこして、
「美保代、来たぞ」
と、ささやいた。
そして、母の墓へ、視線をまわして、――母上、もうひとり、話相手が、できましたよ。
と、声なく、云いかけた。
意識が遠のいたのは、その直後だった。
どれくらいの時刻を、そうして、美保代を抱いたままで、櫨の幹へ、凭りかかっていたものか。
ふっと――。
われにかえった狂四郎は、丘の中腹を下って行く楽水楼老人の後姿を見出した。
すぐ目の前の青草の上には、一梃の鍬と自然石と鑿と槌が、置いてあった。
夕風が立ち、薄闇が降りて来た頃、丘の上には、もう狂四郎の姿はなかった。
『霊』という一文字を刻まれた三基の墓石が、ひっそりと、ならんでいた。

そして――。

右端の墓の前には、男雛と女雛の首が供えられてあり、その美しい貌だけが、ほの白く、暮れのこっていた。

眠狂四郎無頼控（五）

新潮文庫　し－5－10

昭和三十五年十二月五日発行
平成五年一月十日四十四刷

著者　柴田錬三郎

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　営業部(〇三)三二六六―五一一一
編集部(〇三)三二六六―五四四〇
振替　東京四―八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社三秀舎　製本・加藤製本株式会社

ISBN4-10-115010-9 C0193